異世界と絆な黙示録

八神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
異世界と絆な黙示録

【Ｎコード】
Ｎ５０３９Ｊ

【作者名】
八神

【あらすじ】
世界最強の戦闘武術『萩野流』の後継者、萩野司羽（はぎのつかば）。父をうっかり倒してしまい、最強の烙印（？）を押された司羽。未来の光景に頭を抱える司羽の前に現れたのは、銀の長髪が美しい一人の美少女だった。最強系の異世界ラブファンタジー！！　異世界隠れんぼを消して修整を施した感じですので、そちらを見ていた方は最初の１０話程は被りますが御了承下さい。

プロローグ：世界が変わった時の話（前書き）

初めまして、こんにちは、お久しぶりです。『異世界隠れんぼ』のリメイク版＋続きになります。隠れんぼからもう数年経ってしまったので修正を含めて書き直しますので既読だった方は申し訳ありません。初めましてな方も久しぶりな方も、是非、空いた時間にでも見てくれれば幸いです。

それでは、ごゆるりと。

プロローグ：世界が変わった時の話

「この世界で私を見つけ出して、私の本当の名前を呼ぶ事。それが貴方の勝利条件。どう？　面白いでしょう？」

夢か現実かも判らないような空間の中で、長く美しい白銀の髪を持った少女は、にこっと笑ってそう言った。

「は、はぁっ……？」

「ふふっ、心配しないでもちゃんと貴方が見つけられる範囲にいるから安心していいわ。それじゃあ、頑張ってね。」

少年が動揺するのも気にせずに、少女は少年の目の前から消えた。そして、少年一人がその場に残された。

「冗談、だよな……？」

呆然とした少年が周りを見ると、見たことのない木が生えていて、見たことのない木の実が落ちている。そこは確実に少年が元居た世界ではなかった。ここが森なのだろうことくらいしか分からない。まったくもってどういう冗談なのか？　いや、これが夢でないことは分かっているが。

「はぁっ、どうするかなぁ……これから。」

森の中で少年は、自分が何故こうなったのかを整理する様に今に至る事を思い出し始めた。この少年の運命の歯車を、絶対的に狂わせる出来事が起きたのは体感で今より三十分程前になる。

――――――――――――――――――

「ああ、かったりぃ事になったなぁ……。」

溜息をついた黒よりも赤みが強い瞳を持った少年、萩野（はぎの）　司羽（つかば）は地元の川に掛かる橋から川を見下ろしながらそう独り言を漏らした。

「流石に父さんに勝っちまったのは不味いよなぁ……暫くは道場にも戻れないか。」

司羽の父の誠は七代目萩野流武闘術の師範であり、その萩野流というのは分家を海外にまで進出させる程の名家である。ここまで広まった理由は、戦争の様な銃弾飛び交う戦闘でも難無く使える強さに有る。『気』と言う今まで不確かであった存在を利用したその武術は、ありとあらゆる方面でその圧倒的な汎用性と強さを知らしめていた。それはいい、今の問題は、その武術を最も使いこなせている筈の人間を、その息子、つまり司羽が萩野流を使わずに難無く倒してしまったとある。何故そんな事になったのか、理由は簡単な事

である。ただ一人の息子である司羽が萩野流の八代目となる事を拒否した、それが元でケンカになり、

「どうしても継ぎたく無ければ俺を倒してみろ！！」

と言うので、本当に倒してやったまで。代々の技である萩野流を使わずに、あっさりと、自己流の武術で。だが、どうやらそれが不味かったらしい。

「萩野流最強節は無くなって、俺に自己流武術の師範になれなんて……あの戦闘狂め……門下生の前でやったのは俺の責任でもあるけど、押し付けは止めろよな……。」

まぁ、つまりそう言う事だ。今さっきの事だからまだ完全には伝わってないだろうけど、それも時間の問題だ。直ぐに世界中に伝わり、外国に何らかの優位を欲する政府から圧力をかけられて、司羽の自由は終わりだろう。さて、どれだけ逃げられるやら。

「はぁ、しかしなぁ、ただでさえ父さんの息子ってだけで周りから避けられるのに、これ以上かよ……。」

誠はもうこの町の英雄的存在で、その息子と言うだけで周りからは期待と嫉妬の視線。更に司羽は長身で顔立ちが良く、母親からの遺伝である意思の強そうな紅い目と艶がある黒髪。これだけモテそうな要素が揃うと逆効果だ。学校でも皆からは常に外れて生活する事になる。司羽自身が海外での生活が長く、旧友と呼べる存在がいないのも司羽を孤独にしているのだが、今更それをどうにか出来るわけでもない。今の問題は、それがこれから更に酷くなるかもしれないと言うことだ。

「俺は一体どうしたら良いんだろうな。いや、それどころか、どっかにいる神様とやらは俺に選択権を残してくれてるんだろうか……？」

はぁっ、とまた溜息をついて橋の下を見る。するとどうした事だろう！！　年端もいかない少女が、崩れかけの段ボールに入ってドンブラコドンブラコと溺れながら上流から流れて……流れて？

「えっ……おい、ちょっと待て……冗談だろ！？」

司羽は、直ぐさま橋の上から少女を救出すべく端から飛び降りた。ここの川はそんなに深くない筈とか、流れもそんなに早くないとか考えるくらいの余裕はあったが、実際その時の司羽は気が動転していて、その時の事はよく覚えていない。……だが、見間違いだろうか？　司羽には、その少女が優しく、そっと微笑んだ、そんな気がした。

そして次の瞬間、世界は光に包まれた

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「まったく、貴方寝過ぎよ？　起きなさい、ネボスケさん。」

パチンッ

と、誰かに頭をデコピンされた様な感触と共に、司羽は目覚めた。

「……んっ、ここは……何処だ……？」

司羽は周りを見渡しながら、デコピンをしてきた少女へと質問した。少女の外見は十四、五歳程度だろうか。白銀の髪は腰に届く程長く、その色素の無い大きな瞳は宝石の様だった。まだあどけなさの残る容姿には、少しの大人っぽさが同居している。

「うーん、普通ならそうじゃなくて、自分が何でこんな所に？　とか、俺に何をしたっ！！　とか言って狂い出すんじゃないの？　いや、私はそんなの見たくもないけど。」

少女はそう言って、少し不満そうに頬を膨らませた。その少女の反応に司羽は暫し呆然としてしまった。

「何ジロジロ見てるの？　私、そんなにおかしいかな？」

そう言って少女は真っ白いワンピースをチェックし始める。どうやら司羽が固まっているのが、自分の格好がおかしいからだと思ったらしい。

「いや、ごめん、気が動転してね、別に格好は変じゃないよ。所で君はいくつ？　見た所、十四、五歳に見えるけど。」

司羽は少女に睨まれて我に返ると、少女の思考を訂正してから年齢を聞いた。もっと先に聞くことがあるのだが、なんとなくまだ落ち着いてないのだろう。何か心を落ち着ける材料が欲しかった。

「ああ。そういう事ね？　貴方とそう変わらないと思うわ、十五だもの。貴方は？」

「十七だ。」

司羽は少女に聞き返されて、咄嗟に返した。しかしその会話でやっと落ち着いたのか、周りを見回して、真面目な顔になる。

「俺をここまでつれて来たのは君だろ？　俺をどうする気なんだ、君は誰で何者だ。ここは何処だ。答えろ。」

どうやら自分の理解の範疇を超えた場所にいるらしいと分かった司羽は、淡々と質問の嵐を少女に投げ掛ける。すると少女はクスッと笑って答えた。

「ここはエーラと呼ばれる世界。正確にはまだエーラじゃないけど

ね。貴方のいた世界とは随分違うけど、それでも物質構成とかはかなり酷似しているわ。そして私の事は教えてあげない、難易度を上げる為だもの。簡単過ぎちゃ困るわ。そして、あなたをここに連れてきた理由だけど……。」

少女は少し間をおいて、楽しそうに言った。

「これも教えてあげない。だから代わりに、貴方の願いを叶えて上げる。ただし、私にゲームで勝てればね……？　ふふ、それじゃあゲームの内容だけど……。」

少女は楽しそうに、嬉しそうに笑う。司羽はその少女の勝手な物言いに表情を顰めたが、なんとなく素直に聞くしかない様な、そんな気がした。

そして、この司羽の全てを変える事となる。そのゲームは始まった。

第1話：森の中の遭遇（前書き）

何か気付いた事がありましたら、作者のスキルアップの為にも評価感想をお待ちしております。

第1話：森の中の遭遇

「うん、なかなか旨いなこれ。」

司羽はそう言って何だか分からない動物の肉にかぶりつく。森の中に置き去りにされてから、もう三日目になろうとしている。言われた通りにあの少女を捜そうにも名前すら分からないし、幾ら森を彷徨っても村や街にも出ない。そのせいか生きる為に食物を採るのにも慣れて来る始末だ、喜んでいいのだろうか。しかしまさか、こんな良く判らない異世界でサバイバルをする事になるとは思ってもいなかった。まぁ多少のスキルはあったが、それもいつまでも続ける訳にはいかないし、何か考えなければならないだろう。ちなみに、今食べているのは何だか兎の様な可愛らしい動物で、正直最初は何だか食べるのに抵抗があったが今ではスッカリ主な食料になっている。

「ったく、何時までこんなサバイバルな事しなきゃならないんだ？大体あれから人に会ってないぞ。本当に人がいるのかここは。」

何だか悲しくなってきた。あー、でも夢じゃないんだよな？　本当に現実っていつもいつも傍迷惑だよなぁ。と、司羽は何か達観した事を考えながら、食べた動物の骨を土の中に埋める。供養して罪悪感を紛らわさないとあのチワワ以上の攻撃力を持った瞳の力に耐え切れない。

「ごっそさん。さて、そろそろ行くか。」

確かに行く当てもないが、動かなければしょうがないし。もしかしたらそのうち町に出るかもしれない。司羽がそう思って立ち上が

った、その時だった。

「きゃあああああっ！！！！！」

「なっ……悲鳴？」

女の悲鳴、声色からするとまだ幼い感じだ。響きから判断して結構近くのようだ。

「熊か露出狂でも出たのか……？」

まぁどちらにしろ人がいて、助けを必要としているのだろう。そう考えるより先に、司羽は悲鳴の聞こえた方へ急いでいた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

『グルルルル……。』

「なっ……そんな……魔力が足りないなんて……。」

普通の熊を更に巨大にした様な生物が、獲物を捕らえるように少女にジリジリと近寄った。

「駄目……やっぱり使えない……こんな、こんな事……。」

『ルガァァァッ！！』

「きゃあああああっ！！！！！！！」

少女が諦めて眼を閉じた瞬間にその生物が少女に飛び掛かろうとする。その時、真横から現れた影が、同じように熊へと飛び掛かった。

「食料風情が人様を襲うなど、付け上がるなぁぁぁぁぁっ！！！」

ドゴッ！！

飛びかかった影、司羽はその生物の顔面に右ストレートをぶちかました。次の瞬間には鈍い音と共に、熊っぽいその生き物は泡をはいてその場に崩れ落ちていた。

「ふぅ、なんとか間に合ったか……えっと……。」

司羽は少女の方を見て、暫く固まった。そこにいたのはこの前の銀髪少女と同じく、とんでもないレベルの美少女だった。綺麗な金髪の長い髪に、今は驚きで丸くなっている大きく意思の強そうな碧い瞳。発育はまぁまぁだが、背がそれほど高く無いので、悪くはないはずだ。って一体こんな時に何を考えてるんだろうと司羽は軽く自己嫌悪に陥ってしまった。取り敢えず、今は優先順位が違う事に

気付いて直ぐに少女へと駆け寄ったが。

「おい、大丈夫か？」

司羽はスッカリ腰を抜かしているらしい少女に近寄り声をかけた。少女は今何が起こったのか分かっていないらしく暫く呆然としていたが、司羽が声を掛けてきたのに気付くと、我に戻った。

「あ、え、えとっ、た、助けてくれてありがとう。……で、でも、腰が抜けて立てない……かも。」

少女は、「あはは……。」と笑いながらそう言った。司羽はそんな少女を見て、少し考えた後、背を向ける。まぁいくらなんでもこんな所に置いて行く訳にはいかない。さっきみたいのがまた出ないとも限らないし。

「ほら、おぶってやるから乗りな。」

「えっ……いいの？」

「良いから早く乗れよ。立てないんじゃしょうがないだろ。それに、こいつは群れになってる場合があるしな、仲間が近くにいるかも知れないぞ。」

司羽がそう言うと、少女は熊を見て少し悩んだ後、怖々と背中に乗って来た。

「あ、ありがとう……。」

「どう致しまして。所で、少し聞きたい事があるんだけど。」

そう切り出した司羽に、少女は首を傾げて司羽の言葉に耳を傾けた。

「私の名前はルーン。こう見えても魔法とか結構使えたりするんだよ♪」

質問は一通り終わり、司羽は少女、ルーンとも大分打ち解けた。ルーンが言うには、ここの森は魔法磁力だかの関係で魔力の流れが見えない人が入ると出られないらしい。が、ここでは良質の薬の材料が取れるらしく、ルーンは散策していた所を襲われたらしい。まぁ取り敢えずルーンが居れば出れる様なので、司羽は取り敢えずルーンが住んでいる場所に行く事になったのだ。

「それで？　魔法とやらが使えたりするのにあいつに襲われて泣いて居たと。」

「うっ……な、泣いてないもん。」

司羽はそう言って、訝し気にルーンの方を見た。魔法と言う物がどのような物かは判らないが、おそらく司羽がここに飛ばされたのもその魔法によるものだろう。ルーンの様な年齢の子がそんな凄い

物をほいほい使えるのならあの魔法を手掛かりに銀髪少女を探すのはかなり困難だ。あの銀髪少女が抜きん出た魔法使いである事を祈る。

「だ、だっていきなり魔力が足りなくなるなんて考えてなかったんだったんだもん！！　……つまり、あれだよ、想定外ってやつだよ、うん。」

話を聞く限りでは、魔力と言うのは常時少しずつ体に蓄積されるらしく、人によって溜め込める限界があり、限界が大きい程回復もまた比例して速いらしい。ちなみにルーンの話ではこの森は地形の関係で魔力の回復が完全にではないが、あまり出来ないと言う事だ。あの野郎、なんつう危険な場所に連れて来やがった。これはかなりヤバい状態だったんじゃないか？　人も全然こないし。

「あっ、でもでも、司羽が助けてくれたんだから何にも問題ないよね。運だって魔法使いの力の一部だって言われてるし。」

「まぁ、俺も困ってたからな。おあいこって事にしよう。」

「うん、わかった。ありがとう、司羽♪」

そう言って、ルーンは首に回した手でギュッと抱き付いて来る。なんと言うか、甘えられている、この数時間で随分と懐かれたようだ。前の世界じゃありえない、皆避けて来るからなぁ……とは言え、過度なスキンシップはいけない、胸が当たってる、押し付けられてる。……先ほどは多少失礼な感想を抱いてしまったが、教えてられると実はそこそこある事が分かってしまう。

「あーはいはい、抱き付くな戯れつくな……それで、後どれ位で

付くんだ？」

「あ、もうすぐだよ。ここまで出ると魔法磁力の効果もないしね。」

ルーンがそう言った途端に森の奥から光がさした。それに気付いた司羽は、急いで光がさす方に向かう。

「おおぅ、これはデカいな。豪邸と言うやつだ。」

森を抜けた先にあったのは洋館な雰囲気の巨大な屋敷。正確には森の中の木が生えていない所に家が立っている感じだから、抜けたと言えるのかは疑問だが。

「うん、大きいよね。独り暮らしには大き過ぎるくらいだよ。」

「ん？　独り暮らししてるのか？」

そう言うとルーンは、言ってなかった？　と返して来た。司羽には一瞬、ルーンが哀愁を帯びた眼をした様な気がしたが、それも一瞬。ルーンは直ぐに笑顔を見せた。

「取り敢えず入って、これ鍵。というより、私が歩けないからそうして貰うしかないんだけどね？」

「……了解。」

ルーンが鍵を出して司羽が受け取る。鍵を開けて中に入ると、中も西洋風の作りになっている。流石に甲冑等は無かったが。かなり本格的なお屋敷だ。夜とか怖そうな感じがする。

「あ、直ぐそこの部屋だよ、リビングになってるから。」

ルーンに促されるままにリビングに入ると、そこもまた広い。取り敢えず、司羽はルーンをソファーに座らた。何故か降りる時に少し渋ったが無理矢理剥して座らせた。

「ああ、我が家だぁ～。　何だかんだ言ってやっぱり我が家が一番落ち着くよねぇ。」

「なんか暫く家に帰って無かったサラリーマンみたいだな。」

ルーンが寝っころがりながら言ったのを、呆れながら司羽は見つめた。まぁでも、気持ちは判らないでもない。期待ばかりで居心地のあまり良くない家ではあったが、自分自身あの家にそう感じた事がないでもなかった。

「まぁ確かに落ち着く場所ではあったな。」

あれから三日間帰っていない地球の我が家を思い浮かべて言った。別にホームシックになってる訳じゃないけれど、読み途中の本とかの続きが凄い気になってくる。……早く帰りたくなってきた。

「あ、そう言えば司羽は何処に住んでるの？　森の事も知らなかったし、もしかして旅をしてるとか？」

「ああ俺は……この世界に来たばかりだからなぁ。」

一瞬言って良いのか迷ったが、情報を手に入れる為には必要なので、司羽はルーンに自分の此処に至るまでの事を簡単に話し出した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「白銀の長い髪の女の子かぁ。」

そう言ってルーンは、うーん、と考え込む。あんまり手応えがないな、やっぱりそう簡単に見つかりはしないか。

「ああ、何か知ってる事とかないか？　何でもいいんだ、そういう魔法について聞いたとかでも構わない。」

司羽が聞くとルーンは知らないと首を横に振る。まぁ、やっぱりと言った感じ。こんな簡単に見つかるなら誰も苦労しない。

「名前も分からないなんて幾らなんでも調べようもないしね。私も結構詳しい方だと自負してるけど、そんな魔法も聞いた事ないし。」

「だよなぁ、せめて何かヒントが欲しかったよ……はぁ……。」

司羽が溜息をつくとルーンは何かを思いついた様に、ポンッと手

を叩いた。気のせいかもだが、心無しか嬉しそうだ。

「でも違う世界から来たって言う事は司羽は今は家無き子なの？」

家無き子って……ニュアンスは気になったが、まぁ、間違いじゃないので頷いておく。

「そっかそっか。ならさ、取り敢えずはここに住まない？　ね、いいでしょ？」

嬉々として提案するルーンに司羽は少し考える。それは確かに魅力的な提案だ。だが先ずは一番大事な事から切り出そう。この無防備過ぎるルーンと言う少女に。

「俺は男だぞ？」

「見れば分かるよ？」

ルーンは意味が分からないと言う風に首を傾げる。即答で回答になってない返答をされた。

「お前には警戒心って物が無いのか……？」

「うーん、多分大丈夫だよ！！　だって、襲うならさっきだって出来たでしょ？　だから大丈夫。」

まるっきり安心し切っているルーンを見ていると、何だかこんな口論をするのも馬鹿らしく思えて来る。それに、足掛かりが必要なのは確かだ。自分はこのエーラについて何も知らないし。

「……じゃあ、厄介になろうかな。」

「うんうん、それが良いよ！！」

司羽の返答にルーンは嬉しそうにそう答えた。それから、居候記念パーティーと言う謎な名前のささやかなパーティーが開かれた。誰かと何かを祝い合う、それは司羽には久々の感覚だった。そしてなんとなく、本当になんとなくなのだが、この少女にとってもそれは同じである様な、そんな気がした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

その夜。ルーンは寝静まり、一方司羽は慣れないベッドで寝れないでいた。司羽は今まで布団派だったので寝にくいと言うのもある

が、取り合えずの寝床が確保出来た事で、この世界の事を考える余裕が出来たのが大きい。

「まぁ、取り敢えず寝床は確保か。次は街でも探すかな。」

司羽は天井を見ながらそう呟いた。今回は本当にラッキーだった。ルーンがいなければ、死ぬまであの森に居続けなければいけなかったかもしれない。あの白銀の少女には一言言ってやりたい所だ。

「まぁ、今はあまり考えたくないな……流石に気疲れした。」

司羽は溜息をついた。その時、部屋に少女の声が響き渡った。

「何溜息なんかついてるのよ。もっと前向きにいきましょう？　まだ始まったばかりなんだし。」

「なっ……。」

そこに現われたのは白銀の少女。司羽は息を飲んで少女を見つめた、全く気付かなかった、いつの間に此処に居たのだろう。

「お前……。」

「三日振りの再開ね？」

少女はにこっと笑った。儚げな風貌。自分より三十センチ以上は小さいであろう身長と、その夜に輝く髪がそれを引き立てる。いきなりの再開だったが、司羽は思ったよりも冷静にその少女を観察する事が出来た。

「あんたなぁ、名前も言わずにあんな森に俺を置去りにしやがって……。俺がサバイバルスキル持って無ければ死んでたぞ。」

司羽はまた溜息をついた。それを見て少女はクスッと笑った。もしかして心の中で死ねば良かったとか考えてないよな？　笑顔の奥で考えてそうで怖い。巷で噂のヤンデレってやつか？　いや、デレる予定はなさそうだが。そんな事を考える余裕も持てていたが、少女の正体は相変わらず不明だ。

「私だってそうなったら助けるつもりだったわよ。でも貴方、何故か予想以上に強いんだもの。あの世界の人間って皆そうなの？　あの森の魔物や動物って基本的に温和だけど凄く強いのよ？　貴方が良く食べてたウリュンって言うのも、あの森では最速だし。まさか足で追い付くなんて、化け物かと思ったわ。」

「やっぱりどっかから見てたのか？　まぁ、確かに野兎とは比較にならないスピードだったな。だが、この世界の奴らだって魔法ってのを使えるんだろ？　俺はその変わりに幾つかの武術が使える。それだけだ。それに俺は少し特殊な位置に居た人間だからな。」

「……もう一つ予想外。もう少し怒ると思ってた。」

少女は司羽の返答を聞いて、嬉しい様な、困惑した様な表情を浮かべた。まぁ、怒りたい事はある。勝手に連れて来た事とか、そのまま放っておいて監視していた事とか。

「あの兎っぽい動物にカルシウムでも大量に入ってるんじゃねぇの？」

「うーん、そうかもね？」

司羽がそう言っておどけると、少女は楽しそうににコロコロと笑った。まだ司羽には聞いて置きたい事があった。

「それで、何で俺をここに？　あんたは何がしたいんだ？　本でも魔王を倒せ、とかじゃなくて自分を捜せなんて聞いた事ないぞ。」

司羽の問いに少女は薄く笑う。少し自嘲する様な、そんな笑み。

「さぁね、でもこうする事は決めてた。そこで何で貴方を選んだのかは分からない、ただ……私は……。」

そこで少女は言い淀んだ。まるで自分で何を言いだしているのか分からないと言う様に。

「……まぁ、これからは好きにしたら良いと思うよ？　此所で暮らすも私を捜すも貴方次第。名前はやっぱり貴方が調べる事になるけどね？」

少女はまたクスッっと笑って言った。それに、司羽は溜息をついて返した。全く意図が読めない、何をしたいのだろうか。

「教えてくれないって訳か。まぁ、分かってたけどな。じゃあ、後一つだけ。」

「ん、何？　スリーサイズとか？」

「それもどうせ教えないだろ？　大体知ってた所でどうしろと……。」

「ほら、男の子なんだし私の裸が想像しやすく……。」

「いらんわっ！！」

少女のおどけた発言に突っ込みを入れながら司羽は自分の発言を仕切直した。

「人と話す時はちゃんと目の前に来い。幻覚を見せてるのか君の魔法で作り出した別の何かなのか知らないけど、何か気持ち悪いんだよ。」

「……何で分かったの……？」

今度は少女が警戒心を剥き出しにしながら一歩下がった。どうやら今ので完全に危険人物判定を受けたらしい。その反応はこっちがしたいくらいだったが。

「おかしいと思ったんだよ、気配がないし、全く質量が感じられない。魔法の話を聞いてたからそれを使ったんじゃないかと思ってさ。恐らく監視もそうやってしたんだろ？」

「……迂闊に出ないで良かったぁ、最悪気配を覚えられる所だった。本当、何者なのよ。」

少女があからさまに緊張してそう言った。司羽としては言わない方が良かったのだが、やはり人形と話をしている様で嫌な気分になるし、まぁ、向こうも何も言わなくてもそのくらいの警戒はしてくるだろう。

「ま、それだけだ。取り合えず、君を見付けるまではこの世界を堪

能するつもりだ。」

「……もっとあたふたすると思ったのに、何か完全に順応されたみたいね。」

「ははっ、これでも現代っ子だからな。」

「……何それ？　まぁいいや。今日はここまでにしておくわ。それじゃあね。」

少女はそう言うと、司羽の前からフッと消えた。

「うーん、便利だな魔法。俺も覚えられたりするのかな。」

手から炎を出す俺、悪魔を召喚する俺、何か中ニな台詞を言いながら魔物と戦う俺。うーん親父と違って戦闘狂なわけじゃないけど、こう、来るものがある。武術を使って殴り合うよりは良いだろう。

「……小説の中に迷い込んだみたいだな。」

司羽はそう思いながら、改めて知らない場所に来たのだと言うの事を感じるのだった。夜は、ゆっくりと深けていった。

第2話：髭×眼帯×古傷

窓から光がさして、小鳥らしき動物の鳴き声が響く。今までは獣の気配がそこら辺からしてたから久しぶりにまともな睡眠を取った気がする。これぞ文化か。

「朝か……起きるか。」

司羽は眼をゴシゴシとこすって身体を起こし、取り合えずルーンを探すためにリビングに行こうとした……のだが。

「……寝ぼけたか？」

なんか、居てはいけないモノがいる。隣に、ベットの中に。

「……ルーン、何してるんだ？」

「んぅっ……おはよ……司……羽……くぅ……。」

ルーンは少し眼を開けてこっちを見たかと思うとまた眼を瞑ってしまった。どうやら朝は弱いらしい。まぁ、若干混乱した頭で結果だけ言うと、いつの間にかルーンが隣で一緒に寝ている。というかいつ忍び込んだのだろうか、全く気付かなかった。どうやら自分も寝床が確保出来て相当安心していたらしい。これが実家だったら死んでいる。というかルーンに完璧に腕をホールドされているのにも今更気付いた。司羽は視線をずらして眠っているルーンを暫くジーっと見つめた。

「……柔らかそうだな……。」

ムニュッ

「ふにぇっ……！？」

今の音は別に怪しい事をした音じゃない。ただ何だか柔らかそうなほっぺたを摘んで引っ張った音だ。無論起こす為に、いや、確かにやりたかったって欲望がなかったと言えば嘘になる。だって引っ張って下さいと言わんばかりなんだもの。プニプニなんだもの。ということで横に伸ばしてみる。

「ふっ、ひゃ、ひゃにふるのっ！！」

「何するの、か。それはこっちのセリフだ。一体いつから一緒に寝てた？」

ジーっとルーンを睨む。司羽の視線に、ルーンもやっと司羽が何を言いたいのか理解したらしい。

「えっと……司羽が御手洗いに行った後、直ぐ寝たから。その時にね？」

「殆ど一晩中だな。」

なるほど、あれからずっと腕に纏わりついてたのか……。あの後、銀髪娘に会ってから直ぐに眠くなって、それで御手洗いに行ってなかったのを思い出して、行ってから寝たんだよな。

「だって全然寝付けなかったんだもん。」

「だからってなぁ……昨日から言ってるが俺は男なんだぞ？　ちゃんと警戒しないと駄目だ。将来悪い奴に騙されるぞ。」

「うぅー……。司羽は悪い男なの？」

ルーンは腕を取る力を強くして頬を膨らませた。ああ、今摘みたい、凄く摘みたい。いやいやマテマテ平常心を保つんだ。さっきはつい魔がさしたが、一応相手は年頃の女の子だ。勝手に男の布団に入って来たけど。上目遣いされても年上の威厳（昨日聞いたがルーンは１５歳らしい）を見せるんだ。

「まぁ、過ぎた事は良いけどな。でも、明日からは自分の部屋で寝るんだぞ？」

「えー……あ、そうだ。朝御飯作らないと！！」

「……おい。」

司羽がそう言うと、ルーンは手をポンッと叩いて唐突にそう言った。流したな？　と言うような視線を送ったがルーンは気にした様子もなく、じっと考える様な仕草をした。

「司羽が居るし、今日は何にしようかなー……って、あぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「ど、どうしたっ！？」

「昨日、買い物行ってない……。」

「……買い物……？」

ルーンが、忘れてた……、と溜息をつく。いつの間にか先程の添い寝の話題が完全に消滅しているが、まぁ今それは重要ではない。重要なのは近くに買い物を出来る様な場所があると言うことだ。

「ルーン、この近くに街でもあるのか？」

「あるある、この国でもかなり大きい筈だよ。うーん、しょうがない。私は学院で何か買おっと。じゃあ、司羽の分は……って、どうしたの司羽？」

「んー、いや。ちょっと馴染みのある単語が出て来たからな。」

いやまぁ、国で一番大きい街なら学校くらいあってもおかしくはないのかも知れないけど。まぁ取り合えず学校があると言う言葉で一気に親近感が増したなぁ、異世界。何だか森の生活に適応しつつあって感覚がおかしくなってるけど、どの世界も考える事は一緒なのかも知れないな。……取り合えずそこの街で聞き込みでもするか。

「よし、俺も街に行く。俺も一緒に連れてってくれ。聞き込みもしたいからな。」

「あ、そっか。そういえば司羽は銀髪の子を捜してるんだっけ。じゃあ、ついでにそこで何か食べてね。お金は……取り敢えず、これ使ってね。これで銅貨１００枚分の価値があるから、足りなくはならない筈だよ。」

「ああ、わかった。」

ルーンから通貨らしき銀貨を手渡され、取り合えずの目標は掴め

たな、と息をつく司羽の頭からは、ルーンが布団に入り込んで来た事などは綺麗さっぱり忘れ去られているのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「それじゃあ、私は行くからね？　帰りは学院前集合だから。先に帰っちゃ駄目だよ？」

「……ああ。」

ルーンの言葉に呆然としながら返事をして、ルーンが学校の中に入るのを見送った。呆然とする理由はなんて事はない、ルーンの言う学院とやらがデカすぎる、まるで西洋の城だ。こんな物メルヘンな世界にしか存在しないと思って……ってここはメルヘンな世界だったんだよな。

「っと、ぼーっとしてる場合じゃない、とにかく調査だ。取り合えずはこの世界の事と俺を飛ばした魔法についてだな、女の子の事は

情報がなさすぎる。」

なんだか先が長そうな調べ物だなーと思うし、取り合えずこの世界の常識くらい持ってないとこれから困るだろう。取り合えず常識についてはルーンから少しずつ教わるとして、魔法の事を調べないといけない。これについてはルーンも良く分からないみたいだったし……と、ここで思考中断。

「うーん、こういうのは図書館で調べるべきなんだろうけど……あれは、気になるなぁ……。」

取り合えず散策をしてみた司羽の目の前にあるのは、なんかいかにも映画に出て来るウェスタンな感じの店の入口で、凄く酒場な感じがする。なんと表現すれば良いのだろうか？　こう、俺の心の奥深くで何かが叫んでいる。あそこで情報を集めろ、と。

「……うん、やっぱり情報は酒場だよなぁ。図書館とか無いよ。この世界には無い。うん、無い。」

という事で司羽は早速入る事にした。外見はウェスタンっぽい作りなのに、入り口から階段になっていて、奥に入ると探せば我が国にも在りそうな感じのバーである。中にはまだ如何にもな感じのマスター以外の人はいない。というかマスターがシブイ。なんか右眼の眼帯の下に傷があるし、風格がある。そしてこっちに脇目も振らずにグラスを拭いてる。……取り合えず、どうしよう、席に座るか。

「……。」

「……。」

……き、気まずい。取り合えずなんか魔法の事とか聴ける雰囲気じゃないし、なんて切り出すか何にも考えてなかった。くそっ、あまりに好みの雰囲気だったからつい先走ってしまった……今更後悔しても遅い気がするけど。

「人探しか？」

「え……？　はい、まぁ。」

本当は魔法の事を聞こうとしてたんだけど、まぁ間違いではないし頷いておく。というかマスターの声渋い。予想通りだ。

「……そうか。」

「……え……。」

グラスにカクテルが注がれる。いや、注文してないんだけど。というかお金ないじゃん。ルーンに飯食べておけって言われたけど、どうしよう、酒って高いよな。足りなかったら逃げるか？　異世界でいきなり無銭飲食とか最低過ぎる。いや、実際は俺が頼んだわけじゃないけどさ。

「あの、すいません。俺今……。」

「お前もこれくらいなら飲めるだろう。遠慮するな、俺の奢りだ。」

……なんというか、一発でこの人に惚れた気がする。いや、奢ってくれたからじゃなくて単純に感動した。本当にこんな人っているんだな……。

「それで、写真や似顔絵はあるのか？」

司羽が感動していると、マスターは自分用らしい安楽椅子に座りながら聞いた。安楽椅子か、腰痛持ちなのかなぁ、マスター。って、余計な事考えてる場合じゃない。

「いや、それどころか名前も分からなくて……。年齢は１５歳くらいで、長くて綺麗な白銀の髪の女の子なんですけど。」

「……銀髪か、珍しいな。……だが、情報が少な過ぎる。」

「ですよね……。」

マスターは持っていたグラスの中に視線を落とした。なんか凄く絵になるなぁ、って俺はさっきから何を考えているんだ？　っと、思考が逸れた。まぁ、このくらいであっさり見つかるとは思ってなかったけど、やっぱり時間かかりそうだなぁ。

「……その女の事は俺の知り合いにも聞いておこう。時間は掛かるかも知れないが……な。だがあまり期待はするな。お前を見る限り、その女は少々特殊な存在の様だ。」

「……は？」

あの銀髪の子が特殊っぽいのはその通りだが、俺を見る限りってどういう事だ……？

「お前、異常に戦い慣れているだろう？　俺はこれでも昔は色々と旅をして来たが、正直その年でそこまで力の底が見えないと思った奴は初めてだ。場慣れ、と言うだけでは説明し切れん。その女とや

らを捜すにしても、そんな力を持ちながら捕まえられないとなると、俺も力になれるかわからん。……俺の言った事は何か間違っているか？」

「い、いえ……。」

凄いなマスター、正直驚いた。実際は俺があいつを捕まえられないのは、魔法の事が良く分かってないからなんだけど、一応力は隠す様にして生活してるからバレるとは思ってなかった。まぁ元の世界じゃ隠し切れてなかったけど。というかこの人さっきから普通は気付かない程度のレベルで警戒してるし、この人にはちゃんと事情を教えて協力してもらった方が良いかもしれない。凄く良い味方になると思う。

「……この際話した方が都合が良さそうですね。信じられないと思いますが、実は俺はこの世界の人間じゃないんですよ。その銀髪娘に、恐らく魔法で連れて来られました。」

「……唐突だな、それに確かに信じられん話だ。」

……だよなぁ、俺もいきなりそんな事言われたら黄色い救急車を呼ぶよ。落ち着いて話を聞いてくれるこの人はやっぱり大人なんだろうなぁ。

「まぁ、自分自身今でも信じられない話なんですけどね。まぁそういう理由から、俺には力があっても今はこの世界の知識が絶対的に足りないんです。恐らく世界を跨ぐ魔法ってのは凄いんだろうって分かりますから、その娘も特殊なんでしょうけど。俺がどれだけ力を持ってようとこちらの人の協力が絶対必要なんですよ。ですから、マスターの協力も凄く有り難いです。」

「……一先ず、事情は分かった。だが何故その話を俺にした？お前は客だ。そんな事をしなくとも最低限の協力はした。これから会う人間全員にそうするつもりか？」

沈黙し、グラスを傾けた。マスターはグラスを磨いていた手を止めた。まぁ確かに人間ってのは何処でどんな方法で人を利用しようとするか分からないからな。むやみに人を信用するといけない事も分かる。だがまぁ、何と無くの勘と言うのも信じてやらないと身動きが取れなくなるからな。親身になってくれる奴くらいは信じてみたい。マスターはじっと見つめて来た後、溜息を着いた。

「よし。」

そう言ってマスターは立ち上がる。ん、なんか言いたい事が伝わったみたい。こういう人は本当に凄いなぁ、そしてそういう所も渋い。カッコいい。惚れる。

「聞いてしまったのだから仕方ない。坊主、女の事は今は俺に任せろ。お前はこれからは学院に行って学べ、魔法の事もこの世界の事もな。そして考えるんだ、自分がこれからどうするのか。」

「へ……？　学院ですか？　また、なんで？」

「坊主くらいの年では行くのがこの世界での普通だ。坊主の世界の事は知らないがな。」

マスターはグラスに再びカクテルを注いだ。平静を装ってはいるが、実は今かなり動揺してる。しかし、俺が学院に……か。誰も俺の肩書き何てしらない場所で新しい気持ちで……。確かに一個人と

しては凄く魅力的だ、行きたい、凄く、今までが今までだったし。今の俺の状況からしてそう悪い話でもないし……。

「で、でも、どうやって？　俺はツテも金も戸籍もないですし、特殊な制度があったりするんですか？」

「……ツテならここにいるだろう。俺が言い出したんだ、学費や入学届けはいらん。全て俺に任せろ。」

「い、いや。それは凄くありがたいんですが……。」

「ならば拒否をする必要はない。今は遠慮をしている余裕なんてないだろう。」

確かにそうなんだよな……。魔法や常識を習いつつ、自分の欲望っていうか願望も満たせるのは凄く魅力的だ。なんというか、行きたい。

「決まりだな。」

「……お願いします。」

「ふう、しかしもう少し子供らしくしたらどうだ？」

「うっ……。」

なんか喜んでるのバレバレっぽい。そして俺とマスターはルーンとの約束の時間まで語り合い、特製カクテルとマスターが棚から取ったワインっぽい飲物を飲んだのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ごめんごめん！！　ちょっと、知り合いと話込んじゃって……って、どうしたの司羽？」

ルーンが訝しげに顔を覗き込んでくるが気にしない。俺には目標が出来たんだ。高い高い……目標がな！！

「ルーン、俺もマスターの様な本物の男になってみせるぜ……。将来はバーのマスターになって、安楽椅子に座りながらウクレレっぽいの弾くんだ。」

「は、はぁ？　どうしちゃったの……？　何かおかしい物でも食べた？」

ルーンの言葉など気にせず、司羽はマスターの様な男になろうと誓った。そして明日からの学園生活に思いを馳せるのだった。

第3話：異世界な学園

「ん……。」

マスターと話した翌日、昨日は今日からの学園生活への期待でかなり夜更かしをしてしまった。それはともかく窓から日が射し、一日が始ま……ふにっ。

「……ふにっ？」

眼を開けるとそこは真っ暗でした。というか、なんだ、まだ夢か？　なんだか柔らかいし、甘い匂いがするし……ってまさか。

「やっぱりか……。」

司羽は、上に抱き付く様に乗っかっていたルーンを無理矢理剥して、起き上がった。全くこいつはなんて危ない事をするんだ……色々な意味で。

「うにゅ……う……？　司羽……おはよ……。」

「昨日あれ程止めろと言ったのに……。」

こめかみを引くつかせてルーンを睨み付ける。いや、別に嫌じゃないんだが毎日やられるとその内理性を保てなくなる心配があるからな。

「……司羽……早くしないと遅刻しちゃうよ……。」

「は……？」

よく見るとルーンはもう登校服だ。学院は服装は自由らしく、ルーンは学園用に別の服を用意している。まぁ、どっちにしろ昨日の今日で俺の制服を用意しろってのは無理だが。

「なんでその服来たまま寝てるんだ？」

「にゅ……？　私は……司羽を起こしに来たんだよ……？　でも司羽が気持ちよさそに寝てたから……。」

なるほど？　つまりは俺をルーンが起こしに来てそのまま寝ちまったと……って。

「なにぃぃぃぃっ！？　はっ！！　時間は！？」

バッっと時計の方を見る。この世界は地球と時間の見方が変わらない。便利だな、じゃない。学院までは昨日の時間感覚だと三十分くらいで学院の登校時間は八時半だった。で、今の時間は……。

「八時十五分……？」

遅刻だ……完全に、初日から。

「くそっ、着替えだ！！　朝飯食ってる時間もねぇっ！！　おいルーン、何寝てるんだ、起きろっ！！」

「……後十分。」

「無理に決まってんだろ！！」

こうして慌ただしい一日は始まった。

「ま、間に合った。奇跡だ……。俺は奇跡を起こした……。」

まさか五分前に着くとは思わなかった。日頃ってか、小さい頃から鍛えているとはいえ、あの距離をルーンと荷物を抱えて十分。うん、頑張った。ってか多分なんかの力が働いてるんだな、この世界に来てから少し体が軽いし、多分重力の関係だろう。

「ほら、ルーン。着いたぞ、起きろ。」

背中で寝ているルーンの頬を肩でつつく。くそっ、寝入りやがって。てかあんだけ猛スピードで走ったのに良く起きなかったな。

「うにゅ、いやぁ……司羽連れてってぇ。」

「甘えるな。ルーンのクラスの場所を知らないし、そもそも俺は今から職員室だ。」

転校初日は三十分前に着こうと思ったのに……不覚。

「……しょうがないなぁ、自分で歩く……。」

そう言ってルーンは背中からスルッっと降りて自分で昇降口の方に向かった。フラフラとしているが、まぁ大丈夫だろう。というかこれが毎日になったら嫌だな、昨日も学院に来た時間って昼過ぎだし。

「さて、俺も行くか。異界の学校の先生か……どんな人なんだろ。」

期待半分、不安半分の気持ちで職員室に向かった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……此所が職員室か……。」

時間ピッタリ。なんだか早く来るよりこっちの方が良かったと言う感じもするな。

「ふぅ、行くか……。」

深呼吸をしてドアに手をかける。なんか緊張するな、今までの中でもトップランクだ。マスターが手続きをしてくれたらしいけど、速攻で編入出来るなんて思ってなかったし。あの人は何者なんだろう。とにかく、中に入ったら礼儀正しく……。

「失礼しまっ……！？」

ヒュンッ

職員室の扉を開けた瞬間に殺気を感じ、中からクナイ手裏剣が飛んで来る。司羽はそれを指で挟んで受け止めてからドアから離れて殺気の主に視線を送った。

「ほう、私の手裏剣を指で処理するか。」

そこにシュバッっと現れたのは忍者っぽい格好をした女性で、黒い髪を後ろで簡単に束ねている美人。……なんだか、凄く地球の方なんじゃ？　と思う位に忍者服が似合っている。

「い、いきなり手裏剣……。」

「ふふふっ、面白い。確かにこいつならばトップクラスに入れても良いだろう。」

一体なんなんだ？　この人がトップクラスとやらの先生なのか？

と、忍者な先生を訝しげに見ていると周りからおっとりとした声が聞こえた。現れたのは忍者さんより少し背の低い、ピンク色のウ

ェーブの掛かった長い髪にゆったりしたドレスの様な服を着込んだ美人だ。

「ごめんなさいね？　シノハちゃんがどうしてもって言うから……。あっ、私の名前はミリク、よろしくね。こっちのシノハちゃんと同じく貴方のクラスの担任よ。」

「は、はぁ……。」

自己紹介されたがいきなり過ぎて訳分からん。誰か説明してくれ。

「ミリク、何かこいつ挙動不信だぞ？　本当にこいつなのか？」

「……挙動不審って、いきなり攻撃されたら誰でもこうなります。」

挙動不審の原因が何を言うんだか。大体しょうがないでしょう、分からない事だらけ何だから。挙動不審にもなります。……というか、この世界の学院ってこんな目茶苦茶な所なの？

「でもシノハちゃん、写真と同一人物なのは間違ないでしょ？　私もいきなり学院長に転校生をトップクラスに入れるって言われた時には驚いたわ……。ねぇ、司羽君だったわよね？　どんな手を使ったの？」

そんなにジロジロ見ないで下さいミリク先生。いや、マスターが何やったかなんて知らないし。それに顔を近付けられて顔が紅くなる。

「俺も良く分かりません、知り合いに全部任せろって言われたから任せただけですし。それより、トップクラスって何ですか？」

取り合えず分からない事を一つずつ聞いていこうと聞いたんだけど……シノハ先生がニヤリと笑った。

「トップクラスとは極めて合法的に生徒を苛め抜く事が出来る私達教師にとって至福極まりない……むぐぅ！！」

なんだか凄い危ない事を言おうとしたシノハの口をミリクが押さえる。何か段々不安になって来たな……。

「と言うのは冗談で、この学院のクラスには5ランクあってA、B、C、D、Eと言った感じになってるの。格ランクにも3クラスあってA－クラス、B＋クラスとかね。ちなみにAの方が優秀な子を集めるんだけど……。私達が聞くには司羽君は誰かに最高クラスのA＋に推薦されたらしいんだけど、何故か学院理事が昨日の今日でそれを通しちゃったのよ。」

なるほど、だから最初に試したのか……というか手裏剣で試されても困る、下手したら普通に怪我するぞ。……でも、マスターは何をやったんだろう？　エリート校っぽいのに昨日の今日で最上のクラスに無償編入って……虫が良過ぎる。

「まぁ、腕は立つ様だし。私は構わんがな？　無論、弱ければ直ぐに切り捨てたが……。」

シノハが面白い物を見る様に笑う。なんかこの先生怖い……。

「ふふふっ、私も美形男子なら何の問題もありません。男の子ってなかなか私達のクラスまで上がって来ないんですよねぇ……。」

うん、この先生も危ない。気をつけないと……色々な意味で。あの眼は苛めっ子の眼だ。

「さて、じゃあ早速クラスに行きましょうか。」

「……はい。」

なにはともあれ、今日からはここの学院生なんだし、慣れなくちゃな。そんな事を考えつつミリクを筆頭にＡ＋のクラスとやらへ向かった。

ミリクが教室のドアを開けると、ざわめいていた教室がシンと静まる。凄く転校生な気分だ。いや、実際そうなんだけど。取り合えずミリクに、待っててね？　と言われて教室の外で待たされる。シノハ先生と二人にしないで……この先生がさっきからニヤニヤと見てきて怖いよ……。

「皆さーん！！　今日は新しいお友達、つまり転校生がいまーす♪」

ミリク先生が言うと同時に教室がざわめく。ううっ、また緊張してきた。第一印象は大事だからな、ちゃんとリラックスして……。

「はーい、司羽くーん、いらっしゃ～い！！」

ミリク先生の声でシノハ先生に連れられる様に中に入る。同時に教室が再びシンと静まり返った。

「えっと、とある事情でこのクラスに編入致しました、司羽です、よろしく……？」

……あれ？　なんか視界端っこに見慣れた顔がある気がするんだけど。いや、気のせいだよな。だってここって聞けば一番レベルの高いクラスなんだろ？　まさかなー。

「司羽ー！！　司羽ってここのクラスだったんだ！！　これからはクラスまで運んでもらえるね？」

「……。」

……うん、窓側の前から二番目、横からも二番目の席でさっき背負って来たばかりの少女が嬉しそうに手を振っているのは幻覚じゃなさそうだな。

「ルーン……最高クラスだったのか？　でも、そもそもルーンって同い年じゃないだろ？」

まさかあのルーンが最高クラス？　あの人のベッドに入って来り、買い出し忘れたり、俺に背負われなきゃ遅刻確定なルーンが……？

「ルーンさんはこの学院の現首席ですが、お知り合いだったんですか？　それとルーンさんは十五歳ですよ？　何か問題があるのですか？」

「しゅ、首席……？　それに年は知ってたが何で十五歳が同じクラスに……？」

うーん、分からない事だらけだ。流石異世界、学校のシステムが違うらしいな。それにルーンが首席なのも色々とおかしい……。かなり混乱していると、ルーンがクスッっと笑って説明してくれた。あ、なんかデキる子な感じ。

「司羽の所はそうだったのかもだけど、ここはクラスに年齢は関係ないんだよ。クラス分けの成績も、試験で強い人順だから勉強が出来なくてもクラス自体に関係ないし。……でもいきなり此所に入って来るなんて司羽何したの？　まさか、先生を籠絡したとか……？」

「籠絡なんてしてない！！　それに、何故かは俺も聞きたい。」

てか籠絡って……なんか周りからの視線が少し変わったぞ。転校初日にいきなりなんてことを言うんだ！！

「……ふーん……ふふっ、成る程ー、司羽君とルーンさんは仲が良いんですねー？　さて、それでは司羽君はルーンさんの隣りと言う事で♪　ルーンさん、司羽君に色々教えてあげて下さいね？　昼夜交代です。」

「昼夜……？　うーん、良く分からないけど任せて下さい！！」

「ふふふー、よかったですね司羽君？」

ミリクの言葉にルーンは嬉しそうに答えた。なんかミリク先生がニヤリとこっちを見た後、これは楽しくなりそうです。とか小声で

言ってたけど聞こえない、気にしない。一瞬で理解した、この人はそういうタイプの人だ。つまりは人をからかって遊ぶタイプの人。こんな人が先生でいいんだろうか？　……まぁ、うん、頑張ろう。

かくして、学院生活が始まった。

第４話：入替戦

朝のＨＲが終わると、予想通り机の周りにクラスメイトが一斉に集まって来た。てか今更気付いたけどクラスは司羽、ルーンを入れて２０人程度でその全てが女子で何だか喜ぶ所か目茶苦茶落ち着かない。それにかなり特殊な転校生ってのは皆、随分興味があるようで……。

「ねぇねぇ、どこから来たの？　前の学校では歳毎に人が分かれてたの？」

「歳は？　趣味は？　彼女は？　どこに住んでるの？」

「クラス初の男の子だねぇ。ルーンの知り合いみたいだけどどういう関係？」

とまぁ、こんな感じで質問責めに遭うわけで……。ルーンには話しちゃったけど、やっぱり迂闊に異世界の事はあまり話さない方が良いんじゃないか？　と思う。白銀の少女のことはマスターが任せろって言ってたし。これ以上は秘密を明かしてリスクを負う程のメリットがない。

「ほらほら、皆ストップ！！　司羽が困ってるよ。転校生って珍しいから他のクラスからも野次馬が来てるし……。それに男の子でこのクラスって至上初だからね。騒がれて当然だけど。」

ああ、ルーンの気遣いが凄く嬉しかったり。でもこういうのも満更じゃなかったりする。こうやって質問攻めにされる事も向こうじゃ有り得なかったからな。

「いや、ありがとうルーン。俺は大丈夫だよ。」

「司羽……。」

取り合えず立ち上がって皆と向かい合う。さっきはかなり緊張してちゃんと出来なかったし、改めて自己紹介をした方がいいな。

「あー……、俺の正式な名前は萩野司羽って言うんだ。司羽で構わない。少し特異な生まれで、ここら辺の事は良く知らないからたまに変な発言しちゃうかもしれないが、そこら辺は教えてくれ。趣味と特技はないが、家事は一通り好きだな。ちょっと前まで旅をしてて、ルーンには道に迷ってる時に助けられたんだ。いきなりA＋クラスに編入して来ておかしく思うかも知れないけど、これから宜しく。」

自己紹介が終わると何だか黄色い歓声が飛び交う。うーん、最後の営業スマイルは余計だったか？　まぁ受けてるから良しとするか。親父の御陰で国の御偉いさんとも良く会ってたからな。偶には役に立つじゃん、親父も。この容姿も使い方によっては悪いもんじゃないし。

「あ、そうだ。司羽にちょっと紹介したい子がいるの。」

「ん、紹介したい子？」

「うん、リア。」

良く分からない内にルーンは、人ごみの中から黒いローブを纏い布の様な物で顔を完全に隠した謎の人を連れて来た。なんか謎の組

織とかに所属してそうだ。司羽も一瞬たじろいでしまう様な怪しさだが、ルーンが友人と言うのなら大丈夫だろう。

「この子は私の親友のリア。顔は勿論、声も聞いた事がないんだけど……でも、すっごく良い子なんだよ？　ちなみに成績は私の次に良いの、次席だね。」

『宜しくお願いしますね。』

まさかの筆談ですか……しかし、首席にも驚いたが次席もまた……。でもルーンが親友だって言うくらいだし良い子なんだろうな、本当に怪しいけど。身長だけ見るとルーンと同い年に見えるけど、謎だなぁ。

「こちらこそ宜しく。」

そう言うとリアはコクリと頷いた。素直な子だな。この子もルーンの様な美少女なのだろうか？　まぁ、親友と言っているルーンですら見た事がないんじゃあしょうがない。……にしても、さっきから嫌な視線を感じるな……。っと、そんな事を考えている内に原因の男子らしい奴が近寄って来たな。うん、やっぱりこいつの視線だな。他の奴からも感じるけど、こいつ程じゃないし。歳は……俺と同じくらいかな？　少なくともルーンよりは年上っぽい感じがする。

「……君、いきなりこのクラスに編入したんだってね？」

「へ？　ああ、そうだけど。」

言葉と同時にクラスに静寂が訪れた。何だかお坊ちゃまっぽい感じがするな。薄い金髪に人を見下した様な眼。非常に感じが悪い。

整った顔ではあるんだろうけど、あの眼は気に入らないな。

「ああ、そうだけど。お前は？」

「僕はムーシェ、Ａクラスだ。どんな卑怯な手を使ってＡ＋クラスに入ったかは知らないが……。僕は君に入替え戦を申込むよ。」

はい？　入替え戦……？　って何だ？　何だかクラスの雰囲気が一気に悪くなったし。ルーンなんてムーシェを完全に軽蔑した視線で睨み付けてる。

「ねぇ君、誰？　Ａクラスとか言ってたけど……。転入生の司羽にいきなり入替え戦を申込むなんて、ちょっと頭おかしいよ？　そんなに戦いたいなら、入替え戦なんかじゃなくて、私が私的に闘ってあげるけど？」

ルーンは最低、とでも言いたげにムーシェを見る。というか、君誰？　の時点で周りが一歩下がるくらいルーンの雰囲気が怖い。と同時にルーンが首席と言うのに少し納得した。恐らく強いのだろう、ルーンは。ムーシェはルーンを見て一歩下がって、こめかみを引きつらせた。

「ぼ、僕を知らないのかい……！？　僕は男子首席のムーシェだっ！！　総合の首席だか何だか知らないが僕だって首席だぞ！？　せめて顔と名前位覚えておいて欲しいね！！　……まったく……。」

ムーシェはルーンから眼を逸らし、溜息をついてこっちを睨んだ。うーん、ルーンの眼が怖い。

「僕が申し込むのは君との入替え戦だ！！　ちょっと周りに恵まれ

てるからって調子に乗るなよ？　僕の方が強いに決まってるんだからな。下のクラスからの入替え戦は拒否出来ないから逃げられないんだし、覚悟を決めるんだな裏口入学生！！」

さっきからいちいちムカつく奴だな。大体入替え戦ってなんだよ。ルーンが面白くなさそうな顔してるけど、やっぱり言葉通りな感じなのか？

「司羽はまだ知らないのも無理ないけど……入替え戦って言うのは名前の通りにクラスを入替える為の模擬戦だよ。例えば司羽が負ければ司羽のクラスがＡに下がってムーシェのクラスはＡ＋に上がる。逆なら司羽は変わらずムーシェがＡ－に落ちる。これが強い人が上に上がって行くって言った理由。」

「あー、成る程」

つまりムーシェは俺を倒して上に上がろうと言うわけか。確かに転校生狙いってのは卑怯な感じがするなぁ。とはいえ、いきなり最高ランクの此処に入ってきた俺に対してプライドもあるんだろうけど。

「それじゃあ広場に出よう。ふふふ、可哀相だがこれもしょうがない事なんだよ司羽君？」

「はぁ、拒否出来ないんだっけ。面倒だなぁ……。」

あんまり気が乗らないんだけど、とムーシェの見下した笑みを軽く流し、ルーンの不安とは違う不満が混じった表情を不思議に思いながら司羽は広場へと向かった。

広場にはＡ＋クラスの皆は勿論、他のクラスの者も集まっていた。
俺が落ちたら次は自分が戦おうとか思ってるのかもね。つまり俺は絶好のカモと。嫌だなぁ、こういう視線。

「ふふふ、降参と言う手段もあるがどうする？　今ならまだ間に合うよ？」

「面倒事は嫌いなんだがな。……それに……。」

こういう事にはあんまりいい思い出ないからな。この前もこのせいで親父から責任の押し付けされたし。……でもまぁ、こういう奴は少しお仕置きした方が良いかもなぁ。

「……ああ、そうだ。どうせだしお前降参してくれよ？　弱い奴と闘うと後味悪くなって嫌なんだ。」

「……な……にっ！？　弱い？　この僕が！？」

あ、怒った。まぁ別に降参しても良いんだけど、マスターが折角俺を最高クラスに入れてくれたんだし、俺も期待に応えなきゃな、うん。ルーンが一緒のクラスの方が何かと教えて貰えそうだし。怒ったムーシェを観察して遊んでいると、ミリクが『始めてくださー

い♪』と言って結界の様な物を張った。空間が隔離された感じだけど、こんな事も出来るのか魔法って。便利だな。

「ふふふ、先手を君にあげるよ！！　さぁどんな屑魔法を見せてくれるんだい！？」

「……魔法？」

あ、もしかして魔法で戦わないといけないのか？　それは困る、そんな物使えない。いきなりピンチの予感がする。

「ちょっと待った。」

ミリク先生の方を向くと『なんですか？』と不思議そうに返して来た。ムーシェが降参かい？　とか言ってるが気にしない。

「魔法で戦わないといけないのか？　他の素手とか気とか……。」

そう言うとミリクはいきなり何を言うのですか？　と言った感じで首を傾げた。うん、でも魔法の事もこの世界の事も全然知らないからね。

「別に素手で魔法でなくとも勝てればルール上は問題ありませんが……キ、と言うのは良くわかりません。それと魔道具等の使用も出来ますがは持参ですからあげる事は出来ませんよ？」

よかった、魔法じゃなくても良いのか。……武器がないのも別に構わない。素手でも気絶させればいい訳だし。

「ムーシェとかいったな？　先に攻撃して良いぜ。魔法とやらを見

て見たいしな。」

「何……？　君は一体何を言っているんだ？　魔法を見た事がないのか？」

……うーん。周りから奇異の視線を感じる。電気を知らない感覚何だろうなぁ、俺って。どちらにしても、魔法とやらには興味がある。正直、あの銀髪娘の様なのは困るけどな。

「ほら、屑魔法だっけ？　さっさと使えよ。出来ないのか？　出来ないならさっさと降参しちまえ。俺も弱い者苛めはしたくない。」

そう言うとムーシェは本気で怒ったようで、細い杖の様な物を構えた。あれで魔法を使うのか、昔見た小説みたいだな。

「……後悔しても知らないよ……？」

その言葉と同時にムーシェの前に現れた魔方陣から大量の火の玉が飛んで来る。

「うわぁ、魔法っぽいなぁ……でもやっぱり銃弾の方が速いな。」

ここでも親父の無茶苦茶な特訓が役に立った。戦闘を学ばせる為に戦場に子供を放り出すんだからな、人のやる事とは思えん。そんな事を考えつつ、自分に当る炎だけを避ける。炎の方を全く見ずに。

「なっ……避けた……？　あの数を？　レジストしたのではなくて避けただって！？」

「ふーん、魔法にも質量はあるみたいだから風圧が多少あるけど、

それに加えて力自体に気配の様な物を感じるな。……で？　魔法ってのはこんな物か？　他にはどんな事が出来るんだ？　もっと見せてくれ、後学の為にな。」

司羽の言葉にムーシェだけではなく、ミリクやギャラリーまで言葉を失った。でもまぁ本当に興味深いな。感じた力の感じだと、俺の世界で言う気と同じ物か？　でも炎とか出すなんて知らないし、あの杖に秘密があるのかな。……まぁ、どちらにしても非効率的な力の使い方だ。まぁ、こっちの人間が無意識にやってる肉体強化も効率的とは言えないけどね。火事場の馬鹿力とか。

「っ……ならば……これでどうだ！！　避けられまい！！」

「……。」

ムーシェは何かを念じる様に杖を天に掲げた後に杖をそのまま司羽の方に向け、『破砕しろ！』と命じた、しかし……。

「……な……馬鹿な、爆発しない……？」

「お前はアホか？　身体の中なんて気配を感じるに決まってるだろ？　その前に気……いやお前には魔力って言った方が分かり易いだろうが、身体にはそれが溜り易いからそんなに送り込むのに時間掛けてたら相殺するの何て指を動かすより簡単なんだよ。自分の力の事だろうが、把握しろ。」

「……そんな馬鹿な事が……。」

司羽はそう言って溜息をついた。ムーシェを見る限りもう手はなさそうだな。親父の武器使いの門下生の素手の方がまだ強いぞこい

つ。本当に男子の首席なのか？

「そんじゃあま興味も失せたし、そろそろ終わりって事でクラスもまた頑張って上がれよ？」

「なっ……！？」

ドスッ

一瞬で近付き腹に一撃。うん、やっぱりこの世界は重力の関係か動く速さが妙に速くなるんだよなぁ……朝の遅刻しそうな時も間に合ったし。ってな感じで崩れ落ちるムーシェを確認して、ミリクが終了のコールをする。

「しょ、勝者司羽君です！！」

同時に静かになっていた周りのギャラリーから歓声が沸く。ルーンの方を向いて笑うと、ルーンもクスッっと笑ってくれた。まぁ、どうにも荒っぽい学院だけどなかなか楽しくやってけそうだ。司羽は歓声に包まれながらそんな事を思った。

第5話：影の少女

「……嗚呼、めっちゃ眠い。」

この暖かさ、と教師の子守唄のコンボは全世界共通だなぁ。あの入替戦の後、また質問の嵐に遭って疲れたし。見慣れない武術には皆驚いたようで、先程よりも質問者の人数が増えてかなり疲れた、精神的にも肉体的にも。取り合えずエーラにも格闘術がある事をルーンから教えて貰ったから、あまり怪しまれる事のないような物語を創作してごまかしたけど、エーラの武術については良く知らないし、下手な事を言うわけにも行かずかなり苦労した。そのせいで地球でいつも怠いと思っていた数学の授業の時間が凄く有難く感じる程だ。あ、ちなみに数学の授業は、やはり歳によって学力に差があるので移動教室になってる。その為にＡ＋、Ａ、Ａ－の同年代が一つの教室に集まっているわけ。でも、さっきの戦闘のおかげでいきなりＡ＋に飛び入りした事による嫉妬の視線がそこまで多くないのはありがたい。……うん、授業も難しいレベルじゃないし、この時間は少し眠らせて貰おう。

「んじゃ、おやすみ……。」

「司羽、疲れたのは分かるが流石に初日の最初の授業から居眠りは不味いだろう？　それに、ミリク先生の授業だぞ。」

「……流石に初日は大丈夫だろ。もし当てられたらムーシェ、代わりに答えてくれ。俺は眠いんだ……。」

「初日だからこそなんだが……図太い神経してるね。」

ムーシェは呆れ混じりに溜息をついた。そんな事言われても仕方ない。あの質問攻めみたいに慣れない事ばかりだから疲れてるんだ。
ん？　なんでムーシェと普通に話をしてるのかって？　実はあの後、ムーシェが、

「誤解をして済まなかった。今までに無かった事だからつい疑ってしまったが許してくれ。」

と頭を下げてきたんだよ。俺も別に気にしてなかったし、悪い奴ではないみたいだから『良いよー。』の一言で和解。少し話してる内にかなり親しくなったのだ。ルーンが居るとはいえ、あの女の園の様なクラスにいるので、違うクラスとはいえ男友達が出来たのはかなり安心した。折角奇異の視線を浴びせられない所に来たのだから、友達は沢山作っていきたいし。……なんだかこの世界を気に入り出しているな、俺。

「えー、それでは……次の問題を元気が有り余ってそうな司羽君にお願いしましょう。」

「ほら言わんこっちゃない。次は司羽の番だぞ！！」

「うーん……わかったよ。」

くそっ、名指しされた。転校初日はされないと思っていたのに……。やっぱりあのミリク先生の数学で居眠りを見逃してくれるなんて思考は甘かったか。だってあの人は人を弄る事が大好きな人の眼をしてるもの。

「ふふふっ、ではこの問題を解いてください。」

「はい……。」

よし、これが終わったらバレないように眠よう。流石に気配を調整すれば二回連続で当てられたりはしない筈だ。うん、取りあえず問題は……

『どの様な女性が好みですか？《A＋クラス司羽君質問表より》』

「……これは？」

「司羽君への問題ですよ？」

えーっと、なんかジーっと痛いくらいに視線を感じる。というか凄く答えたくない。絶対にからかってくるもん、ミリク先生の眼がうずうずしてるよ。……よし、しょうがないから当たり障りのない答えで切り抜けよう。

『好きになってしまえば特に気にしないので、何とも言えません』

「逃げましたね……？」

「何の事でしょう？」

司羽はミリクのやんわりスマイルに営業スマイルで返して席に戻った。これからはミリク先生の授業は気をつけよっと。そんなこんなで授業は終わり……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「つ、司ピーがルーンちゃんと一緒に住んでるって本当！？」

「一緒に住んでるって事はやっぱり毎日夜は一緒のベッドで……そんなぁ♪」

「萩ノンはやっぱりやっぱりやっぱり小さい子が好みなんだね！？」

「………。」

　くそっ、ルーンの奴に釘刺すの忘れてた……ってか司ピーとか萩ノンってなんだ、まぁ別に悪い気はしないし、女の子のクラスだしある程度は予想してたけど。しかし移動クラスから帰って来るなり大量のクラスメイトの好奇心の対象になるなんて……そろそろ本気で休みたい。

「ムーシェ、何とかしろ……。」

そう言って隣りを見ると、ムーシェまで興味深そうに見ている始末。うん、やっぱり気になるよね。俺がムーシェの立場でも気になるもの。

「それは初耳だなぁ。司羽、僕も興味あるんだけど？」

「……興味に答えられるような事は何もないぞ。」

……取り敢えずルーンに口止めをしなきゃな。余計な事を言わさずに被害を最小限に食い止めなければ色々とマズイ。これから毎日教師とクラスメイトから暖かい視線を送られるのだけは回避しなくては……っ！！

「ルーン……お前皆に何を言ったんだ？」

「ん～、私は、司羽とどんな関係って先生に問題出されたから『一緒に家に住んでる感じの関係』って答えただけだよ？　ね、リア。」

『はい、その通りです』

成る程、向こうも同じ様な状況だったわけか。なんかあのピンク色の小悪魔が微笑んでいる気がしてならない。なんて人に眼を付けられてしまったんだ。……というかルーンの表現が危なすぎる……。そんなこんなで溜息をつくと、案の定、後ろからポンと肩を叩かれたよ畜生。

「ミリク先生……？」

「司羽君、ちょーっと職員室まで来てくれるかな？　聞きたい事とかあるんですよねぇ♪　住居の事とか家族の事とか不純異性交遊の事とか、担任には知る必要があるんですよ？」

ニコニコと嬉しそうに笑うミリクに何か酷く寒い物を感じながら、為すすべもなく司羽は職員室へと連行された。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はぁ……もういや……。」

たっぷりと精神を抉られた。そりゃあルーンと一緒に住んだりはしてるよ？　でもだからって『どうやって堕としたんですか？』とか『毎日ベッドで大運動会ですね♪』とか言って苛める事ないじゃないか。しかもあの人いつの間に書いたのかムーシェと俺が抱き合

っている謎の絵まで見せ付けてくれやがった。絶対ドがつく人だよあの人、今日あったばかりの人を苛めて楽しんでるもん。朝感じた視線はやっぱり玩具登録された視線だったんだな。

「まぁ、それでも一人よりましか。」

つい前の学校での事を思い出してしまった。……いけないな、昔と今を比べる事をしちゃいけない。いきなり飛び級で狡いと思われても仕方ないのに迎え入れてくれた皆に失礼だ。

そんな事を考えながら教室に戻る為に渡り廊下を歩いていると、視界の端に一人の少女がベンチに座って本を読んでいるのを捉えた。その少女を一言で例えるなら『影のような少女』。そこにあっても意識をしなくては気付かない、そんな雰囲気の少女だった。漆黒の腰より下まで伸びる髪が少し顔にも掛かっており、髪と同じ色の大きな瞳、身長や年齢も、ルーンとそう変わらないだろう。だが、ルーンやこの位の女の子の様な無邪気さ、明るさ、幼さが全く感じられなかった。そして、人目を引くような美少女であるようなのに存在感や気配が希薄な事が、気配に敏感な司羽には逆に印象的だった。多少気配に敏感な人でも人込みの中ならば確実に気付く事はないだろう。俺はいつの間にかその少女の放つ異様な気配に引き寄せられる様にその少女の方へと歩いていた。

「……今は授業中じゃないのか？　こんな所にいるなんてサボりか？」

まぁ、俺も人の事言えないけどな。人災の被害にあったんだからしょうがない、回避出来るものならしたかったよ。少女は何故か驚いたような表情をして俺を見たが、直ぐに本に視線を戻してしまった。

「あら、そう言う貴方は転入生ね。転入早々サボタージュ？」

少女は表情を変えずに毒づく。……まぁ確かにこのまま戻ってもどうせ寝るし、サボりも良いかも知れないなー。俺って早速不良だなー。

「そうだな、今から授業に戻る気にもならないし、サボりだな。」

「あらそう。」

そう言って少女は興味なさそうに呟いた。無愛想過ぎる。なんか巷で話題になってるツンデレとかクーデレって次元じゃない。……まぁ、こっちからつい話掛けてしまったんだし話題作りはこちらの仕事だな。あんまりこういうの慣れてないけど、どんな相手ともコミュニケーションを取れる様になりたい。

「何してるんだ？　授業中なのにこんな所で本なんか読んで……。」

俺が問うと少女は呆れた様な視線を送って来た。……なんだか残念な物を見るような視線なのだが、特別腹は立たない。この少女はこんな感じが普通なのかも知れない。

「別に？　退屈だから。……転入生はあの首席を落とした凄腕だって噂で聞いたのに、話題作りが最高に下手ね。それともそういう初っぽいのが持ち味なのかしら？　まぁ、どちらにしろ私は興味ないけど。」

「ルーンを落としたって、そんなデマが流れてるのか……というか別に意図して初を持ち味にしてる訳じゃない。……まぁ、話題作りが下手なのは勘弁してくれ。こういう普通の会話ってのも極最近ま

で皆無だったから、経験値が足りないんだ。」

「そう。」

……話が続かない、なんか登山初心者がいきなり一人でエベレスト登る感じがするよ……。別に無理に続ける必要はないんだけど……。うん、いつまでこっちに居るのか分からないからって、こういうのはいけないな。ナンパ師みたいだし。この子の邪魔になるっぽいし、友人を作るってのは何か違う気がする。ムーシェとも普通に仲良くなったし、俺も普通にしてれば良いのかな。……なんかそう考えると、凄く不審な奴だな、今の俺って。

「悪いな、君を落とそうとかそういう気は無かったんだけど。なんか邪魔になったみたいだし、俺は行くから読書を続けてくれ。」

自己紹介くらいはした方が良かったかもしれないけど、まぁ同じ学園ならまた会うだろ。……さて、俺はどうしようかな。この学園の図書室でも探すか、魔法の文献はかなりの物らしいし。

「待ちなさい、私は邪魔だなんて言ってないわ。それより、ちょっと気になる事があるのよ。……唐突だけどさっきの戦闘見せてもらったわ。弱くはないって物腰で分かったけれど、あんなに強いだなんて思って無かった。あれ、何処で覚えたの？」

「は……？」

邪魔じゃないって事は、さっきのはなんだったんだ？　もしかして、俺は弄られてたんだろうか？　まぁ、それは今はいいか。自分はそういう星の巡りらしいと納得しよう……いや、凄くしたくないけどね？　取り敢えず折角向こうから話かけてきたんだし、俺は

さっきの仕返しに無視して行く様な真似は出来ないし。

「ああ、何処でっつーか……親父に鍛え込まれててな。っていうのも、俺に萩野流を継がせる為なんだがな。」

「……萩野流？　聞いた事ないわね。」

少女は少なからず司羽に興味を持ったようで質問を繰り返した。正直、あまり話してはいけない気がするのだが、眼が真剣だし、今更ごまかせないだろう。

「……ああ、武術って分かるだろ？　それの一種で、俺の先祖が創始者なんだが……ま、それが萩野流だ。俺は生まれた時からこれを身体に教え込まれて来た。さっきのはまぁ……正直武術でもなんでも無いけどな。避けて気絶させただけだ。俺の居た場所にはなかったから魔法は良く知らないが、人の中に見えない力がある事は知ってたし、実際読めるし使える。俺は気って言ってるけどな。」

「……魔力が読めるから特別な秘術でもあるのかと思ったわ。なるほどね、武術の一種だったってわけか。……でも貴方が生まれた時から……か。」

少女はそう言うと、俺に心を見透かす様な視線を送って来た。

「じゃあ、貴方は親から望んでもいない権利を押し付けられて、その為に自由を持って行かれたのね、残念な子供時代、同情するわ。」

……うわぁ、なんか凄く酷い事言われた気がするよ？　この子もろくな人生送ってない感じがプンプンするけど。……まぁ、少しは反論しとくか。

「ああ、まあそうなるな。だが、俺はずっと家に逆らわず、拒絶してこなかった。寧ろ、小さい頃は強くなるのが好きだったし、期待されるのも好きだったからな。別に修業一筋って程でもなかったし、門弟の人はいい人ばかりで、親父や母さんと出掛けたりも少なかったわけじゃない。そこまで酷い親とは思ってない。……まぁ、初めていきなり戦場の前線に放り出された時は親父を目茶苦茶恨んだもんだが。」

「戦場って……なかなか壮絶な過去があるのね？」

周りからは人のする事じゃないと非難を浴びてたらしいな。母さんにも数ヶ月程口利いて貰えなかったらしいし。ざまあみろって思った。

「まぁ、もう慣れたしな。それから得た物も少なからずあるよ。」

勿論余り良いものではない物も多かったけどな？　……っと、喋り過ぎた。そろそろ止めないとマズイか。おかしいな、こんなに話すつもりはなかったのに……そんな事ないと思いつつも、どうやら少しホームシックになっていたみたいだな。……年下っぽい女の子相手に……ルーンもだけど、俺ってそういう趣味じゃないよな？

「ふふっ、それ子供が言う台詞じゃないわよ？」

「……君には言われたくないな。」

少女はクスクスと笑っている。……あんまり笑える話をしたつもりないんだけどな。

「全く、笑うなよ……結構真面目な話なんだぞ。……それより君は名前、何て言うんだ？」

……さて、取り敢えず、ずっと君って呼ぶのは駄目な気がする。さっきは別に良いと思ったが、悪い子じゃなさそうだし。名前くらいは知っておきたい。

「名前？　そう言うのは自分から名乗るものじゃないかしら？」

「……俺は萩野司羽。長い名前だと思うだろうから司羽でいい。ここじゃあそれが普通見たいだしな。」

少女の言葉に、それもそうだと思い名乗った。なんか言い負かされてる感じがする。実際そうだし、別にそれがカンに障ると言うわけでもないので構わないけどな。

「……司羽か。全く、私もまんまと名前を聞き出されちゃう辺り、どうかしちゃったのかしらね。」

少女はフッっと笑って言った。いや、別にナンパじゃないし、そもそも引き止めたのそっちだし。って言ってもカウンター食らうんだろうなぁ。……はい、そこ、情けないとか言わない。

「私はミシュナ。クラスは入替え試験と通常試験をずっとサボってるからＥ一の最低クラスよ。だからあまり会うこともないんじゃないかしら？」

「ふーん、そうなのか……。何にしても、これから宜しくな、ミシュ。」

「……いきなり愛称を付けて呼ばれるとは思ってなかった。ふふふっ、まぁ良いわ。」

俺がそう言うと、ミシュは眼を細めて妖しく笑って言った。なんていうか、少し馴れ馴れしかったか？　さっきクラスメイトに愛称で呼ばれたから、そういうのをした方が良いのかと思ったんだけど……うん、慣れない事は駄目だな。略しただけだし。

「……ふふっ、にしても司羽。私見たいな女の何が良くて近付いたの？　貴方はもう首席の子と知り合いなんでしょ？　あの子も人気あるみたいだけど、噂通りそっちはもう落としたのかしら？」

「だーかーらー、そんな訳無いだろ！！」

「あら、まだなのね。それなら私は練習台？　そうなの？」

いきなり面白そうな笑みを浮かべたミシュに、表情が引きつるのを感じた。それを見てミシュは更に攻撃を仕掛けるべくベンチから立って、俺を甘える様に上目遣いで見る。……可愛いと思ってしまったら負けだ……。

「……お前、そんな事してるといつか襲われるぞ？」

「ふふっ、私自衛が出来る程度には強いから平気よ？　ああでも貴方強いから、私も食べられちゃうのかしら？」

そう言って妖しい笑みを深める。うん、完璧に遊ばれてる。ミリク先生の時よりダメージがデカイのはやっぱり年下だからだろうか……。

「ふふっ、冗談よ。さて、それじゃあ私はそろそろ行くわ。またね。」

「あ、ああ、またな。」

そう言ってミシュは立ち上がって校門の方へ向った。……むう最後の笑顔は狡いな、何と言うか小悪魔だ。……さて、今から戻っても仕方ないし、魔法の文献を探そうかな。

そうして、ミシュナの残した不思議な余韻を味わいつつ、俺は図書館へと向かって行った。

第6話：歌とお酒と宿泊と（前書き）

3月辺りからペース上げられたらいいなぁ……と、思ってます。

それでは、宜しければ感想評価をよろしくお願いします。

第6話：歌とお酒と宿泊と

「ふぅ、初日から中々疲れたな……。」

授業と放課後の質問責めが終わり、俺は一人帰路についた。別に一緒に帰るのが恥ずかしいとかではなく、ルーンはリアと委員会があって一緒には帰れないらしい。と、言う事でこれからマスターのバーにでも行こうかと思っているところだ。

「御礼も言わなきゃいけないしな、うん。一日でどうにかなるとは思えないけど白銀の女の子の情報も聞いときたいし。」

そう独り言を言って店の方に歩く。店までは学院近くの公園を突っ切るのが一番近いのだが、その公園のまた広いのなんのって……森みたいになってるよ。広場が中心にあり、それを取り囲む様に木が大量に生えていて、森と勘違いしてもおかしくない様な公園だ。

「それにしても広いよなぁ。学院にも森見たいなところがあるけど、エーラってどんだけ土地が余ってるんだろう。地球では考えられないな、『魔法との　自然に優しい　エコライフ』」

なんとなく、川柳っぽいのを作りながら森の中に入り、この世界に生えている植物を眺めて進むと、不意に違和感を感じた。……何か声が聞こえる……なんだこれ、歌か？

「……歌声？　まぁ異世界だし、妖精が歌ってても別におかしくないんだろうけどな。」

なんて言いつつ、ついつい声のする方へと足を向けてしまう。美

しく悲しく、優雅でいながら壊れそうな。そんな心に刻まれる歌声の方へと。

――――――――――――――――――――――――――

「……っ……誰！？」

俺が近寄ると、気配を察知したのか歌声が止んだ。そして歌声の持ち主が俺に対して身構える。歌が止んでしまったのは残念だけど……歌声の主が知り合いだった事に驚いたな。

「なんだ、さっきの歌声はミシュだったのか。」

「……司羽……？　あんた、なんでこんな所にいるの？」

ミシュは俺だと気付くと、多少警戒を解いて言った。とはいえ、一定の距離は保たれているけど。うーん、信用されてないな、俺。

俺はいきなり襲い掛かる様な真似はしないつもりだけど、まぁさっき初めて会ったばっかりだし、仕方ないな。若干ナンパ師っぽい言動もあったと自覚してるし。

「なんでこんな所にってのは単純に移動中に歌声が聞こえたから気になったんだよ。この先にちょっと用があってな、公園を抜けるのが一番速いんだ。……おい、あからさまに距離を取ったな？　いや、本当だから、後を付けて襲い掛かったりしないから。」

「……本当っぽいわね……仕方ない、信じてあげるわ。」

分かりやすい説明するとミシュはまだ何か言いたげにこちらを睨み付けた。……まだ疑ってるのか、心配症だな。それとも学院で流れてるらしい俺がルーンに何かした的な噂は、そんなに警戒されるほど酷いのだろうか。……うーん、だとしたらかなり落ち込むな。

「つまり、司羽は私の歌を盗み聞きしてたってわけね。良い趣味だこと。」

「……やっぱり信じてないじゃねぇか。だから、偶然だって言ってるだろ？　……だがまぁ、感想を言えばなかなかの歌声だったと思うぞ？」

「……あ、当たり前でしょ？　見聴料取りたいくらいよ。」

そっぽを向いてしまったが、ミシュの顔がほんのり赤くなっている。うん、照れてる照れてる。じっさい、かなり良いものが聴けたと思うし。何人か歌姫って呼ばれる人の生歌は聞いたことがあるけど、お世辞抜きに結構良い線いってると思う。

「な、何ニヤニヤしてるのよ！！　……内容捏造したニュースを学院警察に突き出すわよ？」

「……い、いや、本気でやりそうだし、それは勘弁してくれ。……ま、今度また歌ってくれよ。時間がある時にでもゆっくりさ。」

「な、なんで私がそんなこと……。大体、私は人前で歌ったりしたくないし。……あ、もしかしてそれって、私を口説いてたのかしら？」

「違うっての！！　……ったく、照れ隠しも程々にしないと可愛くないぞ。」

取り合えず反撃しておこう。何と言うかミシュは年下と言う感じがしないが、どちらにしろ、からかわれっぱなしは趣味じゃないし。……うん、ミリク先生は別だ。なんか逆らったら酷くなるオーラが出てるからな……。

「ふふっ。へー、司羽はそういう初々しいタイプの子が好きなのね？　可愛い趣味ね。」

「……。」

……墓穴を掘った。くそう、ミシュもミリク先生と同じタイプの人間か……。いや、違うぞ？　別にそういうのがタイプとか趣味ってわけじゃない……って俺は誰に言い訳してるんだろうな？　もう止めよう、うん。

「くっ、そういうお前は本当に可愛くないな。」

「あら、冗談を。自分の容姿の程は理解してるつもりよ？」

「……さ、左様ですか。」

照れも何もありゃしないな。……まぁ、良いものが聴けたと思ってるのは確かだし、別にいいか。そろそろマスターの所に行かないと帰りが遅くなるしな。

「歌に関しては気が向いたら頼むよ。じゃあ、俺はそろそろ行くから。ミシュも暗くならない内に帰れよ。自信程には容姿は良いみたいだからな。」

「……司羽、ちょっと待ちなさい。」

ん、なんだ？　心なしか顔が赤い気がするし。もしかして愛の告白でも……って、まぁそれはないだろうが。というか、そんな事口に出したらその瞬間俺の色々な物が終わりそうだ。ミシュ相手には冗談も言えないな。

「……私が此処で歌ってたなんて誰かに話したら……分かってるわよね？」

「あ、あー……成る程。いや、言わないよ。ガセネタで後ろ指さされたくないし。」

「……分かってるなら良いわ。」

成程、つまりは恥ずかしかったわけね。なんだ、普通に年頃っぽい可愛いところもあるなー……って、この思考少し駄目っぽくないか？　本当になんかちょっと落ち込むな。

「ふぅ……んじゃあ、そういう事で。」

「待ちなさい。」

「……まだ何かあるのか？」

俺の事を信用してないのか？　と、思ったらそういうわけでもないらしい。なんか、元のミシュっぽい感じがする。

「……私も一緒に行くわ。」

「……はぁ？　一緒に行くって言っても、俺がこれから何処に行くか分かってんのか？　何も面白くないと思うぞ？」

「知らないし、構わないわ。歌い直す気にもならないし、ただ何となくついて行こうと思っただけ。駄目かしら？」

「いや、駄目って事はないけどな。」

別にマスターの所に行くだけだし、真面目に特別面白い事もないと思うんだけどな。まぁ、人によっては毎日でも行きたがると思うけど。てか俺は行きたい。毎日でも行きたい。

「ならいいじゃない、暇なのよ。……あ、先に言っておくけど退屈させないでよ？　これは歌の見聴料代わりなんだから。」

「……おい。自分が目茶苦茶言ってるって分かってるか？」

「ほら、男には女を楽しませる義務があるのよ。私を連れて歩ける

んだから感謝するべきだと思うわ。」

「……自分勝手な奴……。」

「あら、そういう女もたまには良いでしょ？　家ではあの首席ちゃんを従順なペットにしてるって聞いたわよ？　二人目を御所望？」

「なんだその鬼畜過ぎる噂は……信じるな、そんなもの。」

「隠さなくても良いわ。人の性癖を兎角言おうとは思ってないから♪」

「お前、絶対分かってて言ってるだろ……。」

まともじゃないだろうとは思ってたが、なんつー噂が流れてるんだよ、流してそうな人物に当てがありすぎるのが嫌だ。……しかしまぁ、傍若無人ってのはこいつの事だな……。なんか良く分からんが、いつの間にかミシュが俺について行く事になってるし。体よく暇潰しの対象にされつしまっているし。俺はミシュの独特のリズムに困惑しつつも、溜息を漏らした。

「マスター、司羽です。この度は本当にありがとうございました。」

「いや、いいんだ。若者は学ぶべきだからな。」

今日もまた安楽椅子に座りつつ、グラスを磨くマスターに俺は頭を下げた。渋い、かっこいい。やっぱり此処はいいなぁ。

「で、そっちの嬢ちゃんは誰だ？　坊主が言ってたルーンとか言う家主か？」

「え、あ、私はミシュナと申します。」

マスターに聞かれて少し緊張した様に答えるミシュ。まぁ俺も最初はそうだったさ。そう思っているとミシュが耳打ちをしてきた。

『ちょっと、何なのよ此処は……。あんた、こんな怪しげな所に何しに来たの……？』

『怪しげな所って言うな。あの人は俺に学院編入をさせてくれた人だ。俺はマスターって呼んでるが、名前も何もかも謎な人だ。』

ミシュに耳打ちしかえすと、ミシュはマスターをジーっと観察する様に見た。おい、失礼だぞ。一応俺の恩人なんだからな。

「どうした嬢ちゃん？　……飲むか？」

「マスター、未成年にいきなり酒は……。」

「……未成年……？　なんだそれは、取り合えず座れ。今日は俺の奢りだから気にするな。」

そう言ってマスターはグラスに比較的アルコールの弱い果物のカクテルを注いだ。というかこの世界には未成年って表現はないのか。いや、俺も昨日思いっ切り飲んじまったけど。

「うっ、私お酒は……飲んだ事ないし……。」

「何言ってんだ。少し位飲める様にしとけ。」

マスターはそう言ってミシュのグラスに注ぐ。と言うか、奢ってばかりで客が来てる様にも見えないし。店の経営としては大丈夫なのだろうか？　一カ月の収入が気になる所だ。

「坊主もほれ。嬢ちゃんに手本を見せてやれ。」

「手本って……まぁ、頂きます。」

昨日分かった事だが、俺はかなり酒に強いらしい。マスターも初めてでこの強さは以上だと言った程で、その時にアルコール濃度の高いカクテル、発酵酒、他のアルコール類も飲んだがそこまで酷くは酔わなかった。取り合えずグラスを傾けてミシュを見ると、珍しく少し困った様にグラスを見つめている。

「……ん、甘い。ほらミシュ、折角だしお前も飲んでみろよ。確かにアルコールが入ってる感じはしないし、飲みやすい。」

「うっ……司羽、さっきと言ってる事違うわよ……ああもう分かったわ、飲めば良いんでしょ。」

そう言ってグラスを手にするも、まごつくミシュを見て俺は苦笑してしまった。いやぁ、別にさっきまで一方的にやられてた仕返し

ではないよ？　別に後で反撃のネタになるかなーとかも思ってない。これは単純にマスターの好意は受けた方がいいんじゃないかなと思っただけ、うん。

「それじゃあ、少しだけ……。」

「本当にこれくらいじゃなんともならない筈だからそんなに心配するなって。」

「……。」

コクッ、コクッコクッ

「……。」

ミシュは一口飲んでから一気にグラスを傾け、そのまま一気にカクテルを飲み干し……そして沈黙。……まさか、これくらいでアウトって事はないだろう。さっき飲んだ時はアルコールの匂いもそこまでしなかったし。

「……。」

「どうしたんだ？　おーい、ミ……。」

パタッ

「……え？」

ミシュがカウンターにとっぷした。というか……え、一杯で？いやいや、そんな馬鹿な。殆どアルコールを感じなかったのに…

…。どれだけ弱いんだ。

「……まさか一杯でブッ倒れるとはな……。」

「これはマジですね……。お、おいミシュ！？　大丈夫か！？　おーい！！」

揺さぶっても返事がない。……でもまぁ息はあるので屍ではないようだ。いや、流石に死なれちゃかなわないけど。どうするんだよ、起きるまで待つか？

「……仕方ないな、取り合えず連れて帰ってやれ。今のところ白銀の娘の情報もまだないしな。」

「………わかりました。っていうか、ミシュの家が分からないんですけど……俺が住んでる所に連れて行っちゃっていいんですかね？」

まだ今日会ったばっかりだし、いきなり家に連れ込んだりしたらルーンに何を言われるか……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「司羽おかえりー、何処行ってたの？　……って司羽、その子は？」

「あー、ちょっとな。」

呼び出し鈴を鳴らすと中からルーンが出て来る。ミシュはマスターの言う通りに送って行こうと思ったが、家が分からないし取り敢えず連れて帰ってきたんだけど……うーん、やっぱり何だか犯罪っぽいなぁ……。

「ちょっとって……その子の名前は？」

「ミシュ……じゃなくて本名はミシュナだっけか。酔い潰れたみたいなんだけど連絡先知らないから家に連れて帰ってきちまった。少し待ったんけど起きるも気配ないし……。」

そう言うと、ルーンは呆れた様に俺を見た。うっ、そんな眼で見ないでくれ。まさか一杯で潰れるとは思ってなかったし、家に連れ帰るつもりもなかったんだ。

「司羽がわざとやったわけじゃないんだろうけど……？　でも、どうしよう……。」

「うーん……。」

二人して玄関先で頭を悩ませてるとミシュが身悶えする様に動いた。おお、ナイスタイミング。このまま家を聞き出せれば問題解決だ。

「司羽……。」

「ミシュ、起きてくれたか。」

「起きる……？」

ミシュは虚ろな眼で自分がどういう状況か確認する。今にももう一度夢の世界へ旅立ちそうな勢いだ。

「ここは……？」

「俺の……ってか、ルーンの家だ。お前がいきなりブッ倒れて、取り敢えず起きないみたいだからここまで連れてきた。」

そう言うとミシュはルーンの方を見て、そう……と呟くと力なく背中により掛かった。

「……つまり、私の初めては司羽に食べられちゃうわけね。」

「ちょ、何誤解されそうな事言ってんだ！！　ルーンもその疑いの眼差しを止めろ、そんな気はない！！」

「うーん、取り合えずは信じてあげる。司羽だもん。」

ルーンは呆れた様な苦笑をした。なんだその溜息は、俺はこの数日でルーンにどんな認識のされかたをしているんだ？

「ねぇ、ミシュナちゃん……だっけ？　今日は泊まってく？　家まで魔法で文書送っとくけど。」

「ええ、ありがとう……。でも文書はいらないわ……。」

そう言ってミシュは再び眠りに落ちた。魔法で文書なんて送れるのか、便利だなー、魔法。いや、現代の携帯電話も相当な物だけどな。魔法なら特に機械も要らないわけだしなー。……まぁこの世界は魔法を使えない俺にとっては結構不便だけど。

「えーっと、取り敢えず部屋に運ぶか。」

「そうだね、取り合えずは私の部屋に運べばいいよ。今日は司羽と一緒に寝るから。」

「ああ、わか……って、おい。いい加減に一人で寝ろ、恥じらいを持て。」

そして、ミシュはルーンの家に泊まる事になった。

第7話：初めて泊まった日の話

「あ、頭痛い……ここは……。」

司羽にルーンの家まで連れて来られてから、ミシュナは直ぐに眠ってしまった為に、今自分がどこにいるのか完全に把握出来ていなかった。まだ覚醒しきっていない意識の中、ミシュナはズキズキする頭を押さえながらベッドから起きた。

「……えーっと……ここは確か、首席と司羽の……。」

ミシュナはそう言って記憶を確かめながら辺りを見回す。ただ広い。豪邸と言うべき建物だと言うのは一瞬で分かった。まぁそれより何より、今は何も考えたくないくらいに頭が痛い。

「うう……頭いたー……。もう絶対お酒なんて飲まないんだから……。」

ミシュナは頭痛に頭を抑え、そう呟きながら部屋を出た。とにかく先ずはこの頭痛をどうにかしたい。

「……司羽は何処かしら……？」

ミシュナはそう言って建物の中を暫く歩きまわると、半開きになっている部屋を見つけて中を覗いて見た。中から人の気配がする。恐らくルーンか司羽がいるのだろうとミシュナは予測して中へ入り……眼を疑った。

「……二日酔いって、幻覚とか見えるのかしら……？」

ミシュナはズキズキする頭に再び手を当てて考える。……ミシュナとしても、司羽の布団の中にルーンが入っていると言う光景を見る事になるとは思っていなかった。予想外のシーンに多少頭痛が強くなった気がする。あくまで気がするだけだが。

「やっぱり幻覚じゃないみたいね……。ここはさりげなーく起こして頭痛薬を貰うのがベスト……よし。」

ミシュナは誰に言うわけでもなくそう言って、寝ている司羽を揺すり起こす為に近付いた。

「……んっ……？　ああ、おはようミシュ。一杯だったが随分酔ってたみたいだし、二日酔いとかは大丈夫か？」

ゆさゆさと体を揺すられて、司羽が薄く眼を開けるとミシュが少し顔を赤くして目の前にいた。そういえば、昨日はミシュが泊まったんだったと司羽は思い出し、身を起こした。

「おはよう。ええ、少し頭が痛くて……だから頭痛薬とかないかなぁと思っていたのよ。」

なんかミシュの様子がおかしいな……？　なんか出来るだけルーンを見ない様に話をしている様な……って。

「おいこらっ、ルーン！！　お前、昨日学院で噂になったばっかりだろうが！！」

「ふにゃぁっ！？」

俺がルーンの耳元で叫ぶと、悲鳴（？）の様な声を上げて飛び起きた。それを見てミシュナは司羽を心底疑う様な表情になった。司羽は何故か、ミシュナの中での司羽像が少し修正された様な気配を感じ取った。言うまでもなく悪い方向へ。

「ううっ……耳がジンジンするよ……。司羽、いきなり何するのっ！？」

「何するのはこっちのセリフなんだが……。」

ルーンはまるでここに一緒にいるのが当然だとでも言う様に怒るな。駄目だ、このままだとルーンが居るのに違和感を感じなくなってしまいそうだ。今だってミシュがいなければ気付かなかったし……。ルーンはなんでこんなに自然に入って来るんだろう？　これでも気配には敏い方なんだが。そんな事を考えている司羽の態度をどう捕えたのか、ルーンはやたらと嬉しそうに司羽に抱きついた。

「司羽は周りの人を気にし過ぎだよ？　大体誰も見てないんだから良いじゃない。」

「……いや、今回に限っては見てる人がいるんだが……。」

そう言って俺がミシュの方を向くと、ルーンもやっとミシュナに気付いた。……何と言うか、気付くのが遅すぎる。司羽が疲れた様に項垂れるが、ルーンは全く気にした様子もなくミシュナに笑顔を向けた。

「あ、ミシュナちゃん早起きだね？　おはよ♪」

「……あ、ええ、おはよう……。」

ルーンがミシュに気付いて挨拶をすると、ミシュもなんだか圧倒された様に挨拶を返した。そしてルーンは再び俺の方を向いて言った。

「ミシュナちゃんも司羽が大きな声だすからびっくりしてるよ？ダメだよ司羽。」

「……はぁっ、もういい……。」

俺が嘆息すると、ルーンは何か満足気に頷く。ああ、うん、もう本当にどうでもいいや……なんかルーンに何言っても意味ない気がするし。だからミシュはその蔑むような眼を止めろって。絶対分かってやってるだろう、お前。

「ふふっ、朝から良いもの見せて貰ったわ……それはまぁいいとして、頭痛薬を貰えないかしら……？」

「頭痛薬？　頭痛いの？　ちょっと待ってて、今持ってくるから♪」

そう言うとルーンはベッドから飛び降りて、部屋を出てリビングの方へ向かった。……うん。しかしまぁルーンも荒らすだけ荒らしてくれたな……。

「何か聞いてたより凄い子ね、色々な意味で。毎朝こうなのかしら？」

「ははは……まぁな……。」

俺は渇いた笑みで同意する。それを見てミシュはニヤリと妖しく

笑った。……いや、こうなると予想はしてたけども。

「でもまさか首席と司羽がアレでコレな関係だったなんて知らなかったわ……。私ったらうっかり人の愛の巣に入ってしまうなんて……ごめんなさいね……。ああ、私を気にせずいつも通りにしていいわよ。」

「……おい、ミシュ……。」

「大丈夫よ、誰にも言わない様に気をつけるから。でも、私たま～に独り言を喋る癖があるのよねぇ……ふふふっ。あ、でも司羽がたまに私の言うことを聞いてくれたりすれば独り言もなくなる気がするわ。」

「……。」

ミシュが最後にクスッと微笑んで、俺の背筋ゾクッと震えた。あーもー、何か一番知られちゃいけない人に知られた様な気がするな……。

「ミシュナちゃーん、頭痛薬あったよー。」

「え？　ああ、ありがとう。」

いきなり戻ってきたルーンにミシュナがビクッと反応する。うーん、からかいモードが四散したのは嬉しいが、どうもルーンが苦手らしいな。というより、今のルーンと昨日のマスターと話すミシュを見てて思ったが、元々ちょっと人見知りなんだろうな……。

「さてっ、ほら司羽。ニ度寝だよ、ニ度寝。」

「……は？　学園は？」

「……司羽、今日は休みよ。ちゃんとそれくらい確認しておいたら？」

ミシュが言うと、俺もああ、なるほどと納得した。そういえば昨日学園でそんな事を言っていた気がする。ミシュの件で、すっかり忘れていたが。

「ほらほら司羽っ、一緒にニ度寝ぇー。」

「いや、休みだからって真っ先にニ度寝ってのはどうなのだよ。それと、寝るなら自分の部屋に行け。」

「良いでしょぉー、それくらい。ただの家族のスキンシップと同じだよ？」

そう言ってルーンは俺の手を取りブンブン振り回す。ああ、もう駄々っ子モードに入ってしまった。痛い、主に真横から向けられる視線が。そして後で恐らくそれを使って色々と言われるのだろう。

「朝っぱらから見てらんないわね、ご馳走様でした。」

「そんな事言ってないで助けろ……。」

溜息をつく俺と、それを見て楽しんでいるミシュ。結局それはルーンが空腹を感じるまで続いた。

「へーっ、ミシュナちゃんはあの幽霊屋敷に住んでるの？」

ルーンは満腹になると直ぐにミシュナに質問を始めた。しかし幽霊屋敷って、本人の居る前で……。俺が窘めるような視線を送ると。ミシュは気にしないとでも言うように苦笑した。

「ああ、そう言えばそんな風に呼ばれてたわね。ちゃんと掃除したりもしてるのに、幽霊屋敷なんて失礼しちゃうけど。」

……そう言えば子供の頃にはそう言う場所が家の近くにもあったなぁ……。実際は普通のお爺さんとお婆さんが仲良く住んでたりしただけだったけど。

「でも町外れにあるし、私が見た時に人が住んでる感じがしなかったから驚きだよ。ミシュナちゃんが住んでたんだね。」

「まぁ、寝て起きるだけの家よ。それに、私もこんな所に大豪邸があるなんて想像もつかなかったわ。周りは森だし……もしかして一人……ふふっ、二人暮らしなのかしら？」

ミシュは一人暮らし、と言いかけて、あからさまにこっちを見て妖しく微笑んだ。勘弁してほしい。もやもやした気持ちで俺の心を圧迫するのはやめてほしいんだけどな？　それはそうと、ミシュは

ルーンを自分の家の話題から早く離そうとしている様に見えるな。
何か事情があるのかもしれない、でもまぁ俺も訳あり具合では人の事言えないからなぁ。

「うーん、でもちょっと行って見たいなぁ……。」

「……別に面白い場所じゃないわよ？　本当に寝具くらいしか置いてないもの。余計な物を買うの嫌いだから。」

ミシュはそういいながら俺の方に眼を向けて何やら視線で合図を送ってきた。……つまり、会話を締めてルーンから解放しろという感じだな。やっぱり予想通り、ミシュナはあんまりルーンが得意じゃないらしい。

「……まぁ、そうだな。機会があれば行ってみても良いかもしれないけど……それはまた今度だな。」

「……さてと、それじゃあ私はそろそろ帰るわ。」

「えー、もう帰っちゃうの？　折角のお休みなのに。」

ミシュが席を立つと、ルーンが不満そうに言った。俺としてもちょっと心配だな。一杯のみとはいえ、昨日はぶっ倒れたんだし。

「二日酔いなんだから寝てたらどうだ？　まだ頭痛はするんだろ？」

「ふふふっ、そんなことしたら司羽がベッドの中に忍び込んで来るかも知れないじゃない？　さっきのを見る限り安心出来ないわね。起きてみたらシーツに私の血が染みてたりしたら洒落にならないし。」

「……あのなぁ……。」

ミシュがクスリと笑う。全く何を考えているんだか分からない。いや、俺をからかって遊ぶ事を考えてるんだろうけど。

「半分冗談よ。まぁ、そうね………ルーンさん？　司羽を借りて行っても良いかしら？　家の近くまで背負って貰うから。」

「うん、良いよ♪」

「………俺の意思なんて考慮されないわけね……。」

いやまぁ、俺も送っていくつもりだったけどさ。この便利屋さん的な立ち位置はどうにかした方がいいかもしれない。そんな事を考えながら、司羽は溜息をついて、ミシュナを睨んだ。

「ほら、行くわよ。」

「はいはい……。」

――――――――――――――――――

「うん、なかなかの乗り心地ね。悪くないわ。」

「……ミシュの性格が昨日今日で分かってきたよ……。」

しかし、街中を女の子一人背負って歩く恥ずかしさにも段々慣れて来たな……。ミシュの容姿は何だかんだでやっぱり目立つし。あの初めて会った時は気配でも消していたんだろうな。今も気配はかなり薄くしている様だが。

「別に良いじゃない。こんな美少女の感触を味わいながら街中を歩けるのよ？　男にとっては最高クラスの幸福だと思うけど？」

「はぁっ……本当に良い性格してるよな。」

美少女とかに関しては否定できないから質が悪いな。それと……歩きながら一つ思った事がある。

「そう言えば、魔法で空って飛べるのか？　ルーンが飛んでるのは見たことないけど。」

まぁ、ミシュが飛べたとしてもフラフラな状態の今、それをやれとは言わないけどな。

「はぁ……？　魔法で空を飛ぶのはそんなに難しくないわよ。使い魔や魔法具に乗ったり、自分自身に魔法を掛けたり。魔法具なしで飛べる人は本当に少ないけどね。それって結構高度な技になってくるし。……でも司羽、なんでそんなことも知らないの？」

「えっ？　……ああ、いや。今まで魔法とは縁のない場所で暮らしてたからな。」

「……でも、そんな場所この世界で聞いた事もないわ。武術にも全く魔法を使ってないし……どこから来たのよ、あんたは。」

「ははははっ……まぁ、地図上には無いかも知れないな……。」

「……そこはどんな辺境よ……。」

……無いかもじゃなくて、確実にあるわけないんだけどな。でも本当にこの世界では魔法が当たり前なんだな……。魔法なしじゃ困る事がそのうちあるんだろうか。

「……でも、なんだか不思議ね……。」

「はい？　なんか言ったか？」

「いいえ、なんでもないわよ。あ、今お尻撫でたでしょ？」

「……何の脈絡もなく、いきなり濡れ衣を着せないで貰えるか？」

……周りの人に聞こえただろ確実に……。何人かおばさんが今こっち見たし。取り合えず、何とか送り届けるまでミシュには大人し

くしててもらおう……。

第8話：課外学習に御用心（準備編）

「おーい、ルーン。飯出来たぞ、起きろ。」

休日に行った簡単な会議の末、食事の支度は当番制になり、今日は司羽の番だ。そしてルーンを起こす為に自分の寝室に行くと言う行為に疑問を持ちながらも実行し、今に至る。というかもう直させるのは諦めた。朝にはいつの間にか来てるし。何故か接近に気付けないし。

「うー、司羽……もう食べられないよ……。」

「おい、朝食を無駄にする気か？」

と、ルーンの寝言にツッコミつつも布団をはぎ取る。……全く、少し服が開けてるし。ルーンに恥じらいなんて存在しないらしいな。年頃の少女としてそれはどうなんだ。

「あう、寒い……。」

「ほら、さっさと起きろ。遅刻するぞ。」

「やだよー、眠いよー、ご飯食べさせてー……。」

「分かった、朝食は抜きだな。」

「うぅ……。」

そう言うとルーンは渋々と言った感じで起きた。髪がボサボサに

なっていて、小さく欠伸をする様にはまだ寝ていたいと言う願望が張り付いている。というか立ったまま寝るなよ。

「司羽おはよー……。」

「はいはい、おはよう。さっさと飯喰って行くぞ。」

そういうとルーンはフラフラとリビングまで歩いて行った。途中途中睡魔に負けそうになるので後ろから叱咤しつつだ。

「全く、あの寝起きは何とかして欲しいな……。」

司羽はそう言って嘆息した。その願いは結局叶わないんだろうなぁ、と、若干諦めにも似た感情は吐き出す事が出来なかったが。

――――――――――――――――――――

「くそっ、今日は間に合うと思ったのに。飯食いながら寝やがってぇぇぇ！！！」

そんな朝の光景を経て、今日も今日とてルーンを背負って街中を全力疾走。ルーンは穏やかな寝息を立てている。気を付けて運んでいるからか、背中はなかなか快適らしい。

「くそっ、このままじゃギリギリ間に合わないか……？　流石にあの距離を三分じゃ無理か……、この速度でも我ながら人間業じゃないがな。」

司羽が校門を抜けると同時にチャイムがなる。もう普通なら間に合わないだろう。……まぁ、緊急事態なので周りの目と行儀は無視の方向だ。

「よし、アレをやろう。」

司羽はそう言ってルーンを背負い直した。ルーンは軽いから、途中で自分のバランスが崩れる事はないだろう。このくらいの軽業なら眼を瞑っていても出来る筈だ。そんな思考をしつつ、司羽は目的地までの道順を脳内地図に描いた。

「よっと。」

先ずは走りながら、近くに植えてある木に向かう。その後、木と壁を三角跳びで上がって行き、教室の空いている窓の近くに接近。窓に手をかけそのままの勢いで一回転しながらダイナミック侵入、窓に着地してからルーンを速攻で席につかせて、流れる様に自分も席についた。

「ま、間に合った……。」

司羽はそう言ってため息をついた。周りから聞こえてくる拍手が気持ちいい。

「本当に、朝から元気ねぇ……。」

「ん？」

机に伏していた顔を上げると、そこには昨日二日酔いしていた少女が立っていた。凄く呆れた顔をされている。

「ミシュ、なんでここにいるんだ？」

俺がそういうと、当人ミシュナは少し困惑した様に言った。

「今日学院に来たら、いきなりマスターにここのクラスに行けって言われて……。何かこの先生方も『お話は聞いています』って、一体なんなのよ……。訳分からないわ。」

俺の時と似た様なものな気もするが、そういえば、確かミシュって最低ランクのクラスだった筈じゃなかったか？　……マスター、貴方は本当に何者なのですか。まぁ、なんか偉い人みたいだよなぁ。

「でもミシュは元々サボって下のクラスだったわけだろ？　周りから目の敵にされなきゃ良いけど……。」

「……私、入替え戦は全部棄権するわよ……？」

ミシュがミリクとシノハに向かってそういうと、二人は困った様

に唸った。

「上からの命令で、本人がやりたくないならそれでも構わないって……。」

「司羽君の事といい、何でこんな事が続くのかしら？　トラブルの原因になるっていうのに。」

二人も困った様に頬に手を当てた。そうしているとルーンが呻き声（？）を上げて眼を覚ました。

「……此処は……何処……？」

「学院だ。」

ルーンはまだ少し寝ぼけているらしく、ボーッとした視線で俺を見た。ちゃんと整えて来なかったので金髪のロングヘアーはまだ少しボサボサになっている。

「それじゃあ司羽、一緒に二度寝しよ……。」

「どうしてそう言う結論に至るんだ？　そもそも回数が違うぞ。ルーンは三度寝だろ……？」

一緒に二度寝発言に教室内の数人が眼を輝かせたがスルー。俺は溜息をつきながらルーンのボサボサの髪を家から持って来た櫛で梳いた。んー、髪質良いなぁ。

「本当にマイペースよね……首席も司羽も。案外お似合いかも知れないわよ？」

それを見たミシュが呆れたように腕を組んでそんな事を宣った。ルーンとかぁ……まぁ、朝が大変そうだけど。それにこんなにボサボサな髪の状態で学園生活を送るとなっては、色々と不味いだろう。ルーンは女の子なのだから、身だしなみはきちんとしないといけない。

「……まぁ、それはいいとして。ミシュもこのクラスに編入する事になるんだろ？」

「まぁ今までの事を簡単に言えば、そう言う事になりますね。」

ミリクがいつもの調子で笑いながら言った。ミシュはまだ少し納得いっていないさそうだが。

「そうか、まぁ宜しくな、ミシュ。」

「ええ、私は授業には出ないけどね。」

司羽の発言に対してミシュナが軽く流す様にそう言うと、ミリクの後ろに控える様に立っていたシノハの瞳がキラリと光った。

「ほぅ？　私の前で断言するとは随分と度胸がある生徒だな。これは鍛えがいがありそうだ。」

「え……？」

ミシュナの発言に対してシノハはククッっと怪しく笑ってそう言った。成る程、この人は熱血タイプの人なのか。どうやらミシュもそれに気付いたらしく、失敗したと言うように眼を逸らしている。

「私のクラスでサボりは許さんぞ……？　もしサボったら放課後に私が１対１で授業をしてやる。いや、どうせだし司羽も一緒にやるか。連帯責任というやつだ。」

「うっ……。司羽、先に謝っておくわ。」

「何故に俺が……！？」

そんな疑問に答えてくれる人もなく、なんだか悲しくなった俺は、取り敢えず現実逃避の代わりにルーンの髪を整えるのであった。……はぁ……。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「それでは、今度の課外学習についての説明を始めまーす。」

「……課外学習？」

前に立つ二人の教師に向かって疑問を投げ掛けると、シノハが答えた。

「ああ、司羽は新しく入って来たからな。この学院では年に何度か課外学習をするんだ。まぁまだ年齢の低いやつもいるから泊まり込みの遠足みたいなもんだと思うと良い。連帯感を高める為の学習だ。」

「ああ、なるほど。遠足ですか。」

課外学習か、この世界で知ってる所が少ないのも確かだし、良いかもな。

「と、言うわけで。今回行く2泊3日、エアテル魔法旅館での行動班と就寝班を造りましょう！！　ふふふっ、司羽君はちょっと来て下さいね♪」

「はい。……って何か嫌な予感がするんだけど。」

「ほらほら、早くしなさーい。」

ミリクの言葉と同時に全員が動き出すし。それと同時に、司羽もミリクに呼ばれて廊下に出た。

「……なんですか？」

「……なんでそんなに疑わしげな眼をするんですか？　……まぁ、

良いです。それと言うのも就寝班の事についてなのですが。」

まぁ、男は俺だけだからなんとなく分かってたけど。男が筋力が上がる代わりに女は魔力が強くなりやすいってのは昨日言われたが、それがクラスに男が少なくなる原因だし、なんだか不便だな……。

「……俺は一人でも平気ですよ？」

「いえ、そう言うわけではなくてですねぇ。つまり、私が言いたいのは……。」

ミリクはニコニコ笑いながら教師にあるまじき言葉を言った。

「避妊はしなくちゃ、めっ。ですよ？」

「……はぁ？」

「ですからぁ……。」

ミリクは困った子供を見るような笑みを絶さないで人差し指を立てた。いや、なんでそんな優しい眼をされなくちゃいけないんだろう。

「どこに夜這いを掛けるにしろ、ちょっと問題の収拾がつかなくなると困るので♪」

「……あんた、教師やめちまえ……。」

嬉しそうに言うミリクに、司羽は呆れながらも毒づいた。

「教師なんて仕事は止められませんよ？　折角生徒達のあられもない姿を拝めるんですから……ふふっ、こんなに良い職業簡単に止めるわけありません。」

「……。」

本当に良い笑顔でそう言い切ったミリクに司羽の表情は思いっきり引き攣った物になった。こんな教師居ちゃいけない……。様子を見に来たシノハも呆れた様にミリクを見ていたが、ミリクは全く気にしていない様だ。

「ミリク……。」

「ああ、シノハちゃんも心配しなくてもいっぱい構ってあげますから♪」

「なっ！？　い、いや、そうでなくてだな……。」

「ふふふっ、シノハちゃん。私が忘れられない課外学習にしてあげます……楽しみですぅ……。」

妖しく笑うミリクにシノハはたじろいだ。まぁ二人共楽しそうだし、俺はそろそろ退散しよう。司羽はそう思って早々にその場を立ち去った。

「お、おい司羽！！　お前、一人だけ助かる気か……！！　……っ……ミリ……やめっ……はぅ……。」

さあ、十八禁になる前に退散、退散。シノハ先生は犠牲になったのだ。

第9話：手掛かり

「やだやだやだやだぁっ！！　司羽も一緒の班が良い！！」

「大声を出すな、子供かお前は……。」

駄々を捏ねるルーンに溜息混じりで苦笑する。ちなみにルーンの班には他にもリアにミシュがいるので、別の意味でも入る訳にはいかないんだなーこれが。いや、ルーンなら良いってのはまるでないんだけどね？　十分過ぎるくらいに美少女だし。俺も色々とある年頃なのでね。別に自分自身がそこまで最低男であるとは思っていないが。

「だって私まだ十五歳だもん、子供でいいもん……。」

「行動班は一緒なんだしいいだろ、別に。」

正直好かれて悪い気はしないが、一応家じゃないし、公衆の面前だし、家で誰もいなければ良いわけではないけどな？

『私は構いませんよ？　司羽さんなら大丈夫だと思いますし。』

「私も。あんな物見た後じゃちょっと不安だけど、別にいいわよ。……寧ろ楽しそうだし。」

いや、そこでＯＫ貰っても困るんですが……というかミシュに関しては本音駄々漏れだな。ルーンのお願いを聞いたら精神攻撃まで確定されたぞ。

「ねぇねぇ司羽。二人もこう言ってるんだし……。」

そんな懇願されても……困る。既に決まった周りの班からも好奇の視線を感じるし。よし、やっぱりダメだ。今了承しようものなら一発で在らぬ噂が立つからな。それに俺が来る前は普通に寝てたんだし、一人だと寂しくて発狂するようなとんでも設定もルーンにはないだろ。そもそも一人って訳じゃないし。

「うん。やっぱり、俺は一人……。」

「私、司羽が一緒にいてくれないと寝れないよ……。」

ザワッ！？

その瞬間、司羽の声が遮られて一瞬の沈黙……そして……。

「つ、司羽君っ、もしかして本当にっ！？」

「嗚呼神様、私にも素敵な彼氏を……。」

「何かあるのは分かってましたけどもうそこまで……いやん♪　宿泊が楽しみですわ♪」

『司羽さん、ルーンをお願いします。』

教室に不穏当な発言が飛び交う。もう先生も止める気は皆無な様でルーンにボイスレコーダーを持って詰め寄っている。ああ、止めるのももう面倒だ。

「司羽、貴方も苦労するわね？」

「ミシュ……分かってくれるのか。」

「避妊は大事よ。」

「ミリク先生みたいな事言うな………っていうかお前も楽しんでるだろ！？」

数分後、騒ぎが弱まった際に司羽は皆の誤解を解いてからルーンを３０分かけて説得し、結局就寝は個別に行う事になった。ミリクやミシュナは不満そうだったが。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「それにしてもルーンの奴にも困ったな……。毎回こんなんじゃ周りの眼が恥ずかしくてかなわない……。」

俺はそういって嘆息。ルーンは言っても聞かないし、ミシュは面白そうにしてるだけだし、先生の方はというと、シノハ先生はそういう話は駄目らしく何も言わない上、ミリク先生に関しては煽って来る始末だ。溜息もつきたくなるってものさ。

「まぁ良いじゃないか。司羽だって好意を寄せられて嫌なわけじゃないのだろう？」

現在ムーシェと学院内の喫茶店で昼食をとっている。まぁ、確かに嫌なわけはないんだけどな。まだ黄色い悲鳴をあげる人はいいんだけど、中には別のクラスの男子だが嫉妬の視線を送ってくる奴がいるしな。

「それが何か問題なのかい？　司羽の想像通り、あれでいて人気は高いぞ？　彼女は。そんな子を噂が立つなら構わないだろう？」

「問題なのかって……大問題なんだよ、俺としてはな。」

まぁ司羽から見てもルーンはかなり美少女な部類に入るから人気は出るだろうとは思っていたが、何と言うか、男の友人がまるで出来ないのは問題だろう。実際今のところ男の友人と呼べるのはムーシェだけなのだ。

「大体、ルーンと俺はそんな風に意識し合ってない。好意だって、もう家族見たいなもんだからそういう好意だ。勘ぐり過ぎなんだよ、面白半分にな。」

「ふぅん、家族ね……。そう言えば、司羽が来た場所を聞いてなかったな。僕はここの街で育ったんだけど。……ねぇ、司羽はどうなのかな？　故郷や家族は？」

ムーシェが思い出した様に言った。家族……思い出すのは父親の顔だ。別に俺の周りに人が集まらなかったのは父親のせいだけじゃない。学校を休学して海外に飛ばされたりしたのは確かに大きく関係してるんだろうが、中学に入ってからはそれもなくなった。親父なりに気を使った面もあったのかもしれない。だが憎まずにはいられなかった父親の顔。今はどうしているのだろうか……。

まぁホームシックはここまでにして、どうしたものか？　上手く誤魔化してもいいんだが。

「家族に故郷か……そうだな……別に隠し続けても実際仕方ないし、何よりマスターだけに任せるのもな……。」

あまり言い触らしても向こうにいた時の様に奇異の視線を向けられるだけだが、ムーシェになら大丈夫だろう。それなりに親しくしてくれてるし、Ａクラスならかなり魔法にも詳しいだろう。下手に先生に聞いてどこかに勝手に話されるよりも友人の方が安心だ。

「……実はなムーシェ、真剣な話だから真面目に聞いてほしいんだが……俺は、このエーラで育ったんじゃないんだ。魔法のない星で育ったんだよ。親も、そっちにいる。」

「……はい？　司羽？　何の冗談だい？　真面目な話じゃないのかい？」

いやまぁ、そうなるだろうね普通は……。俺でもまず病院に連れて行くだろうしな。

「冗談でも何でもないんだよ。俺はこのエーラに来たばかり……いや、連れて来られたばかりだ。ついこの前、数日前に。」

「……君は魔法の無い星と言ったが……つまり、星間移動をした……と？」

ムーシェは俺の眼をジーっと見た。まぁ、これを信じてもらえない事には次にいけないし、信じてもらうしかないな。

「嘘……は、ついてないみたいだね？」

「おお、本気の話だ。」

俺がそう言って水を飲み干すと、ムーシェは何か考える様に唸った。

「本当だとしたら凄いな……でも、誰にどうやって連れて来られたんだい？　気になるな。」

「んー、多分魔法で来たんだと思うんだが……。」

本当にアイツ、名前も教えてくれなかったし、どうやって捜せって言うんだよ……。うん、やっぱりマスター一人に任せるのは無理がありすぎたな。

「……どうしたんだい？」

「いや、すまん。誰だか名前は分からない。ただ、銀髪のロングヘアーで十四歳から俺くらいだと思う。んで、俺はそいつを探し出さないといけない。」

本当にこれぐらいしか分からないからな。

「その年齢はまだ魔力が強くなる時期なのに……それなのに星間移動を……？　しかも自分でなくて他人を魔法で送るなんて……いや、でも……。」

ムーシェがブツブツと何かを呟く。うん、何だか好感触の予感がするぞ。……あー、何だかんだで魔法に関しちゃ本当に周りに頼り切りだな。

「どうした？　心当たりでもあるのか？」

俺が苦笑しながら聞く。まぁいくらなんでも、あれだけの情報で分かるわけ……。

「なるほど。いや、誰がやったかは分からない……けど、手掛かりならある。」

「……は？」

今度はこっちが間の抜けた声をあげる番だった。予想外過ぎて一瞬理解が遅れたが、本当に手掛かりがあるならこれは初めての手掛かりって事になる。それをムーシェが知っている。これは話して正解だったかもしれない。

「ほ、本当か！？」

「ああ。かなり有用な情報だと言う自身があるよ。」

ムーシェがニヤリと笑みを深めた。そこから見て取れる様にかなり自信があるみたいだな。

「ハッキリ言って、そんな大層な魔法は普通は使えないんだ。無理だね、不可能だ。まさに神の奇跡だね。だからこそ見つけられるのさ、その魔法使いをね。」

「……えっと……どういう事だ？」

実際に使えているから困っているんだがな……。まぁ、凄い魔法だって事はなんとなくわかるけど。使用された以上不可能ってことはない筈だ。そこから見つけるってのはつまり……。

「あー、説明が長くなるけど聞いてくれ、つまりだね……。」

ムーシェは頭の中で知識を整理しながら言った。

「普通は不可能なくらいの魔法を使うって事は、人間の本来使える以上の魔力量や技術が必要だ。そしてこの世界にはそれをサポートする要因がある。つまりその様々な要因からその魔法使いを絞る事が出来るんだ。先ずは地形だね、エーラには魔法を使うのに有利な地形が存在するんだ。一つは、長年魔法を使い続けて来た場所、もしくはその地形自体が魔法的な効果を持っている場所だ。理由は魔法を受け入れやすい土地になるからなんだがね。」

「なるほど、あの森に落とされたのにも理由があったのか……。」

司羽がそう言って納得すると、ムーシェは森になんて落とされて大変だったね、と同情し、話を続けた。

「他にもあるよ。人の身体と魔力もその地に馴染むし、その逆もまたある。つまりこの辺りに落ちたなら、この辺りに住んでる人間っ

て線が高いね。」

……おお、何だか見つかりそうな気がして来たな……。最悪しらみ潰しにやれば見付かるかも知れない。

「後は司羽の言ってた事を総合すると、『この辺りに住んでて、十四から少し上くらいの、銀髪のロングヘアー』って事になる。」

「へぇ、かなり絞れてるじゃねぇか……。」

もう今直ぐにでも見つかりそうな気がして来たな。いや、気が早いのは分かるが、いきなりこれだけ絞れたのだ、かなり見付かる可能性は上がった。後気になるのは……。

「それで、さっき言ってた、星間移動が無理ってのはなんだ？　魔力とかが関係してるのか？」

「ああ、それはね。他人を星間移動させる所か自分自身の短距離テレポート自体も魔法では不可能だとされてるからだよ。」

「……不可能って言われても……。事実やられてるんだぞ？」

それを言われてしまったら俺がされた事自体が矛盾してしまうしな。

「テレポートに関しては理論的にはまぁ……条件が提示されている。そうだな、司羽は……例えば、違う何かに、まぁこの場合は魔法なんだが、それに集中した状態で、こっちに転移する前の場所でそこにいた自分自身をイメージした上で、転移した場所に居る自分を完全にイメージする事が出来るかい？」

「それは……無理だな。確実に人間の脳の容量を越えてるし。今言った三つとも集中を必要とする物だしな。自身の把握に関しては、今いる場所の自分だけならいけるかも知れないけど、転移先の自分と周りを全て把握なんて出来ない。それを別の事をしながら二カ所同時なんて確かに不可能だ。」

「……一箇所の自分を全部掴める司羽のそれだけでも、僕は十分にとんでも能力だと思うけどね。まぁ、正直これが出来ても恐らく無理だと言われてるんだけどね。意識だけ飛ばされたりするって予想が立てられてるし。」

一応その場自分なら読み取るのは俺にとってそこまで難解な事じゃない、つまり自分を世界の一部とする様な意識を持った後、自分の意識と体を正確に感じ取ればいい。しかし、それは恐らく別の事をしながらでは無理だろう。さらに言えばそこに居ないはずの場所と、そこに存在する自分を客観的かつ正確に知覚するのはそれだけでも無理だと断言出来る。

「成る程な、つまりテレポート以外の方法で連れて来られたのか。」

「ああ、テレポートは何か別の場所に無理矢理入るって事だからね。世界の理と言う言葉があるが、これに違反する事は出来ないと言われている。まぁ、その世界の理がなんなのか、全体が全く掴めていないんだけどね？　それでも記憶を植え付けたりとか、相手の意思を奪う事は出来ないとされているんだ。でも、世界の理を信じていない人は、心周辺の魔力は無意識に近づくほど強く、人の意識で操る魔力ではとうてい他人や自分の心、無意識と繋がる意識に近づく事は出来ないからだって言う人もいる。他にも、記憶を植え付けるには相手の記憶を全て把握しなくちゃいけないし、操作するには相

手の体と意思を把握する必要がある、とかね？　そんな感じで、人間には到底無理な障害があるんだ。　っと、長くなってしまったけど結論を言うなら、世界の理を侵す事なく、司羽の身体の自由も奪う必要がない魔法。つまりは『召喚』されたんだよ、司羽は。まぁ、これも正直凄い魔法なんだけどね。」

「召喚……。」

「ああ、これなら可能だ。テレポートと違って身体のある空間自体を直接入れ替えるわけじゃないから転移先にある物の存在を侵す事がないし。道を創ってそこを移動させるってだけで、歩いて移動するのと概念はあまり変わらない。普通はワープホールに使ったりするんだけど、別の空間を作ってその中を移動するんだよ。まぁ、一緒だと言ってしまえば結果は同じ様な物なのだが、こちらは緻密な思考がいらないんだよね。相手や物の場所を想像する必要がないからね。それどころか相手すら想像する必要がない召喚もある。やり方としては、まず『自分が考えた場所』を何でもいいから創造する。一応空間に空間を織り込んでいるから、これを維持するのが一番大変だし、途中で集中が切れると次元の狭間に放置される様な危険な魔法だけど、無理と言うわけじゃないよ。自分の魔力で自分の一番想像しやすい場所を創れば良い。勿論さっきも言った様な自分の得意とする場でね？　後は簡単さ、相手を問わないなら空間の入口を開けて中に入って、適当な場所に出口を作ればいい。海の底とか火の中かも知れないけど何処かには繋がるからね。後は……。」

　ムーシェは言葉を区切って息をついた。長く話しすぎて少し疲れたのかも知れないが、なんとなくは理解出来た。それと恐らく、テレポートではなく召喚だと言うところにも重要な部分があるのだろう。

「後はなんだ、ムーシェ。」

「後は……相手を指定する時は、召喚者とされる者の間に繋がりや想いの同調があると召喚されやすい。これについては全く分かっていないが、そもそも魔法は心の力だとされるからかも知れない。例えばお互い愛し合っていたり、使い魔と使役者としての相性が抜群だったり、同じトラウマを持っていたり。後は相手を自分の作った空間まで呼び寄せ、司羽の様に入口から出れば、道を通り抜けた事になり召喚は成功する。テレポートと違って、狙った者を召喚出来る確実性にかなり欠けるが、これは今の魔法技術では唯一星間移動が出来る魔法だ。そしてこれは専門に勉強していないと構築が危険過ぎて出来ない。魔力もかなりの量がいる。つまりは先程の情報に、召喚技術と強大な魔力を持ち、司羽と何かしら同調する物を持った人間と言う手掛かりが新たに加わる。」

「……成る程な、それは大した手掛かりかもしれない。」

するとかなり明確な人物像が出来る。銀髪で少女の様な外見に加え、この近くに住み。強大な魔力と技術を保持し、さらに俺と何かしら通じ合う物を持っている人物。これだけ絞れれば探すのも容易だろうな。この街がいくら広いと言っても限界はあるのだから。

「……ただ、問題があるとすれば……。」

「……なんだ？」

「……僕達くらいの年齢の魔法使いは全てこの学院に編入されているんだが、銀髪の者は一人もいないんだ。さらに言うなら、召喚が出来る程の技術と魔力を持つ者は学院に入っている様な年齢の者には一人もいない。技術だけならば幼い頃から才能があり、密かに練

習していたならばいるかも知れないが、魔力に関しては絶対にいないと断言出来る。首席のルーン嬢レベルが全力で魔力を使ってギリギリだろうね。そもそもそんな魔力の持ち主がいたらこの辺りに住んでいなくても学院側がとっくにスカウトしてるだろう。」

「それじゃあまるで意味ないじゃないかっ！？」

それはつまり、今までのムーシェの推理が間違っているという事だ。全く、長々と話していたからかなり期待しちまったじゃねぇかよ……。

「いや、それについてはまだ不確定要素があるのだよ……。」

「不確定要素……？　もしかして、髪を染めてるとかか？　それは俺も考えたんだが、そもそも見付かる場所にいるとか最初に宣言して自分に縛りを掛けてる奴がそんな事するかね？　……まぁ、名前も何も教えてくれないのはかなり意地が悪いと思うけど。」

「同感だね。僕もなんでわざわざこんなゲームみたいな事してるのかは興味あるよ。目的も分からないし、条件の付け方も意味不明だよ。司羽を呼ぶのが目的なら、変な条件付けないで普通に姿を消せばいいってのに。まるで司羽に見付からない物を探してくれって言ってるみたいだ。ただの愉快犯だとしたら尚更自分の特徴を掻き消す様な事はしないだろうね。向こうは司羽に探すのを諦めないでいい、見付かるかもしれない最低限の手掛かりを残している気がする。見つかりたくないけど、探してほしい様な……。まぁ、僕が言う不確定要素はそれじゃないんだけど。」

まぁ、取り敢えず聞くとしよう。俺も折角ここまでそれっぽい手掛かりが揃ったのを無下にしたくない。

「一人いるんだよ。現状十五歳程度だと思われる人間で謎の人物がね。……司羽も知ってるだろう？　君の同居人の親友さ。」

「謎の人物でルーンの親友……まさか、リア！？」

俺が思い出したのは、親友のルーンにも姿を見せない謎の人物、リアだった。

「御名答。だが確認をせずにそうだと言うのもな……。確かにルーン嬢並の魔力がある様だし、魔法の技術もかなりの物と聞いたが、何せ銀髪の人自体が珍しいからあの子がそうだとは断言出来ないし、あの子が召喚したとしても理由がないからな。」

確かにムーシェの言う通りだ。だが、リア以外には今のところ考えられないし。駄目なら駄目でまた同じ所に戻るだけだ。調べる価値はある。

「……そうだな。司羽、課外学習が近いし、そこで何か手をうって見ようか？」

「うーん、そうだな。確かに課外学習は調度良いかもしれないな。」

俺とムーシェは顔を見合わせて、うんうんと頷きあった。周りから見るとかなり変な光景であったが、二人はあまり気にしていない。二人は取り合えず、課外学習でリアを調査する手順を相談するのであった。

第１０話：課外学習（前編）

「はーい、２列に並んでゲートに入ってくださーい。」

ミリクはそういうと、観光案内の指導員の様な格好をして旗をパタパタと振りながらゲートへ入る様に指示をした。ゲートの向こうにはもう旅館が見えているが、これももしかしたらムーシェが言っていた召喚魔法と何か関係のある物なのかもしれない。まぁ、今はそれは良いとして。

「課外学習の時ですらルーンは寝ているんだなぁ。ルーンを背負って学校に来るのが日課になっちまってるよ。」

「そうねぇ、でもしょうがないんじゃないかしら？　だって司羽の背中って実際普通の布団よりも寝やすいわよ？　寝た私が言うんだから間違いないわ。揺れないように気をつけてくれてるんでしょ？　ふふふっ、そういう所は素直に評価出来るわね。」

ミシュはそういって笑ったが、自分としては特にそんなつもりもなかったので、何とも言えない。無意識にと言うならそれもむず痒い感じがするし。まぁ、ルーンを無理矢理起こすのも可哀相だし、快適ならそれはそれで構わないけど。

「俺自身は俺の背中で眠れないからそんな事言われてもなぁ……。」

「何当たり前の事を言ってるのよ。」

ミシュにそう言いながら、俺はリアの方に視線を送った。……さて、何とかしてこの課外学習の間に正体を確認しないとな。

「司羽……どうかしたの？　顔が強張ってるわよ？」

「……いや、なんでもないよ。」

後ろにいるムーシェに視線を送って俺はそう言った。

「ふぅん？　まぁ、良いけどね……。」

ミシュは少し不満そうにそう言って会話を区切った。なんで不満そうなのかは分からないが、ミシュはいつもそうだと言えばそうなので、取り合えず追求は止めておく。

「では中に入ったら向こうの添乗員さんから部屋割りを聞いて、荷物を置いたら旅館前に集合してくださーい♪」

「はーい、皆さん集合しましたね？」

ミリクはクラスの人数を確認して満足気に頷いた。うーん、こういう所は結構先生っぽいんだけど……。

「えーっと、今から自由時間に入るんですけれど。皆は程よくはっ

ちゃけて下さいね？　皆様の中にはそんな人はいないとは思いますが、昔他校の不良に一人残らず焼きを入れて、土下座させた人がいたんですよねー。ねぇ、シノハ先生？」

「あっ、あれはミリクに言い寄って来る奴等が……。」

「ふふっ、それでは解散♪」

シノハの言い訳を軽く流してミリクがパンッと手を鳴らす。何というか凄く嬉しそうだ。恐らくこの場で一番楽しそうなのはミリク先生だろう。まぁ、それはいいとして。

「ねぇ司羽、何処行く？　私達は何回も来てるから何処でも良いけど。」

『はい、御任せします。』

「そんなこと言われてもなぁ、行きたい所かぁ……。」

そう言って司羽は地図を見た。基本遊園地と同じ様な感じだな。アトラクションも元の世界とそう変わらない。旅館に遊園地が一緒に建設されているのはなんか変な感じがするけど。

「ミシュ、なんか行きたい所ないのか？」

「はぁ、なんで私に振るのよ……それじゃあ、あのオバケ屋敷でも行く？　定番の一つだし、そこにあるし。」

ミシュの視線の方を見ると確かにオバケ屋敷らしき建物がある。だが結構デカいな。……それにしてもオバケ屋敷か、うん、まぁ別

に良いだろう。他の二人も平気見たいだし。

「んじゃあオバケ屋敷からにするか。でも二人ずつ見たいだな、カップル用か？」

「あ、僕司羽とが良い！！」

すかさずルーンが立候補してくる。まぁ分かってはいたけどな。

「そうだな。それじゃあ……。」

「あ、司羽は私と入ってもらえない？　ちょっと怖いのよねぇオバケ屋敷。」

そう言って苦笑するミシュ。オバケ屋敷見たいな家に住んでるって言ってたのにな……。と言うか発案者が苦手ってなんかおかしいな……。

『ルーン、私と入りましょう♪』

「うーん、怖いなら仕方ないかな……うん、一緒に行こうリア♪」

ミシュナの発言にフォローを出したリアの意見を素直に受け入れ。ルーンはクスッっと笑うと、リアを連れて中に入って行った。うーん、今日はなんだか妙に聞き分けが良いな。

「ミシュ、それじゃあ俺達も……。」

「……はぁ、やっと二人で話せるわ。全く、苦手な物を自分で推すわけないじゃない。分かってるんでしょ？」

又しても俺の台詞を遮ってミシュは言った。まぁそうだろうとは思ってたけどな。でもミシュが改まって俺に話ってのも珍しいな。何かあったのか？

「別に大した事じゃないんだけどね。司羽、さっきからあのリアって子の事気にしすぎよ？　どうしたの？」

「……うーん、やっぱりバレてたか……そんなにあからさまだったか？」

「まぁね。なんだか気になっちゃったのよ。」

しかし、ミシュに気付かれるとは……まだまだだな。でも良く気付いたな、不審に思われないようにしてたのに。

「もしかして、惚れたとか言うんじゃないわよね？　顔も見てないし、喋った事もないのに、私なら有り得ないわ。司羽、貴方何か私に隠してないかしら？」

……鋭いな。うーん、どうしたもんかなぁ。あんまり言い触らしていい事じゃあないが、ムーシェに言ってミシュに言わないのは何だか区別してしまっている気がする。とはいえ友人なんて地球では殆ど出来たことなかったから良くは知らないが。

「別に、って言ってもミシュは信じないんだろうな……。、まぁそれならどうせだし、ミシュにも手伝ってもらうか。」

「……手伝う……？　何かあったの？　それともやらかしたの？」

ミシュナは首を傾げて、微笑する俺を見つめた。

――――――――――――――――――――――

「ふうん、それはまた壮大な話になったわね……。」

取り敢えずミシュには全ての事を話した。ミシュは俄かに信じられないと言う顔をしたが、こちらの真剣な顔を見て納得した様だ。ムーシェといいミシュといい、素直な友人を持ったものだと思う。だが実際に魔法を日常的に使っているからそういう魔法の可能性くらいは考えたことあるんだろうな。そういう意味ではここがそういう世界で助かった。

「取り敢えずそういうわけで、まずは最低でもリアの髪の色を確認しないといけないわけだ。正直協力してくれるとかなり助かる。」

「……なるほどね。まぁ筋は通ってるし、協力してあげない事もないわ。興味深い話だとも思うし。」

司羽の説明を聞き終えると、ミシュはクスッっと笑ってそう言った。ミシュが協力してくれるなら風呂の時にでも見てもらえれば良いし、かなり楽な作業になるだろう。これは話して良かったと言える。

「ああ、そう言ってくれると助かるよ。」

「ええ、これで借り一つね。ふふっ……。」

ゾクッ……。

「……お、おーい、ミシュナさーん……？」

「ほらほら、私達も早くオバケ屋敷に入るわよ。……さーて、この借りは何に使おうかしら？」

「……いや、あのな？　ここは友人の為に人肌脱いで無償でとか言うところじゃないのか……？」

「あら？　まだ何かするとは言ってないわ。無償かも知れないし、何かあるかも知れないし。」

げんなりする司羽に、ミシュナはクスクスと笑いながらそう言った。……これは絶対何かやらされるな……と、そう考えて若干鬱モードに入りながら、司羽は溜息をついた。そしてその隣には、嬉しそうに考え事をするという珍しいミシュナが始終付いていたのだっ

た。

――――――――――――――――――――

『ルーン、どうかしたの？　さっきからなんだかおかしいけど。』

先にお化け屋敷に入ったリアは、同じく先に入ったルーンに、少し心配そうな雰囲気を漂わせながらそう書いた。それにも理由がある。司羽達から離れ、オバケ屋敷に入ってからルーンの表情は一転した。明らかに先程の明るい笑顔ではない、何か暗い、別の感情が体中から出ている。そんな雰囲気が感じられた。

「ねぇ、さっきの司羽さ。リアの事見てたよね？　気付いた？」

『……そうなの？　私は特に気がつかなかったけど。』

リアは暗闇の中では魔法で文字を発光させているが、相変わらず

の筆談だ。その文字を見て、ルーンは何かを考え込むように黙り込み、俯いた。

『……もしかしてルーンは、あの人の事……司羽さんの事が好きなの？』

「うん、好きだよ。当たり前だけど、私達はもう家族だもん。一緒に住んで、一緒にご飯食べて、一緒に寝て。」

ルーンは拳を握り締めて言った。リアの眼でも分かる、ルーンは自分の感情を明らかに隠そうとはしていない。今のルーンはリアが見たことがないくらいに苛立っていた。

『ルーン？』

「ねぇリア。なんでそのローブ付けてるの？」

ルーンの瞳からはもう幼く無邪気な色は消えていた。リアにはその理由が全く理解できなかったが、自分に関係があるかもくらいには考える事が出来た。だが、今更このローブが気になったという感じではない気がする。

『ごめんね、ルーン。それは言えないの。』

「リア……。」

ルーンは哀しげに親友を見つめた。リアとしては意味がわからない事だらけだ。

『本当にどうしたの？　私はルーンの好きな人を取ったりしないわ

よ？』

「そうじゃないの……ごめんね、何でもない。だから、此所で話した事は忘れて。」

『ならいいんだけど……。でも、何かあったなら直ぐに相談してね？』

「……うん、分かった。」

ルーンはそう言って笑った。リアにはその笑顔が酷く哀しげに見えて、何も言う事が出来なかった。

第１１話：課外学習（中編）（前書き）

まさかの投稿出来ていない事実が発覚しました……。
待ってくれていた皆様申し訳ございませんでした。

第１１話：課外学習（中編）

「んで、これがお前の考えた作戦か……？」

「そうさ！！　これならいくら鉄壁の装甲を纏おうとも隠す事は出来ないはずだ！！」

はぁ……、と口からは溜息しか出ない。普通リアの髪を見るだけでこんな事をここまで綿密に計画するか？　と司羽は考え込んでしまった。ムーシェを見る目が若干変わったかもしれない。

「確かにそうかも知れないけど……覗きって、正気かよ？」

「ふぅ、貴方、最低ね。」

俺とミシュナは揃って毒付いた。だがムーシェは全く気にしていない。

さも当然と言う様に嘆息した。

「だって仕方ないだろう？　ターゲットは先生に相談して皆とは違う時間に入る様にしているから、ミシュナにも確認してもらえないんだから。」

ムーシェはそう言って腕を組んだ。それは確かに正論に聞こえるし、それしか方法がないのは事実だが、ミシュナは軽蔑の視線を送るのをやめない。

ムーシェの評価は死んだな。

「別に確認は君にしてもらえば問題ないだろ？　女が女を覗いても

危ない趣味の持ち主だと思われるだけだし。」

「ねぇ司羽？　こいつ殺っちゃって良いかしら？　全身にナイフを１０００本刺して何本目で死ぬか確かめたいから。」

ミシュナが本気の眼で俺に聞いてきた。頷いたら間違いなくやるな、これは。

ムーシェの顔が真っ青になったのも分かるが……うん、自業自得。まぁミシュナの発言には凄い威圧感と殺気があったし無理もない。

「だがまぁ、確かに他に方法もないしな……だが、それよりも……。おいルーン、そんな所で盗み聞きか？　怒らないから出て来いよ！！」

司羽が部屋の入口に向かってそう叫ぶと、ドアを開いてルーンが姿を現した。ムーシェは驚いた様な表情をしたが、ミシュナは気付いていた様でさほど反応を示さなかった。

「あれ、やっぱりバレてたの？　まぁそれは良いとして、僕も協力するよ、その作戦♪」

「は……？」

司羽が惚けた声を出すとルーンは無邪気に笑った。悪戯がばれた子供がそうするような、ペロッと舌を出して楽しげに。

その瞳からは純粋な好奇心しか見られなかった。

「私も興味あるもん。それに司羽を連れて来たのがリアかもって思ってるんでしょ……？　疑いたくはないけど、私も十五歳くらいで銀髪の子は知らないし……。」

ルーンは少し声のトーンを下げて言った。司羽はルーンも同じ答えにたどり着いた事に感心しながらも、自分のせいで二人の関係が悪化したらと考えていた。ただでさえ二人がお化け屋敷から出て来てから様子が少しおかしい気がする。極微細な変化ではあるが……。

「大丈夫だよ。髪の色だけ確認すればいいんだから、司羽もそんなに心配しないで♪」

「だけど、ルーンなら髪の色くらい見せてくれるかも……。」

俺がそう言うとルーンは無理だと首を横に振った。ふむ、ルーンでも駄目か。やっぱり覗きしかないのかなぁ、最低な事だと自分の中で思っていた事を計画まで立ててやらんといかんのか。

「リアは見せてくれないと思うな。オバケ屋敷でも聞いて見たけどダメだった。」

「うーん、そうか……。」

俺がまだ悩んでいるとルーンはクスッっと笑って背中を叩いてきた。

「司羽は何にも心配しないで良いんだよ♪　とにかく作戦実行は1時間後ね？　僕は部屋に戻ってるから♪」

「あ、ああ」

そう言ってルーンは自分の部屋へと戻って行った。司羽は何かルーンに違和感の様な物を感じたが、それも一瞬で消えたので気に止

めるのは止めた。

「まぁ取り敢えず。ミシュとルーンが確認係だな。頼んだぞ?」

「まぁ、やるだけやるわよ。協力を申し出たのは私だしね……。」

ミシュナはそう、少し不満そうにそう言った。そして、四人の覗き見作戦は始まりを告げようとしていた。

「問題はいかにリアに気付かれずに覗くかだけど……露天風呂じゃなくて室内だから結構難があるんだよね。覗き防止用に魔法結界を張ってるし。」

「だからこそ結界を張っている元を叩くんだよ♪　多分私達の時と同じでここの旅館の人が見張ってる筈だから。そっと近付いて気絶させる。これが出来るのは司羽だけだよ。魔法だと気付かれるかも知れないしね。あくまで隠密行動だから。」

「完璧に犯罪者だな、これ……はぁ……。」

つまりは結界を張っている人に気付かれずに貧血に見せかけて気絶させる。その間、ムーシェは人払いの結界で目撃者が出ない様にする、その後リアに近付くのがミシュナとルーンと言うわけだ。ま

ぁ完全に覗きと傷害を合わせてニ犯なのだが……今は気にするのは止めよう。

「……んじゃあ行ってくる。」

「ああ、結界は任せてくれ。」

司羽は風呂場前の角に背をもたれながら風呂場の前を見た。若い女性の様だが、どうやら内部を結界、外部を肉眼で警備しているらしい。司羽は視線がこちら側から外れたのを見計らい地を蹴った。

トンッ…バタッ。

「ざ、罪悪感が……。」

「はいはい、気にしないの。それじゃあ、その人起きない様に見ててね。起きたらもう一度意識刈り取っちゃってね？」

司羽は、俺がおかしいのか？　罪悪感を感じる俺がおかしいのか？　と、自問自答しながらも言われた通りにその女性を見守る。それを見てミシュナとルーンは中に忍び込んだ。ルーンは妙に楽しんでいる様にも見える。

「ローブは此処にあるし、もう中に入ってるみたいだね……。」

「ええ、それじゃあ気配を消して行くわよ……これで私も犯罪者ね。」

そう言って、二人は浴場に繋がるドアに手を掛けて、少しだけ中を開いた。

「……あれ？　いないわよ？」

「え、でももう結界張り出してたし、そんな筈は……。」

ルーンとミシュナが顔を見合わせて疑問の表情を浮かべる。するとミシュナの背中に手が伸びた。

トントン

「司羽、ちゃんと見ててって言ったでしょ？　誰か来たら大変じゃない。」

ミシュナは振り向かずに注意する。すると、手はルーンの方に。

トントン

「司羽、ダメだよ。リアは女の子なんだから……って……。」

ルーンが気付くのと同時にミシュナも気付き、同時に振り向いた。

『……覗きは、めっですよ？』

「リ、リア！？」

「気付かれてたのね……はぁ……。」

ルーンは驚き、ミシュナは溜息をついた。司羽も中の騒ぎに気付いた様で、心配になり入って来た様だ。

『もう、何でこんな事したんですか？　ルーンにも素顔は見せられないのには理由があるって言った筈ですよ？』

「……ごめん……。」

ルーンがそう言って俯く。司羽の為とは言え、親友に対して裏切りに近い行為をしてしまった事について素直に反省した様だ。

「すまんリア、今回の責任者は俺だ。ルーンは俺が無理に協力させちまったんだ」

「ち、ちょっと司羽……！？」

『司羽さんが……ですか？』

ハッキリ言って自分の為に行動したのは自分だけだし、皆は協力してくれただけだ。司羽はそう思っていた

『司羽さん。私に説明して頂けますか？』

「本当に済まなかった……。」

『いえ、もう謝らないでください……。でも驚きました。そんな事

が……そうですか、司羽さんはこの世界の人では……本当に、不思議な巡り会わせもあるのですね。』

リアは何かをしきりに頷き、そして考える様に俯いた。リアの筆談と言うのは、魔法で行われる物で、頭の中で口にしようと思った事が直接文章になるらしいのだが……。何だか、魔法に慣れた司羽にも、それが不思議な感じがした。

「リア……？」

『いえ、すいません。なんでもありません。ですが、私は銀髪ではありませんよ？　なんなら確かめて見ますか？』

「良いのか？」

『はい、司羽さんもスッキリしないと思いますし…。私も司羽さんに協力したいですから。』

リアは頷くと司羽に身を寄せて少しだけローブの口を拡げた。司羽の眼には長く、そして水色に輝く髪が一瞬見えた。

『私は銀髪ではありません。でも、秘密……ですよ？』

「あ、ああ分かった。」

司羽はその時、リアが笑った様に思えた。顔が見えないので思えただけかも知れないが……。

「でもこれで降り出しよね。司羽、どうするつもり？」

ミシュナがそう言って司羽に視線を送ると、司羽より先に、ルーンが答えた。

「大丈夫だよ、見つかるまで私の家にいれば良いんだから♪　だから、ゆっくり捜そうよ♪」

「……ま、そうだな。急ぐ必要もないしな。」

「……まぁ司羽がそう言うなら私は何も言わないわ。」

司羽がそう言うとルーンは満足そうに頷き、ミシュナは溜息をつきながらそう言った。こうして、ムーシェ考案の覗き大作戦は無事（？）終了したのだった。

第１２話：課外学習（後編）

「キャー♪　夜這いよ、夜這い♪」

「ルーンちゃん、良いなぁ……。」

司羽の部屋には同じクラスの女子生徒が集まり、司羽と、司羽の布団の中で眠るルーンを取り囲んでいた。司羽が起きたら既にこの状態だった。というか、元よりこの状態に気付いて目を覚ましたのだが、起きるに起きられなかったのでじっとしていたら、状況が悪化した。同じ部屋の女子の一人が、ルーンがいないのに気付き、ミシュナが口を滑らせたのが原因らしい。

「……おいルーン、起きやがれ。何度このやり取りをすれば気が済むんだよ。」

「うにゃ……。」

さて、なんでこの馬鹿な首席はこんな時でも布団に潜り込むのでしょうか？　鍵をかけたような気がするんだけどな。さては魔法で開けたな？　それじゃあ鍵の意味ねぇじゃねぇか。

「おいルーン、昨日絶対忍び込まないって約束したよな？」

「だってぇ……司羽がいないと眠れないんだもん。」

ルーンがそう言って司羽にしがみつくと同時に周りからは黄色い悲鳴が上った。そしてその人だかりの中からミリクが割って出て来た。怖い笑顔と一緒に。

「ルーンちゃん？」

「……？」

ミリクはルーンを自分の方に向かせると真面目な、教師らしい顔をして言った。

「司羽君は優しかった？」

「……司羽は優しいよ？」

再び歓声。司羽は疲れた様に……実際疲れていたのだが、布団から起き上がった。

「ルーン……あのなぁ……。ミリク先生もいい加減にして下さい。着替えるから皆さっさと出てって出てって。」

司羽がそう言うとルーンが名残惜しそうに見つめて来たが、サラッと無視して追い払った。さて、あの興味深々で隠れながらこっちを見てる奴らはどうしてやろうかな。

「全く……。さてと、今日は登山にバーベキューだっけか？　なんだか小さい頃を思い出すなぁ……。ああ、でも結局は親父に海外に放り出されていけなかったんだっけ……はぁ……。」

司羽はそう言って、一人で落ち込みながら着替えを始めた。

「それでは、頂上でバーベキューをするので、各自自由にまったりと自然と触れ合いつつ登って来て下さいね♪　茂みの深くで男女の触れ合いも悪くはありませんが、たまにはね？」

ミリクがそう言って旗をパタパタと振りながら説明する。説明に紛れて余計な事まで言っているが。シノハはと言うと向こうで食材を確認しつつ他の教師に指示を出していた。

「では、かいさーん。」

ミリクがそう言ってシノハの方に走って行くとシノハは何か恐ろしい物を見るかの様な眼をして逃げて行ってしまった。昨日、何かあったのだろうか？

「さて、じゃあ登るか。この距離なら十分掛からないかも知れないが。」

「……それは司羽だけだと思うなぁ……。」

「同感ね……この運動馬鹿……。」

司羽が山を眺めてそう言うと、隣りでルーンとミシュナが何だか怠そうに言った。

「ああ、そう言えば魔法は使えない様に結界這ってるんだっけ？」

「そうなんだよぉ……自然と触れ合うなら何も坂道じゃなくても良いのに……はぁ……。」

『たまには良いじゃないですか。ね？　ルーン』

「良くないよぉ……運動は苦手なの～。」

ルーンは子供の登山に適しているあまり勾配がキツくない山を恨めしそうに見ながら溜息をついた。

「ほらほら、俺の布団に忍び込んだ罰だと思って登るぞ。」

「登ったら、一緒に寝ても良いの？」

「ダメだ。てかどっちにしろ入って来るくせに何を言う。」

人混みから司羽を見付けて、そんな会話を聞き取ったムーシェが二人を訝しげに見て言った。

「ねぇ司羽、あんまりそう言う会話を人前でしない方がいいよ。ただでさえ、今朝の噂……かなり広まってるよ？　かなり脚色されつつね。」

それを聞いて司羽は苦い顔をした。ルーンの方を見ると何でもない様な顔をしている。視線に気付いて首を傾げるルーンに司羽は諦めた様に溜息をついた。

「司羽、諦めなさい。そして責任を取るか取らないかハッキリした方が良いわよ。子供出来ちゃってからじゃ遅いもの。」

「俺は無実だ……。」

そんな事を言いながら五人は山に入って行った。

「さて……迷った。」

「うん、迷ったね。」

周りには誰もいない。そしてそんなに高くない山だと言うのに雲の中に入った様に視界が悪い。濃い霧の様な物が視界を埋めている。

「ルーン、ミシュナ達はどうした？」

「わからない。でも、何か変だよ。この感じ。でも多分、魔法だと思う。」

「だろうな……それもこの感じ、極最近に感じた気配の魔力だな……白銀の少女の物だろう。俺も油断してた訳じゃないんだが、いつの間にかけられたんだ？　近くに俺ら以外の気配はなかったんだが。」

司羽にも魔法がかけられているのは何となく分かった。この霧からは何か別の力を感じるのだ。そして、かけたのは恐らく……あの

白銀の少女だろう。こちらに飛ばされた時と同じ様な魔力の感じを受ける。司羽にも魔力の気配の差が段々分かるようになってきていた。

「ふぅ。なぁルーン、これは何とかならないのか？　正直無理矢理この場から脱出は出来るが、出来れば、出所を探りたいし。一応手掛かりになるからな。……まだ魔法の出所を掴める程には慣れてないんだ。」

「出来るならとっくにやってるってね♪　まぁ、無理矢理出なくても大丈夫だと思うよ？　山自体結界の中だからその内解けるだろうし、その白銀の少女さんのいたずらじゃないかな？」

「いたずらねぇ……。」

何となく俺とルーンを故意に二人にさせようとしてる気がするんだが。いたずらなんかじゃなくてそれ自体が重要な様な……。考えすぎかも知れないが。

「ねぇ、司羽。歩いたってしょうがないし、魔法が解けるまでここらで休もっか？」

「ああ……。」

司羽はルーンに何か違和感の様な物を感じた。霧で髪が少し白く染まった様になったルーンはまるで……。

「司羽、昨日リアの髪の毛見たんだよね？」

「ん、ああ。教えちゃいけないらしいから、ルーンには言えないけ

どな。」

輝く水色、あれは銀髪とは違った。それに、何となくだけどリアはあの少女とは雰囲気が違う気がした。

「そっか。まぁ、そんな事はどうでもいいんだけどね。」

「ルーン？　どうしたんだ、変に笑って。」

「ううん、何でもないよ♪」

一瞬だけ、ルーンが別人の様に見えた。姿だけが同じ、別人の様に。

「司羽、帰る当てが無くなっちゃったね。これからどうするの？むやみやたらに探し回る？」

「どうするって言われてもなぁ……。どうしようもないよなぁ……。適当に探してもどうせ見つからないし。」

手掛かりはない、と言うよりも、今は何も分かっていないに等しい状況だ。世界単位で手掛かり無しの隠れんぼなんて、正直見つかる気がしない。目的も分からないし、これは海に捨てた指輪を探す事よりも難しいだろうと思う。なんせ、見付けた指輪に人違いだと言い張られれば、司羽にはどうしようもないのだ。

「……じゃあ、ずっと居ても良いからね？　多分もう無理だよ。何にも手掛かりがないんだから。」

「ルーン？　何言ってるんだ？　昨日はあんなに手掛かり探しに協

力的だったのに。」

「……。」

司羽の返答にルーンは沈黙する。まるで聞き分けのない子供を見る様な眼でルーンは司羽を見た。

「諦めた方が良いんじゃないかなって思ったんだよ。だって特に帰らなきゃいけない理由なんてないんでしょ？」

「まぁそりゃあ、そうなんだが。でも、いきなりどうしたんだ？」

「別に……ただ、無理だろうって思ったから……。司羽が頑張らなくてもいいんじゃないかなって。」

ルーンは何かもどかしそうにそう言うと司羽に背を向けた。

「私が言いたいのは無理しないでねって事だよ。司羽はずっと僕の家に居てくれていいんだって……ね……。」

「ルーン……。」

「ねぇ、司羽……。私達って、もう家族だよね？」

「一緒にご飯食べて、一緒に学校行って、一緒に寝てるんだし。私は司羽の一番の味方になるよ。だから、家族だよね。私達は。」

「……そうだな。家族……だな。」

「司羽……。」

司羽がそういうと、ルーンは安心した様に微笑んだ。……そして、空を仰いで、何かを呟いた様に、司羽には見えた。

「ほら、司羽。魔法が解けるよ……これからは、私達……一人じゃないよね。」

ルーンがそう言うと同時に霧が晴れていった。

第13話：隠れんぼの終わり

課外学習から帰って来た翌日、ルーンの様子はいつもと変わらない。そして、いつも通りにベットに潜り込んでくる。

「またか、よっぽど襲われたいらしいな。」

「うにゃっ……司羽は襲いたい？」

「いや、別に。」

ルーンは無邪気に笑って、安心仕切った様に司羽の上で二度寝する。いつもと変わらない。だがルーンの変化に司羽も気が付いていた。はっきり言って司羽は鋭い。人の心を読み取る術を持っているわけではないが、雰囲気などにも敏感だ。先日の事は夢の様で夢ではない。そして司羽にはある可能性が見えていた。いや……鋭いと言いつつ、今まで気付かなかったのは遅いくらいだ。

「今日は休日だったな……。」

司羽はそう言って起き上がると、上に乗っていたルーンも一緒に起き上がった。

「司羽、何処行くの？」

「散歩だよ。」

「じゃあ、私も行くね。」

ルーンはそう言って起き上がり着替えようとする。勿論、司羽の目の前で。司羽は一瞬思考停止に陥った。

「阿呆か！！　少しは恥じらいの心を持て！！」

「い、痛いよ司羽……。」

ルーンはそう言って頬を膨らました。司羽はそれを見ているとその可能性とやらを考えるのが馬鹿馬鹿しくなってきたが調べる必要があるのは変わりない。

「一人で行くよ。気分転換なのに、二人一緒じゃ家に居ても一緒だろうが。」

「うー……司羽は私と一緒は嫌なの？」

「そうじゃない、メリハリがある方が人生楽しいんだよ。ほら寝てろ、ちゃんと戻ってくる。」

「……本当？」

「本当だ。」

ベッドの中の司羽が寝ていた辺りで丸くなるルーンに苦笑しつつ、司羽はそう言って部屋を出た。

「んで、俺の所に来たってわけか。」

「はい、どうにも緊張しちゃうんですよね。まぁそれは良いとして、マスターはどう思います？」

「……。」

マスターは司羽が言わんとしている事を察した。つまりは、司羽の隠れんぼの相手の事だ。正直、司羽もあからさま過ぎて、確認を取るのも馬鹿馬鹿しい感じはしたのだが。

「まぁ、その予想は正しいだろう。……実はこっちでも調べた結果が出ているよ。」

「じゃあ……。」

「ああ、お前の思ってる通りだ。」

「やっぱりか……。」

マスターがそう言うと司羽は沈黙した。呆気ないもんだと思った。まぁ子供のする事だからとも思う、バレるに決まってるのに……。でも、それは本人も判っているのだろう。だからこそ、必死になるのだから。

「御邪魔するわよー。」

「み、ミシュ……もしかして此処が気に入ったのか？」

「むっ、何よ。司羽がここに居るだろうと思ったのよ。課外学習が終わったばっかりだけど、これからどうするのかと思ってね。」

ミシュナは顔を赤くして言った。司羽はそんなミシュナを見て微笑んだ。しかし、これからの事……か。さぁ、どうするかね。

「んー、いや。俺もそれなりに悩んだんだけどね……。」

「元の世界に戻るの？　戻らないの？　どうせ全部分かってるんでしょ、司羽は。」

「まあね、何だよ、ミシュも分かったんだ。」

「私達の歳でそれが出来るのは私が知る限り3人、いずれも銀髪じゃないわ。けど、元々それだけの大規模な魔法使ってるのに元の髪も銀髪なんて普通は有り得ないのよ。」

「へぇ、そうなのか。」

司羽はさほど興味もなさそうに言う。イスに座ってから、ミシュナは呆れたように額に手を当てた。

「あんた、魔法の知識もないくせに、犯人を知ったの？」

「いや、魔力が足りない可能性ってのがあるからね。いや、ムーシェの話を聞く限りその可能性の方が高いだろう。だから一時的に何かで代用する事が出来るとしたら、と考えたわけだ。髪の色なんてのは特徴を抑える時にかなり重要だからな。そのままを相手に教える必要なんざない。一番利用しやすい代用品だ。魔力の代わりにな

るってのは今ここで聞いたけどな。」

「はいはい、司羽は頭脳明晰ですね。羨ましいわ。」

ミシュナは何か投げやりに言った。どうやらご機嫌ななめらしい。

「……なんだか機嫌が悪いな。」

「……そんなことないわよ……。」

司羽が訝しむと、ミシュナはそっぽを向いてしまった。マスターは二人を見ながら相変わらず無表情にグラスを拭く。

「私が聞きたい事は一つ『これからどうするか』どうしたいかはどうでもいいし、決断は早い方が良いわよ。変な情で行動して、後で後悔されても困るけどね。」

「そうだなぁ、取り敢えず馬鹿な事を仕組んだ奴に白状させるか。」

「……。」

そうだな、多分今日で隠れんぼは終わりだ。本当に呆気ないもんだ。だが、明日から自分が何を始めるかは、まだ決めていないが。

「じゃあな……。マスターも、ありがとうございました。」

「……はいはい、行ってらっしゃい……。」

ミシュナがそう言うと司羽は驚いた様な顔をしてミシュナを見た。ミシュナの顔は見えない、だがさぞかし不機嫌そうな顔をしている

事だろう。司羽は苦笑してその場を去った。

「はぁ……アルコール頂戴。私が死なない程度に濃い奴。」

「……青春を謳歌する、昔の俺でも言ったかどうか。」

「……黙りなさい、その髭を毟るわよ……。」

「……。」

ミシュナの不機嫌そうな顔を見て微笑しつつマスターは桃のカクテルを取り出した。それを見てミシュナは完全に子供扱いされている事に気が付いた。

「……私なんでこんな不愉快な所にいるのかしら……。」

「さぁな。」

そう言いながらグラスにカクテルを注ぐ。ミシュナはそれを見詰めながら嘆息した。

「しかし、行ってらっしゃいとは……若いな。」

「……我ながら馬鹿な事を言ったもんだわ……。」

「良いんじゃないか？　馬鹿な事一つで遂げられる想いなら。」

ミシュナの顔は少々赤いが、まだグラスには口を付けていない。ミシュナもからかわれている事は分かっていたが、今否定したら確実に肯定と取られると分かっているために何も言わない。

「ほら。」

「ありがと、代金は司羽にツケといてね。あいつのせいだから。」

「……分かった……。」

マスターは苦笑した。全く代金の事など気にしてはいなかったが、少女に奢ると何かムカつくと言われていただろう事は分かっていたため、慎んで了承した。これからはツケが溜まっていくかもしれない。無論司羽の。

「あー、酔ったらどうしよう。」

「止めたらどうだ。」

「いやよ、そんなの。」

ミシュナはそう言ってグラスを呷った。

バタッ

「桃のカクテル一杯でこの酔い方か……いや、最早酔っているのか？」

マスターは苦笑して、司羽が迎えに来てはくれないものかと思案した。

帰るとルーンは玄関先で立っていた。司羽は苦笑してしまった。どうやら帰りを待っていたらしい。服装は黒いマントを付けていて、下につけている物は分からないが……。マントで体がすっぽり隠れている。

「あ、司羽。お帰りなさい♪」

「ああ、ただいま。それで話があるんだが、ルー…。」

「嫌。」

「あのなぁ。」

どうやら気付いていたのはこちらだけじゃないらしいと悟る。司羽は嘆息した。ルーンはこちらを向こうともしない。表情を見られたくないとでもいうようにそっぽを向いている。

「嫌でも聞け。」

「それも嫌。」

「隠れんぼはもう止めだ。隠れる人間がやる気ないんじゃしょうがない。」

「……。」

ルーンは不機嫌だ。さっきのミシュナよりも明らかに顔に出ているようだった。

「元々隠れてすらなかったんだからな。まさかとは思ったが、ルーンは分りやす過ぎて簡単に見つかった。まぁ髪の色だけで欺き通すのは無理があるよな、最初の時だけ、また髪を銀髪にして俺の前に現れたけど。あれで誘導されちまったんだな。」

「ねぇ司羽。誰から聞いたの、髪の色の事。ちょっと私出掛けてくるから。」

ルーンはそう言うと拳を握った。今にも教えた人間を潰しに行く様な気迫だ。正直司羽も多少表情が引き攣った。

「魔力が足りない場合には代わりに生命力を使うってのは勘だ。まぁ代わりに髪の色とかじゃねぇかと思ったんだ。」

そして魔力は回復する、それならまた髪の色も回復するだろう。ムーシェが気がつかなかったのも無理はない。普通、魔法でもなんでもあまりに自分の力とは違い過ぎる事はやらないから、魔力に何かを合わせる事はしないだろう。だから気付かなかった。

「隠れんぼなんてのは名目だ。ルーンは俺をこの世界に閉じ込めたかったんだろ。」

「……そうだよ？　まさかこんなに早くバレるとは思ってなかった。直ぐに諦めてくれると思ってたのに。契約っていうのは司羽が諦めても成立するから。そうなればバレても後の祭りだったもん。」

「甘いな、大体お前は分かり易過ぎだ。こういっちゃなんだが、ル

ーンの事は首席って話を聞いた辺りから怪しんでたんだぜ？」

「……首席？」

ルーンは訝しげに司羽を見た。司羽は苦笑して見返す。

「あのシステム下で首席なんだから強いんだろ？　あんな一撃で倒せそうな動物に襲われるほどに魔力を使うなんて滅多な事じゃない筈だ。もしくは弱く見せる為の目的かと思ったんだよ。あんなに大規模な魔法は簡単に出来ない事くらい知識がない俺でも予想がつくからな。」

「そうだね、あれは私にとっても予想外だったよ。森は完全に回復を妨害する物じゃない。だからと言って簡単に回復する場所でもないんだけどね。なのに髪の色が戻ったからと思って動いちゃって、いざと言う時に魔力が全然戻ってないんだもん、司羽が来てくれた時は不覚にも安心しちゃったよ……。この人は私を守ってくれる人なんだって。でも魔力がある程度戻るまでは道に迷って家にも帰れなかったし…あれはしょうがなかったんだよね。本当ならもう一週間くらい徘徊させて根気を潰そうと思ってたんだけど……流石に私が参りそうだったし、司羽は無駄に順応し始めるし。」

ルーンは俺にあんな姿をさらした時点で失敗していたわけだ。首席と言う立場にありながらあの程度の、少なくともルーンより弱いはずのムーシェでも余裕であろう相手に襲われると言う矛盾をさらしてくれたわけだから。

「司羽がリアの髪を見て、銀髪じゃなければ諦めてくれると思って、リアまで裏切ったのになぁ……。あーあ、もう、やっぱり向いてないのかなぁ……こういう事って。私、わかりやすいって良く言われ

るし。」

「ああ、ルーンは向いてないよ。相手を罠にはめようとするなら催促みたいな事はしない方がいい。」

「うん……。」

ルーンはうつむいてしまう。司羽は、そのままルーンの言葉を待った。ルーンはそのまま黙っていたが、司羽が話さない事を悟ると嘆息し、口を開いた。

「だって、早く安心したかったんだもん。不安なんだもん。司羽が帰りたいなんて言うから……凄く不安になるよ。狡いよね、逆に罠にかけるなんて……。私だってあんな魔法はそう簡単に使えないんだよ？　一ヶ月くらい水だけで過ごして魔力を精練したり、死ぬかも知れないギリギリまで体力使って魔法陣に念を込めたり……。ねぇ、司羽、帰りも私がそれくらい辛い思いをするって言ったら帰らないでくれる？」

「いや、それについては調べはついてるからな。俺を帰すのはそんなに難しくないんだろ？　それと、罠に掛けたつもりはないけど、初めてこの場所に来た時、ルーンが寂しそうにしてたからな。」

「……最低だね、司羽って……女の子の嘘を信じる所か先回りして調べておくなんて。それに、私がなんで司羽を呼んだのか分かってるんだ。」

「まぁ、大体はな。」

司羽は、一人で住むには大き過ぎる屋敷を見てそう言った。ルー

ンはそんな司羽を見て寂しそうに溜息をついた。

「でも、そんな司羽と一緒にいたいと思うのは何でだろうね？」

「さぁな。」

「多分このままじゃ私の思い通りにはならない……そうだよね司羽。」

「さぁ、どうだろうな。」

「……そう……。」

ルーンはそう言うとマントを脱ぎ捨てる。下から現れたのは漆黒のドレス。いつもの無邪気な雰囲気はない、そのせいかルーンには不思議な、妖艶な魅力があった。両腕には白銀に輝く文字が刻まれた腕輪、そして、その腕輪が淡く光だした。

「このまま帰すのもなんだし、司羽が勝てたら言う事聞いてあげる。」

「勝手だな。」

「こっちの世界じゃ決闘はもっとも簡単な問題解決の方法だから。」

ルーンがそう言うと司羽はなるほどと頷いた。あの学校といい、問題解決法といい、なんて荒っぽい世界だ。正直この世界の風習は俺には合わないだろうな、元の世界も似たようなものかも知れないが。

「郷に入っては郷に従えと言う事か。」

「何それ？」

「こっちの世界での諺だ、気にするな。」

「そうなんだ……私が勝ったら、この家に司羽を閉じ込めて私から離れられなくしてあげるから。……それじゃあ、行くよ？」

そういって寂しげに微笑むルーンの周りに、魔力の渦が、司羽にはそれがハッキリと見えていた。

ルーン　（戦闘用魔力増強黒衣＆amp;シルバーブレスレット（ルーン仕様））ＶＳ司羽　（装備なし）

先にルーンが少し後方に下がり、光る腕輪に魔力が集まる。もっとも単純だが扱いやすく魔力に比例して威力が上る攻撃。つまり精練した魔力を直接相手にぶつける事。ルーンは右手を司羽に向けて光の柱となった魔力を放った。司羽が横跳びに避けると、屋敷の近

くの木は光の柱に触れた部分だけ消滅した。

「あぶなっ、殺す気か！？」

「そんなわけないでしょ、気絶させるだけだよ。これは僕の中の純粋な魔力。もっとも扱いやすいそのままの魔力だから、手加減もしやすいもの。」

そう言って次々に魔力を打ち出す。だが単調過ぎて司羽には当たらない、だがルーンの放った柱はターンして司羽の方に戻って来る。それをギリギリのところで司羽は避けた。

「なっ！　後ろから！？」

「当たらないなら数を揃えるだけ。質で勝てないなら量で攻めるよ。戦いは数とか誰かが言ってたし。」

ルーンの両手から次々生み出される光の柱は外れても戻って来て司羽を狙う。それが外れても永遠に司羽を狙い続ける。一発一発は単調だがタイミングをずらして連続で来ればかなり厄介なオールレンジ攻撃となる。仕方ないので司羽は回避しつつ光の柱の隙を伺うが時間が経てば経つほどに攻撃の量は増えていく。

「本当に目茶苦茶な運動神経だね？　全部避け続けるなんて。」

「大した事じゃない。」

さて、どうした物かと考える。そして結構あっさり考えがまとまった、特に考える必要もなかったなぁ、と司羽は溜息をつく。どうやらいきなり戦いになって少しテンパっていたらしい。暫く本気で

殺しにかかって来る様な相手と戦っていなかったせいだろうか。まぁ、つまりは元を断てば良いのだ。司羽は一度距離を取ると気を集中させた。

「行くぞ。」

「なっ……！！」

司羽は気と魔力を反発させて逸らしつつルーンに向かって右手を振りかぶったまま突撃した。ルーンは迎撃は無理だと判断し、両手を前に出して防御の為に壁を形成する。

「司羽、いくらなんでも焦りすぎ……。」

「へぇ、物理干渉出来る壁とか便利だな。」

「えっ……？」

司羽が左手で壁に触れると魔力と気が相殺し、光の壁はあっさりと崩壊する。だが、ルーンは咄嗟に飛び上がり、司羽との距離を取った。

「嘘でしょう……？　触れただけって何？　そんなので壊れるなんて……。」

「魔法って便利だな、話には聞いてたが本当に空まで飛べるのか……。まぁ、魔力を常に使うらしいからエコじゃないのな、主に使用者に。」

まるで見物するような姿勢の司羽に対して、ルーンは先程までの

余裕が吹き飛んでいた。表情がひきつっている。

「冗談じゃない……なんでこんな事出来るの？　おかしいよ……こんなのおかしい……なんでなんでなんで！？　当たったら死んじゃうよ！？」

「こっちから見れば魔法の方がおかしいんだけどな……。それと、今のは壁に気を流して中和しただけだから、当たっても死なないよ。」

「……っ、でも司羽は飛べないよね。いくら魔法が弾かれたり避けられても、この優位は私の物。私の魔力と体力が尽きる前に、司羽を疲れて動けなくしてあげる。私だって調べてあるの、気ってさ、生体エネルギーなんだよね。使ってれば体力も使う、根競べだね、司羽。私は諦めてあげないよ、絶対に。」

「……んー、ちょっと違うが大体同じだな。戦略もまぁ合格だ。だがスマートじゃないし、六十点ギリギリだな。でも……俺にとって空は、見上げる場所でもなければ、飛ぶ場所でもない。」

司羽がそういうと、その瞬間、司羽の姿と気配が消えた。そして、ルーンは背後に何かを感じ、そこから飛び去った。

「やるなぁ、ルーン。」

「くっ……飛んでる！？　何で司羽が……。」

「飛んじゃいないさ。」

そう言った司羽は地上にいた。そして、またルーンに向かって肉

薄する。表情には微かに笑みが浮かんでいた。子供を相手に遊んでいるように。

「滑ってるだけさ、自分の気を使って、気の海を。」

「……あっ……。」

咄嗟に張られた光の壁は消滅し、そのままルーンは、司羽に抱き抱えられる様にして、地上に降ろされた。

「……俺の勝ちだったな?」

「……こんなの狡い……反則だよ……。」

光の柱は最後にルーンが壁に魔力を集中させた時に消えている。その壁すらも溶ける様に消滅したのだ。ルーンは唇を噛み締めた。

「確か勝ったら望む通りにしてくれるんだよな?」

「ねぇ……司羽。私……誰にも抱かれた事ないよ? キスも……初めて、だから……お願い……もうあんな魔法使えないの……前回の魔法でずっと溜め続けてた魔法陣の魔力も無くなったし、魔法具も壊れて無くなったの……。」

「ルーン、俺がそんな事言うお前を、分かったって言って傷付けると思うのか? そんな事言うんじゃない。……分かるな、ルーン?」

「……なんで……司羽は私と同じ寂しさと傷を持ってる筈なのに……だから呼べたのに……なんでよぉ……。」

優しく諭すように言った司羽に、ルーンは泣きそうな顔で答えた。
これは決闘、問題解決法。ルーンはそう宣言している。
「ルーン、遠慮はしないぞ。……俺の願いはな。」
そして、ルーンの涙と共に隠れんぼは終わった。

プロローグのエピローグ

「うーん……なんだか寝不足だな……。」

隠れんぼから一日が経って、昨日の戦闘の事など、頭から抜け落ちてしまっている。それくらいに清々しい朝だ。窓から外を見ればいつもと変わらない風景。そして、布団の中も、いつもの光景だ。

「……。」

ムニッギュウッ

「起きろ阿呆、てか気配を消して忍び込むのだけは無駄に凄いな。まったく気付かなかった。」

司羽は布団を剥いでルーンを見付けると頬を掴んで引っ張った。

「……ふゅはばおはおー……。」

「ああ、おはよう。俺はもう怒るのも疲れたから何も言わないぞ？」

「分かった、おやすみー……。」

司羽からの後押しを受けて、ルーンは力無くうなだれた。

「起きろ、何が分かったんだ。今日の朝食はルーンの番だろ。」

「司羽の作った朝食が食べたい……。」

「プロポーズなら後にしろ、それと時と場所をわきまえろ。」

「……くぅ……。」

「……はぁ……。」

最近朝食を全部任されつつある現状と今日もルーンを背負って学院に行く事になるだろう現実に司羽は軽く鬱になった。

「しゃーねぇなぁ、取り敢えず今日の献立は……。」

悩んでいても仕方ないので諦める事にした司羽であった。

「ん、ミシュ？」

「……おはよう。今日も仲良いわね。」

司羽がルーンを背負っていつもより早く家から出るとミシュナが門にもたれかかって待っていた。

「ど、どうしたんだ？」

「……別に……なんでもないわ、気まぐれよ。」

ミシュナはそう言って先に歩きだした、司羽も少し小走りにその隣りにつく。

「不機嫌そうだな。」

「そうね、どっかの誰かさんのせいよ。」

「そりゃ悪かったな。」

「……本当にね、反省しなさい。」

司羽はミシュナが自分とルーンの事を心配していた事を察した。そのミシュナの不機嫌そうな顔を見て苦笑する。

「昨日は大変だったわ、あの後アルコールで倒れちゃってね、フラフラなまま家に帰ったの。マスターが家の近くまで送ってくれたけど、まだ頭が痛いわ。本当に私お酒はダメみたいね……。」

「今度は何で倒れたんだ?」

「……桃のカクテル。」

「……何本開けたんだ?」

「……一杯よ……。」

「……。」

司羽は呆れた様にミシュナを見た。ミシュナはムッとして司羽を

睨み返した。

「……なによ？」

「いや、そんなアルコールの低い物で酔ったのか。しかも一杯って……。」

それを聞いてミシュナはますます不機嫌になる。実際は一口で倒れたのだから何も言えない。

「しょうがないじゃない、どーせ私は子供よ。」

「拗ねるなよ。」

「拗ねてない、ただ迎えに来なかった司羽を恨んでるだけ」

「……無茶苦茶言うなよ……。」

司羽もまさかまたそんな事になっているとは思っていなかった。分からないのに桃のカクテルで倒れる事を予測して迎えに来いと言うのはハッキリ言って無茶苦茶だ。

「これは貸しね。」

「……まぁ心配かけたみたいだからな。」

「……ふぅん、分かってるじゃない。それじゃあ早速首席さんと一緒に背負ってもらおうかしら？」

「流石にそれは無理だ。どっちか落とすぞ。」

司羽がそう言って困った顔をするとミシュナはクスッっと笑って歩く速度を上げた。

「なら早く行くわよ。このペースじゃ遅刻確実だしね。遅刻しそうになったら私も一緒に担いで走ってもらうから」

「はいはい、それじゃあ少しペースをあげるぞ……。」

「俺の願いは、ここでの安定した暮らしだな。」

「……え?」

泣きそうなルーンは拍子抜けして間抜けた声を出してしまった。

「いや、遠慮せずにここに住んでもいいんだろ?」

「え……あ、でも……司羽は……。」

ルーンは何故とでも言いたげに司羽を凝視した。それを見て司羽は溜息をついた。

「別に帰る理由もないだろ、元々帰るのもいつでも良かったし。帰ったら帰ったで窮屈な暮らしが待ってるだけだ。ならここで暮らすのもありだろう。」

「で、でも……。」

ルーンはまだ何か言いたげに司羽を見つめた。

「……家族がいるんでしょ？　本当の……家族が……きっと、司羽の事心配してると思うよ。」

「さぁ、どうだろうな。まぁ、結構心配してるのかもしれないな。」

「な、ならどうして……。」

ルーンはそう言ってうつむいた。司羽はルーンの頭に手を乗せて優しく撫でた。

「向こうになんて戻ったら、今度は俺がルーンの事が心配になるだろうが。」

「……え……？」

「確かに向こうでは親も心配してるかもしれないけどな。俺が向こうに帰ったら俺はお前が心配になる。向こうの家族については心配は要らないけどな。」

「……私が……心配……心配……なんで、私なんかを……。」

司羽の言葉を何度も呟いて、ルーンは黙り込む。

「それにいずれは親とは離別しようと思ってたから良い機会だ。ルーンが気に病む必要はない。逆に住ませてくれてるんだからな。」

「……ねぇ、なんで私なんかを心配してくれるの……？　自分勝手に司羽を振り回したのに……。司羽を……攻撃したりもしたのに……。」

ルーンの発言に司羽は苦笑した。自分は最後まであんなにこだわっていたのに、今更何を言っているのか……と。

「……家族なんだろ？　俺とルーンはさ。ルーンはそうは思ってくれてないのか？」

「……家族……？　……あ……私、酷い事……でも……司羽と……私が……うっ……あっ……司……司羽……ふぇぇっ……うっ……ありが……と……ごめん、なさい……司羽ぁ……。」

「おっと……。」

ルーンは泣きながら、すがりつく様に司羽に抱き付いた。それを受け止めて髪を梳く様に撫でる。それを受けて、ルーンは気持ち良さそうに眼を細めた。

「よしよし、良い子だな、ルーンは。」

「……ぐすっ……私、そんなに子供じゃないよぉ……。」

ルーンはそう言いながら、司羽に甘える様に縋り付いて来る。

「見た目は完璧に子供だな、全然十五歳に見えない。」

「……あぅ……子供って言うなら、一緒に寝ても良い……？」

「それはダメだ。」

「ケチ……いいもん、勝手に入るから。」

「あ、あのなぁ……。」

「……ついでにお風呂も……。」

「それは止めろ。」

司羽が真顔で答えるとルーンはクスッっと微笑した。そして安心仕切った様に体を司羽に預ける。昨日は色々あったから、司羽は恐らくあまり良く眠れなかったのだと推測した。

「ベットまで運ばないとな。……しょうがないな……今だけは一緒に寝てやるか……。」

司羽は微笑とも苦笑ともつかない笑みをしてルーンをいわゆるお姫様抱っこで持ち上げた。

隠れんぼ編　ＥＮＤ

オマケのキャラ紹介とか

萩野　司羽　（はぎの　つかば）　１７歳

身長１７８ｃｍ

体重６３ｋｇ

好きな物

炊事　自己を高める事

嫌いな物

父親　軍

備考　髪：黒　瞳：真紅　自己流武術、萩野流武術、気が使える

とっても強い人です。ルーンに布団に侵入されて怒ったりしていますが、嫌なわけではなく、元々あまり友達などがいなかったので特に女の子に対する免疫がないだけです。ちなみに戦闘で使ったのは萩野流で、司羽の自己流技はエグイのが多いです。まぁ、それはまたの機会に見せて貰えるでしょう。

ルーン　１５歳

身長１４７ｃｍ

体重　凄く軽い

好きな物

司羽　魔法

嫌いな物

孤独　野蛮な人

備考　髪：金髪ロングヘアー　（司羽が髪を梳いてくれた後はツインテールになる）　瞳：碧眼　首席　星間転移魔法（？）を成功させる

物語が始まるきっかけを作った女の子です。真っ直ぐに性格を出すので、ムーシェが司羽に戦いを挑んだ時などは見るからに不機嫌そうになりました。かなり黒い部分もあり、滅多に人に心を開かない慎重な子でもあるんですが、獣に襲われた時に助けてくれた司羽の人格を選定する辺り、善悪や下心見抜く事が出来る敏感な子でもあります。

ミシュナ　１５歳

身長１４９ｃｍ

体重　秘密だがとても軽い

好きな物

歌　読書　司羽をからかう事

嫌いな物

魔法　しつこい人　面倒な事

備考　黒髪ロングヘアー　瞳：黒　魔法使用記録無し　自己流武術

人見知りが激しく、他人を信用しない事もあり、あまり他人と接点を持ちたがらない子です。しかしとても優しい子で、司羽の事を最も心配していました。アルコールに弱くどんな酒でも一杯（一口？）で倒れてしまいます。

リア　１５歳（？）

身長　？？？

体重　？？？

好きな物

ルーン　勉学　人の事を考えられる人
嫌いな物
他人を傷付ける人　だらしない人
備考　髪：水色（？）　瞳：（？）　次席　出身不明　学園では筆談で話すために声も聞いた人もなし

謎のおそらく麗人の方です。黒いローブでその名の通り謎のベールに包まれているが、ルーンととても仲が良い方。ルーンが信頼する人物である、司羽にも信頼を示しています。

ムーシェ　１７歳
身長１７２ｃｍ
体重６１ｋｇ
好きな物
魔法　強い奴　正義だと思う物
嫌いな物
不正　悪だと思う物
備考　髪：金　瞳：金　男子首席（司羽は除いて考える）　実家は

富豪

意外に博識で自分に誇りを持っている人。善悪を自分の中で決めて悪い事をしたと思ったら直ぐに謝る事が出来る司羽の友人。外見は美形に入るのだが性格に少し難があり更にナルシストな部分があるので人気はそこまで高くない。いつも司羽の周りにいる人の中では一番そう言う噂に敏感。司羽も信頼を置く人物

ミリク　２０歳

身長１６５ｃｍ

体重　スタイルの割には軽い

好きな物

シノハを弄る事　生徒の色恋

嫌いな物

からかわれる事　しつこい人

備考　髪：ピンクのウェーブの掛かったロング　瞳：ピンク　教師

いたいけな少年少女をからかうちょっとアレな先生です。夜にシノハを自室に連れ込んだりしてます。とってもモテる方ですがその気はゼロの小悪魔です

シノハ　２０歳

身長１６７ｃｍ

体重　身長に見合わない軽さ

好きな物

からかわない時のミリク　骨のある奴

嫌いな物

根性の無い奴

備考　髪：黒　瞳：黒　忍術　教師

どう考えてもくのいちな人。よく分からないけどずっと忍びの家系らしいです。ミリクとは幼馴染みで色々とエピソードがあり、かなりがトラウマと直結しているが、基本的にミリクは親友。ミリクに部屋に連れ込まれたりそこら辺で襲われたりする方

マスター　??

身長　１８６ｃｍ

体重　７２ｋｇ

好きな物

酒　努力する奴　素直な奴

嫌いな物

人を見下す奴

備考　髪：銀　瞳：銀　眼帯　バーのマスター

渋い方（笑）司羽がマスターと呼んでいるだけで本名は不明だがそんな事は気にしていない。最近では司羽の他にミシュナもバーに来る様になり、愚痴を聞いてやる父親の様な御方です。ミシュナが司羽を心配するのを見て微笑む素敵な方でもある。何故か安楽椅子がお気に入りで座りながらグラスを磨くのがデフォルト

後書き

まず初めに、ここまで読んで頂きましてありがとうございました。この話自体は始まりでしかありません。これからが学園バトルラブコメ（？）です。新キャラも出しますし、恋もバトルも激しくなります。

本編の話ですが、これは司羽が異世界へ来てルーンと出会い、異世界で暮らす事を決めるまでの話。

司羽も真面目ですから帰るのに恋なんか出来ませんしね。

まぁ、そう言う事で白銀の君はルーンだったわけですが、かなりバレバレですね（笑）最初の方で分かっちゃった人もいるんでしょうね。最後まで楽しんで読んで頂けたか心配です。最後のキャラ紹介はオマケです。スリーサイズは記載していませんが、ご要望があれ

ば次辺りに…。

さて、そろそろ後書きを締めくくりましょう。この隠れんぼ編の感想を頂ければ嬉しいです。それでは次の章か他の作品で会える事を祈ります。

第１４話：始まりの鐘の音（前書き）

前回までが『異世界隠れんぼ』のリメイクになりますので、その頃から見ていただいている方には今回からが続きという形になります。初見の方や、久しぶりな方の為に説明やキャラ紹介に重点を置いているため、一話から御覧頂いている方は見ていただかなくても特に支障はありません。

第１４話：始まりの鐘の音

「それで？　僕抜きで話は進んでいたわけかい？」

場所は西洋の城の様な建造物の庭に設置されたカフェテラス。
ここは学院と呼ばれていて、魔法と学問を学ぶ場所である。
学院生の年齢にはかなり幅があり十二から二十ニ歳くらいまでの年の学生がいる。今話をしているのはこの学院の学生で少しパーマのかかった金髪に、同じ色の瞳、美形と言えなくもないが親しみやすい雰囲気がある少年だ。少年はつまらなそうにそう言いながら自分の向い側に座る少年を見た。まさに不満満点と言った感じだ。

「悪かったと思ってるよ。ムーシェの協力にも感謝してるって。」

黒い髪に真紅の瞳を持つ調った顔の少年、萩野司羽（はぎのつかば）は向い側の金髪の少年、ムーシェに苦笑しつつ返す。
今の二人の会話と言うのは先日解決した騒動の事だ。司羽が科学により成立っていた地球から、魔法によって成立つ、このエーラと言う世界へと来る原因となった騒動である。司羽はこの世界で育ったわけではなく、少し前に起こった騒動によりこの異世界に魔法で飛ばされたと言うわけだ。

「だが、結局こっちに残る事にしたんだろう？　本当にいいのかい？」

「ああ、こっちで暮らすよ。学院にも今まで通り通う事にしてる」

「そうか、まぁ僕としてもあまり帰って欲しくはなかったし、安心したよ」

ムーシェがそう言って自分のカップを傾けた。
司羽は向こう側ではその容姿と、とある事情により友人と呼べる者がいなかったため、こういった言葉は素直に嬉しかった。
とある事情と言うのは家庭の問題で、司羽の父親が世界に名高い戦闘武術萩野流の師範であり、家が萩野流本家であったが為に司羽は嫉妬と奇異と期待の視線に晒され、人が寄り付かなかったのだ。
それもあり、司羽は萩野流から決別しようとしたが、父親は『それならば俺を倒してみろ』と言うのでケンカになり、司羽は最強の武術の師範である父親を自己流武術であっさりと倒してしまった。だがそれが原因で父親から『自己流武術の師範となれ』と言われ、困っている時に一人の少女が司羽をこの世界につれて来たのだ。

「あ、そろそろ時間だね。確か移動教室だったし、早めに行くとしようか。」

「次は混合クラスだったか？」

学院のクラスにはAからE、更にそれぞれ『A＋』『A』『A－』の様な物もあり計１５クラスである。A＋が最高、E－が最低で、入れ替え試験によりクラスが変わる。だが年齢がバラバラなため学問の授業に限り、同じアルファベットの同じくらいの年齢の生徒を集めるのだ。

「ああ、次は自然学だ。僕はどうも苦手だけどね」

「俺はそこそこ楽しいけどな。この世界の自然は意味不明で面白い。」

「まぁ司羽は魔法以外の成績は良いしね。なんでこの世界の歴史を

僕達より詳しくなるんだか。」

ムーシェはそう言って溜息をついた。司羽は魔法を使えない為に魔法の実技は全て0点だ。学科の成績はそこそこなので補償は免れているが、正直この世界の人間ではない司羽に魔法を使えと言っても無理な話だ。司羽がそう思っていると、後ろに知った気配を感じて振り向いた。

「あら司羽、こんな所で何してるの？　もう授業始まるわよ？」

「ミシュ、お前こそ授業だろ？」

司羽が振り向くと漆黒の長く豊かな髪を持った少女がクスリと笑った。

そのミシュと呼ばれた少女の本名はミシュナと言って、司羽より2つ下の15歳である。腰まで届く長い髪は小柄なミシュナの体の前や同じく漆黒の左目にも掛かっていて、とても美しい少女なのだが、人見知りが激しいのかいつも気配を消しているので目立たない。そのくせ司羽をからかって遊んだりする不思議な少女だ。だが、司羽が元の世界に帰る為に尽力してくれた一人でもあり、最も司羽の事を案じていた一人でもある事を司羽は良く知っていた。

「ふふっ、私はサボりだから問題ないわ。」

「いや、問題とする所が間違ってるな。シノハ先生に見つかったら説教されるぞ。」

「残念でした、あの無駄に熱血な教師は自然学の教師じゃないわ。ちゃんと教師は調べてあるのよ。」

「……ほぅ、私が教師じゃなければサボるのか。」

「……え……？」

ミシュナはギクリと体を強張らせ、そして恐る恐る後ろを振り返る。するとそこには『くのいち』の格好をした黒髪ポニーテールの教師がニヤリと笑っていた。シノハと言う名前でA＋クラスの担任の内の一人だ。格好を見るとどう見ても『くのいち』だがエーラの住人である。

「さてと、俺達は行くかムーシェ。」

「そうだね、授業に遅れたら色々と大変だしね。次はミリク先生だし。」

「なっ……ちょっと待ちなさい！！　司羽！！」

「ミシュナ、無駄に熱血で悪かったな……？」

「え、いや、それは……。」

司羽とムーシェはシノハに掴まったミシュナの抗議の声を取り敢えず放って置いて教室へと向かった。

「それでは書物３５ページの食肉植物を開いて下さいね、ちなみに実物はこれです♪」

「み、ミリク先生！！　なに本物持って来てるんですか！？」

「だって実物あった方が分りやすいでしょ♪」

生徒の一人がツッコミをいれるのにも関わらず、教卓でかなりヤバイ感じの植物をつついているのはミリクと言うＡ＋クラスのもう一人の担任である。ピンク色のウェーブのかかったロングヘアーに抜群のスタイルと言うかなり綺麗な人なのだが、幼馴染みであるシノハやいたいけな生徒を苛めて遊ぶような人でもあり。実はかなり腹黒い人だと言う噂もある人である。夜中ミリクの部屋からシノハのあられもない声が聞こえてくるとかこないとか。

「ミリク先生危ないと思うのですが？　食肉植物は人を簡単に襲いますし……。」

「あらムーシェ君、どんな生物でも自分の命を粗末にするような行動は取らないわ。ちゃんと教育しておいたから大丈夫よ♪」

「利口ですね。なるほど……食肉植物には知性があるんですね。」

「いや、司羽。今教育って言葉をスルーしたよね？　いや、そんな『何が？』みたいな顔しないでくれよ。僕はスルーしちゃいけないと思うんだけど。」

司羽はムーシェの言葉の意味が分からないと言う様な顔をした。

いや、本当はかなり危ないと思っているのだが今ツッコミを入れたら『後で生徒指導室で教えてあげます♪』とか『司羽君が家でやっている事ですよ♪』とか返されても困るので敢えて何も言わない、言えない、言いたくない。

「では食肉植物さん口を開いて下さいね♪」

パカッ

「はい、このように全ての部分が物をひきちぎるのに特化していて。特に顎の力は人間よりも強力です。しかし大した強度はなく、このように」

バキッ

「顎を壊せば全く怖くありません♪」

「先生、その顎はどれくらいで元に戻るんですか？」

「司羽君は相変わらず良い質問ね。大体一週間くらいで元に戻るんだけど食肉植物は二週間何も食べなければ死んでしまうの。だから一週間何も食べていないこの子は…。……さて、最初の行を番号八番の人が読んでくれる？」

「……はい……。」

何とも気まずい空気の中食肉植物の生き方についての文章が読まれていく。そして時は過ぎて……。

「司羽ぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

「うわっ、ルーン！！　危ないから飛び付くな！！」

「けちー。」

「ケチじゃない。」

授業が終わり、元の教室に戻った司羽に飛び付いて来たのは、この学院の首席であり、司羽の半永久的な居候先の主であり、司羽をこの異世界に連れて来た張本人であるルーンと言う少女だ。

とても小柄な十五歳で金髪碧眼、とても活発な印象を受ける美少女である。長い髪は今はツインテールにしているが、主に髪は司羽が整えており髪型が司羽の気分によって変わる。何故かと言うと理由は簡単。ルーンは朝がとても弱く学院にも司羽に背負ってもらいながら来ていて、放っておくとボサボサのまま一限目を受けてしまう。その為、司羽が髪を梳かして結っているのだ。最近朝食を含む家事も司羽がやっていて、半分お母さんの気分になっている。

「あのね司羽、今日はリアと一緒に用事があるから先に帰っててくれる？」

『委員会の仕事なんです』

「ああ、分かった。」

筆談で話し、黒いローブで全身を覆ったリアと言う少女はルーンの親友であるが、正体は不明であり、司羽は前に髪の色だけ確認させてもらった事があるので髪の色が水色と言う事だけしか分かっていない謎な少女である。

「と言うよりも、俺もマスターの所に寄って行くから多分ルーンより遅くなるぞ？」

「うん、分かった。……ところで前から思ってたんだけど、マスターって誰？」

「漢（おとこ）だ。」

「え……？」

ルーンはぽかんと口を開けて何言ってるのこの人みたいな顔で司羽を見た。

「マスターは男であり漢（おとこ）でありマスターなんだ。」

「……ワケ分かんないよ……大丈夫、司羽？」

『ルーン、もう時間ですよ。遅れたらシノハ先生が怖いです。』

「あ、うん、そうだね。司羽、あんまり遅くならずに帰って来てね？　お料理作る時間も考えると、お腹空いちゃうから。」

「今日はルーンの当番じゃなかったか……？」

「うん。でも、一緒に作りたいなーって……。あ、それじゃあ行くね？」

ルーンの言葉に同じクラスの女子から黄色い悲鳴が飛んだのは取り敢えず気にしない事にする司羽だった。

「来たか。」

「……なんか最近ミシュがここに入り浸ってる気がするな。」

「気にしないの。」

司羽が、外から見るとウェスタンな酒場風のバーに入ると何やら寛いでいるミシュナと安楽椅子に座ってグラスを拭いている眼の傷を眼帯で隠したダンディーなマスターを見付けた。

「ミシュナは最近毎日来ているな。」

「マスターは余計な事言わないで。……だって家に居ても退屈だし、私人付き合い苦手だもの。そう言う司羽だってかなり来てるじゃない。」

「俺もここくらいしか来る場所がないし、ここは人が居なくて落ち着く。」

「……俺の店に人が来ないみたいな言い方だな……？」

「事実でしょ。」

「俺も見た事ないな。」

二人が口を合わせてそう言うとマスターは誤魔化すようにグラスを二つ並べた。それを見てミシュナの顔が引きつった。ミシュナはアルコールが嫌いなわけではないのだが、ミシュナはアルコールがかなり低い桃のカクテル一杯で倒れた程に酒に弱いので当たり前といっては当たり前だが。ちなみにこの世界には未成年と言う言葉すらないらしい。

「まぁいいわ、司羽もいるし。」

「倒れる気満々だな。その安心のしかたはどうかと思うぞ？」

「倒れたら司羽に泊めてもらうわ、襲われる心配は首席を見る限りは皆無だし。」

そう言ってミシュナはグラスを手に取った。ミシュナの言葉を聞いてマスターはフッと笑った。

「……大丈夫だ、アルコールは前回の半分以下だから……。」

バタッ

「「……」」

台詞の途中でミシュナに倒れられてマスターは少々苦い表情になった。司羽は苦笑してグラスを傾ける。

「……アルコールの匂いがしませんね。どれだけ過敏なんだか……。」

「……まぁな……俺の失態だが、連れて帰ってくれるか？」

「……分かりました。」

司羽はもうルーンは帰って来ているかなぁ。と考えながら帰りに切らしている頭痛薬を買っていこうかと思案した。

第１４話：始まりの鐘の音（後書き）

おはようございます、こんにちは、こんばんは、八神です。前作の隠れんぼを読んでくれていた方に取っては久しぶりと言う事になりますね。何はともあれ新章開幕となります。出来るだけペースを上げて書いて行くので、皆様宜しくお願い致します。それでは感想や評価の方、作者の励みになりますので、宜しければお願い致します。それでは、次の話で。

第１５話：心に住む者

ふわり　ふわり

宙に浮かぶ一人の少女がいた。

肩の下の辺りで揃えられている美しい銀髪に、薄く開いた金色の瞳、そして美しい銀髪を装飾している髪止めは三日月の形をしていて金色に光っている。肌は抜けるように白く、身長は平均だが出る所は出ていている理想的な体型。着ているのは天女の衣のような物と言うのが近いだろう。ただ、重要視すべきは事は、彼女は人間ではないという事、そしてここは現実ではないという事。

「むにゃ……なんとも居心地の良い夢よ。」

夢。ここは夢。少女は夢の中を行き来する人ならぬ者。その存在を知る者は彼女の様な存在を夢喰いと言った。

「この夢の主に会ってみたい物じゃが、妾が外に出ると言う事は……。」

夢喰いは夢の中を移動する。人と人との触れ合いを通じて移動し、人の心の中だけで生活する。そういう物なのだ。

「しかしこの者、何故にこんなにも穏やかか。たった一つの曇りもない、逆に気味が悪くもあるな……。」

夢喰いはそう言いながらも頬がゆるんでしまう。まるで自分用の空間とでもいうような。そんな空間で安心するのは人でも夢喰いでも同じ事だ。夢喰いのような意識や夢に敏感な者なら当たり前と言え

る。

「む……？」

遠くに亀裂のような物が見えた。夢喰いにとっても初めての体験だ。近寄って触れて見ると壁のような物に触れた。

「まさかこれは……いや、じゃが、そんな事は……。」

夢喰いは困惑する。やはり壁のような物がある。確かに心の壁と言う言葉は存在する。しかしそれは単なる比喩であり。実際に心の中に壁があっては感情が出せなくなってしまう。なら何故壁があるのか。夢喰いにもまったく分からなかった。

「ふむ……。」

ピシッ

亀裂に触れるとそれは音をたてて大きくなった。夢喰いは音にびっくりして手を引っ込めてしまったが、試しにもう一度触れてみようと壁に手を伸ばした。

ピシッ…ビシッ…

「……。」

また広がった。こうなったら限界まで行くしかないだろう。夢喰いは好奇心もあって、亀裂に当てた手に力を入れてみた。

ビシッ、ビシビシッ

途端に亀裂は夢喰いの見える範囲全体を這い回るように広がっていく。そこで夢喰いは一つの推測に行き着く。もしやこの世界は本当に自分用に創られた世界なのではないか、そして亀裂はその世界に入った物であり……。

「なるほど、この外に本当の……。」

ビシッ……パリーンッ！！

そして創られた世界は砕け散った。だが夢喰いは気付いていなかった。自分自身で自分の揺り篭を壊した事に。

「……な、なんじゃここは……。」

夢喰いは唖然とした表情でそう言って周りを見渡した。砂漠のような地形。空が暗く、黒く、激しく雨が降っている。暗いのは雲に覆われているからだろうが、それだけではない気がした。何か正体不明の圧迫感がある。ただそこに居るだけで身が裂かれるような、そんな感覚。……そして、何処か遠くで、何かが壊れる音がした……。執拗に、何度も何度も、打ち付ける様に、痛め付ける様に……。

「……あ……ああ……ここ、は……。」

夢喰いは戦慄した。震えが止まらなかった。直ぐにでも何処かへ逃げ出したかったが、何故か体が動かない。いや、きっと動かせないのだ。視線を動かした途端に、何か見えてはいけない物が見える気がした。

「……いや……誰か……助け……っ。」

そして、自然と涙が溢れ出した。後ろで何かが動く様な感覚。何かが足元にいる様な錯覚。錯覚だ、これは、夢なのだから。だが、夢喰いに取っては夢は何よりもリアルなのだ。この少女は夢喰いの中でも迷わず子供と見なされる者、それでも暗い思念や人の怨念が、時に中にいる夢喰いを逆に取り込む事を知っていた。

「……ひっ……あ……怖、い……よぅ……。」

「あーあ、入って来ちまったか……。上手く隠したつもりだったのになぁ。」

「……っ……!?」

恐怖に身を震わす夢喰いの眼の前に少年が現れる。黒髪に真紅の瞳。顔立ちは人間を見た事のない夢喰いから見ても調っていた。そして何より印象的なのが、とてもこの場所にそぐわない苦笑。夢喰いは悟った、この少年はこの世界の主で、ここは踏み込んではならない場所だったのだと。そこに自分は足を踏み入れてしまった。

「あ……ご……ごめんな…さ……。」

「……。」

雷が鳴り響き、また遠くで鈍い音を立てて何かが壊れる、千切れる、裂ける。夢喰いは恐怖で掠れる声で謝罪した。涙は止まらない。何かに恐怖して、自分のした事を謝罪する夢喰いに少年は歩み寄って、そっと抱き締めた。

「……恐怖だけじゃない。君は、ちゃんと謝る事が出来るんだな……良い子だ。」

「……あっ……。」

夢喰いは抱き締められて、先程からの恐怖がだんだん薄れていくのを感じた。頭を撫でられると不思議と安心した。夢喰いにはこの少年が優しい人なのが分かった。

「……怖かったか？　もう大丈夫だから……直ぐに元に戻るから……こんな物を見せて悪かったな。」

「……うん……。」

夢喰いはその少年の腕の中で、瞳を閉じた。そして夢喰いの心には一つの欲と一つの決断が生まれる。そのまま夢喰いの意識は途絶えた。

「ここは……首席の家ね。まぁ予想通りといえば予想通りだけど、やっぱり少しは飲めるようにした方がいいわね。」

ミシュナは眼を覚ますと周りを確かめて、近くにあった頭痛薬を手に取った。どうやら司羽が先を読んで用意してくれたらしい。時間を見てみるとまだ学院の登校時間まではあるが、そろそろ司羽達を起こした方が良いだろう。ミシュナは予め置いている服に着替えて司羽の部屋へと向かう。司羽に泊めてもらう事が多いので、面倒だからと置いてあるのだ。

「さてと、首席は今日も司羽の布団に忍び込んでるのかしら……？」

ミシュナが少し呆れ気味にそう言いながら司羽の部屋に入った。見れば予想通りルーンの長い金髪がベッドから覗いていた。

「ほら、そろそろ起きなさい。起きて朝……食……を……。」

ミシュナは絶句した。司羽にしがみつくように、ミシュナの手前側でルーンが寝ているのは、まぁ見慣れていると言うのもありそこまで驚かない。だが司羽の反対側にいるのはなんだろうか。肩に掛かる銀髪に三日月の髪飾り、あどけない顔立で豊かな胸を司羽に押し付けるように抱き付いているとんでもない美少女。着ているのは天女の羽衣のような物であるし、もしかして天女なのだろうか。まぁ今そこは重要ではないのだが。重要なのはこの現状だ。

「……ミシュか……どうした？」

「……さぁ？　それは私が聞きたいわね。一体昨夜は何があったのかしら。」

「……な、なんか怖いぞミシュ。」

「……うるさいわよ……。」

現状に気付いていない司羽はミシュナから発せられる黒いオーラに困惑した。ミシュナが腕を組んで司羽の隣りで寝ている天女のような少女に視線を送ると起き上がった司羽もそちらを見て……見事に固まった。

「え、まじ？」

「不潔、鬼畜、最低。もっと見境ある人間だと思ってたのに。」

「い、いやミシュ……。」

「良かったわね、この街は女の子多い関係で多重婚出来るわよ。二人とも美少女だし、男冥利に尽きるんじゃない？」

「いや、話を聞いてくれ……。」

ミシュナは冷汗を流す司羽を少し見た後に溜息をついた。まぁ、正直司羽がそこまでチャランポランだとはミシュナも思っていない。

「で？　その子、どうしたのよ？」

「いや、俺にも良く分からないんだが……。なんで『こっち側』に出て来てるんだ？」

「……こっち側……？」

ミシュナは訝しげに司羽を見た。また厄介事に巻込まれているのかと勘違いしたらしいミシュナに司羽は苦笑する。

「いや、そんな顔するなって。ミシュの思ってるような事はないからさ。」

「……なら、この子はなんなのよ。朝起きたら美少女と一緒に寝てました、なんて、普通はありえないわよ？　しかも二人。」

ミシュナは起きる気配のないルーンを見て言った。司羽としては何も言い返す事が出来ない。しばらく沈黙していると、問題の中心にいる天女のような少女が身じろぎをした。

「……う……むっ？」

「あ、起きたか？」

少女は司羽を見ると眼をごしごしと擦って周りを見回した。その様子を司羽とミシュナは見守る。しばらく見回した後、視線を司羽に戻して少女も沈黙した。沈黙に耐えきれなくなり司羽が口を開く。

「えーっと、なんで出て来てるんだ？」

「そんなもの、魂契約（こんけいやく）したからに決まっておろう？」

「魂契約……？」

「うむ、そうじゃ。」

少女は首を縦に振り、司羽は意味が分からないと首を傾げた。一方ミシュナは少し驚いたように眼を見開いている。

「こ、魂契約って……まさか、本当に……？」

「ミシュ、魂契約ってなんだ？」

「……はぁ。知らないで契約したの？　本当に呆れた。」

ミシュナが溜息をついた。だが司羽の本当に知らないと言う顔を見て口を開く。

「そのままの意味よ。司羽の魂との契約……つまりこの子は司羽の体じゃなくて魂に取り憑いたのよ。」

「それって体に取り憑くのとどう違うんだ？」

「……言伝えだけどね……魂は死んでも残るって言われてるわ。つまり、そう言う事よ……。」

ミシュナはそう言ってまた溜息をつく。司羽もそれは聞いた事があった。輪廻転生はそんな感じの事だった気がする。何となく分かった、つまり魂契約って言うのは……。

「つまり、転生後までついて来ると……。」

「そう言う事よ。魂契約の事例はないし、転生自体が伝説だったけど……。」

「転生は本当にあるぞ、妾が証人じゃ。」

少女は司羽に押し付けたままの胸を張ってそう言った。簡単に言うと恥ずかしい恋人達の台詞でたまにある『来世でも来来世でもずっと一緒だよ』状態である。司羽はいつそんな契約をしたのか考えたが、さっぱり思い当たらなかった。何と言うか街角アンケート並の巧妙さである。

「なぁ、いつ契約したんだ？　大体それと外に出て来てるのと何の関係があるんだ？」

「いつって、あんなに優しく妾を抱いたではないか。あれを主の同意とみなして我が契約した。出て来れるのは主から力を分けてもらっているからじゃぞ？　安心せい、一日外にいても少し疲れる程度じゃ。」

「ああ、なるほど。まぁ少し疲れるくらいならいいか。」

「……ちょっと待ちなさい？　……ねぇ、抱いたってなに？　現実ではないとはいえ、そんな見ず知らずの子と？　……信じられないわ、最低……。」

何やら司羽が納得して頷いていると、ミシュナから先程とは比較にならない軽蔑のまなざしと負のオーラがにじみ出ていた。それを見て司羽は抱いたと言うニュアンスの中にある危ない表現に気付いた。

「いや、勘違いするな、抱き締めたと言う意味だ。ミシュの考えているような意味ではない。」

「……信じるわよ……？」

「そんな疑いの視線を向けながら言わないでくれ。」

ミシュナの視線にたじろぎながらも司羽は弁解した。抱き締めたというのもかなり危ない気がするのだが、そこは事実だから何も言えない。

「……まぁいいわ。それで、貴方は人間じゃないわよね？」

「うむ、妾は妾の事を夢喰いだと認識しておるぞ。」

「夢喰い……？　また伝説上の存在を……。まぁ本当なんでしょうけど。」

「……ミシュ……。」

「あーはいはい説明するわよ、そんな眼で見ないで。夢喰いは人の意識の中を移動して生活していると言われている存在よ。人の認知出来ないような所で存在してるはずなんだけど……。」

ミシュナは司羽をじっと見た。スポーツの試合でインチキをした相手を見る様な視線だ。

「……主よ、そう言えば何故妾に気付いたのじゃ？」

「いや、普通は自分の心の中に誰か入れば分かるだろ。」

「……何故あのような居心地の良い部屋を創れるのじゃ？」

「普通は自分の心の中くらい自由に出来るだろ。」

「……この人は夢喰いが今までなんで認知されなかったのか分かってないみたいね……。」

さも当たり前と言うような司羽の言葉に夢喰いもしばらく呆然となってしまった。

「……妾の選択は間違っていなかったようじゃな。」

「……まぁそうなんでしょうね。それで、扱いは司羽の使い魔でいいのよね？」

「ふむ、そう言う物なのか？　今まで誰かの契約下に入る事がなかったから良く知らんのじゃ。そちらに任せよう。」

なんだか色々大事な事を話しているらしいが司羽は全くついていけていない。取り敢えずこちら側ではミシュナ以上に信頼出来る人物はいないので任せる事に異論はないのだが……。

「司羽、聞いてるの？　貴方の事なのよ？　それも一生以上に関わる飛切り重要なね。」

「わ、悪い……。」

全く聞いていなかった司羽にミシュナは軽くたしなめた。だが信頼されていたのは分かった様で、まったく……、と照れ隠しをするように視線を逸らした。

「それで、名前なんだけど……。」

「名前？」

「ええ、夢喰いに名前はないみたいだし。夢喰いって呼び続けるのもね。昔から自分の使い魔には名前を付ける風習があるし。司羽が付けなさいよ。」

「名前……か。」

そう言って司羽は悩んだ。女の子だから女の子っぽい名前が良い。まぁ当たり前だが……さて、どうするか。

「そうだな……うーん……うん、トワなんてどうだ？」

「……トワ……。」

「トワ、嫌か？」

司羽が聞くと少女、トワは首を横に振った。そして顔を赤くして俯きながら言った。

「……いいや、気に入ったぞ。……だが驚いた、名前を呼ばれるだけでこんなにも妾は幸せな気分になる……名前とは不思議じゃな。」

トワはそう言って司羽に擦り寄って来て、膝の上に抱き付くように座った。それを見たミシュナの軽蔑の視線が司羽に突き刺さる。

「これで妾は主の物、所有物じゃな。なんでも言う事を聞くぞ？」

「……まだよ、契約には色々あるけど。今回はお互いに自分の物を相手に渡して契約とするわ、夢喰いの間では知らないけど一応規則だからね。」

「ふむ、そうなのか。……じゃが妾は何も持っては……。」

トワは唇に指を当てて考えて、ポンと手をうった。

「そうじゃ、主に渡すには調度良いものがある！！　……なぁ主よ、こっちを向いてくれんか？」

「……ん？　何をくれるんっ……！？」

司羽が振り向いた瞬間、トワは司羽に寄り掛かるように抱き着いて、そのまま唇を合わせた。

チュッ

「……んっ……んむっ……むっ……♪」

トワは頬をほんのりと赤く染めて、司羽にしな垂れかかり、甘える様に接吻をした。それを見たミシュナが口端を引きつらせて沈黙する。当の司羽はトワの意図を読み取り、優しくトワの頭を撫でると、ゆっくりと離れた。ミシュナの方は見ないように軽く視線を逸らす。

「女のファーストキスと言うものには特別な意味があると聞いた事がある、それを主に捧げよう。……それでは足りぬじゃろうか……？」

「……いいえ、十分よ。それはもう十分過ぎるくらいにね。」

沈黙していたミシュナが冷たい視線を司羽に送るが、司羽はあくまでみないふりを貫く。そんな緊迫した雰囲気の中、ミシュナ側から抱き付いていたルーンが身悶えをしてうっすらと眼を開けた。

「……んっ……何……司羽、どうしたの……その子誰……？」

「司羽の愛人よ。」

「おいミシュ、変な事言うなよ、ルーンが信じるだろ。」

「む、ルーンとな？　して、こやつは何故我が主に抱き付いておる。離れよ！！」

いきなりの事にルーンは困惑し、3人の顔を見比べた。ミシュナと司羽が何やら言い合っていて、見知らぬ女の子がルーンを睨み付けている。

「……にゅぅー……司羽ぁ……私二度寝するね……。」

コテンッ

そう言って、司羽が起きろと体を揺するのにも構わず、思考を放棄したルーンは、何だか賑やかだなぁと思いつつも二度寝に入った。

第１６話：繋がった心

「司羽君、先生は不純異性交遊がいけないと怒っているのではありません。司羽君をそんなに弄りやすそうな話を黙っていた事に怒っているんですよ？」

「教師なんだから前者を注意して下さいよ！！　それにシノハ先生も同じ先生なんですから助けて下さい！！！」

「う、うむ……。」

今は職員室なのだが周りにいる教師は全く今の状況を気にしていない。と言うのも最近司羽をからかう事を目的としてミリクが呼び付けまくるので、殆どの教師がこの光景に慣れているからである。シノハは少しばかり熱いが常識がある教師で、司羽もそれが分かっていたから助けを求めたのだが……。

「あの、ミリク？　そろそろ授業もあるし……。」

「あら？　シノハちゃんも昨夜の御勉強の続きがしたいのですか？　職員室でなんてマニアック過ぎると……。」

「わーっ！！　わーっ！！！　昨夜は何もなかった、何もなかったんだぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

「「「……」」」

「シノハちゃん可愛い♪　ちょっと駄目になるのが早いのがあれだけど、そこもまた可愛いのよねぇ♪」

シノハが泣きながら職員室を飛び出して行くと、職員室にいた先生達も沈黙し、司羽も黙り込んでしまった。シノハがミリクに勝てない事は知っていたが今のはちょっと予想外だった。次はシノハの授業があるけどどっかで泣いてて来れない可能性が出て来たなぁとか考えつつニコニコ笑っているミリクを見た。

「取り敢えず、あの子の事説明してもらえますか？　大丈夫です、次の授業は自習になりましたから♪」

「……。」

司羽は逃げられない事を悟り。シノハの事まで計算してた感じのミリクから眼を逸らしつつ溜息をついた。こんな事になる原因を思い出しながら。

時は数十分前にさかのぼる。

「……よっこらしょ、すいません遅刻しました。」

「司羽、人を抱えて平然と窓から入るな。ここは3階だぞ。」

「まさしく両手に花ですねー♪　司羽君、遅刻の原因について詳しく聞きたいのですが？」

「ルーンの寝坊です。それ以外には何もありません。」

「まぁ、そういう事にしておきましょう……♪」

司羽が寝坊と言う所を少し強調して言うと、ミリクがさも何かあるかのように含み笑いをした。司羽とミリクがお互いに視線を逸らさずに沈黙していると、右側に抱えていたミシュナが司羽の服を引っ張った。

「そろそろ降ろしてくれない？　凄く恥ずかしいんだけど。」

「ああ、悪い。」

司羽がミシュナを降ろすと、ミリクは今気が付いたように言った。……とても何かを企んでいそうな笑みで。

「そう言えば今日はミシュナちゃんも司羽君と一緒なのね？」

「はい、昨日は私『司羽』の家に泊まったので♪」

「なっ……！？」

ニヤリと笑うミリクを見て司羽は抗議するようにミシュナを見た。しかしミシュナもニヤリと笑い、完全に司羽をからかう態勢に入っていた。ムーシェの話では、他のクラスの生徒に司羽はかなりの女ったらしだと言う噂が広がっているらしいが、伝わるスピードが促進されるのは間違いないだろう。

「ミシュナちゃん、体の調子はどうですか？」

「なんだか怠くて……足元も少しふらつきます……。」

ミシュナが壁に寄り掛かかりミリクの言葉に返答する。早くも教室には黄色い悲鳴が飛び交っていた。二人の狙い通りだろう。

「原因をハッキリさせなければいけませんね、司羽君を尋問しないと！！！　司羽君、昨夜のミシュナちゃんはどうでした！？」

「あたかも何かあった見たいにいうなよ！！　ミシュはただの二日酔いだろうが！！！」

「何かあったんですか？　私はミシュナちゃんの体調の事を聞いたんですけど。」

「ぐっ……。」

ミリクは真顔に戻り、司羽に詰め寄ったが笑みを隠し切れていなかった。ミシュナの方も同じく笑いを押さえ切れていない。だが司羽には勝算があった。

キーン　コーン　カーン　コーン

「あ、授業始まりますよ？　さて、授業の準備をしましょうか。」

「「ちっ……。」」

司羽がそう言ってまだ眠っているルーンを席につかせると、首謀者二人は舌打ちをして自分の席と教卓の前に戻った。

「最初の授業は予定変更で魔法です。取り敢えず、司羽君が苦手な

実技に変更します。」

「「「賛成でーす♪」」」

ミリクが不機嫌そうな雰囲気のまま笑顔でそう言うと、クラス全体が敵に回った。

「ふふっ、敵だらけね？」

「……誰のせいだよ。」

「んー、司羽じゃないかしら？」

ミシュナと眠っているルーン以外のクラスメイトがミリクの八つ当たりに賛成すると言う司羽にとっては理不尽極まりない状況にミシュナはそう言って笑った。

「はい、じゃあ自分の周りに結界を張って中を見えなくしてから中で適当に踊って下さい。それでは司羽君、どうぞ♪」

「あんた、鬼だな……。」

「あれー、司羽君の姿が見えません。結界成功ですね。　早く踊って下さい♪」

「……。」

引きつった表情をする司羽を余所に、ミリクはニヤニヤしながら下手な三文芝居をうった。ミシュナに助けを求めて見たが無駄だった。眼に見えて楽しそうにしている。もういっその事逃げちゃおっかな

ぁと考えていると突然司羽の膝の上にそんなに重くはないが安心感を得られる重みを感じた。

「なんじゃ、主は魔法が苦手か？」

「ああ、そうなんだよトワ、って……。」

「「「…………。」」」

「……ぷっ……。」

一部を除き沈黙。一部とはこの状況を誰より楽しんでいるミシュナと膝の上に座って、何で皆は黙っているの？　と言った感じのトワだったりするが。しかし、暫く固まっていたミリクはいち早く回復し、クスッっと笑って司羽に言った。

「司羽君？　その子が今まで何処に居たかは重要ではありません。重要なのはその愛じ……もとい女の子と何処までいったかですよ？」

「今わざとだろ？　わざと愛人って言おうとしただろ？　愛人じゃねぇぞ？　ただの……。」

「ただの司羽の奴隷じゃ。」

「「「きゃあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ♪♪♪」」」

その一言で教室は黄色い声が飛び交う、司羽にとってこれ以上ないほどに危険なフィールドに変じた。

「おい、トワ！！　早く訂正しろ！！」

「主よ、訂正と言われても間違っている所がわからないのじゃが？」

「司羽、もう言い逃れ出来ないわね。」

「ミシュはちゃんと理由を知ってるだろ！？」

「私は司羽とその子と首席が添い寝してる所しか見てないわよ。見てるこっちが恥ずかしくなるほどイチャイチャと。」

最早四面楚歌。意味の分かっていないトワまでもが司羽の敵に回って、あまつさえ司羽の顔を下から覗き込むように擦り寄ってくるから黄色い叫び声は増すばかりだ。

「今日の授業はまたまた変更します、今日は昨日の夜何があったかの発表です♪」

「職権乱用もいい所ですけど、何もないですよ！！！」

「あーあー、聞えませーん。」

司羽の抗議の声は当たり前の様にミリクに流されてしまう。取り敢えず真剣に逃げる事を考えていると、トワは不安げに表情を変えた。

「主よ、妾が居ると迷惑か……？」

「い、いや、そんな事はないぞ？　ただ激しい表現は自重して欲しいなぁと。」

「激しい表現……。つまり、主と優しくキスしたとかなら良いか？」

「「「き、きすぅ！？！？」」」

トワが少し頬を赤く染めてそう言うと、ミリクだけでなくクラスメイト全員が詰め寄った。と言うか顔を赤らめて小首を傾げる動作はかなり可愛かった。

「と、トワちゃん、その話詳しく聞かせていただけませんか？　大丈夫です、先生は大人ですから。ちょっとくらい大人な話題もＯＫですよ♪」

「大人な話題……？　そう言われてものぉ。した事と言えば、主に初めてのキスを捧げたくらいじゃし。」

「トワ……、それで十分過激なんだよ。」

依然として膝の上で司羽に寄り掛かりながらミリクの質問に答えているトワに司羽は嘆息した。

「他は！？　他の初めてとか捧げたりしちゃいませんでしたか！？」

「……トワ、今日はもう戻れ、また後で出て来てもいいから。」

「主がそう言うならそうするぞ。」

トワはそう言ったかと思うと次の瞬間にはそこから消え去っていた。

「……司羽君、後で職員室に来なさい♪」

「……。」

「むぅー、トワちゃんは左手だよ！！　さっき独り占めはしないって約束したでしょ！！」

「うー……。主よ、ルーンが苛める……。」

「苛めてないよ！！　司羽は私の家族だもん、独り占めはダメー！！」

「司羽良かったわね。周りからの嫉妬の視線が気持ちいいでしょう？」

ミシュナが苦笑しながら皮肉ると、司羽は引きつった笑みでそれに答えた。現在下校しようとしている所なのだが、荷物も背負っているのに両手が塞がっている。というのも、ルーンとトワと手を繋いでいるからなのだが。かなり嫉妬の視線が痛い。

「それよりルーン、トワ、先に帰って夕飯作っておいてくれ、ちょっと寄る場所があるんだ。」

「寄る場所？　まぁ良いけど、早く帰って来てね？　危ない事しちゃ駄目だよ？」

「大丈夫だ、ミシュも一緒だからな。」

「あら、私も一緒にって一体何する気？　純潔奪うならちゃんと責任取ってよね。」

「ミシュ、そういうギリギリな発言は止めろ。ミリク先生がこの近くにいたらどうする。ちょっとアドバイスを貰いたいだけだ。」

「……アドバイス……？」

司羽がそう言うと、ミシュナは腕を組んで訝しげに司羽を見た。

「そう言う事なら妾も一緒に……。」

「トワは駄目だ、ルーンと一緒に居てくれ。」

「……主は妾が嫌いか……？　妾に足りない事があったらなんでもするから、主よ……。」

司羽がそう言うと、トワは泣きそうな顔になって、司羽の手を握り締めた。

「そう言うんじゃないよ。でも今回はルーンと一緒に居てくれ。分かるね、トワ。」

「……分かった、主の望む通りにする。」

「……本当に従順ねぇ……一体私が知らない所で何があったやら。」

トワは不安そうに司羽に擦り寄ったが、司羽がトワの髪を梳くよう

にして撫でると、一つ頷いてそう言った。ミシュナはそんなトワの様子を見て呆れ混じりの溜息をついた。

「なるほどね、アドバイスって言うのはこれの事か。」

「ああ、俺は契約とか全然分からないからなぁ。」

今、ミシュナと司羽がいるのは、なんて事はない、ただのジュエルショップ。先程のトワとの契約の際に、司羽からは何も渡していなかった為、何がいいか考えたのだが、まるで検討がつかなかった為にミシュナを連れて来たのだ。

「まったく……、自分の女にプレゼントするんでしょ？　そんな物、他の女に聞いちゃ駄目じゃない。自分で選びなさい。」

「そんな事言われてもなぁ、こういうの選んだ事ないんだよ。それに女ってなんだ女って。」

「あら意外ね、経験豊富そうに見えたんだけどね？　この女ったらしが。」

「……なんかミシュ、怒ってないか？」

「……別に……。」

司羽が色々な首飾りを見ながらそう言うと、ミシュナは一言そう言って、司羽から顔を背けた。

「しかし、そうだなぁ……これにするか。トワがどんなの好きか聞いてくれれば良かったけど、俺が選んだ方が良いっていうならそれも違うんだろうし。」

「……ふぅん、まぁ中々良いんじゃないかしら？　あの子は元が良いからあらかた似合うでしょうしね。元々契約にしても、渡す物はなんでも良い訳のよ。」

司羽が指定したのは赤い宝石に翼のような銀の細工が施されているネックレスで、ミシュナから見てもトワに良く似合いそうな物だった。司羽としては少し自信がなかったが、ミシュナから良いと言われた物なら特に問題はないだろうと思えた。

「良し決定、ミシュも付き合わせて悪かったな。助かったよ。」

「別に気にしないわ、特に何をした訳でもないし。……それじゃあ帰りましょ、今日はトワの歓迎会するとか言ってたしね。」

「……ああ、そうだな。」

「……？」

ミシュナは薄く笑って帰ろうとしたが、司羽がそこから動かないのを見て、司羽が眺めている指輪に視線を移した。

「……これがどうかしたの？」

「んー、いや、ミシュに似合いそうだなぁって思ってな。」

「なっ……!?」

司羽がふとそう言うと、ミシュナは少し頬を赤らめて言葉に詰まった。そしていきなり何を言い出すのかと言うように司羽を睨みつけた。

「……よし。すいません、これも貰えますか？　おいミシュ、お前の指だとどれくらいだ？」

「ちょ、ちょっと待ちなさい!!　何しようとしてんのよ!!」

「何って、今日も含め色々あったからな、御礼だよ。ああ金なら心配するな。家の近くの森で色々取れるからな、それを売ればかなりの稼ぎになるんだ。」

「わ、私が言いたいのはそう言う事じゃなくて……。」

「まぁ、良いから手を出せ。今迄の御礼と、これからの迷惑料だと思えば良いだろ？」

「そ、そういう事じゃなくて……。つ、司羽のいた場所だと指輪なんて大した物じゃないかも知れないけど。」

「いや、プロポーズとかにも使ったりするみたいだな。」

「……。」

勝手に話を進めていく司羽に、ミシュナは呆れ混じりの溜息をついた。もう思考放棄を選択したらしい。

「……貴方、いつか後ろから刺されても知らないわよ？」

「大丈夫だ、そうなっても生き延びる自信があるから。」

「あら、刺される自覚はあるのね。」

「まぁ、な。だが、これにも理由があるんだ。昔歳の離れた友人に言われたんだよ。生きていく中で一番迷惑かけそうな女には指輪を渡しとけってな。」

「……ねぇ、やっぱりそれ意味違うと思うんだけど。」

ミシュナは投げやり気味にそう言ったが、時既に遅し。指輪はお買い上げ済みだった。

「……首席にでもあげなさいよ。」

「ルーンの分は別の物をもう用意してあるよ、ブレスレットだけどな。」

「あんたね……絶対向こうの世界の女で遊び慣れてるでしょう？」

「馬鹿言うな。俺に喜んで声をかけてくる女なんて居なかったよ。」

司羽はそう言うと、ミシュナの手を取り、上に指輪の箱を載せた。ミシュナは店員の視線が恥ずかしいのか、はたまた怒っているのか、頬を僅かに染めると、諦めた様に指輪の箱を受けとった。

「……仕方ないわね、指輪なんて興味ないけど、今回だけは貰ってあげるわ。」

「ああ、そうしてくれ。……それと、改めてありがとな。ルーンとの事、色々心配してくれて。」

「……。」

司羽がそういうと、ミシュナは暫く硬直し、司羽の顔を、意図が読み取り難い、なんとも言えない表情で見つめた後……大きく溜息をついた。

「あっ、おかえりなさい、司羽、ミシュちゃん♪」

「あ、主っ！！」

「ただいま、二人共。」

「ただいま。」

ミシュナと共に家に帰ると、リビングとして使っている部屋へと向かい、何やら料理を作っているらしいルーンと、食器を棚から取り出そうとしていたトワに声をかけた。

「よ、ようやく帰って来てくれたか、あるっ……。」

ズシャッ

「と、トワ？　大丈夫か？」

「何？　この子、ドジッ子路線に変更したの？」

……何だろう、今のトワの様子が少しおかしかった気がする。それに一瞬だけどルーンの魔力の気配がした気がしたんだけど……。

「トワちゃん、私が先に話があるの……司羽に。」

「……は、はい……。」

「おいトワ、お前顔が真っ青だぞ？　大丈夫なのか？」

「あ、ああ、大丈夫じゃ。」

トワはそういうと、血の気の引いた表情のまま自分の作業に戻った。

……しかし、何だろう二人のこの異様な空気は。取り合えずルーンから何か話があるらしいから、その後にでもトワの事は聞く事にしよう。

「……ルーン？　話ってなんだ？」

「うん、司羽に聞きたい事があるの。トワちゃんとの事で。」

「トワの事？　……なんだ？」

そこまで言って、司羽もこの空気の違和感の原因がルーンである事に気付いた。

ルーンは自分と話す時は基本的に手を休めて、目を見て話す。そのルーンが、今は包丁を使う手を休めずに話している。正直それだけの事ならそこまで気にする必要はないのだが……。司羽の位置からだと、ルーンの手元のまな板の上にある『何か』が見えてしまっていた。

「あのさ、俺もちょっと聞きたい事があるんだけど……ルーン、その血まみれのって……なんだ？」

「ああ、これ？　お祝いに使ったりするお肉だよ。司羽もこっちに来た時に取って食べたでしょ、覚えてないの？　あの小さいやつ。買っても良かったんだけど、せっかくだし取ってきたの。」

「そ、そうなのか……覚えてはいるけど、何なのか分からなかった……。」

正直あんなミンチになってたら何なのか分かるわけない。もう肉ってよりペースト状の何かだよ。ミキサーか何かを使った見たいになってるし……包丁一本でどれだけ叩いたらアレになるんだろうか。

……取り合えずなんだか良く分からないけど、今この家は凄く危険な場所になっている気がする……。

「次は私の番だよね、司羽。」

「いや、今はちょっとマズイかも知れないんだが……。」

「……。」

「いや、何でもない、話してくれ。」

何故だろうか、ルーンの包丁を使う音がしなくなった瞬間に凄く不安になった。今ここで何とかしないと後で酷く後悔する気がする。

「そんなに気を張らないでよ、私達は家族なんだから。ただの確認だよ。」

「……気を張ってなんかいないぞ？　なんだ、確認って。トワの事っていってたけど。」

「うん、ちょっと学園で悪趣味な噂を耳にしたの。勿論その時はただのデマだと思ったから、特に気にしないで噂を潰してきたんだけど……さっきトワちゃんに聞いたら本当の事だとか言っててね？あ、でも安心してね。そんな事あるわけないのに不愉快な噂を広めてくれたトワちゃんには私がお仕置きしておいたから。」

「あ、ああ、そうなのか。……それで、どんな噂だったんだ？」

お仕置き、という言葉にトワが反応して皿を取り落としそうになったのが凄く気になる。ミシュナが咄嗟にカバーに入ったために無事だったが、トワは依然として動かないままだし。

「うん、本当に馬鹿馬鹿しい噂だよね……司羽とトワちゃんがキスした……なんて。……私とも、まだした事ないのに……。ねぇ、司羽。」

「……あ、えっと……。」

……なるほど、その事だったのか。それでルーンはこんな黒い状態になっている、と……。普通喜ぶ様な状況なのだろう……ルーンの言っている事が本当にただの噂なら。ルーンはそういって、完全に手を休めてこっちに振り向くと、いつもと同じ、邪気の無い笑みを司羽に見せた。

「本当に、質の悪い噂。司羽はそんな事する人じゃないのにね？皆してデマを広げて……もう、なんかまた苛々して来たよ。」

「……。」

「こっちを向いて、眼を逸らさないで、私だけを見て。……それとトワちゃん、私言った筈だよね？　今のがなんのサインだか知らないけど、余計な事はしないでって……さっきは司羽の使い魔だって言うから手加減したけど、次は無いんだよ……？」

「ご、ごめんなさいっ。」

先程のトワのサインは恐らく『話してはいけない』と言うものだろう。トワの震え具合からしてよっぽど怖い事があったのだろうが……それを聞く勇気は今の自分にはない。……とにかく、この話題を何とか逸らさないと……。

「あ、そうだ、ルーン。」

「……その反応からすると、噂は本当だったんだね。」

「……へ……？」

「司羽は嘘をついてる時とか、隠し事をする時には少しだけ呼吸の仕方が変わるの、気付いてた？」

「いや、その……ははは……。」

「あははっ、司羽、全然笑えないよ？」

ルーンはそう言って一歩ずつ間合いを詰めてきている。なんなんだろうか、この威圧感は。もう言い訳のしようがないと言うか、そもそも言い訳しても無駄みたいだ。悪いことをしたわけではないと思うのだが、罪の意識が湧きあがってくるって……これはなんなんだろうね。

「ルーン、良く聞いてくれ。」

「話を逸らそうとする人の話なんてまともに聞けるわけないでしょう？　それで、司羽はどうしてキスなんてしたのかな？　私が抱いて良いよって言ってるのに何もして来ない司羽が、出会って間もない女の子に迫られてキスしちゃうなんて信じたくはないけど。それとも何かな、キスくらいなら誰とでも出来るってこと？」

「いや、その……すいません。俺が全て悪かったです。」

「私が聞いてる事の回答になってないんだけどなぁ……それ。」

ルーンはそういって溜息をつくと、司の前で足を止めた。そして、顔を上げて司羽を見上げた。

「何が良かったの？　顔？　スタイル？　それともまさか、出会って間もないのに性格とか言わないよね？　私に足らないのは何？　私の何が気に入らないの……？」

「別にルーンが足りないなんて事はなくてだな……。」

「じゃあキスして。」

「……。」

間髪入れずにそう答えたルーンに、さすがの司羽も絶句してしまった。……ルーンが嫌なわけではない。寧ろ既にルーンが言っている様に大切な家族だと思っているし、家族だから女として見れないなんていうような考えは持ってない。持っていないが……。

「はぁ……、司羽は分かりやす過ぎるよ。だから、司羽の考えてること私にも分かるよ？　司羽は私が、司羽を繋ぎ止めたいからこう言ってるんだと思ってるんだよね？」

「……ああ、正解だ。俺ってそんなに分かりやすいのか？」

「うん、凄く分かりやすいよ。……でも、司羽が頭を撫でてくれる時とか、背負ってくれてる時とか、私のことを凄く大事にしてくれてるのが分かるから……私は、司羽のそういう所は好きだな。」

ルーンが嬉しそうにそういうと、司羽はつい視線を逸らしてしまった、自分の顔が赤くなっていないか心配になったが、今更取り繕っても恐らく無駄だろう。そして、こういうダイレクトに好意を伝えてくる所がルーンの魅力なのだろう……。

「でも、司羽が他の女の子に優しくしてたりするのを見ると、相手の子をバラバラにしたくなってくるんだよね……本当……苛々して、たまにやっちゃおうかとも思うよ。」

前言撤回、ダイレクトなのも程々にした方がいいな。さっきからルーンの言葉に反応してビクビクしてるトワがなんか可哀想になってくるし。……ルーンは一体トワに何をしたんだろうか。

「私は別に浮気が駄目って言ってるわけじゃないんだよ？　司羽が住んでた所は重婚なんてなかったみたいだけど、ここではそんなに珍しくないし。トワちゃんが良い子なのも分かるもの。……私が言ってるのは、私がこんなに目の前で司羽を求めてるのに、司羽はあろうことか私の気持ちを勝手に勘違いして、それなのにトワちゃんとキスしたっていうのが許せないってことなの。司羽、私がこれを聞いた時にどんな気持ちだったか分かる？」

ルーンはそう言って視線を司羽から下ろした。司羽は……自分の行為がどれほどルーンを傷つけたのかが分かってしまい、咄嗟に出かけた言葉を飲み込んだ。勘違いだというのなら、ルーンの言葉を聞かなければならない。自分はどうやらルーンに甘えすぎていたらしい。

「司羽、私は確かに司羽を体で繋ぎ止めようとしたこともあったよ。……でも司羽があの時、そんな事しなくても私のことが大事だって言ってくれて、家族だって言ってくれて、本当に嬉しくて……だから決めたの、私の大好きは、本当に一番愛している人だけに捧げようって……。」

ルーンは大事な思い出を思い出すように目を閉じ、微笑んだ。

「冗談でもないし、これは一時だけの感情なんかじゃないの……誰になんと言われようが、私は司羽が好き、大好き、誰よりも一番に愛してる。司羽が望むものは全てあげたい、司羽の敵は私の敵。そして、この想いを貶そうとする人は……全員許さない。」

顔をあげて司羽に微笑みかける。瞳に迷いはない、あるのは絶大な信頼と愛情だけ。……きっと自分は待たせすぎたのだろう。本来ならあの時、決着がついた時に答えをあげるべきだったのだから。

「司羽、私ね……愛して欲しいの、私の一番である司羽に。」

「……そうだな……。ごめんなルーン、トワのことがなくてもルーンはいっぱい我慢してたんだな。」

「ううん、私も怖かったから。きっとトワちゃんが来てなかったら他のきっかけがあるまで気持ちを伝えられたか不安だったよ。」

「……ルーン、俺もお前が好きだ。……俺のところへおいで、一生大事にするから。」

「……あっ……あ…っ……うんっ……大好き、司羽……んっ……。」

ルーンは司羽の言葉に驚きの表情のまま涙を流すと、そのまま司羽に抱きつき唇を押しつけた。司羽はそれを受け止めると、ルーンの頭を撫でながら、ルーンを抱きしめた。

そして暫く抱き合っていると……。

「……あの……そろそろ気が済んだのかしら……？」

「え？　……あ、ああ……すまん。」

「ミシュちゃん、待たせちゃってごめんね。トワちゃんも、今日はトワちゃんの歓迎会だったのに。」

「気にしないでいいのよ。貴女がどれほど司羽を愛していたかも少しは理解してるつもりだし。結果だけ言えば、あの時全部解決しちゃわなかった奥手司羽が悪いんだし。」

今気づきましたと言わんばかりの反応をした司羽に、顔を真っ赤にしたミシュナが悪態をついた。司羽もそうとう恥ずかしかったのだが、今回の事は完璧に自業自得だ。

「童の事も気にしないで良い、キスに強い意味があるとは聞いていたが、よく考えもしないでしてしまったのじゃからな。……次は、主に求められた時にするとしよう。」

「あら、司羽。トワはこう言ってるわよ？」

「えっと……ルーン、痛い。」

あー、なんなんだろうなこの理不尽。まぁ、色々と自業自得なのかも知れない。決めた、そう思う事にしよう。

「……それじゃあ、仕切りなおしましょうか。トワの歓迎会と……貴方達の婚約記念、でいいのよね？」

「ははは……御手柔らかに……。」

その後、ルーンの一層恥ずかしさが増した甘えモードと、ミシュナのからかいと毒舌、ルーンがやっているのを見てやりたくなったらしいトワのアーン攻撃に耐えつつ日の変わり目まで騒ぎ続けるのだった。

「ミシュナー、まだ起きてるかのー？」

「……ん……っ、トワ？　どうしたのよ、何かあった？」

「うむ……良く分からないのだが……ルーンから今日だけはミシュナと一緒に寝て欲しいと言われてな。ルーンはまだ童の事を怒っているのだろうか？」

「うーん、あの主席がそんなに引きずるとは思えないけど……。」

就寝の準備に入っていたミシュナの部屋に入ってきたトワが不安そ

うにそう呟くと、ミシュナはそう言って少し思考を巡らせた。

「私は別に構わないけど、司羽はなんて言ってたの？　というか理由はなんなのよ？　少なくともあの男は誰かと良い仲になったからって掌返すようには思えないけど？」

「うむ……主は今日だけはごめんって言って、いっぱい撫でて、ぎゅってしてくれたぞ？　その後ルーンに抓られていたが。理由は……良く分からぬ。ルーンが言うには、司羽とルーンの血の繋がった家族を作るんだとか、主のものになるとか言っていたな。その後詳しく聞こうとしたら主に止められた。」

「トワ、今日はここで寝なさい。間違っても司羽と主席の部屋に行っちゃ駄目。近づいても駄目。私が良いって言うまではあの部屋には近づかない事、いいわね！！」

「う、うむ、分かった。でも、ミシュナ……どうしたのだ？　顔が赤……。」

「赤くない！！　……今日はもう寝るわよ、色々疲れたわ。」

ミシュナはそういうと、明日どんな仕返しをしてやろうかと考えながら、実は自分が一番理不尽な被害を受けているのではないかと、珍しくも溜息をついたのであった。

第17話：クラス入れ替え試験

「んー……、おはよう。」

「あ、ミシュちゃんおはよー。」

「……珍しいわね、貴女がこんなに早く起きてるなんて。司羽はどうしたの？」

「……ミシュちゃん……確かに事実だけどそれはちょっと酷くない……？　今日は私が司羽に朝食を作ってあげたくなったの。司羽なら倉庫に材料を取りに行ってるよ。」

何か特別な用事があるわけでもないのに（学園はあるが、ルーンは学園の日でも問題なく寝坊するため除外する）ミシュナより早く起きてキッチンにいたルーンに、ミシュナが驚きの視線を送ると、ルーンは少し不満そうにそう返した。別に不都合があるわけではないので、ミシュナもあまり気にした様子もなくルーンを見ていると、首に掛かった蒼い宝石細工に眼が止まった。

「……その首飾り……。」

「……ああ、これってミシュちゃんと買いに行ったんだよね？　そうだよ、これは昨日司羽に貰ったの。本当に司羽って律儀だよね。わざわざミシュちゃんと買いに行った事も、本当はトワちゃんの契約に使う物を買いに行ったって事も教えてくれるなんて。」

「あー、言っちゃったのね。……もう、女心の分からない奴よね、本当。」

ミシュナは呆れたようにそう言ったが、ルーンが特に気にした様子もなく朝食の準備を進めているのを見て、内心軽く驚いていた。

「……司羽の事なのに、貴女が気にした様子がないのは驚きかも。」

「うーん、多分嬉しい気持ちの方が大きいからなのかもね？　司羽は正直に話してくれたし、他の用事で行ったのに、私の事をずっと気にかけてくれてたって事だしね。……この宝石、司羽のいた所にも在った物なんだって。『アクアマリン』って言って、司羽の知ってる国では、航海の安全を祈って船の先に付けたりする事もあったみたいなの。司羽がこっちで暮らすようになって始まった、私達の新しい生活の幸せを祈ってっていう事みたい……昨日は沢山泣いたはずなのに、その話を聞いたらまたいっぱい泣いちゃって……司羽はずるいよね。」

「そうね、あいつには女ったらしの才能があるわ。」

ルーンが心底嬉しそうに自分の胸元に下がっている蒼い宝石を撫でると、ミシュナは皮肉と呆れの混じった言葉で答えた。それを笑ってルーンが受け流したのを見てまた驚いたが、ルーンも成長したのを感じて、ミシュナも今はルーンの前で司羽の皮肉を言うのを止めにした。恐らく、昨日までだったら司羽の悪口一つですぐに抗議の視線を送られていただろうが……まったくもってやりにくい。それに、何だが無言で惚気られた気がして少し腹が立たなくもない。後で司羽に責任を取って貰う事にしよう。

「……取り敢えず、これは貴女に渡した方が良さそうね。」

「そういえば、ミシュちゃんには指輪を渡したんだっけ。」

「そうよ。取り敢えず、指輪はまだ箱から出してないし、貴女が持っている方が自然よ。……指のサイズは……多分大丈夫でしょ、私と貴女なら。」

ミシュナはそう言って自分の上着のポケットから昨日司羽に渡された指輪をルーンに差し出した。だが、ルーンは表情を少し険しくしただけだった。

「……早くしまって……。」

「え……？」

「早くしまってって言ってるの。今は私が自制してるけど、それを渡されたらきっと自分で壊しちゃうから。せっかく司羽の想いが籠ってるのに、そんなことしたくない。」

「……そんなこと言われてもね……。」

「それにはミシュちゃんへの想いしか入ってないから、ミシュちゃんが持ってる方がずっと自然だよ。……それに私、そんなのを渡されたら本当にどうなっちゃうか分からないよ……？　指輪だけじゃなくてミシュちゃんも壊したくなっちゃうかもしれない。」

ルーンは昨日僅かに垣間見せた、司羽やトワを責めた時と同じ様な瞳でそう言った。もしかしたら、ルーンは凄く危険な方向にも成長してしまったのかもしれない。小刻みにストレスを発散出来ないということは、それら全てを溜め込み続けるということで……。

「ミシュちゃんには、私と司羽の事をあんまり気にし過ぎないで欲

しいの。司羽だって、私との指輪は、その時が来たら私だけの為に用意してくれるって言ってくれたし。だから、私の大事な司羽の想いを、誰かにあげたりするような事は二度としないで欲しいな。……勿論、司羽の好意が迷惑だって言うなら今すぐにこっちに渡してもらって構わないよ、粉々に砕くから……。」

「それは……遠慮しておくわ。」

「……そう？　心変わりしたらいつでも言ってね。」

いつもと同じ調子で抑揚なく捲くし立てたルーンに、ミシュナは若干引き気味になりながらそう言った。

……指輪をくれた司羽には悪いが、どうやらこの指輪をつける為には色々と覚悟をする必要がありそうだ。

「はぁっ……準備、手伝うわ。」

「うんっ、ありがとう♪」

取り敢えず全てを忘れて気持ちのいい朝食を取るべくミシュナがそう提案すると、ルーンはいつも通りの無邪気な笑みでミシュナのそれに答えた。トワも起きてくるだろうし、そろそろ司羽も戻ってくるだろう、ルーンの事が気にならないではないが、少しは自分のストレスも発散させてもらうことにしよう。ミシュナがそんな事を思っていると廊下からバタバタと騒がしい音が聞こえた。

「ミシュナ！！　た、大変じゃっ！！」

「何よ、朝から騒がしいわね……。」

「どうしたの、トワちゃん？」

「る、ルーンは無事なのか！？　今主の部屋に入ったら寝具に沢山血がついっ……むぐっ……。」

「……トワ、私が良いって言うまで入っちゃ駄目っていったでしょ……。」

キッチンに入ると同時に捲くし立てたトワの口を塞ぎ、朝になってトワに注意するのを忘れていた事を悔みつつ、ミシュナはルーンの様子を見た。

「……ねぇミシュちゃん。一人にしちゃうのも可哀想だし、少しの間トワちゃんと一緒に寝てもらっても……。」

「……いい加減にしなさい！！」

予定変更、朝だけと言わずしばらくは司羽で日ごろのストレスを発散させてもらう事にしよう。具体的にはこのやり場のない感情が消え去るまで……。

「入れ替え試験……？」

「そうですよ、司羽君は初めてですよね。前にも説明したと思いますが簡単にいえばクラス替え試験です。実力順に並べるだけなので難しく考えないでいいのはいいんですが、準備なんかが凄く面倒なんですよねー。」

「だが、この時期になると皆の士気が上がるしな。教師としてはこれほどやり甲斐のある時はない。」

朝のＨＲでミリクとシノハが温度差のある連絡をすると、クラスの雰囲気が変わったように感じた。そういえばこの学園に来た時にはムーシェが入れ替え戦をいきなり挑んできた事もあった。それから察するに、このクラスはここの学院生にしてみればかなり重要な物なのだろう。

「今回の試験はペアで行う。協調性が大事になって来るからな、個人プレイは厳禁だぞ。とはいっても、ペアはいつも通り同じクラス内で相性の良い者同士を選ぶ事になっているから、まったく知らない者と組むということはないので安心してくれていい。……一名男子がいるからそのペアはもしかしたらギクシャクしてしまうかも知れないが……お前達が兵士になった時、男も女も関係ない。ここを戦場だと思って挑むように！！」

「シノハ先生、私は研究者志望だから兵士に興味なんてないけど、司ぴーと組んでみたいなぁ。王子様に守ってもらうのって一度味わってみたかったんだよね。司ぴーは個人的に全然アリだったりするし♪」

「あ、ずるいよユラ！！　抜け駆け禁止！！」

「やるわね司羽、凄い人気じゃない。浮気の許可も出てることだし、主席とトワの他に三人目を狙ってみたら？　このクラスはレベル高い子ばっかりよ？」

「ミシュ、その冗談は笑えない。昨日の今日でそれは殺されたって文句言えないぞ。」

なんだか向こうの世界にいた時とはまったく違う大人気具合なのは正直悪い気はしないのだが、これで喜ぼうものなら完璧にルーンの嫉妬心を買うことになる。実際最初の発言の辺りから、珍しくこの時間からＨＲに参加しているルーンから発せられる空気が痛いのだ。

「私で満足出来ないっていうなら、体だけならいいんじゃないかな。私は司羽以外に体も心も触らせる気はないけどね？　そうだ、心がぶっ壊れてていいなら今から……。」

「いや、怖いから。それと、痛い。ルーン、腕を掴むなら優しく頼む。」

「うぅ……ルーンよ、そろそろ交代して欲しいんじゃが……。」

「あ、ごめんね。はい、次はトワちゃんの番。」

「……愛されてるわね、司羽。」

そう言ってルーンとトワは座っていた場所を入れ替えた。ルーンの席に座っていたトワがどこに移動したのか、答えは簡単俺の膝の上。ルーンとトワが昨日締結していたらしい『司羽相互甘え条約』（命名ミシュナ）は健在らしい。それより気になるのが、なんだか

さっきからミリク先生がホクホク顔でこっちをみてることだ。後で絶対につつきまわされるな、これは。

「落ち着けお前らっ！！　相性次第だと言っているだろうが……。それに、なりたい職や夢があるなら上を目指せ。特にユラとアミリス、今回はお前が行きたがってる国立魔道遺跡研究所の人間もチェックを入れるんだからな。男にうつつを抜かしてる暇なんかないぞ？」

「大丈夫ですよー。司ぴーとドラマチックにアピールするから。」

「ええ、任せてください。研究所の方のハートも司羽さんのハートも射止めて見せますから。」

「分かってると思うが、今回も内容は戦闘だぞ……？　お前ら、一体何をアピールする気だ……？」

大きく溜息をついたシノハと何やらやる気が満ち溢れているクラスメイト二人に視線を移しながら、司羽はある可能性を見出しつつあった。……あくまで予測なのだが……これが真実だとしたら、少々不愉快だ。

「司羽？　どうしたの？　何か不安な事でもあるの？」

「え？　ああ、いやそういう訳じゃないんだけど……ルーンから見ると本当に顔に出やすいみたいだな、俺は。」

「だって司羽の事だもん。」

分からない訳がないと言わんばかりにそう言ったルーンの頭をぽ

んぽんと叩きながら、取り敢えずその場は忘れる事にした。どうせ直ぐに確かめる機会がくるだろうし。

「さて、そういうわけで今日は定例の魔力検査を行う。ペアになりたいからってイカサマしないようにな。」

「取り敢えず男子は私、女子はシノハちゃんに任せましょう。早く終わって趣味に専念したいですし♪」

「職権乱用だ……。」

「まぁ、かんばりなさい。」

その宣言の後、ミリクの瞳が光ったのを視界の端で捕えながら、司羽は大きく嘆息した。

「んー……相変わらず魔法はまったく使えないんですねー……。」

「まぁ、自分が元居た場所では必要ありませんでしたしね。」

「本当に不思議です、魔法無しで生活出来るなんて。司羽君の身体能力も十分に不思議ですけど。」

ミリクと一緒に教室を移動したのは良いが、結局魔法の類がまったく使えないので魔力を計測することが出来なかった。まぁ、いきなり魔法が使えるようになるってのも都合よすぎるけど。

「でもどうしましょうか、魔力が測定出来ないと相性の問題も解決しません。……もう司羽君の好みで決めちゃいましょうか？　ぶっちゃけＡ＋クラスでは誰が一番好みなんです？　先生に教えてください。」

「あんたそれが聞きたかっただけだろ！？　職権乱用にも程があるぞ！！」

「いいじゃないですかー。ちゃんと一緒になるようにしてあげますよ？　シノハちゃんは基本私の言うことに反対しません、というかさせませんし、あの子達の中に好みの子がいないっていう事はないでしょう？　やっぱりルーンちゃんですか？　あの子は司羽君にべったべたですもんね。あの子って凄いんですよ？　あの歳で次元魔法学の独自の理論を打ち立てて発表した天才ですし、本気を私も見たことがありません。でも私的にはミシュナちゃんも司羽君には合ってると思いますよ？　なんだかんだでいつも傍にいるのを見ますし。個人的にもあの子の事は前から気になってたんですよ。魔力も学力も下手すればルーンさん以上なのにいつも入れ替え試験の時はサボってましたし……ほら、あの子の時は司羽君の時ほど騒ぎにならなかったでしょ？　あれは皆あの子の強さを知ってるからなんです。ただ、いつも一人でいましたから、この期に司羽君とくっついちゃえばいいかなーなんて思ったりもしてるんです。でも同い年がいいっていうならセリアちゃんとかもいい感じ……。」

司羽の意見を無視して次々と言葉を並びたてるミリクに唖然とし

ながらも、なんとかこの状況を切り抜ける方法を考えて……ある一つの方法が浮かんだ。

「おいで、トワ。」

「んむ？　どうかしたのか、主。」

「なるほど、トワちゃんがいいんですか。でも、トワちゃんは使い魔扱いなのでパートナーは別に決めなければなりませんねー。……ここは年下とか狙ってみたらどうですか？　例えば……。」

「落ち着いてください先生。魔力を測る方法が見つかったんですよ。」

「……えー……。」

「なんでそんなに不満そうな顔するんですか……。」

司羽がそう言うと、いままでキラキラと輝いていたミリクの表情がいきなり失望と絶望の色に染まった。なんていうか、本当に分かりやすい先生だなー……この人。

「トワは俺の魔力やらエネルギーを吸い取っているらしい事を言っていたので、トワに魔法を使ってもらえば全部解決です。」

「はいはい、そうですねー。分かってましたよそのくらい……はぁっ……。」

「……主よ、童は出てきて良かったのか？　なんだか凄く罪悪感が沸き出てくるのじゃが。」

「ああ、トワがいてくれて助かったよ。ありがとな、トワ。」

「えへへっ、主がそういうなら。」

というかこの人分かってて今まで黙ってたのか……本当に油断ならないな。まぁ、取り敢えずこれでなんとかなるな。

「司羽君の魔力とはいえ、トワちゃんは女の子です。女の子用の検査機はシノハちゃんの方にありますから、第三魔法室に行っていただけますか？　それと、司羽君は残ってください。一応最低限の健康診断がありますから。」

「トワそういう事らしい、お願い出来るか？」

「うむ、わかった。ルーンやミシュナの魔力がある部屋に行けばいいのじゃな？　行ってくる。」

司羽がそういうと、トワはその指示に頷いて窓から飛び去った。どうやらその第三魔法室は上にあるらしいな、行ったことないから知らないが。……さて、一つ気になった事をトワがいない内に聞いておくとしようか。

「ミリク先生、聞きたい事があるんですけど。」

「……私の質問は流したくせにですか？」

「……仕事してください。教師でしょうが。」

「しょーがないですねー。」

健康診断の準備をしながら完全に拗ねてしまったミリクに呆れながら、司羽は苦笑した。

「ちょっとした事なんですけど、この入れ替え戦って毎回皆の何を試してるんですか？　スカウトまで来るんですよね？」

「何って、魔法の熟練度とかですよ？　結果的には何らかの方法で優劣をつける訳ですが、大体が戦闘行動ですね、どこからスカウトが来ても一番能力を見やすいし、結果が分かりやすいですから。司羽君は学園に入るのは初めてとの事なので知らないと思いますが、基本的にどこも似たような物ですよ。国家の中心は魔法学ですから、そのスカウトさんにアピールするにはちょうどいい機会なんですよね、この試験って。だからクラス分けっていうよりそっちメインで考えてる人が多いです。特に上の方のクラスは注目度が違いますからね。クラス変え試験前でもスタートを少しでも上のクラスで切る為にどこもヒートアップしてますよ。」

「うーん、やっぱりそうなのか。そうなるとちょっと気になる事があるんですよね、この学園の入れ替え戦とクラス替えのシステム。」

「あら、なんです？　一通りは説明したと思うのですが……。」

「そんな大した事じゃありませんよ。……ただこのクラス替えがどこの命令で、スカウトなんかでカムフラージュしながら、本当は何の意図があってやってるのか気になっちゃいましてね。だって不愉快じゃないですか、こういうの。」

「……。」

司羽がなんでもない事を話す様にそういうと、ミリクは珍しく驚きの表情を見せた。そして、大きく息を吐き出すと、困ったような顔をして司羽に答えた。

「頭の良い子ですね、貴方は。流石に驚きました。」

「この制度は色々おかしいですからね。他の教科を全て省いて魔法学でのみクラス分けテストを行うのは……まだ魔法学を特化しているというなら分かります。ですが、シノハ先生の発言を聞く限りその内容は戦闘。さらにその結果を後から入れ替え戦なんて暴力的な手段で容易に覆せるようにしてある。それに、高々一つの学園のクラス替えテストを直接国家機関が見に来るのも気になる。そうやってクラス分けして優劣をはっきりさせれば、皆も上に上がるために戦闘技術を磨きますからね。傍目から見れば優秀な人材の輩出を目標とした魔法の専門学校なんでしょうが、内容があからさま過ぎますね。どこもかしこも戦闘技術を上げさせる為の機関にしか見えない。ここの学園以外でもやってるならなおさらおかしい、国家機関からのスカウトっていう餌までつる下げて……戦争でもする為の人材育成でもしてるんですか？　ここの国は。」

「……貴方のような子を見るのは初めてです。たかがクラス替え試験の事でここまで色々な事を見抜くなんて。」

「じゃあ、俺の推測は当たってるんですか？」

司羽が真剣な眼でミリクを見ると、ミリクはその視線を真正面から受け止め……優しく微笑んだ。

「うーん、半分正解って所でしょうかね。」

「半分……ですか？」

「ええ、表ではスカウト目的の品評会ですが、結論から言えばこのクラス替えテストは各国のパワーバランスを殺戮以外の方法で解決する手段として使われています。昔は戦争状態が長く続いた事もありましたが、各国共に疲弊が酷く、それを教訓にしましてね。各国共にこの形態の学園を規定数建設し、そこの生徒の能力を数値化することによって戦争の勝ち負けを決めているんですよ。新しい戦争の方法です、司羽君が思っている様な物ではありません。」

「そうだったんですか……でも聞いておいてなんですが、いいんですか？　それって一応機密でしょ？　情報の重要さくらいは自分も分かるつもりですが。」

司羽が聞いてしまった事を少し申し訳なく思いながらそういうと、ミリクはまったく気にした様子もなく笑った。まるで大したことじゃないとでも言うように。

「問題ありません、本来なら学園教師である私すら知っている筈のないことですから、私の妄想だと思っていただければ。昔私もここの学生だった時、司羽君と同じ事を考えて、独自のツテを使って調べたんですよ。まぁ確かにそんな事で各国のパワーバランスを決めていたなんて知れ渡ったら反対派も出てくるでしょうし、機密にしたいのはわかりますが……私もこれを知った時は失望したものです。もっと凄い組織が黒幕だったりとか、実はこの学園自体が何かの実験に使われてたら面白いのになーとか思って調べていましたから。」

「……凄い学生時代を送ってたんですね……。」

「ふふっ、でも司羽君は鋭い洞察力をお持ちですね。なにせ本来、学園というのは比べる為の機関なんですからね。テストによって実力を測るのは、成績としてその人間の能力を数字で出して、誰かに比べさせる為なのですから。普通、少し形態が分かりやすく変わったところで誰も不思議に思いません。……でも貴方には、この学園のテストがそれとは違う形に見えた。」

「あのー……勘違いだったんですし、恥ずかしいのであんまり言わないでください……。」

確かに真相は近い部分にあったのかも知れないが、はっきり言って証拠も何もなかったし、そもそもミリクが事の真相を知っているとは限らなかったのだ。なんだか、少し暴走し過ぎた感じがする。どうもこっちに来てから人を疑う事をし続けてたせいか、疑り深くなっていたようだ。

「恥ずかしくなんてないですよ？　今日は司羽君の事見なおしました、私心の中では男の子なんて馬鹿ばっかりなんだろーなーって思ってましたから。貴方は私と同じ所に着目して、結果的に物凄いスピードで疑問を解決したんです。もっと誇るべきです♪　間違っていたとはいえ、筋が通った推理でしたし。」

「……。」

さり気なく自分を褒めちぎったり、人類の半分に対して凄く失礼な事いったりしてるし、ここら辺は本当にミリク先生だなーと思う。

「んー、まぁ私を楽しませてくれたお礼にここらで止めてあげましょう。その代わりに二つ、私が質問に答えた分だけ、私からも質問があるんですけど、答えてくれます？」

「……答えられることなら答えます。」

「まったく、ずるいですねー司羽君は。まぁ、いいです。」

何を聞かれるのかは知らないが、取り敢えずこの人が俺に有利な事を聞いてくるはずはない。取り敢えず何を聞かれてもスルー出来るように準備しておかないと……とはいえ、自分の無茶な質問に答えてくれた分はなんとか答えないといけない気もするな……。

「そんな難しい事じゃありませんよ。まず私が聞きたいのは、貴方が本当はどこから来たのか。」

「それ、言わなきゃ駄目ですか？」

「気になっちゃいます、夜も眠れません、代わりに司羽君が私を寝かしつけてくれますか？」

「……地球って場所から来ました。場所は知りません、座標なんざ調べたことないし。」

「ふーん、そんな国も地名もこのエーラには存在しないし、やっぱり別世界から来たみたいですね。魔法も知りませんでしたし、その線が濃厚です。」

……結構適当に答えたつもりだったのに完璧に読まれてる……

あーもう、本当にやりにくいなこの先生……。

「ふふふっ、その顔は当たりですね？」

「いえ、呆れてるんです。」

「否定しないっと、確定ですね、これは。」

「……。」

あー、本当にもうヤダこの教師……。それに、なんだかこの秘密っていまいち守れてない気がする。結局最初の関係者以外にもバレちゃったし……。

「それでは二つめの質問です。」

「はいはい、もう勝手にしてください。後先に言っておきますけど好みのタイプとか聞かれても知りませんからね？」

「大丈夫ですよ、私が聞きたいのは……司羽君が経験した戦争について……で……。」

「……へぇ……？」

「……司羽君……？」

「成程、さっきの俺の反応から経験者だと思ったんですね？　で、何を知りたいんですか？　経緯？　結果？　それともどんな作戦が使われたかとか？」

「え、いや、あの……ですね？　わ、私が聞きたいのはそういう事ではなくて……。」

「じゃあ、なんです？　軍事的な物以外ですか？」

なんだ、はぎりが悪くなったな。ミリク先生らしくもない……。
それより、なんで震えてるんだ、この人。

「あ、あ、えと、私が聞きたいのは……せ、戦争状態の国が……和解する方法……を……。」

「なんだ、そういう事ですか。俺のいた場所だと、負けてる国が賠償金を払ったりしましたね、他にも自国の持つなんらかの権利を相手に譲り渡す場合が多いです。あーでも、これって和解って言いませんよね？　お互いが本当に理解、尊重し合ってっていうのは聞いたことないかな……すいません、俺が説明できるのはこのくらいです。」

「え？　あ、ああ、はい、ありがとうございます！！　参考になりました。」

なんだか、珍しくまともな事聞いてきたな。いや、そっちの方が助かるんだけどな。しかし……和解の方法とは、またなんでそんなの知りたがったんだろう。こっちの世界だと和解して終わったことがないのか？　まぁ地球の歴史でもちゃんとした和解なんてないのかもしれないけど。司羽がしばらくそんな事を考えていると、視線を逸らしていたミリクが、いつもより表情を堅くして司羽に視線を送って来た。

「……あの、司羽君……？　……もう、怒ってませんか……？」

「……えっと、何がです？」

「い、いえ、分からないなら良いんです……。それなら、取り敢え

ず、向こうの世界の事とかもうちょっと教えて欲しかったりするんですけど……。文化とか、そういう事を。」

「……仕方ないですね……少しだけですよ？」

司羽がそういうと、ミリクはホッとしたように胸を撫で下ろした。

その一連の動作の意味は、司羽には分からなかったが、ミリクの質問攻めはトワが戻ってくるまで続いた。

第１８話：明日の天気は嫉妬ハリケーン

ビリッ、ビリッ、グシャッ

「先生、冗談が笑えない。本物はどこにあるの？」

「……あ、あのな、ルーン？　そういうのは出来れば破く前に言って欲しいんだが……。というか、お前にそれを破かれると私は凄く困ってしまう。仕事的な意味ではなく……主に、個人的な反応で。」

「でもこんなの納得出来ない。今の私と司羽の相性はこれ以上なく良いはずです。まさか、本当に私以上に相性の良い人が居たんですかっ！？」

「……ルーン落ち着け、皆驚いてる。」

女子の方の検査も終わり、トワが帰って来たので司羽も教室に戻ると、シノハが教室に結果を張り出して……それをルーンに破かれ、破棄されている所だった。……何となく、結果が予想出来るが……。取り敢えず、唯一この場の雰囲気に呑まれていないらしいミシュナに、説明を求める視線を送った。

「……俺とルーンは誰と組む事になったんだ？」

「司羽はリアと、あの子は私とよ。……どうやら、あの子は完全に司羽と組めると思っていたみたいね。特に貴方達は付き合い始めたばかりだし、あの子がそう思っても何も不思議じゃないけど。」

「どういうことだ？」

司羽がそう聞くと、ミシュナは司羽が魔法について詳しくない事を思い出した。昔から傍にいるような気がして、たまに忘れそうになるが司羽はこちらの世界の人間ではなかったのだ。

「簡単に説明すると、魔力の相性ってお互いの事を深く意識してたり、同じ気持ちを抱いていれば自然と良くなる物なのよ。こっちに疑似召喚みたいな事出来てる時点でかなり魔力の相性はいいんでしょうけど、今はそれだけじゃない。あの子がちょっと病的なまでに貴方の事を好きなのは今更言わなくても分かってるでしょうし、貴方だって恥も外聞もなく私の部屋にトワを押しつけてくるくらいにはあの子の事を愛してるんでしょ？　苛立って当然よ、あの子にしてみれば二人の間にある物を侮辱された様な感じでしょうから。特に貴方が待たせてたせいで喜びも凄く大きかったでしょうしね……そういう意味では司羽にも責任があると思うわ。」

「なるほど、正直そういわれると俺も思うところがあるな、俺はまだルーンの相手がミシュだったからいいけど、もし別の男とかだったらかなりムカつくだろうし、ルーンも似たような感じなのか。……ところで、なんだかミシュの言葉に凄く棘を感じるんだが……もしかして怒ってるか……？」

「……割と、かなり、昨日の夜くらいから。今の発言もなんだか惚気られたみたいでイラっときたわね……何か言うことは？」

「あー……その……すまん。」

司羽がなんと言っていいかわからず、取り敢えず素直に謝ると、ミシュナは深く溜息をついて視線を逸らした。……なんだろう、俺

はまた何かやってしまったのだろうか？　……よし、取り敢えずこの話題は危険だ、早急に逸らそう、うん。

「……ま、まぁ、取り敢えずよろしく、リア。組んだからには頑張ろうな？」

『あ、はい、よろしくお願いします。……ですが、本当に宜しいのでしょうか……？　正直私も司羽さんとルーンが一緒の方が自然な気がするのですが……。』

リアはルーンの方を見ると、そういった（書いた？）。ルーンはリアの視線に気付いたのか、こちらを振り向くと、優しく微笑んで……直ぐにシノハに冷たい視線を送った。理由の説明を求めるという事だろう。それを受けて、シノハは若干押され気味になりながら口を開いた。

「あー……た、確かに、お前達の魔法的な相性は一番良かったし、仲が良いのも分かってはいる。私も、本来ならルーンと司羽を組ませようと思っていたのだが……いつもの二人を見ている限り、リアと司羽の相性が妙に良いのが気になったんだ。ルーンやミシュナ程ではないのだが、ルーンとリアがよく一緒にいる事を考慮しても、それほど接点があるようには思えないのに高い値を出していたのがな……。やはり色々と試してみるべきだと判断したんだ。」

「……リアにミシュちゃんとも相性良いんだ、司羽。」

「……流石タラシね。」

「……俺が責められるのは理不尽過ぎやしないか……？」

ミシュナが呆れた様に、ルーンが睨むように、リアからも表情は分からないが視線が飛んで来ているのが分かった。それを見て楽しそうに笑っているミリクが凄く恨めしい。

「ごめんなさいね、ルーンさん。シノハちゃんは教師として貴方達の事を考えただけで悪気はなかったの。司羽君とルーンさんはいつも一緒にいるから新しい発見もあるかもしれませんし。シノハちゃんには乙女心をしっかりと教え込んでおくから、今回は許して？」

「……実際は、私と司羽の相性が一番良かったんですよね？」

「ええ、これ以上ないくらい。先生としては、何がどーなってるのか凄く興味あるんだけど。」

「……うん、分かりました。ミシュちゃんと組むのも面白そうですし♪　ミシュちゃんは放っておいたら試験サボってクラスが離れかねないし。その為に私が組む事になったんでしょ？　シノハ先生。」

「確かに、お前達の相性の良さもあるが……実はそういう意図もある。ミシュナも、ルーンと司羽を自分で離れさせたくはないだろう。」

「……成る程ね。私がサボったら司羽とルーンを引き裂いちゃう訳か。……この前のトワを見てる限り何されるか分からないし……まぁ、頼んだわよ。楽させて貰うから。」

……こうして、ミシュナの溜息と共に、波乱の組分けが終わったのだった。

「なるほど、それは羨ましい状況だったね司羽。」

「……話をちゃんと聞いてたのか？」

「聞いてたよ。君が別の女子と組むのにルーン嬢が嫉妬してたんだろ？」

「……まぁ、確かにそうなんだが……俺が凄く女にだらしない男って感じがしないか、それ。」

組みわけが終わり、通常授業に戻ると授業クラスが同じであるムーシェと、先程の話になったのだが……どうやら自分は凄く幸せ者らしい。いや、自覚してないわけじゃないんだけど。

「ルーンから嫉妬される事自体は嬉しいんだけど……後が怖いんだよなぁ……。ちょうど今は通常授業に戻ってるし、帰りまでには機嫌直ってればいいんだけど。」

「でも、ルーン嬢も納得したんだろ？　なら大丈夫じゃないか？」

「うーん、どうだろうなぁ。あの場には自分と組むミシュに、俺と組むリアがいたから、二人に気を使ったのが大きいと思うんだよ。」

ルーンは何だか無理矢理自分に納得させてた感じだったしな。まぁ確かに、暴走しかかってたのは魔力の相性云々の話もあったからだろうし、ルーンも常識がないわけじゃないから教師としてのシノハの言い分も分からなくはなかったんだろうけど……昨日の今日だしなぁ……。

「たかがクラスの入れ替え試験だし、組むのがルーンの親友とはいえ、まだ付き合い始めなのにいきなり他の女と……だからな。」

「まぁ、もう決まった事なのだし、仕方あるまい。それにいくら付き合ってるとはいえ、今回は事故の様な物なのだしルーン嬢が司羽に辛く当たる事はお門違い……。」

そこまで言いかけて、ノートを見ていたムーシェは呆然として司羽に向き直った。

「……って、ちょっと待ちなよ司羽。僕は今、君がルーン嬢と付き合っていると聞こえたんだが？」

「……ああ、そういえば言ってなかったな。俺ら昨日から付き合いだしたんだ。」

「……それは本当かい？」

「嘘をついてどうする。」

おかしな奴だな。まぁ、友達同士が付き合い始めたと聞いたら多少驚くかもとは思ったが。でもムーシェはルーンとそんなに話すわけではないし。……これはあれか？　俺がルーンて付き合うのが信じられないってのか？　俺はそんなにモテそうにない感じの奴な

んだろうか。それはちょっと凹む……。

「……入れ替え戦は気をつけた方が良いかも知れないな……。」

「……まぁ確かに今までモテたためしはないわけだが……って、どういう事だ？」

「……去年最後の入れ替え戦で、ある女子と付き合っていた男子がＡマイナスのクラスからＥマイナスまで落とされたんだ……。僕のライバルみたいな奴だったんだけど……あんな人数に囲まれたら無理もないね。今回も多分バトルロイヤル形式だろうし……この事はあまり口外しない方が身のためだよ？　なんせ、そいつは今だにＥマイナスクラスだからね。入れ替え戦を申し込んでクラスが上がる度に他の男子が結託して入れ替え戦を申し込み、波状攻撃を仕掛けて疲労させ、最後にはまた一番下まで叩き落とされてる。波状攻撃の途中で負けた奴らも下に落ちるんだけど……何故か凄くやり切った顔をしてるんだ。」

「……最悪だな。」

ムーシェは遠い目をして窓の方を見た。まるで亡きライバルを回想する様に……。

「……まさか、恋人がいるだけでか？」

「いや、ちゃんと理由があってね。我が学園では年に一度お祭りをやるんだけど、その時に学内人気投票があるんだ……秘密裏にだけどね。」

「なるほど、そこの上位に食い込んだ人だったわけか。」

「ああ、その年の三位だった。司羽は実感ないかもしれないけど、この学園はEに行くほどクラスの人数が増えるから千人くらい生徒がいるんだ。その中の三位なんて、人気のレベルが違うんだよ。」

「へぇ……なんかこの言い回しだと、ルーンもその人気投票で結構人気があるみたいだな？　まぁ、正直言って俺もルーン以上の美少女って言われると出てこないし……ミシュナ辺りなら張り合えると思うけど……。」

身内の贔屓目……というとなんだかおかしいかも知れないが、それを抜きにしてもミシュは美人だ。ルーンと年齢も同じだし、身長もあまり変わらないが、あの独特の雰囲気は人を惹き付けてしまう物がある。……顔見知りが激しく、あまり人付き合いをしないせいで暗い印象を持ちがちだが、かなり良い性格してるし……色々な意味で。

「それで、結局ルーンの人気はそんなに凄いのか？　前に人気があるとは聞いてたから多少はやっかみがあるとは思ってたけど。」

「……結果だけ言えば、ルーン嬢は前回二百票以上を集めて堂々一位、ミシュナ嬢も百八十票くらい集めて二位だった。確か二位と三位の間に百票差以上あったよ。もしミリク先生を投票対象にしてたら結構面白そうだったんだけど……一位と二位は出来レースだったね。あの二人が入ってきてから順位が変わらないし。」

「……多少のやっかみじゃ済まないわけか……。」

「ルーン嬢はずっとAプラスクラスで恋人どころか男友達すらいないような存在だった上、放課後も次元系の魔法の研究ばっかりして

て、クラスで普通に話してるような女の子が遊びに誘ってもまるっきり無駄だったみたいだし。さらに年齢が上がるにつれて人気も上がって手がつけられなくなってたしね。そんな手の届かない、皆完全に諦めモード入るような状態のルーン嬢と付き合えば、暴動が起きてもおかしくないよ。さらに言えば司羽はミシュナ嬢とも仲いいわけだし、これはいつ殺されてもおかしくないレベルだね。」

「……つまり、これ以上の男友達は出来そうにないってことか……。」

司羽がそういって溜息をつくと、ムーシェは苦笑しながら司羽に同情の視線を送った。そんな時、司羽は膝の上に、柔らかい重みを感じた。

「主、童がおるぞ。童はどんな時でも主を一人にせぬ。よってそんなもの不要じゃ。」

「……司羽、その子は？」

「……えっと……使い魔のトワだ。」

「初めましてというんじゃったかの？　主の所有物のトワと申すものじゃ。」

「……司羽、自重しなよ？」

「……善処する。」

この後、突然現れたトワに教室中から好奇心でいっぱいの視線が集められ、授業は中断。司羽の使い魔トワの名はＡプラスクラスだ

けでなく、学校中に広がっていくのであった。

第１９話：ある放課後と花言葉（前書き）

一か月オーバーしてしまいました、申し訳ありません。
もう少し早く投稿する予定だったのですが、編集に時間がかかってしまいました。

さて、こちらの作品は今年最後の投稿になるでしょう。皆さん、良いお年を

第19話：ある放課後と花言葉

「あ、泣いてる時にずっと抱きしめててくれる司羽君が戻ってきた！！」

「本当だ、優しくていつもルーンちゃんの事考えてる司羽君だ、おかえりー♪」

「……。」

授業を終えてクラスに戻ってきた司羽は、クラスメイトから『歓迎』の言葉を受けて、絶句した。教室の空気が異様なピンク色をしている様にも見える。そしてその空気の中、全員の視線が司羽へと送られていた。

「……ミシュ、これはなんだ？」

「ああ、これ？　首席がミリク先生につつかれて、あんたと付き合ってる事を吐いた上に皆に司羽との事をノロケまくった結果よ。『優しくて強くてかっこよくて料理や家事が出来て、私をいつも気にかけてくれて、泣いてる時には優しく抱きしめてくれて、いけない事をした時にはちゃんと怒ってくれて、我が儘を言っても何だかんだで全部聞いてくれるくらい私に甘くて、一番辛い時に慰めてくれて、私の心を救ってくれて、私を自由に出来たのにそれよりも私の本当の幸せを一番に考えて優しく撫でてくれて、いままでの全部を捨ててても私の傍にいる事を選んでくれて』……後なんだったかしら？」

『途中に、『私の髪を綺麗だって言って褒めてくれて』と、『私と

いつも添い寝をする時にベッドから落ちない様に気をつけてくれて』が抜けてます。他は……すいません、覚えていません。』

ルーンが言ったらしい恥ずかし過ぎる発言を真似る口調で言ったミシュナと、訂正を加えたリアに、なんだか司羽は頭が痛くなり帰りたくなった。……先程、ルーンとの事で面倒な事になるだろうとは思っていたが、まさかこんな形で恥ずかしい思いをするとは司羽も思っていなかった。

「あら、『初めてで怖かったけど、司羽がずっと優しく抱きしめてくれて凄く嬉しかった』っていうのも言ってましたよ？　……ふふふっ、まさか二人がそんなに進んでいたなんて思いませんでした。見直しましたよ、司羽君♪」

「……ミリク先生、怨みますよ？　というかそんなギリギリアウトな事まで言ったんですかルーンは。」

「本当はあのルーンさんが恥ずかしがる所を見てみたかったのですが、私にも予想外な反応をしてくれました。……ふふふっ、司羽君からはどんな話が聞けるのか、いまからもう楽しみで先生息を荒げちゃいます♪」

そういって心底楽しそうな笑みを浮かべながら本当に息を荒げるミリクのSっ気の強さにかなり引き気味になりつつ、ミリクを出来る限り無視してこの噂の元凶を捜す。

「……おい、ミシュ。ルーンは何処に行った？」

「噂を聞き付けた耳聡い子達にノロケながら足止めを喰らってるわ。……まぁ、でもそろそろ来るんじゃないかしら？　取り巻きは多い

でしょうけど、あの子に簡単に声を掛けられる人なんてそうにいないでしょうし。……私は人混みが嫌いだから抜け出して来ちゃったけど。」

『すいません、私もです。』

「……いや、謝らなくてもいいよ。もう手遅れなのが分かったし。」

司羽が溜息を着くと同時に廊下が騒がしくなったのを感じた。気配からして、恐らくルーンが戻ってきたのだろう。そう考えるのと同時に、廊下からルーンの物らしき気配が単独でこちらに近付いて来た。

「司羽！！」

「うわっ、いきなりどうしたんだ！？」

「司羽の気配がしたから走ってきただけだよ？　それより聞いて聞いて、私と司羽がお似合いだって！！　今年のベストカップルかもですね、だって♪」

教室に入って来るなり飛び付いてきたルーンを真っ正面から受け止めると、ルーンはそのまま司羽に抱き着きながら、ふにゃふにゃの笑みを向けた。……あまり言い触らさない様に注意しようとしていたのだが、そんな気が一瞬で無くなってしまった。……もしかすると、自分も結構ルーンの事を言えないのかも知れない。

「そうか、それは朗報だな。」

「うんっ、でも新聞部の記者さんが来て司羽の良いところ聞いてきたから戻ってくるの遅くなっちゃった。」

「……さっきのやつか……話してきたのか？」

「うん、全部は話しきれなかったけどね？　えへへっ、ギュッってして司羽。」

一目を憚らずに愛情表現を繰り返すルーンのお願いを聞くかどうか一瞬迷ったような迷わなかったような、そんな感じでルーンの要望に応えた。……やっぱり、結局は自分もルーンと何も変わらないのだろう。

「司羽、新聞部の記者の人が居心地悪そうにしてるわ。そろそろ貴方も戻って来なさい？」

「え？　ああ、ごめんごめん。……でも、俺インタビューとかされても……。」

「……い、いえ、もう充分ですっ。ルーンさんの言葉がありますし、インタビューはいりません。それではっ。」

ミシュナの言葉に司羽が視線を移すと、記者らしき人は赤くなっていた顔を更に真っ赤にしながらそういって去って行った。

「ルーンの言葉って……色々まずくないか？」

「貴方の行動もね。手遅れよ、諦めなさい。」

冷たく言い放つミシュナの呆れ混じりの視線を受けて、羞恥が戻

って来た気がしたので、急遽話題を変える。

「……まぁ今更言っても仕方ないし、これ以上人が集まらない内に帰ろうか？　そろそろルーンとトワを連れていって紹介しないといけないって思ってたし。」

「……？　司羽が行くなら私は何処にでも行くよ。一緒に連れてって。」

「……司羽いい加減にして、聞いてて私まで恥ずかしくなるわ。」

「……俺のせいか。」

ミシュナがそういったのを聞いて、司羽はルーンが来る前より教室が静かになっているのに気付いて、非常にいたたまれなくなった。そして、隣から服を引っ張っているトワに気付いた。今日は暖かいのでお昼寝の時間にしていたのだが、どうやら名前が出たので呼ばれたと思ったらしい。

「……んっ、主……呼んだかの……？」

「いや、寝てて良いぞ。後で起こすから。」

「……そうか、主に必要になったらいつでも呼んでいいからの？」

わざわざ起きて来てくれたトワを軽く撫でてやると、幸せそうに司羽に抱き着いて、そのまま心の中へと戻って行った。

「……本当に……タラシ。」

「……すいません。」

顔を赤らめたミシュナのその一言に、抗い難い物を感じて、司羽は素直に謝った。

「初めまして、司羽の妻のルーンです。司羽がお世話になっています。」

「トワじゃ、宜しく頼む。」

「ああ、宜しく。……ところで司羽、お前いつ結婚したんだ?」

「結婚はしてません、付き合ってますけど。」

お互いの挨拶が終わり、マスターからの疑問にさらっと受け答えをする。……別に嫌じゃないんだが、何だか今朝からルーンが暴走してる気がするな、彼氏の責任としてはしっかり言い聞かせないといけないのだろうか?　……決して、ミシュの視線が痛いからではない。

「ルーン、俺達の関係をちゃんと知らない人には誤解されやすいからちゃんと真実を……。」

「……司羽は……私と結婚したくないの……？」

「……はい？　……いや、俺が言いたいのはそういう事じゃなくて……。」

「……はぐらかすなんて、やっぱり嫌なんだ……司羽の物になれない私なんて要らない……次は司羽好みの女の子に生まれて来るから、待っててね……？」

うん、言い聞かせるとか無理。てか、ルーンの口から赤い物が……あれはヤバい。

「ちょっと待てっ、舌を噛み切ろうとするな！！　っ……本気で噛みやがった……。」

「むーっ……はにふるのふはば。」

「何するのは俺の台詞なんだが……。」

咄嗟に口に手を入れて阻止したが……指が凄く痛い。まさか本気で『要らない』と思っているとは……何だか迂闊な事が言えなくなってきたな……。

「マスター、何か飲むもの頂戴。喉渇いちゃったわ。」

「……あれは、止めなくていいのか？」

「いいのよ、止めたところで司羽の言うことしか聞かないし。目の前でイチャつかれると鬱陶しいから見ないことにしてるの。……

ほら、トワもこっち来て何か飲みなさい？」

「……あのピンクなのはなんじゃ……？」

「ああ、あれね。マスター、お姫様のご注文よ。……確か、何かの花のエキスを抽出したお酒だったかしら？」

「……ああ。」

マスターはミシュナとトワから、一瞬視線を司羽とルーンに移し、溜息とも取れる息を吐いた後に視線を戸棚のピンク色の酒に移した。どうやら三人とも司羽とルーンの事は無視をする事にしたらしい。

「ふふふっ、ここにあるお酒の事は大分覚えたわ。まぁ、味に関して諸事情により責任持てないけど。」

『俺もルーンと結婚する気がないわけじゃないんだぞ？　寧ろばっちり責任を持つつもりだ。』

「……相変わらずどんなアルコールの薄い酒でも一口と飲めないようだからな。」

『本当……？　もし嘘だったら私が口移しで司羽に毒を飲ませるよ？』

「ミシュナは酒が苦手なのか。妾は主が酔っている所を見たいのぅ……ふふふっ、今度一緒に飲んで貰おうかの。」

『あ、安心してね？　司羽がいない世界に興味なんてないし、私も一緒に飲むから。キスしたまま一緒に死のう？』

「……あああああっ、もう！！！　後ろで怖い会話しないでくれない！？」

「……ふぅ、やはり我慢出来なかったか。」

「いや、無理じゃろう。妾達の会話に微妙に同調しとるのが余計に気になるしの。」

段々と瞳の色が危なくなり始めたルーンにミシュナの我慢が断ち切られた。司羽も正直一人ではかなり心細い。……前々からルーンは黒くなる事があったが、どうやら方向性が固まってきたらしい。更に言うなら威力（？）も上がっている様な気がする。これは……一つの誤解で物凄い被害につながったりするかもしれない。

「主席ちゃん、こっちに来てこのお酒を司羽と飲むといいわ。これはフルメントって花のエキスを抽出したお酒なんだけど、フルメントの花言葉が面白くてね、『束縛』、『依存』、『永遠の繋がり』なんていう花言葉があるの。」

「へー私達にぴったり。司羽、あれ飲もう？」

「……了解。」

「ミシュナ……お前よくそんな事知ってたな……。」

「ミシュナは博識じゃのぅ。」

その後、フルメントの酒をルーンが満足するまで口移しで飲まされ、トワにちょっと羨ましそうな眼で見られながらミシュナの嫌味

を長々と聞かされた。マスターから貰ったちょっと強めのアルコールがちょうどよく感じてしまう、そんな放課後だった。

第２０話：入れ替え試験の始まり（前書き）

あけましておめでとうございます。今年も絆録を宜しくおねがいします。

第２０話：入れ替え試験の始まり

「えーそれでは今回の入れ替え試験の説明に移らせていただきましょう、シノハちゃん。」

「今からお前達をペアごとに二つに分ける、司羽がいるから一応説明するが、これは人数が多すぎる為だ。これについてはいつも通りペアの中で学内順位の高い者を基準に高い方からＡとＢに分かれてもらう。……ルーン、そう睨むな。私も悪気があってこうしているわけじゃないんだ……おい、司羽、なんとかしろ、冷や汗が止まらん……。」

「無理です。」

入れ替え試験当日、今日はルーンもちゃんと目覚めたようで、元気にシノハ先生へと不平の視線を送っている。だが、ルーンとはとことん離される様だ。まぁミシュもいるし、ルーンは心配いらないだろう。心配なのは八つ当たりされるであろう犠牲者だ。

「取り敢えず場所は訓練所の五番と六番を使用します。あそこは天然の樹海になってますからねー、迷わないように気を付けてくださいよー？」

「おいおい、大丈夫なのかそれ。」

「大丈夫ですよ、最悪の場合でも直ぐに救助出来るようにしてますから。」

「えー、今回のルールだが、面倒なのでプリントに纏めてきた。ア

リエス、配布を頼む。」

「はーい。」

回ってきたプリントの詳細に眼を通す。……なんだかかなり本格的なサバイバルになりそうだ。

入れ替え試験概要

・今回の試験は数日をかけて行う。（夜間有り）

・フィールドは訓練所五番六番の樹海を使用する。

・試験中は個々に専用の腕輪をする。防御フィールドを発生させる腕輪ではあるが、あくまで試験中の重大な怪我を防止する為の物である為魔法や物理ダメージを減少させる事は出来ない。

・腕輪は体の表面にフィールドを展開し、ダメージが蓄積されると腕輪の安全装置によって失格判定がなされる。尚、ハンデとして上位のクラスになるに従い失格の耐久度が下がる。

・腕輪が外された場合失格とする。

・ペアの内で片方が失格となった瞬間に試験を継続する資格が消滅する。

・失格後は各自指定の控室へと集まること。

・試験開始時刻は十時を予定している。尚、これはフィールドへは十時から入る事が出来る為その間に散策やターゲットのマークなどの行動は各自の自由であるという事である。この時は腕輪のフィールドが強化されている為、魔法や物理攻撃は無効化される。この強化が解除されるのは十時三十分を予定している。

・失格の順にクラスが決定される。

・食糧等は支給エリアで教員から受け取る事。二十四時間体制で受け付けているが支給するのはその日一日分のみである為、長期に渡る生存者は何度か取りに来ること。

・人数が規定数まで減少したら試験終了とする。

と、まぁこんなことに加えてシノハの熱弁が書かれていたが、それは別にいいだろう。

「大まかな事はこれに書かれてるんですが、何か皆さんから質問はありますか？」

「はい。」

「はい、なんでしょう司羽君？　スリーサイズは９５・６０・９３ですよ？」

「……数日に渡ってとありますがその間外部との連絡は取れないんですか？」

「照れ屋さんですねぇ、司羽君は。ちなみに外部との連絡はフィールドから出ないという条件化でならいいですよ。例えば緊急の用事やラブコールなんかは支給エリアの教員あたりを使って伝える事は出来ます。」

さらっとスルーした司羽に不満そうな表情になりながら、ミリクは答えた。余計な答えも一緒について来たが。

「他にはありますか？」

「あと一つ。この十時から三十分の間のフィールド強化されてる時間は攻撃自体はしてもいいんですね？」

「……まぁルール上は可能ですけど……無駄ですよ？」

「いえ、可能ならいいんです。それが聞きたかっただけなので。」

なるほど、可能なのか。フィールドの強度ってのはどんなものなんだろうか？

「えーっと、取り敢えず他に質問はありませんね？　ならそろそろ十時なのでＡ班Ｂ班共に各選手控室へどうぞ。」

ミリクがそういうと、全員が一斉に動き出す。視線を振ると、教室の後ろの方でリアが待っていた。今日から何日かは一緒に行動する事になる。前の覗き騒動の時から少しギクシャクした感じがあったので出来ればこの数日で仲良くしたい物だと思う。あれは完全にこちらに非があったのだし、もう一度期を見て謝っておいた方がいいのかもしれない。司羽がそんな事を思いながらリアの方に向かうと隣にいたルーンが服の袖を引っ張った。

「司羽、頑張ってね。私も私の体には誰にも触れさせないから。」

「ああ。ミシュと仲良くやるんだぞ？　ミシュも、ルーンの事頼むぞ。」

「……仕方ないわね。主席に迷惑を掛けるわけにはいかないし、司羽と同じクラスに入れてくれたマスターにも悪いから、少しは真面目にやってあげるわ。」

「ああ、そうしてくれ。ミシュともまた一緒に授業受けたいからな。」

「……まぁ、主席がいるんだから大丈夫でしょう。」

司羽がそういうと、ミシュナはふいっと顔を背けてしまった。なんだかちょっと顔が赤い。照れてるのが丸わかりだ、その代わりに嫉妬オーラを出し始めたのが一人いるが。

「ルーン、頑張れよ。ルーンとはずっと一緒にいたいからな。」

「……うん、頑張る。……司羽……。」

「なん……っ。」

「ん……んっ、ちゅっ……大好き……。」

不意打ちで飛びついて来たルーンを受け止めると、ルーンがそのままキスを求めてきた。周りからの好奇の視線が痛いが、もう遅い、後の祭りだ。

「はぁっ……行くわよ、主席。」

「うんっ。それじゃあ司羽、頑張ってね。」

ミシュナが呆れた声でそういって教室を出るのに応じて、ルーンも一緒についていく。……さて……。

「リア、俺達も行くか。」

『……刺激が強すぎます……。』

「すまん……。」

やっぱり自重を覚えた方がいいのかもしれない。入れ替え戦の前だというのにそんな事を考えている司羽だった。

第２１話：人の恋路を邪魔する奴は……

「……これは、かなりの人数だな。」

『全校生徒の半分ですからね。正確な人数は調べてみなければ分かりませんが、かなり大人数である事は確かです。』

控室らしき大ホールへ入ると、数百人はいるだろうと予想出来る人数の学生が既に集まっていた。司羽達が最後と言うわけではないので、まだ増えるだろう。司羽が辺りを見回していると、徐々に視線が自分とリアに集まりだしたのに気が付いた。

「……見られてるな。」

『ルーンは人気者ですから。実は私もルーンと親しくしているので、結構やっかみを受けたりするんですよ。見た目と違って、基本的に誰に対しても付き合いの悪い子ですから。その割に、あの見た目と能力で男女問わず人気は凄いんですけどね。』

「なるほど、ルーン関係で嫉妬を受けてるのは俺だけじゃないって事か。案外そういう所が相性に関係してるのかもな。」

『確かに、そうかも知れません。』

そんな感じで司羽とリアが談笑（見た目には司羽が一方的に話している）をしていると、後ろに慣れた気配を感じた。

「俺の後ろに立つな。」

「……どうしたんです？　ルーンちゃんと離れておかしくなりましたか？」

「いや、言ってみたかっただけです。」

背後からミリクが可愛そうな人を見る様な視線を送って来るのに堪えられず、そっぽを向きながら答えた。一度は言ってみたい台詞だったんだよなー、これ。

「で、何か用ですか？　もうそろそろ十時になりますよ？」

「……んー、ちょっと胸騒ぎがしまして。」

「……どういう事です？」

「取り敢えず、貴方達は目立つみたいなので……。」

司羽がミリクの方に向き直ると、ミリクはリアと司羽を交互に見た後、ホールの端を指差した。何やら周りに聞かれたくない話をするらしい。司羽がリアの方へ視線を送ると微かに頷いた。ミリクが真剣なのを感じ取ったらしい。三人は周りから向けられる視線を避ける様にホールの端に寄った。

「……実は、ルーンちゃんと貴方達の事なのですが……。」

『どうしました？　何か不備が？』

「あったとしても、もう始まりますよ？」

「ああ、いえ、そういう事ではありません。」

ミリクはそれを否定して、視線を周りにさっと流すと難しい問題を考えるような顔をした。

「実は昨日データを弄ってましたら、ルーンちゃんとリアちゃんのペアの相性が最悪になってたんですよ。」

『私とルーンの相性が？』

「……まさか、俺のせいか？」

ルーンがヤキモチ焼きなのは今までの経験から過ぎる程に理解している。……となると、自分とリアが組んでいるせいで、という事が理由になっている可能性が高い。心の相性がそのまま反映されるらしいし。

「私も最初はルーンちゃんの可愛いヤキモチが原因かなーと思ったのですが、どうもそうではないらしくて。」

「……と、言うと？」

「うーん、簡単に言えば、改竄されているみたいなんです。」

『改竄？　私達のデータをですか？』

「ええ、何故だか良く分からないけど、相性検査の内容に関係なく、二人の相性が最悪になる様に元々セットされていたみたいなんですよ。」

『そんな……。』

ミリクは人差し指を頬に当てて、片目を閉じ、暫く考える様に沈黙した。

「司羽君が来る前はいつも二人一緒でしたから、今回もそうなると踏んでこんな事をしたのでしょう。誰が得をするのか分かりませんが、とても巧妙に隠されていたので、生徒が悪戯でやったというのは考え難いですし、そんな事をすれば退学ですからね。」

「リスクに見合ってませんね、確かに。」

ミリクは司羽の言葉に相槌を打つと、リアの方に視線をやった。

「修正をしても結果的にルーンちゃんと司羽君の相性が一番になってましたし、シノハちゃんの思い付きがなくても、ルーンちゃんとリアちゃんが一緒になる事は取り敢えずありませんので、私からは特に何もしませんでしたが……。」

「胸騒ぎがする……という事ですね？」

「はい。こんな事を公にすればセキュリティの面で各方面から非難されますし、結果的に何かに影響を及ぼしている事もないので、この事は秘匿しようと思っています。ですが、もしもの時は……。」

「まぁ、俺も気をつけますよ。リアはルーンの親友ですし。」

「ふふっ、男の子ですね。……それでは、そろそろ時間なので私はこれで。試験中にえっちな事しちゃ駄目ですよ？」

いつも通りの軽口を叩いて司羽の表情を引き攣らせると、ミリク

はその場から上機嫌で去って行った。司羽は溜息をついてから、隣で黙り込んでいるリアへ眼を向けた。フードで表情が分からないが、何となく不安が感じ取れる。司羽は見兼ねて頭に手を乗せようと手を伸ばし……そのまま手を引っ込めた。

「リア、悪い。つい癖で。」

『いえ、こちらこそすいません。取り乱してしまって。』

司羽の手が伸ばされた瞬間に、リアは一瞬で司羽から間合いを取っていた。微かに感じた殺気は霧散していたが、フードに隠れた表情は、なんとなく申し訳なさそうな顔をしている気がした。

「気をつけるよ、訳あって顔を隠してるんだもんな。」

『ありがとうございます。』

うーん、何だか一発で空気が悪くなった気がするな。この調子で数時間、もしくは数日の間、間が持つのだろうか？

ビビーッ

「ん、時間か。」

『はい、三十分の間は攻撃は無力化されますが、移動は出来ます。行きますか？』

「……そうだな、行くか。」

その何となく固い雰囲気のまま、司羽とリアは樹海の形式を取っ

ているフィールドへ入って行った。

――――――――

「うーん、本当にムーシェの言った通りになっちまったな……。」

『どうします？　下手をすると二百人はいますよ？』

リアとフィールドに入ってから少し歩いた辺りで、ホールで感じた視線がそのままついて来ている事に気がついた。まだ開始時間になっていない事もあって気にしていなかったのだが、どうやら開始と同時に襲い掛かってくるつもりらしい。

なんというか……鬱陶しい事この上ないな。ルーンと一緒にいる時は気にならなかったし、こういう嫉妬の視線は親父のせいでか

なり慣れているつもりだったけど、こうまであからさまだと流石にウザい。……それに、なんだか分からないけど苛々する。この視線のせいか？

「……はぁっ、ルーンの人気ってのはヤバいな。人気投票の事は知ってたけど、ここまでだとは思わなかった。」

『攻撃が通る様になるまで三十分ありますし、逃げますか？　ほぼ烏合の衆の様ですが、数人Ａクラス級の方もいるようですし。』

「……そんな奴らまでいるのか。大事なアピールの場じゃねえのかよ、暇な奴らだな。よっぽど頭が悪いのか？」

苛立ちから悪態をついて舌打ちをすると、近くで数人の気配が動いたのを感じた。どうやら聞こえたらしいね。そんなの気にしないけど。

「……逃げる必要はないだろ。それに、どこに行ったところでこの樹海から出られないし、ああいうストーカーみたいのはしつこく付け回して来ると思うけど？」

『ですが、この数を相手にするのも無謀かと。試験中はフィールドの判定で失格になってしまいますし、私達Ａプラスクラスは一発でも掠るとアウトになると思いますよ？　流石に全員の攻撃を回避、防御をしながら戦うのは厳しいです。この前の司羽さんの動きを見ている限り可能なのかも知れませんが、私には……。』

リアの筆談に納得すると、立ち止まって視線を周りに投げた。うーん、ここはリアの言う事にも一理あるんだけど……やっぱり逃げるのは癪に障る。ここからでも隠れている奴らが笑いながらこち

らを見ているのが分かるし、凄くストレスを発散したい。

「リアを守りながら……ってのは確実とは言い難いな、俺も魔法はそこまで詳しい訳じゃないし、もしかしたらリアに掠るくらいならあり得るかも知れない。」

『私を守って、自分に当たるかもしれないとは言わないんですね？』

「ああ、俺は自信家だからな。実力は伴ってると思うが。……もしかして、今のちょっと皮肉入ってたのか？」

『少しだけ、ですけど。』

リアの質問に苦笑しながらそう返してみると、リアは案外素直にそれを認めた。まぁ、ちょっと傲慢だったかもしれない。リアは守って喜ぶ様なタイプでない事が分かったな。いや、だからどうするって訳でもないんだけど。

『なら、どうしますか？　司羽さんは逃げたくないのですよね？』

「そうだなぁ……確かに逃げたくはないけど、フィールドの問題があるみたいだし……。少しばかり狡い感じがするけど、やっぱりやるしかないか。」

『狡い、ですか？　何をするつもりです？』

「なに、フィールドを利用させてもらうのさ。ルール上も問題ないだろうしな。」

リアはどうにも理解出来ないらしく、スケッチブックを持ったま

ま動かなかった。取り敢えずミリクにも確認を取ってあるので、実行に移す事にしよう。このストーカー共のせいで溜まった分のストレス発散にもなるだろうし。取り敢えずターゲットは……あの草の影で結界張ってこっちを見てる馬鹿。

「取り敢えずそこに隠れてるストーカー男、気持ち悪い眼で見てんじゃねぇよ。三原色とか、服の色の組み合わせも気持ち悪いしな。周りにいる奴も引いてんじゃねぇか、さっさと消えろ。」

『ちょっと司羽さん？　何を言ってるんですか？』

「リアは下がってろよ、あんなのに近づいたら馬鹿が移るぞ？」

「きっ、貴様ぁっ！！！」

リアもいきなりの事に驚いてるみたいだけど、まぁ俺のストレス発散の為だ。しっかし周りからの視線が鋭くなったな。こいつら隠れる気あるんだろうか？　取り敢えず結界を解いて出て来たこの馬鹿野郎を使いますかね。おーおー、怒ってる怒ってる。

「出て来いなんて言ってねぇだろ、消えろよ。目障りなんだ。」

「くっ、お、俺はこの前Ａマイナスに上がったんだ！！　お前みたいなルーンさんに気に入られたからＡプラスに居られる様な奴とは違う！！　暴言を訂正しろ！！」

「なるほど……そういう意味での嫉妬もあったわけね。」

というかその話はムーシェの時ので終わりだと思ってたのに、まだ引きずってる奴がいるのか。まぁ、当然俺は気にしないんだけど。

今回ちょうどクラス入れ替え試験なんだし。

「確かに俺がルーンに好かれているのは認める。だけどそれがお前に何の関係があるんだ？　クラスの事だって今回の入れ替え試験ではっきりとするんだからいいだろ。お前が俺を付け回す理由なんてないんだよ。」

「そ、そんな事はない！！」

「ホモなのか？　お断りだ。」

「違うに決まっているだろうっ！！」

いかんいかん、顔がにやけてしまいそうだ。こいつはなかなか面白い、俺の選別眼も中々の物だな。さて、こいつらにはルーンも困ってたみたいだし、リアも待ってるし、さっさと終わらせますかね。

「おいおい、なら何だってんだ？　まさか俺がルーンと愛し合ってるのがいけないなんていわないよな？　お前に何の権利がある。俺は他人の女を誘惑する様な下種な真似は絶対にしないが、少なくともルーンは誰と付き合ってた訳でもない筈だ。俺だけじゃない、ルーンもお前らには苛立ってんだよ。いい加減に引き際を見定める眼を持たないとな？　お前がどれほどルーンの事を好きなのかは知らないが、こんなストーカー染みた行為に及んだ時点で、俺はお前が屑虫以外の何物にも見えないんだ。鏡で自分を見てみろ、滑稽だぜ？」

「きっ、貴様っ、絶対に許さんっ！！　そんな暴言を吐いた事死ぬほど後悔させてやるから覚悟しておけっ！！」

しっかし月並みな台詞だな。こういうのは全世界（異世界的な意味で）共通なのか？　でも、うん、大分すっきりした。まだ多少残ってるムカムカはきっとその内解消出来るだろう。と、いうかそのつもりだしな。

「覚悟しとけって、そんな覚悟いらねぇだろ。お前如きが何をするって？　寝言は寝て言え、大口叩くと後で後悔するぜ？　少なくとも、俺がムーシェより強いのは知ってる筈だろ？」

「ふんっ、大口を叩いて後悔するのはお前だ。どうやら気付いていないみたいだが、ここら一帯に二百人近いルーンさんのファンがいる。俺とお前の今の会話は全部聞こえただろうなぁ？　三十分後が楽しみだよ、せいぜい足掻くといいさ。」

勝ち誇った顔でこちらを睨みつけてくる馬鹿。自分の力でとは思わないのかね？　その時点でこいつはここまでの人間だな。まぁ、何を期待してた訳でもないけど。取り敢えず、俺に勝つっていう良い夢を見れたんだし、もういいよな。

「そういう事なら、三十分後を楽しみにするとしよう。さて……何人残ってるか見物だな。」

「ハッ、何をっ。」

ピピーッ

「……が……ぁっ……。」

「ああ、残念。また下のクラスから頑張ってくれ。」

ドサッ

ピピーッ　ピピーッ　ピピーッ　ピピーッ　ピピーッ

司羽の眼の前で勝ち誇った様な笑みを浮かべていた男の顔が苦痛に歪むと、単調な機械音が聞こえ、続いて男は地面に崩れ落ちた。司羽と男のやり取りを呆然と眺めていたリアは何が起こったのか分からず、地面に倒れた男を眼で追った。続けて辺り一帯に先程と同じ機械音が何度も響き渡り、人が倒れる音も同時に何度も聞こえた。リアがそれを失格を告げる音だと気付くには、そう時間は掛からなかった。状況を理解し、司羽を探したが、姿どころか気配すら感じない。だがその時、眼の前に突然司羽が現れ、リアは咄嗟に身を竦ませてしまった。

「悪い、驚かせたな。俺はこいつらにお仕置きをして回るから、リアはここで待っててくれ。直ぐに戻る。」

『分かりました。』

リアを気遣うように笑った司羽の言葉にリアがなんとか答えると、司羽は次の瞬間にはまたその場から消えてしまっていた。機械音が止み、司羽が戻ってきたのはそれから二十分程経った頃だった。

第２２話：リアとルーン

「司羽君、分かっているとは思いますが、これはスカウトの場でもあるんですからね？　準備時間中はデータも残りませんし……まぁ、強化フィールドを貫通出来る訳がないと、たかを括っていた私にも確かに落ち度はあるかも知れませんが……。」

「まぁ、確かにやり過ぎたのかも知れませんね。ほんの脅しのつもりだったんですけど。」

『脅しで参加人数の一割を失格にしてしまった訳ですか。私もびっくりしました。』

司羽が戻って来た後、試験時間になったという時に、放送で準備時間延長の知らせが急遽樹海の中に伝わった。何かトラブったのかなーとかそんな事をリアと話していると、ミリクが入口の方から走ってこちらに向かって来るのが見えて、今に至る。問題になるかもとは思っていたが、やはりマズかったらしい。

「こんな事は学園史始まって以来初めてです。デタラメ過ぎますよ。控室はお通夜ムードで泣き出す子が続出してますし……今回は有名所のスカウトがかなり来てますから、皆凄くやる気だったのに、開始前に失格なんて汚名どころ話じゃありません。あの子達を受け入れてくれる場所が無くなっちゃいます。」

「……まぁ可哀相だとは思いますが自業自得でしょう？　そんな大事な時に、俺への嫉妬でストーカーをして来る様な馬鹿な奴らに掛ける慈悲を俺は持ち合わせていませんよ？　それに俺はちゃんと加減しましたしね。あの程度で俺にやられるくらいなら、時間にな

ってから向かって来ても結果は何も変わりませんよ。」

『加減……？』

更に言うなら、途中で戦意喪失して逃げ出した奴らはそのまま逃がしてやったし、俺に敵意を持ってる奴だけピンポイントで狙ったから他の人に被害は出ていない筈だ。

「それに、今更どうしろって言うんですか？」

「別に司羽君に何かを求める訳ではありません。ただ、このままでは問題があるので、あの子達への救済措置ということで試験への復帰を認めて欲しいんです。」

「ああ、成程。後で何か文句を言われても困るから先に言いに来た訳ですか。構いませんよ、あちらの力量も把握しましたし、間違っても遅れを取る事はありませんから。これに懲りてもうあんなこともしないでしょうしね。」

「ふふふっ、ありがとうございます。そう言ってくれると思ってあの子達は既にフィールドに解放しておきました。試験は直ぐにスタートしますので、暫くお待ちください。」

「……。」

つまり、本当に確認の為だけに来たということか、まぁミリク先生の予想は外れてないし、結果的に効率が良くなるから構わないけど、なんかこの先生は食えない。今にわかった事じゃないけど。

「それでは、ルーンちゃんの為にも頑張ってくださいね。私やシノ

ハちゃんも、また貴方と同じクラスでお勉強出来るのを楽しみにしていますから。真面目で可愛い学生、それで頭も良くて強いなら大歓迎ですよ♪」

「……ありがとうございます。」

司羽が溜息をつきながらそういうと、ミリクはそれを微笑みで受け止めた。そしてその場から飛ぶように去ると、直ぐに気配を感じなくなるほど遠くまで行ってしまった。確かに、教師としても一流らしい。暫くすると、スピーカーからザザザッという音が聞こえてきた。

＜みなさーん、お待たせしました。これより、B班のクラス入れ替え試験を開始します。それでは、開始三十秒前……十……五、四、三、二、一、開始っ！！＞

「始まったか。」

『はい、気を入れなおして頑張りましょう。』

こうして、司羽の初めてのクラス入れ替え試験は騒動の中に始まったのだった。

「なんだこれ、新手の作戦なのか？」」

『きっと噂が広がったのでしょう。試験会場のピリピリした空気の中であの騒ぎでは、情報が伝わるのも早いでしょうし。』

「そうなんだろうけど……。」

試験開始から体内時計で既に三時間が経とうとしていたのだが、どういうことか、敵の姿が全く見えない。これはこっちが逃げ回っている訳でも、気配を消している訳でもない。相手が気配を消していてこっちが掴めていない可能性もあるが、それはないと思う。つい一時間ほど前まではちょこちょこと敵が近付いて来たりしていたのだが、こちらに気付くと直ぐに逃げ出してしまうので追う気にもならない。司羽としては、逃げる相手の様子が昔のトラウマをチクチクと刺激してきて堪ったものではなかった。今一番近くにいる敵でも直線距離にして二キロ以上離れているのだ、わざわざ出向く理由もないし、二人でこうして座り込んでしまっているというわけだ。

「これを終了まで続けるのか……。」

いっその事こちらから出向いてもいいのだが、さっきの様子をみる限り逃げ回る生徒を後ろから攻撃することになりそうなのでなん

となく気乗りしないのだ。弱い者苛めしてるみたいだし。そうしていると、リアが持参のポーチから何やら取りだした。

「……なんだ、それ。」

『スケッチブックですよ？』

「それは見れば分かるんだけど……。」

リアが取りだしたのは筆談に使っている物とは別のスケッチブックと鉛筆、そして食パンの様な物。これは恐らく消しゴムの代わりなのだろう。随分本格的なスケッチセットだ。確かに、持ち込みは自由だと聞いているが、娯楽の物を持ち込んでいる学生がどれだけいるだろう？　リアに持ち合わせていた真面目なイメージを改めなくてはならないのかもしれない。そんな事を考えていると、司羽の中で何かが動くのを感じた。

「……起きたのか。おいで、トワ。」

「……んっ……主……。」

「おはよう、トワ。」

司羽が呼ぶと、トワは眼の前に顕現した。眠そうに手で眼を擦って、司羽へと向けていた視線をきょろきょろと辺りへやると、リアの方へ向いた所で視線を止めた。

「……お腹すいた。」

「そういえば、もうお昼だもんな……今ここで寝て夢を食べさせて

あげたいけど、それは出来ないし。支給用の食糧ならあるけど、食べるか？」

「……んーんっ、それは主の。」

司羽がサンドウィッチを取りだしてトワへと差し出すと、トワは首を横に振った。その仕草に司羽の胸は酷く打たれた。司羽は昔見たドラマを思い出した。今のトワはまるで親に遠慮して自分が我慢しようとする健気な子供の様で……凄くお父さんの気持ちになってしまった。司羽は思った、トワを飢えさせてはならない。というか、元々二、三日くらい何も食べないでも平気だしトワにあげようと思っていた物だったので食糧的な問題は何もない。

「そっか、でもリアは何かやってるし、一人で食べると寂しいから半分こにしような。」

「主がそういうなら、それでいい。」

「じゃ、食べるか。」

トワは頷くと、司羽の膝の間に座って寄りかかってきた。ルーンとトワは膝の上とか膝の間が好きらしい。良く分からないが、ここが一番安心するらしい。まぁそういわれて悪い気はしない。司羽がサンドウィッチを一つトワに渡してやると、早速それをパクついた。トワが寄りかかったまま見上げるようにしてきたので、司羽も一つ取って食べる。うん、なかなか美味しい。

「……ん？」

シャッシャッ

視線を感じてそちらを向くと、リアがこちらを向いて鉛筆を走らせていた。司羽も絵のモデルになった事はない。親父は何回か肖像画なんて書いてもらってたみたいだが……。少し落ち着かない。

『気になってしまいますか？』

「いや、大丈夫だ。でも、俺はモデルなんてやった事ないぞ？」

『はい、構いません。私は書くこと自体が楽しくてやっているのですから。』

リアは器用にスケッチブックを入れ替えながら筆談をしている。会話をするとリアの邪魔になってしまうかもしれない。司羽はそう思って視線をトワに戻した。

「今日は随分遅くまで寝てたんだな？　いつもはもっと早いだろうに。」

「昨夜はミシュナが面白い本を読んでくれていたのじゃ。」

「へー、ミシュがか。それってどんな本だったんだ？　あいつの読む本って凄く難しいイメージがあるんだけど。」

「えっと……タラシ……というのじゃったかの？　女好きの主人公には沢山の秘密の恋人がいるんじゃが、その内の二人に主人公の悪行がバレてしまうのじゃ。女達は主人公を取り合うんじゃが主人公はそんな時に他の女に手を出してしまい。結果的に女達に殺されてしまうのじゃ、因果応報というやつじゃな。他の一夫一妻制の国の本らしいが……ミシュナは主の様だと笑っていたのぉ。」

「……あいつ、トワになんてもん見せやがる……。」

なんだかミシュのその時の様子が眼に浮かぶようだ。なんだかあいつ最近ストレス溜まり気味みたいだが、それを無垢なトワに向けないで欲しい。……なんだか、凄く自業自得な気がするんだが気のせいの筈だ。俺は何もしていない。

「トワ、そんなの見ちゃ駄目だぞ？」

「……？　何故じゃ？　ミシュナは教訓ものの本だから良く覚えておきなさいと言っていたぞ？」

くそっ、今すぐ参加者を全滅させて試験を終わらせてやるか……？　でもそんな事してもあいつらの方が終わってないだろうし、ミリク先生には文句言われるだろうしな……なんでミシュとは班が違うんだっ！！

「主、どうかしたのか？　ミシュナに伝えることがあるなら童が行って来るぞ？」

「良いんだよ、トワ。今は試験中だからな。ミシュには俺が後でちゃんと言っておくから。」

軽くいなされて反撃される未来しか見えないけどな。司羽がその後暫くトワと話していると、トワは余程昨日寝ていなかったのか、また眠そうにとろとろとし始めた。司羽がトワに寝てもいいと言うと、トワは微かに頷いて、フッとその場から消えた。トワの気配が薄くなっていく、どうやら完全に眠ってしまったらしい。

「あ、そういえば絵を描いていたんだったな。すまん、トワがいなくなっちゃったけど大丈夫か？」

『はい、もう殆んど出来上がってますし。後は仕上げだけです。』

「そうか。」

絵を描き始めてから一時間になるかならないかという程度。もう少しだというのなら少しだけ動かずに居よう、邪魔しちゃ悪い。暫くその場でじっとしているとリアが鉛筆を置いた。どうやら書きあがったらしい。リアはスケッチブックをこちらに向けた、どうだろうかと聞いているようだ。司羽は絵の方に視線を移すと表情がほころんだ。

「ははっ、俺はそんなに優しそうな顔してたか？」

『はい、とても。』

率直に返されて司羽は咄嗟に言葉に詰まってしまった。あの絵の通りだとするなら、自分はリアにはなかなかの好印象を受けているらしい。司羽は専門的な意見を言うことは出来ないので、素直に喜ぶ事にした。事実その絵は司羽からみてもとても上手く書けていたのだ。

「ありがとう。絵、上手いんだな。結構書くのか？」

『それなりにですね。ルーンを良く書かせてもらっています。試験でもいつも一緒でしたし。』

「……いつも持ってきてるのか？　そのセット。」

司羽が聞いてみると、リアはコクリと頷いた。そこで司羽は先ほどから気になっていた事を聞いてみる事にした。

「ちょっと思ったんだが、試験の時っていつもこんなに暇なのか？」

『はい。試験の時にルーンとペアになるようになってから試験中に攻撃される事はなくなりました。今回の様に逃げ回られる事はあまりありませんが、基本的にルーンを敵として相手にするような方はこの学園にはいないですから。次元魔法を相手にするなんて自殺行為ですから。』

「……先生達もそんな事いってたが、次元魔法ってのはそんなに強いのか？　あの召喚魔法は確かに凄かったが、魔力的な負担もかなり来てたみたいだし……次元魔法自体はそこまで実用的に思えないんだが。」

実際にルーンと戦った時も次元魔法とやらは使われなかったしな。警戒はしてたけど、結局ルーンは普通の魔弾での波状攻撃のみに留まってた。とはいえ、ルーンが強いのを疑ってる訳ではない。魔弾のパワーは俺を死なさないように手加減してたんだろうけど、あの量を同時に操ってたし、ルーンが出した防御壁は確かに滅茶苦茶だった。破壊するのにわざわざ気を流して中和させたくらいだ。並みのだったらそのまま身体強化に使ってる分の余波で壊せるし。だからルーンの力自体を相手にするのが自殺行為っていうなら分かるが。

『そうですね。時間もありますし、私の知っている限りの次元魔法や魔力の知識を貴方に教えておいた方がいいかもしれませんね。貴方はルーンの恋人なのですから。』

「……そうだな、正直良く分かってないんだ。ルーンに聞くチャンスもなかったし。」

時間は有り余ってるし、リアと話す事もあまりなかったからコミュニケーションを取るのは悪くない事の筈だ。個人的にも結構気になっている事だし。

『次元魔法の例としてルーンが使ったあの魔法を挙げてみましょうか。ルーンから聞きましたが、司羽さんは、ムーシェさんに召喚魔法の事で相談されたことがあったそうですね？』

「え？　ああ、そんな事もあったな。って、なんでルーンがそれを知ってるんだ？」

『ルーンは隠れて聞いてたみたいですよ？　それはともかく、ムーシェさんの推論は大部分は当たっていた訳ですが、数ヶ所間違えてる場所があるんです。』

「……間違い？」

ルーンにはあんまり詳しく聞いてないが、何が間違えているんだろう？　とりあえず、俺もまだまだ魔法について覚えなければならない事は多い。余計なことは言わずに教えてもらっておいた方が良いだろうな。

『ルーンが魔力を魔力貯蔵用の魔法陣に溜めていた事は知っていますか？』

「……そういえば、そんな事もいってたな。戦い終わった時、もう魔法陣の魔力もなくなっちゃったって言ってたし。」

『ムーシェさんがこれを使っていたという可能性を外した事からも分かる通りこれは普通私達が使える様な物ではない超高位の魔法なのですが、実は次元魔法の様に大量の魔力を使う者にはかなり重要だと言われている魔法なんです。学内で旅行に行った時に使ったゲートがあるでしょう？　あれも次元魔法の産物なのですが、魔力を溜め込む魔法陣の中に作ることで、一般の人が魔力を注ぎ込むだけで、技術者がいなくとも半永久的に稼働させる事が出来ます。そして、後はムーシェさんが言った理論で道を作るのです。テレポートが不可能なのは知っていると思いますが、あのゲートのやり方は次元魔法の先人が編み出した抜け道ですね。』

「成程。」

それも驚いたが、リアの文字を書くスピードにもびっくりだ。ペン先が見えん。しかし魔力を溜め込む魔法陣か……。

『この魔法陣なのですが、一度に溜めこめる量には限度があるとはいえルーンの力量ですとかなり膨大な量を溜めこめますから、実は本来ならルーンが何かを代償にする必要は皆無でした。それどころか、召喚魔法の魔力を全て魔法陣に溜めこんでおいた魔力で補ったとしても、数百分の一を使うかどうかなんです。あれにはあの子が何年も溜め続けた魔力が魔法陣の許容量限界まで入っていた筈ですから。あの魔法陣はそういう異常な物なんです。』

「……それってかなり話が変わって来るんだが……。」

それなら俺の時はいったいどうなってたんだ？　他の可能性っていうと、俺自身がそこまでルーンに負荷をかけるような存在だったのか？

『今言ったように、次元魔法というもの自体にかかる魔力はムーシェさんが言ったように確かに膨大ですが、そもそもこの魔法陣が使える時点で次元魔法に使う魔力に関してはなんの問題もありません。ムーシェさんが読み違えたのは、ルーンがこの魔法陣を使えると知らなかったからでしょう。魔力とは減れば最大値まで回復します。人間の治癒能力と同じです、怪我をすれば治るでしょう？　魔力の治癒能力とでも言ったところですね。この魔法陣は魔力が健康体の時にサボっている治癒能力を使って溜められるんです。これって意外と馬鹿にならないんですよ。特にルーンはあんな森の近くに住んでますから基礎回復速度も鍛えられてて早いですし、魔法を普段通り使っても七日に一回くらい召喚できちゃうんじゃないでしょうか。大規模であり、ルーンが相手の意志を無視してこちらの世界に連れてくるような契約を行うのですらその程度なのです、戦闘で使う程度の次元魔法なら魔力についての心配は全く必要ないでしょう。とはいえ殆んどの人はムーシェさんと同じ様にルーンがあの魔法陣を使えることを知りませんから、単純にルーンの強さを噂で伝え聞いて恐れている場合が多いのでしょうね。次元魔法の難度だけは有名ですから。』

「他の奴らがどう思ってるかは正直どうでもいいが。つまり、ルーンはその魔法陣を使えるから次元魔法自体を打つリスクはそこまで問題じゃないんだな？」

『はい。特に戦闘で使うような魔法ですと、別空間を作って逃げ込んだり、相手を隔離したり、相手を別空間に隔離した状態でその空間ごと消滅させてしまう事です。流石にルーンもそこまではやっていませんが、別空間を作ることは次元魔法の初歩ですし、ルーン程の魔法使いならば容易に可能なはずです。なんせあの子は現存する空間を一定範囲でなら変化させる事も出来るのですからね。ちなみ

にこれは次元魔法に限った話ではありませんが、一から何かを作り出す創造より何かを変えたり探ったりする干渉の方が格段に難しく、魔力も大量に消費します。この事実から見ても分かると思いますが、次元魔法使いの中でもルーンはかなりの実力者なんです。こんなものなくともあの子は十分強いのですが、やはり世界で数人の力というのは前に出されてしまう物なのでしょうね。これのせいでルーンはあの若さで歴代に名を連ねる様な存在になってしまったわけですし。』

「へぇ、ルーンはそこまで有名だったのか。だが、なるほどな。魔法の仕組みってのが分かってきた。それと次元魔法が強いって言った理由もな。確かにちょっと反則っぽい技術だな。ルーンは魔力を通常の数百倍近く溜めておける上に、攻撃に使うときの使い勝手の良さが高すぎる。やられる前に倒すか、魔法を解く必要があるだろうな。……それだけって訳じゃないが、まぁ普通の人間じゃあ対処のしようがないな。」

いくつか対策は考え付くが、事実俺がこの世界に連れてこられた時もかなりの強制性が見受けられたし、それを攻撃的に使われるのはなるべく勘弁してもらいたい。本気で殺しにかかるような戦いなんてしたくないし。

「でも言いたい事はなんとなくわかった。つまり、ルーンがあれだけ疲弊したのは、俺以外の何かにも干渉してたからなわけだな？」

召喚魔法自体に魔力を消費していたのではないとしたら原因は俺くらいだが、先ほどからの話を聞いている限り俺という人間に干渉したとかいう話ではない気がする。話に聞いた相手を閉じ込める魔法だって一応は『相手という人間』に干渉しているのだ。それは大した問題ではないと話しているのだから、ルーンが干渉したのはも

っと別の何かだろう。恐らくなんらかの形で俺が関与している物だと思うけど。

『ええ、あの子は恐らく召喚の際に対象の心理状況を限定したのでしょう。魔法を使う際に効果を限定するのは良くあるのですが、身体や物質への干渉はともかく、心への干渉なんて不可能の領域ですから。認識能力以前に使う魔力も桁違いになります。』

「不可能の領域？　なんでだ？」

『生物の心には人工的に作ることが出来ない程の高密度な魔力の壁、いわゆる心の壁という物が存在しまして、これを破る事は理論的に不可能です。一般的にこれがある為に人を心理的に洗脳したり、心を弄ったりは出来ないとされています。勿論魔力の問題以前に技術的な問題も山積みですし、更に心に触れるには相手の心を深層心理まで完全に把握してなければならないという条件もあります。ですから心への干渉と言われて実現可能なのは、その一歩手前の心の『参照』でしょうね。これは心の壁の前まで干渉して、そこから中を見たのだと思ってくれればいいです。例えば何処かに逃げ出したいと思っている人に限定したり、心に何か傷を負っている人に限定したり。』

「……成程、つまりルーンがあれだけの魔力を使ったのは召喚魔法を行ったからじゃなくて、召喚魔法で呼ぶ人間の心理的な条件を限定したからなのか。」

『恐らくそうだと思います。でなければ髪の色を使ったり、魔法を使う前にあそこまで自分を追い込んでまで魔力を精錬する必要はありませんから。』

まぁ、確かにこれで納得はいったかな。ルーンが言ってた事でいまいち意味が分からない事が解決したのは個人的にもすっきりしたし。

「それで？　聞かせてくれよ、今更なんでそんな話を俺にしたんだ？　気になってたのは確かだが、俺はルーンの次元魔法のリスクについて聞いただけだぜ。まぁこういう知識も無駄にはならないんだろうが、あの召喚魔法の事を掘り返したのも気になるな。何か言いたいことがあるんじゃないのか？」

『大した事ではありません。ただ貴方に色々な事を知っていて欲しい。直接的に言えば貴方にはルーンの力と心情をちゃんと把握していて欲しいんです。今いった事でも分かるように、いくらルーンが強くても魔法の力は決して貴方の心へは影響出来ません、ですから貴方からあの子への愛をそういう意味で疑って欲しくないんです。』

「そんな事最初から疑っちゃいなかったが……大体俺の心に何かしようとすれば気がつくさ。」

『貴方がそういう意味でも強い方なのは分かっています。ですが、人という物は疑い深い生き物です。今私が心への影響を与えることは不可能だと言いましたが、この学園にはルーンならばその不可能の領域を超えることが出来るのではないかと考える者もいます。そしてそんな不安のせいでルーンから離れていく人もいます。心というのは人の最も繊細な部分ですから、ルーンの強すぎる力がいつの間にか自分に及んでいるのではという被害妄想を持つ方が出ているのは事実です。そしてこと心の事に関してですからやはり、ルーンに愛情を向けられている貴方が一番そうなる可能性を秘めているのです。ですから、もし誰かがルーンの力について何か言っていても、ルーンへの愛情を信じてあげて欲しいんです。』

「成程。俺がルーンを好きじゃなくなる事を心配してるわけじゃなくて、そういう噂を聞いて自分自身を疑う事を心配してるわけね。」

『貴方がルーンから離れるとしたら、理由はそのくらいでしょう。あの子は貴方にべったりですし、貴方も悪い気はしていないようですから。なんにしても可能性は潰しておくに限ります。やっとあの子があんなに幸せそうに笑っているのですから。』

無理はないかもしれないな。俺がいずれ魔法について詳しく知って、その心の壁とやらの事も知れば、ルーンなら出来るかもしれないくらいには思っただろうし、あいつがそんな事するような奴じゃない事は分かってるけど、人によってはやっぱり怖がるだろうし、疑うこともあるかもしれない。リアのは少し心配し過ぎに思えるが、今まで人に恐怖された事も多い俺としては気持ちは分かる。

「それは分かったよ、教えてくれてありがとな。すると、さっき言ってた心情の方もそういう事だろう？　ルーンは苦しい思いをしてでも、俺みたいな存在に限定したかった。ルーンの寂しさを分かって、家族になって欲しかったんだって。だから無理矢理にでも俺をこの世界に引き留めて、俺を脅迫してでも俺である事に拘った。それを責めないで欲しいって言いたいんだろ、リアは。」

『はい、よくわかりましたね。あの子にとっては家族という物は特別なんです。ですから誰でもいいなんて考えは持てなかった。だからこそ自分の全てを使ってでも貴方に拘った。流石に見ていて痛痛しくて、私も止めようと何度も思いましたが、今のあの子を見ていると、変に止めなくて良かったと思います。最初の頃は貴方を繋ぎ止めようと躍起になってたようですが、最近のルーンは見ていても微笑ましいです。とても、元気になりましたし。』

「不可能の領域の話は知らなかったが、あいつがただ無作為に召喚したんじゃないとは前から思ってたからな。決着をつけた時にあいつが言ったんだよ、『司羽は私と同じ傷を持ってる筈なのに』ってな。」

『そうでしたか、やはりルーンはそういった関係の事を参照したのですね。……大体予想してはいましたが。』

リアがそう書いたのを見て、司羽は苦笑した。さっき何を望んだかは分からないなんて言っておいて、ちゃんと分かっていたらしい。今になって気付いたが、この子はルーンの為に色々尽くしてくれている。あの旅行の時もそうだ、リアはルーンのしたことだから許したんだろうし、髪も見せてくれたんだろう。これだけ詳しいってことは、もしかしたらルーンが召喚をすることについて、リアは前から知っていたのかもしれない。

「次元魔法の事は勉強になったよ。ルーンがそれだけ簡単に使える次元魔法を、俺には使わなかったってのも分かったしな。聞いてる限り次元魔法は手加減ってのがしにくそうだし、ルーンの目的の上では使えなかったってのもあるんだろうけど。ルーンはそれを盾に脅すような事はしてこなかった。万が一人の心のどうにか出来るかもしれなくても、あいつはやらないよ。最後まで俺自身の意志を変える事に拘ってたんだしな。それと、俺はこっちの世界に来た事を今後悔なんかしてない。だからルーンを後になって責める様な事もしないさ。」

『そう言っていただけると私も安心してルーンをお任せすることが出来ます。……もしかすると、私が何かを言う必要はなかったのかもしれませんが。』

「そんな事はないよ。リアみたいな子がルーンの傍にいてくれるってことが分かっただけでも俺としては収穫だからな。リアがなんでそこまでルーンの事を考えてくれてるのかは分からないけど。」

司羽がそういうと、リアは暫く何かを考える様な間を取ってから、スケッチブックに一言だけ書き込んだ。

『私達は親友になろうと約束しましたから。』

第２３話：平和を語る道化（前書き）

戦闘描写は難しいですね。書き直す事何度か、文字数も１５０００文字を超えてしまい。自分の作品中でも過去最高です。長すぎでしょうか？　区切った方がいいよー、という人はコメントください。

第２３話：平和を語る道化

「おお……美味いな。」

『お口に合った様で良かったです。』

「でもこんな物が隠されてるなんて、ちょっとしたゲーム感覚だな。」

試験開始から数時間が経ち、辺りも大分暗くなってきた頃。司羽はリアが作った夕飯に下鼓を打ちながら、鍋やまな板へと眼を向けた。

これは司羽やリアが持参した物ではなく、何故か樹海にあった川辺に梱包されて放置されていた物だ。司羽も最初は怪しくて使う気にならなかったのだが、リアの話では料理に使う道具や寝袋なども探せば各地に設置されているというので唖然としてしまった。これはフィールドが樹海である必要があるのかも不明だ。だがリアは大して気にした様子もなく、司羽に待っているように一筆書くと、その場で黙々と調理を始めたのだ。材料は支給された物の他に川で取れた魚や森で取れた木の実、それと司羽が見つけた動物（例の最初に落ちた森で見つけた生き物がここにも居た）の肉で、なんだか軽くキャンプ気分を味わっている。リアは魚や動物の血抜きもお手の物で、料理上手だと素直に褒めてしまっていいのかと司羽も苦笑いをしてしまった。だが隣で大人しく食べているトワも満足している様だし、これで良いのだと納得しておく。

「慣れてるのか？　こういう所での料理って。」

『はい、割と。』

「ふーん。リアとペアになった俺は運が良かったのかな。」

『ありがとうございます。でもこれくらいならばルーンも出来ますよ？　あの子はずっと一人暮らしでしたから、料理や他の家事レベルもとても高いですし。この魚の捌き方もあの子から習ったんですよ。司羽さんもあの子の手料理は食べたことあるでしょう？』

「ああ、なるほどな。でもルーンはやたらと俺の手料理を食べたがるんだよなぁ……俺は家事は好きだけど、そこまで上手くはないんだが。」

恋人になってからは寧ろルーンが自分で作りたがる事が増えたが、それでもお弁当を作って欲しいとかいきなり言い出す事もあるし、まあ理由はなんとなく分かるようになって来たけど。

『きっと甘えたいのでしょう。だれかがあの子の為だけに食事を用意をしてくれる事なんて今までなかったでしょうから。』

「だろうな、最近やっと俺にもそれが分かるようになって来たよ。」

『貴方は凄い方です、司羽さん。私は二年近くあの子の傍にいますが、私がそれを分かるようになるのにどれだけ時間が必要だったか。』

「二年か……。俺はもっと昔から一緒なんだと思ってたよ。」

『そうですね……あの子は物心ついてから私に会うまでの間ずっと独りでした。ですからこれからは、司羽さんがあの子に教えてあ

げてくださいね、人の温かさと愛を。私はルーンへ声を掛ける事も姿を見せる事も出来ない身の上ですから、きっと、その役目は神様が司羽さんの為に取って置いたんですよ。』

リアはそう書くと、食べ終わった自分の食器や料理が無くなった皿を片づけ始めた。それを見ていたトワは司羽に視線を送ると、司羽はその視線の意味を読み取って頷いた。それと同時にトワも洗い物をするために川辺の方へ食器を移動させ始めた。本当なら一々許可をあげなくてもいいのだが、何分リアは秘密主義な子だ、トワの行動もコントロールしておかないと不注意でリアに不快な思いをさせてしまうかも知れない。そんな理由からトワにはリアに関する行動を起こす時に許可を取る様にと言っておいたのだ。

「でも、なんだかルーンの話ばっかりだな。」

『……そうですね、私は自分の事を話すのが下手なので。つまらなかったですか？』

「いいや。リアが自分の事を話す訳にはいかないのは、なんとなくだけど分かってるしな。何故かは分からないけど、それは俺が立ち入るべき事柄じゃないんだろうし。それに俺だって、ルーンの事くらいしか話題が出てこないんだからお互い様だろ。こんな時に気の利いた事でも言えれば良いんだけど、何分俺は同年代くらいの女の子と話したことがあんまりなかったからな。」

『そうなのですか？　司羽さんは女の子の扱いに慣れている様なイメージがありました。』

「……それはつまり俺が遊び慣れてる様に見えるということか？」

司羽がそう言うと、リアは暫く考える様な沈黙を置いた。先ほどトワが言っていた、ミシュに読んでもらった本とやらの事を思い出してしまう。自分そっくりだとミシュは言っていたみたいだけど、やっぱり周りからはそう見えているのかも知れないな。だとしたらこれは由々しき事態だ。変な噂が立って、それをルーンが聞きつけたら血の雨が降るだろう。

「やっぱりそう見えるのか。」

『冗談ですよ、そんなに落ち込まないでください。確かにルーン以外にも、トワさんや、ミシュナさんが傍にいる事で周りからはそう見えてしまうかもしれませんが、貴方がそういう方でないのは分かっています。ルーンがそんな方に捧げてしまう筈はありませんから。』

「ん……？　なんだか今おかしな発言が聞こえた気がするんだけど……まさか。」

『ルーンから全部聞いてます。事細かに細部に至るまで。』

「やっぱりか、ルーンはどうも人に話したがるみたいだな……後で釘を刺しておかないと。」

『……あの、体に残る傷を付けるのはどうかと……ルーンは女の子ですし……。』

「い、いや、釘を刺すってのは俺の世界の比喩だ……そんな虐待みたいな事しないよ。」

それに寧ろ喜びそうに思うのは俺がおかしいのだろうか？　俺が

つけた傷を撫でて微笑むルーンが容易に想像できる……いや、まて、俺は何を考えているんだ？　最近思考がサド系になっている気がする、ミシュにバレたら罵られるだけじゃ済まないし、トワの教育上も良くない、自重せねば。

『そうだったのですか、安心しました。……ですがまた、ルーンの話になってしまいましたね。話というのは難しいです。』

「無理することはないさ。好きな事を好きなように話せばいい。ここは何か重大な事を話し合う場とかじゃあないんだからな。」

『そうですね……その通りだと思います。』

その時、司羽はこの場に似合わない緊張を感じた。これはリアが発した物か、それとも別の何かか。……と、そこまで考えて司羽は思考を中断した。そうさせる者の気配を感じ取ったからだ。どうやらリアはまだ気づいていないらしい。一瞬、自分の不安も杞憂の物かとも思ったが、一応リアにも伝えておいた方がいいだろう。

「リア、気を付けろ。ここから随分離れた場所だが、真っ直ぐにこちらに向かってくる奴らがいる。」

『……そうなのですか？　私は何も感じませんが。』

「無理もないよ。こんな色んな生き物が居そうな樹海の中で、何キロも先の事を感じ取るのは難しいからな。」

『それでも、貴方には分かるのですね。……ですが司羽さんが気にする程の事なのですか？　そんな距離からこちらの事が分かるのは不自然ですし、きっと偶然でしょう。』

「……偶然か？　……そうだと良いけどな。」

「主、気になるのなら童が様子を見て来ようか？」

司羽の様子を見て、傍で洗い物をしていたトワがそう言って来たが、司羽は首を振った。自分の力を分け与えているとはいえトワの力は見たことがない。そんなトワを一人で危ない所へ行かせるわけにはいかない。それにトワには今回の試験で使用しているシールドが付いていないのだ。そんな司羽の様子に何かを感じたリアはスケッチブックへ何かを書きこんだ。

『何か気になることがあるのですか？』

「……なんとなくだが、今回の試験が始まる前から嫌な予感はしてたんだ。てっきりさっきのルーンに付き纏っている馬鹿共のせいだと思っていたんだが。」

『違うのですか？』

「違うとは言い切れない。だが、そのこっちに近づいてきている奴らだが、恐らく完全にこっちの位置を掴んでる。さっきから進行方向が全くズレていない。この距離でこっちの位置を掴んでるような、そのレベルの実力者は今回の試験会場には居なかったはずだ。何か嫌な予感がして来たんだよ。……トワ、取り敢えず戻れ。」

「ん、わかったのじゃ。」

司羽が指示を出すと、トワは頷いて司羽の心の中へと戻っていく。続いてリアに視線を送り、腰を落とした。

「リア、逃げるぞ。背負って行くから俺の背中に乗ってくれ。」

『背負ってですか？　ですが私は……。』

「顔を見ない様にすればいい。それにあいつ等が本当にこっちの場所を掴んでいるのか知りたい。向こうのスピードはかなりのもんだし、色々説明したいけどこのままじゃその時間もないんだ。背負って逃げれば話易いだろう？　今は取り敢えず乗ってくれ、早く。」

司羽がそう言うと、リアはおずおずと背中に乗ってきた。思ったよりも軽い。もしかしたらと性別を疑った事もあったが、やはり女の子なのだろう。リアを背負い直すと、その敵らしき者から直角の方向へと地を蹴った。障害物となる物が沢山ある地上を駆けるより早いと判断して木の上に飛び乗り、飛び移りながら移動する。

「……進行方向に変化なし……か……偶然か？」

『そろそろ説明していただけませんか？　それだけが理由じゃないのでしょう？』

「ああ、そうだな。」

リアは司羽の首に腕を回して、そのままの体勢で簡易のメモ帳らしき物に筆談を始めた。司羽は相手の気配を読み取りつつ答えた。

「不自然な所は色々あるぜ？　まず、相手の人数だが……驚いた事に五人で行動してるんだ。」

『五人ですか？　その程度の人数なら珍しい事はありません。効率

良く試験をクリアするために手を組む人たちも多いですから。』

「何を言ってるんだ？　今回の試験は二人の内一人が脱落したらその時点でアウト、つまり行動しているのは偶数の人数じゃないとおかしいんだよ。十人を半分に分けたとも考えられるが……こんな重要な試験で完全に相手を信用するような奴がいるだろうか。万が一を考えるのが人間だ。」

『それは確かにそうですね。』

「おっと。」

そこで司羽は突然進行方向を変えた、リアは驚いた様に司羽の首に回す腕に力を込めた。司羽は咄嗟に「すまん」と謝った。

「更にあいつらの気配なんだが、どうもおかしいんだ。今回全員に張られている筈のダメージ判定のフィールドが感じられない。」

『……それはつまり。』

「ああ、あいつらが教師連中って事も考えたが、どうもあいつら殺気立ってやがるからな。これは何かあるぜ？　どうやらこっちに向かって来てるのも偶然じゃないみたいだしな。」

先ほど向こう側もこちらに方向転換するのが感じられた、間違いなく自分達の場所まで真っ直ぐに向かって来ている。今もそうだ、こちらの方向転換から僅かに遅れて方向の修正を掛けて来ている。方向転換への敏捷さはそこまでではないが、進行の速度は間違いなく早い。とはいえ逃げきれない事もない。実際こうして逃げていれば追いつかれる事はないのだが……。

「教師や生徒でないなら一体誰なんだろうな？　こんな試験の最中に俺達を追い回す様に行動してる奴らってのは。……恐らく試験前にミリク先生が言ってた、ルーンとリアを引き離した連中もあいつらだろうと考えると、俺じゃなくてリアが目的だって事は何となく分かるが。友好的な人間でないのは確かだろうな。何故リアが一人の時を狙わないのかは不自然だが、それも含めて、想像しても意味のないことだ。……っと、どうした、リア？」

『司羽さん、私を降ろしてください。』

「……は？」

『今すぐ私を降ろしてください。そして貴方はそのまま、此処から離れて欲しいんです。これは貴方には関係のないことですから。』

いきなりのリアの発言に司羽も間の抜けた声を出してしまった。だが少し考えて、直ぐに答えが出た。リアはこれは私の問題だから手を出すなと言いたいのだ。さて、どうするべきか？　見方によっては危ないから逃げろといっている様にも聞こえるが、本当に迷惑な場合もあるし。

「一人でどうにかなるのか？　相手は単なるストーカーとかじゃないみたいだぞ？」

『どうにかなります、どうにかします。貴方の力を借りるまでもない、私一人でどうにでもなる事ですから。今までだって私は乗り越えて来たんです。』

「……。」

『自惚れないでください。貴方は私より強いかもしれませんが、全知の神ではないでしょう。貴方はこう考えているのでは？　私はこれに関わることが危険だから貴方を巻き込むのを嫌がっていると、貴方に逃げて欲しいと思っていると。私の心を捏造するのはやめてください。貴方は力の面では足手まといになったりしないと思いますが、この問題に関してこれ以上面倒事が増えるのは勘弁してほしいんです。お願いですから降ろしてください。』

「……わかった、そこまで言われちゃ仕方がないな。さっきの場所に居るから、終わったら教えてくれよ。」

『……気配を読んだりしたら駄目ですよ？』

「ああ、分かってる。」

司羽はふうと溜息をついて地上に降りると、リアをその場に降ろした。そして直ぐにその場から離れる。お互いに眼の届かない所まで。リアの事は気になったがああまで言われては降ろすしかないだろう。これ以上はお節介という物だ。人には踏み込まれたくない場所という物が存在するのだから。だから司羽は最後に一言だけ言って行く事にした。

「健闘を祈るよ。」

『はい、問題ありません。』

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

リアは司羽が離れて行くのを見送りながら、司羽が言っていた五人組の方角を振り向いた。今朝ミリクから話を聞いた時からなんとなく予想はしていた。ルーンの名前は有名だ。誰だってあの子とは敵対関係になんてなりたくない筈なのだから。だからこそ、今日仕掛けて来るだろうとも思っていた。

「司羽さんには悪い事をしてしまったでしょうか。流石に言い過ぎた様な気もしますね。」

美しいソプラノ調の声、自分の事を本当の意味で知る人間以外には聞かせる事の出来ない声で、リアは独り事を言った。先ほどの自分の台詞を思い出す。自惚れないでくださいなんて、筆談であったとはいえ咄嗟に書いてしまうなんて、ここで生活するようになってから少し言葉使いが変わったのだろうか？　でもああでも言わなけ

れば、司羽さんまで巻き込んでしまうことになってしまうし、仕方ないでしょう？　とリアは自分を納得させた。

「さて……なるほど、確かにおかしいですね……三、四、五人ですか。本当に司羽さんの言った通りの人数ですね。あの方には驚かされてしまいます、きっとルーンもあの方の傍でなら幸せになれるでしょうね。……少し、嫉妬してしまいますが。」

自分はルーンに声を聞かせてあげる事も出来ない。あの子はいつも私に優しくしてくれたのに、自分に勇気をくれたあの子を、ルーンを幸せにする役目は自分には最初から与えられていなかった……初めから自分には……。だから少しの嫉妬は許される筈だ。そんな事を考えながら、やっと完全に気配を感じ取る事が出来る距離まで近づいて来た相手に気を回す。

「大見得を切ったのですから、やらなければなりません。今は、一人で。」

リア（装備不明）ＶＳ？？？（装備不明、人数五人）

地形：樹海　夜　付近に人の気配なし

瞬間、考えるより先にリアは走り始めた。戦いの基本、まずは固まっている敵をばらさなければいけない。何処かに追い詰める事が出来なければ相手はこちらを取り囲もうとしてくる筈だ。そうなれば……。

「よし、散開しましたね。」

短期決戦でないとこちらも体力が持ちませんからね、と呟いて、リアは一旦スピードを落とした。暫く走り続け、後方に一人、後方斜め左右に一人ずつ、左右に一人ずつ人の気配を感じ取ると、リアは急速に左へと方向転換をした。同時に小さめの簡易スケッチブックを取り出して文字を書く。

「私だって、ここで負けるわけにはいかないんですよ。」

リアが鉛筆を取りだし一文字にスケッチブックに走らせると、何かの文字のような模様が書き出された。リアが念じるとその文字はスケッチブックから浮かび上がり、地を這い、リアの向かう先へと向かって行く。

「居た……っ！！」

そのまま走り続けていると、少し先の方に最初の敵の姿を捉える。赤いフードを被った、恐らく男。捉えると同時にスケッチブックに鉛筆を走らせて鏡と一字の文字を書くと、続けてスケッチブックのページを捲り、剣の絵が書かれたページを開き、破った。すると破ったその紙が剣と成り、リアの腰に顕現した。同時に敵がこちらに向かって杖を振る。そして次の瞬間、炎の竜巻がリアに向かって襲い掛かった。

「来ましたねっ！！」

リアは避けるでもなく、その炎の竜巻へと突っ込んだ。そして当たる直前、鏡と書いたページを破り、前方へと翳すと、そのページは燃え尽き、リアを包んでいた炎の竜巻は消え去った。そして次の瞬間、同じだけの力を持った炎の竜巻が生まれ、その赤いフードの

男へと襲い掛かって行った。

「ちっ、反射か。面倒な！！」

男はもう一度炎の竜巻を発生させ、相殺した。だが、男がもう一度杖を構える前に、消え去った魔法の向こう側から剣を抜いたリアが飛びかかって来る。咄嗟に体を捻って男はそれを避け、反対側に飛び去った。

「おいおい、剣術まで出来るのかよ？　このお姫様は。」

「……無駄口は叩かない方がいいですよ？」

「何っ？　うぉっ！！」

「遅いっ！！」

男の体へと、先程リアが放ち地を這って行った文字が纏わり付く。それと同時に、抜け出すために一瞬リアから視線を外した男へ、リアは素早く近づき躊躇なく剣を突き立てた。

「ぐっ……あっ……。」

「まず、一人目。」

リアは直ぐに剣を抜き、スケッチブックの爆弾が書かれた紙を破り取ると、風で飛ばないようにその剣で男の陰に固定した。そして直ぐに逃げる様に走り出す。暫く経つと、大きな爆音が聞こえて、先ほど男を倒した辺りで殺気を放つ気配がまた一つ消えた。簡単なトラップだったが、なんとか成功した様だ。これで残りは三人。右

側の一人、右下の一人、下に居た一人。どうやらまた合流されてしまった様だが、着実に数は減っている。

「後、三人……。」

そして休む間もなくリアはまた走り出した。次はどうしようか？

先程一人目の傍でもう一人がやられた事は、向こう側の人間も察知した筈だ。これからはさっきみたいな細工は使えない、それ所か、バラバラにする事ももう難しいだろう。ではこのまま逃げ続けようか？　……駄目だ、体力が続かない以前に、それではいつか心配して司羽がこっちに来てしまう。リアは良く知らないが、先程からの態度を見ている限り、きっとあの人は優しい人なのだろう、さっきはなんとか言い聞かせる事が出来たが、こんな状態を見たら今度は手伝うと言って来るに違いない。あの人は強いとルーンが言っていたが、だからといって自分の問題に巻き込むなんてしてはいけない。……それにもし自分と関わりあいになれば、自分が一番危惧している事まで知られてしまうかもしれない。そして司羽に知られれば、ルーンにも知られる日が来るかもしれない。それだけは嫌だ。なんとしても回避しなくてはならない。リアがそう思って悩んでいた、その時、頭上に小石か何かが当たった気がして空を見上げた。

「私だけの力で……はっ！？」

そのリアの頭上から光の柱が降り注ぐ、盾のページで咄嗟に受けたが、危なかった。違う事と考えてしまっていたとはいえ、気を張っていたのに相手からの攻撃に全く気付かなかった。リアが少し離れた場所から狙撃していたらしい敵を見つけると、敵は即座に撤退していった。一人だけいつの間にか別行動をとっていた様だ。それに気付かなかったのは恐らく、敵からの気配察知の魔法に対するジャミングのせいだろうが、妨害魔法はかなり高等の魔法であり、そ

れを使える段階で相手はかなりの腕だと分かる。もう気配を頼りに戦うのも難しいだろう、今のは運が良かっただけだ。恐らく今までジャミングをしなかったのは向こうの油断か、この一撃を成功させるための罠。どちらにしろここからは多用してくる筈。

「でもどうしたら……向かって行っても三体一じゃあ不利どころの話じゃないし……。」

緊張の中走り続けたせいで体力も落ちて来て、相手の気配を察知しての安全策もきかない、おまけにもう思い通りにバラバラにする事も出来ない。何も対処法が浮かんでこないまま、リアは途方に暮れてしまった。

「どうしよう、どうしよう……どうしよう……。」

考えている時間がないのは分かっているのだが、作戦がない、何時またあの攻撃が来るか分からないのだ。今のでこちらにジャミングが効かないと勘違いしてくれれば良いのだけれど、そんなに都合良く行くわけもない。もう捨て身で突っ込むしかないのだろうか？

あまりにも無謀な賭けだけれど……。

「あら、何をそんなに悩んでいるのかしら？」

「……え？」

「そこから動かないでっ！！　……その手に持っている物を捨てなさい。」

「くっ……。」

背中に杖を当てられ、手に持っているスケッチブックを地面に落した。いつの間にか、狙撃された反対側から接近されていた様だ。さっきの狙撃も念のための誘導だったのかもしれない、全く敵の接近に気付かなかったなんて不覚どころの話じゃない。リアを拘束しているフードを被った女が手を挙げると、残りの二人もリアへと走り寄り、リアを威圧するように杖を構えた。

「これで逃げられません。さあ、私達と来てくれますね？」

「……何故、私が分かったのです？」

女は質問を質問で返され少しムッとした様だったが、周りに居た仲間に視線を送ると、その質問に答えることにした様だった。

「わざわざ魔法の掛かったフード付きのローブを着て、従者らしき者達と居住者不明の家まで帰っていれば誰だって不自然に思います。貴方がこの学園に入った時期を調べて確信しました。」

「ルーンと私の相性を弄ったのは……。」

「貴方だって、ルーンさんを巻き込みたくはなかったのでしょう？私達だって同じです。あんな化け物みたいな人と戦ってたら命がいくらあっても足りませんから。世界にとっても有益な存在ですし、貴方がこちらに来てくれれば、仲間になってくれるかもしれません。」

「なら、貴方達は共和国のグループなのですね？」

「はい、その通りです。反シーシナ共和国レジスタンス『蒼い鷹』を補佐する傭兵団『道化』の長、アルゼルハント＝ユーリアと申し

ます。」

「その名前……、貴方も元は共和国出身の方ですか。」

「はい、今はあの国を敵と見なしていますが。」

リアはそれを聞くと諦めた様に溜息をついた。そしてユーリアと名乗った女はそれを聞いて、承諾したのだと確信した。

「私達と来てくれますね？」

だがリアはそれを聞いて、くすりと笑いながら言った。

「え？　誰が貴方達なんかと。」

瞬間、リアは身を捻り、ローブの中から素早くナイフを取り出し、ユーリアの顔を斬りつけた。そしてそのまま驚いているユーリアから杖を奪い、間に挟みながら残る二人から素早く距離を取る。その際ユーリアにローブを掴まれたが、リアは咄嗟にそれを脱ぎ棄てた。ユーリアは自身は、ナイフはなんとか避けた様だったが、怒りに身を震わせていた。

「くっ、私が下手に出ていればっ！！」

「戦争屋なんかと仕事をするつもりはありません。名も捨て、こうなった身の上ですが、元の高貴な身分に多少の誇りは持っているつもりですから。」

そう言って微笑んだのは、一人の少女だった。輝く様な薄い水色に、ほんの少しウェーブのある、肩甲骨の辺りまで伸びた髪を風に

靡かせ、リアはそこに立ってそう言い切った。黄色に光る瞳は宝石の様に輝き、後ろ髪と同じくらい伸びた横髪はビーズで纏まり黒いドレスに少し掛かっていた。ルーンやミシュナ、トワに負けず劣らずの美少女は敵を威圧するように、ユーリアから奪った刺殺にも使える細長い軍用の杖を構えた。ユーリアは他の二人の射線上にいる事に気付くと、二人の後ろに飛ぶように後退し、予備らしき杖を取り出し構えた。

「まさか私がミスするなんてね……。」

「助かりました、貴方が素人で。」

「言うわね。二人共、もう無傷で捕える必要はないわ。後で拷問でもなんでもして言うこと聞かせればいい。女の子だし、殺さずに外から見えない所を拷問する方法なんていくらでもあるしね。最悪死んじゃっても、亡き骸を持ち帰って共和国の連中に殺されたってことにすれば、レジスタンスの士気は上がる。」

「無傷で、ですか。一番最初に会った方は見つけるなり攻撃してきましたけど？」

「あの男は馬鹿なのよ。入ったばかりなのに言う事聞かないし。でも、あいつが正解だったみたいね。」

レジンスタンスグループの三人はリアを取り囲むように移動した。なんとも逃げるに逃げられない状況だ。素人だなんて言ったが、相手は間違いなく腕の確かなプロだ。正直相手が素人だったとしても勝てるか分からないのに、そんな状況では絶望的過ぎる。今更命乞いなんて馬鹿らしくてやるつもりはないけれど、さて、状況はどんどん悪くなっている、打開する方法を考えなくては。

「役割はいつも通りで、皆一斉にいくわよ？」

「命乞いとか駄目ですか？」

「どーせ命乞いとか馬鹿馬鹿しいとか考えてるんでしょ？　皆、レディ！！」

「……そうです、かっ！！」

「くっ……。」

リアは諦めた様な口調でそう言うと、いきなり腰を落として、右側に居た女に杖を使って当て身をし、体制を崩させた。そしてそのまま溜めていた魔力を杖へと伝導させ、反対側で魔法を撃ってこようとしていた男に対して雷撃の衝撃波を放つ。水や風などの自然現象を操る魔法の中でも簡易だが、一番速度の速い魔法だ。威力が低いため倒す事は出来ないが、一瞬時間を稼ぐ事くらいは出来る。発動前に男の動きを止めると、続いて魔法を撃とうとしているユーリアへ向かって雷撃を打とうとして、唐突にリアの体制が崩れた。

「なっ！？　気絶させられなかった！？」

「残念っ！！」

「きゃっ！！」

女は倒れた状態からリアの腕を引っ張り、足を払って、アクロバティックを使ってリアの持っている杖を蹴り飛ばした。そして直ぐに起き上がると、倒れこんだリアへとそのまま蹴りを放つ。

「ま……だっ！！」

リアはその蹴りを手で受けると、足を引っ張って女の体勢を崩し、逆に足を払った。だが、追撃を掛けようとしたその時、背後から大きな衝撃を受けてリアの体は吹き飛ばされた。どうやらさっき雷撃で攻撃を止めた男が復活したらしい。こちらもどうやら間に合ってしまった様だ。

「うっ……く…あっ……。」

「アシュさんナイス！！　ユーリア……あんた攻撃しかけるの遅過ぎ……っ！！」

「リリーが邪魔なのよ、退きなさい！！　これでトドメ！！」

「くっ……。」

ユーリアから魔法が放たれる、さっきとは比較にならない魔力の量。完全に殺しに来ている攻撃だ。スケッチブックも杖もない。さっきの衝撃波で頭がふらふらして立つ事も出来ない。さっきの女を盾にしようとしたが、既にそこから離れている、万事休す。

「……ルーン……ごめんね……。」

リアは魔法を受ける直前、心の中で懺悔する様に呟いた。自分は結局、あの子に何もしてあげられなかったのだと。貰った勇気の分も返してあげられなかったのだと。でも心配はない、あの子にはもう既に……。

「……司羽さん……後は……。」

頼みました。そう言いかけて、リアはユーリアが放った光の中に消えた。

―――――――――――――

「……おい、どうするんだよ？」

「ユーリア、あんたは手加減ってのを知らな過ぎ。」

「しょ、しょうがないでしょ！？　中途半端なのだと、あのお姫様に反撃されるかもって思ったし、私だってそこまで強力だって思わなかったんだもん！！」

三人はリアが居た辺りで声を荒げながら口論をしていた。ユーリアの放った魔法はリアへと直撃して、そのまま亡き骸も残さず消し

去ってしまった。これではここまで来た意味がない。

「それはそれとして……どうする？　今回の参加者の誰かを殺して代わりにするか？　焼いちまえば誰だか分からないだろうし。」

「あ、なら今回お姫様と組んでた司羽って男の子は？」

「……ユーリアは馬鹿ね。男と女じゃ流石にばれるから。」

「そうだな。だが、今回俺たちの動向に気付いてたのはどうやらあいつみたいだぜ？　カメラを見てたナビ係の言ってた事だけどな。」

元々今回の行動は、スカウトに参加していた『蒼い鷹』のメンバーにサポートしてもらっての作戦だった。司羽達の動きを掴めたのもその為だ。

「そ、それに、あの男の子って人間の女の子そっくりな使い魔を連れてるってナビの人が言ってたよ？　万が一って事もあるし、男の子を消すついでに使い魔を焼き殺して代わりにするってのはどう？」

「……まあ、悪くないかもね。」

「ははは、なんだか随分と面白そうな事を話してるな？」

三人の意見がそれで一致しかけていた時、ユーリア達の後ろからその場にそぐわない笑い声が響いた。ユーリア達が驚いて振り向くと、そこに立っていたのは赤い瞳をした、一人の青年だった。

「でも流石に本人の前で、本人とその使い魔を殺す算段を立てるのはどうかと思うけど？」

「お、お前は！！」

ユーリア達は笑っている青年、司羽の前から飛び退って距離を取ると、驚きを隠せない様子で司羽を見た。

「いつからそこに……。」

「ん？　降りて来たのは今だけど、ここには随分前から居たぜ？一旦リアを連れていく為に離れたけどな。俺はずっとリアの傍の木の上に居たからな。あいつが攻撃を受けたら、この試験用センサーを切らなきゃいけなかったし。ああ、ちなみにリアならこの近くにちょうどいい洞窟をトワが見つけてくれたからそこで介抱してるよ。気絶してるけどな。」

「き、気絶？　そんな馬鹿な事……あの時に間違いなく……。」

「馬鹿はお前らだろ？　あの程度で人が灰も残さず消え去るかよ。弱いのは力だけにしろよ。頭まで弱かったら良い所ないぜ？」

三人は飄々と笑いながらそう言った司羽に唖然としていたが、ユーリアはふと我に返ると杖を構えた。そして不敵に笑いながら言った。

「ちょうどいいわ、今殺しにいく所だったのよ。お姫様の居場所も教えてくれたみたいだし、苦しまない様に殺してあげる。」

「……本当に頭弱いんだな、頭領じゃないのかよ。その『道化』とやらのさ。」

「何ですって？」

「ほら、そこの二人はまだ理解してるみたいだぜ？」

ユーリアが他の二人を見まわすと、二人とも緊張した様子で司羽を睨みつけている。

「ユーリア、この子はやばいわ。退きましょう。」

「同感だ。こいつの言っていることが本当かは知らないが、俺達の後ろで話を聞いていた事は確かだ。俺達に全く気付かれずにな。」

「……。」

司羽はその二人の発言を聞いて目付きを変えたユーリアを、小馬鹿にしたように鼻で笑うと、三人が杖を構えている事など気にも止めてないかのようにユーリア達に近づいて、緊張しながら後ずさりする三人の目の前で、なんの警戒もせずにリアのローブを拾った。先ほど、ユーリアが剥ぎ取った物だった。

「これを取りに来たんだ。ないとリアも不便だろうからな。それに俺も、あんた達の事は見逃してやってもいいかなーって思ってたんだ。事情も知らずに善悪判断するのは俺の主義に反するからな。リアが何の躊躇いもなく人を殺してたのも気になるし。」

「……なら見逃してくれるのか？」

「もうあんたの事を狙ったりはしないわ、約束する。」

「そうね……さっき言ってた身代わりに誰かを殺して行くのも勿

論止めるわ。」

司羽が心底どうでも良さそうにそう言ったのを聞いて、ユーリア達はホッとした様に息をついた。それに対して司羽はローブに付いた土や葉を取りながら溜息をついた。

「人の話を理解出来ないのか？　俺は事情も知らずに善悪の判断がしたくないだけだ。その理由を話せって言ってるんだよ。短く、分かり易く、簡潔にな。嘘をついても緊張の具合で分かるから、嘘は止めた方が身のためだぜ？」

途端に司羽から掛かる圧力に身を固まらせながらも、ユーリアは頷いた。

「わ、わかったわ。私達は共和国の圧政に対するレジスタンスに雇われた身なのよ。レジスタンスの旗領として、ジューン国の生き残り中、唯一の王族であるフィリア様を掲げようとしてる連中に、フィリア様を連れてくるように言われてここに来たの。フィリア様ってのは、あんた達がリアって呼んでる子の本名よ。でも、その、もしも連れてくるのが困難な場合は攫ってこいって言われて、それも無理なら亡き骸でも構わないってレジスタンスの奴らが……。」

「……それで？　なんでリアが旗領になるんだよ。」

「ジューン国が共和国の政策に反対し、それにより共和国がフィリア様のご家族を全て殺したからだ。城の者も殆んどが殺されたらしいが、フィリア様だけは逃げ出す事が出来て……。」

ユーリア達がそこまで話すと、司羽は唸る様に考えた。なんというか、小説の世界だな。リアがレジスタンスの旗領になるように言

われてる共和国に滅ぼされた国の王女で、それから逃げながら暮らしてるって感じなんだろう。まぁ、最後のは想像だが。

「なるほど、筋は通ってるな。さっきからしてる話の答えにもなる。後はリアが話してくれたら聞くことにするよ。だが気になった事がある。教えてくれ。」

「な、なに？　私も二人も嘘はついていないはずよ！！」

「ああ、それは分かってる。分かってるんだが引っかかる事がある。リアの国が反対した共和国の政策についてだ。」

司羽は納得がいかない様子で腕を組みながら考えた。ミリクの話が本当ならそういう政治的な事は各国のパワーバランスが決まっていて争いの種にはならない筈だが。それにミリクの口ぶりから言って最近戦争は起きてないみたいだし、少なくともその出来事は他の国へは通じてないのだろう、戦争として認知されてないだけかも知れないが。とにかくその二つの国がどんな規模の国なのかは知らないが、もしかして何かあるのか？

「それについては私達もわからないわ。そういう噂があるってだけ。でも現実ジューン国はフィリア様以外の王族は共和国に殺され、国は吸収されているという事実が確かにあるのよ！！　それに共和国の圧政も事実で、もう何人もの人が弾圧され殺されてるの！！　私の父も母も、このリリーの家族やアシュの恋人だって殺されたのよ！！　あいつら平和の為っていってやりたい放題に……っ！！」

「ちょ、ちょっとユーリア、ヒートアップしないで！！」

「すまないな、だが、これで分かってもらえただろう？　俺達は金

の為に動いたんじゃない。お姫様には悪いとは思ったが、もっと同士を集めなければいけないんだ。一人を犠牲にしても、俺らには勝ち取りたい物がある。」

「……。」

……馬鹿馬鹿しい、とは言い切れない。全部を聞いて、命乞いでもしてきたら殺してしまおうかとも思っていたんだが……。どうも気が削がれてしまった。こいつらの言っている事が嘘ではないと、いままで培ってきた技術が言っている。確かにルーンの親友を殺そうとしたゴミを生かしておくのはどうかと思うし、またリアを襲うかも知れないのだが……どうにも何かが気に障る。

「なぁ、そこのユーリアっての。」

「な、なによ？」

「共和国ってのは平和の為って言って圧政を敷いて、人を殺してるんだよな？」

「そ、そうよ。」

「じゃあ聞くが、お前の家族は何をして殺されたんだ？」

「ちょっと貴方！！　いくらなんでもそれは！！」

「後で聞くからリリーってのは黙っててくれ。ユーリア、話してくれないか？」

司羽が先程とは打って変わって、柔らかい口調でユーリアに聞く

と、ユーリアは何故そんな事を聞くのか分からないと言った表情をしたが、諦めて話始めた。

「……お父さんがモンスターを倒すための武器を作ってたんだけど、共和国の兵士に売るのを渋ったらそれを共和国政府への侵略未遂だって。お母さんも一緒に……。」

「アシュってのは？」

「俺の方は他の国への輸出をしてた恋人をスパイだって……。」

「リリー。」

「くっ、私の方もスパイ容疑よ。母と父は外の国で依頼を貰ってくる人だったから……。」

なるほどな……なんとなくのどんな国なのかの予想は立った。三人は司羽をいぶかしげな眼で見たが、司羽が何やら考え込んでいるのを見ると、眼で合図を送りあった。そして、一斉に逃げ出す為に踵を返した瞬間。

「おい、逃げなくてもいいぞ。」

「「「なっ！！」」」

「……悪いな？　お前達の緊張の具合で分かるんだよ、逃げようとしてるかどうかくらいな。」

突然振りかえった先に現われていた司羽に、三人とも驚きを隠せないようだった。全く、人が許そうかどうか考えてる時にこんな事

しやがって。だがどうしたもんか、完全に情が出て来ちまった。こっちの世界に来てから、考え方がどうも甘くなってる気がするな。いや、俺が甘くなり始めたのはもっと前かも……。だが、相手がこいつらじゃそれも仕方のない事かもな……どうも調子が狂う。何となく、知った顔に似てる気がするんだよな。……でも……だとするなら……。

「……取り敢えず、お前達は解放するよ。二度とリアの命も身柄も狙わないと約束するならな。……だが、最後に。本当に最後に聞かせて欲しい事があるんだ。」

「聞かせてほしい事？」

「ああ……お前達の意見で構わないから、頼む。」

「……えっ……？」

ユーリアは司羽の言葉にホッとしたのも束の間、そう言って司羽が見せた表情に驚いてしまった。恐らくリリーとアシュは気付いていないだろう。その場で気付いたのはユーリアただ一人。見た目には、殆んど何も変わっていないが、何かが違う。

「共和国とやらを批難するお前達は……暴力による支配以外で平和が成り立つと思うか？　そして、圧政を敷く国を暴力以外でなんとか出来ると思うか？　皆が幸せになる平和ってのは、やっぱり暴力を使っちゃいけないんだろうか？」

「……わ、わからないわ、そんなこと……いきなり言われても……。」

「……俺もだ。」

「そうか。ユーリア、あんたはどうだ？」

「……。」

ユーリアにだけ見えたその表情は、この少年にしてみればあまりにも弱弱しかった。そして恐怖するのも忘れて、ただただ呆然としてしまった。なんだか、放っておけない様な、だが触れると壊れてしまいそうな。だから、ユーリアは優しく抱きとめる様な口調で言った。殆んど無意識の内に、自分がこの少年に脅されていた事などなかった様に。全ての関係が今、リセットされたかの様に。

「……貴方は私になんて答えてほしいの？　それで貴方は納得出来るのかしら。それは答えが存在しない類の問いだって分かってる筈なのに、甘えるのは止めなさい。どうせ、貴方は私が何をいっても納得なんてしないわ。殺戮でも非暴力でも貴方が考えて出した答え意外、貴方にとっては無価値でしょう？」

「ちょ、ユ、ユーリア……！？」

リリーが、一瞬で様子の変わったユーリアに驚いていたが、もっとも驚いたのは問いかけた司羽の方だったらしい。眼を見開いて呆然としている。そして、ユーリアの方もまた、自分が発言した事に呆然としていた。

「……。」

「……あ、その……言い過ぎた……かしら？」

沈黙している司羽に、ユーリアは我に返って問うと、司羽の表情は段々と驚きから別の何かに変わって行った……そして……。

「ふっ、ふふふっ。」

「え？」

「はっ、ははははははっ、ははははははははっ！！！！！　そうだな、その通りだ！！　お前の答えはそう、その通りだ。何も間違っちゃいない！！　意味が分からないのは俺だな？　ははははははっ！！！！！」

司羽はいきなり笑いながら、呆然とするユーリアに近づいた。そして次の瞬間には、ユーリアのフードを取って額にキスをしていた。ユーリア達は一瞬なにが起こったのか分からず呆然としていたが、被害にあったユーリア本人は、自分が何をされたのか気付くと顔を真っ赤にして叫んだ。

「あああああ貴方っ！？　何をするんですきゃっ！！　……いったぁっ……舌噛んだじゃない！！」

「ああ、礼だよ。それと仕返しだな。昔俺にあんたと同じ事を言った人がいてな？　その人にやられたんだ。あの人のせいで俺は悩みっぱなし、ちっとも前に進めやしないのさ。しかし、お前も初心なんだな。あの時の俺と同じだ、ははははっ！！　それじゃ、俺はそろそろ行くぜ？　もうリアに手を出すなよ？　ははははははっ！！」

司羽が笑いながらその場から離れていくのを、ユーリア達は呆然と見送った。ユーリアは顔を真っ赤にしながら、アシュとリリーに

関しては何が起こったのか、まだ分かっていないようだった。司羽の声が聞こえなくなった頃。リリーが呆然としたまま溜息をついた。

「なんだったのかしらね、あの子。変な子だったけど。」

「まったくだ、見逃してくれたみたいだけどな。俺はてっきり聞きだすだけ聞きだして、さっさと殺されると思ってたよ。あいつの眼は最初から俺らの事をゴミみたいな眼で見てたからな。なぁ、ユーリア？」

「そうね……でも、最後は違ったわ……。ふふっ。」

ユーリアが司羽の消えた方向を見ながら笑ったのでリリーとアシュは顔を見合わせた。

「ねぇアシュ、リリー。私レジスタンスに参加するの止めるわ。『道化』も解散。私は共和国にも帰らないわ。」

「は、はいっ！？　ユーリア、貴方いきなり何言ってるの？」

「……あんたは『道化』作った時も適当だったしな……。いつかは同じノリで解散するとか言うと思ってたが。俺らがどんだけ必死で魔法とか戦術とか特訓したか忘れてるだろう？」

「メンバーも初期メンバーの私達以外、死んだり抜けたりでいなくなっちゃったし。もう十八だから就職先も探さないといけないしね。ほら、世の中そんなに甘くないし。……それに、私も色々考えてみたくなったのよ。それと、知りたくなったのかな。」

「……知るって、何をよ？」

ユーリアはくすりと笑って二人へ向き直った。

「あの子が見てる景色ってやつを。なんとなく、私が見ててあげた方が良い気がするのよ。甘やかされて育った子みたいだから。ふふっ、ここで出会ったのが、きっと何かの運命だったのよ。」

そう言って眼を輝かせたユーリアに、アシュとリリーは呆れた様な視線を送り、二人顔を見合わせた。仕方がないな、という意味の視線を交わしながら。

「こいつを見てると全部忘れて、なんだかんだで平和だなって気になって来るよ。」

「同意していいのかしら……。取り敢えず、ナビ係の人には傭兵団は解散しましたって伝えた方がいいわね。それと、これ以上フィリア様に近づくと火傷じゃ済まなくなるってね。……私も真面目に働こうかしら……はあ……。」

そんな事を言い合う二人も気にせずに、ユーリアは司羽の消えた方へと走り出した。そして、傭兵団『道化』はここに壊滅した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーー

「うん……今もまだ拘ってるよ……ねえ、どう思う？　やっぱり……駄目だよね。ごめん、まだ何にも分からないよ。何にも。」

　ひとしりき笑い終えて、余韻の中、司羽は空を見上げた。どことなく疲れた様にも、満足げにも見える表情で。

「でも、今日はなんだかすっきりした気がするよ。だから今日くらいは考えるのを止めようと思うんだ。初めて、誰かを許せたんだから……それが良いよね……姉さん？」

　微笑みながら仰いだ空は、星が綺麗に瞬いていた。リアは眼を覚ましただろうか？　早くローブを持って行ってあげよう。そしたら今日は、久しぶりに星を見て寝るのも悪くない。あるいは眠らなくても、今日は退屈だと感じはしないだろう。

第２４話：二人っきりじゃない夜（前書き）

バグか何か知らないけど１５０００文字がまるっと消失。御蔭で執筆時間が3倍くらい掛ってしまった。
ちょっとイライラしちゃったりとかしちゃったりとかして雑になってしまったかも、ごめんなさい＾＾；

第２４話：二人っきりじゃない夜

「反対反対反対じゃ！！　主、あやつはリアを殺そうとしたのじゃぞ！？　それをそんな簡単に信用するなんて正気の沙汰ではないのじゃ！！　寧ろ生かしておくのも危ういくらいじゃ。」

「まぁまぁ、取り敢えず最悪周りに危害が無い様に気を張っておくからさ。」

「し、しかし主にもしもの事があれば……童はっ……！！」

「……んっ……。」

リアは周りから聞こえる騒がしい声に薄く眼を開けた。確か自分はユーリアとか言う女に魔法を撃たれて直撃を受けた筈だ。ならここは敵のキャンプか何かだろうか？　あれからどれだけ時間が経ったのだろう。司羽さんは心配してないだろうか？

「ああ、リア。目が覚めたか？　悪いな、そのローブの魔力切れちゃってたみたいなんだが、俺達じゃ魔力の入れ方分からなかったみたいで。」

「……ろーぶ……はっ！？」

「おはよう、リア。」

「こ、ここは！？」

リアは身を起こすなり辺りを見回す。場所は薄暗い洞窟、見当た

るのは暖かい火と、苦笑する司羽、何やら不機嫌なトワに、毛布代わりに掛けられたローブ。外を見るともう完全に暗かった。

「え、え？　私はやられた筈……それに司羽さん？　あ、そうだ筆談！！　って私何でここに！？」

「あーあー、いいから落ち着け。頭に衝撃破食らってたからな、取り敢えず体におかしい所はないか？　気持ち悪かったりとか、どこか痛かったりとか。」

「え、あ……それは、大丈夫です、えっと……。」

「主が御主を助けたのじゃ。流石に最後のあれが直撃すれば命はなかったろうからの。……お姫様抱っこなんて童でもされたことそんなにないのに……。」

「た、助けたって……。」

リアは混乱した頭で状況を整理した。自分はあの『道化』とかいう傭兵団と戦って、二人倒したけど追い詰められて、最後はあのユーリアとかいう女に魔法で攻撃されて、でもそれを司羽さんが助けてくれて……。

「ま、まさか、私の事をずっと見ていたのですか……！？」

「ああ、悪いとは思ったんだが……。」

「そんな、酷いじゃないですか！！　付いて来ないって約束したのに！！」

「何を言っておるのじゃ！！　主が居なかったらおぬしは殺されておったのじゃぞ？　あの狙撃だって主がわざわざおぬしに小石を当てて気付かせ、敵の攻撃に対して主がおぬしの試験用のセンサーを妨害したからこそ試験だってこうして続けられておるのじゃ！！」

「そ、それは……ありがとうございました。」

トワがいきり立ってそういうと、リアは二の句が継げずに押し黙ってしまった。司羽はそれを見てトワへもう止めるようにアイコンタクトを送った。今度はそれでトワがシュンとなってしまったが、頭をぐりぐりしてやると嬉しそうに頬を綻ばせた。

「いや、悪いのは先に約束を破った俺だろう、リアが礼をいう事じゃない。それに、今回俺は自分の為に動いただけなんだからな。」

「試験のパートナーを助けただけ、という事ですか？」

「まぁそれもあるけど……。まだ、俺にルーンの全部を任せられちゃ困るんでね。」

司羽がそういうと、リアは驚いた様に瞳を見開いた。リアの表情には聞かれていた事に対する驚愕と、ほんの少しの羞恥があった。

「俺はルーンの恋人だが、あいつの親友の分までルーンを支えてやれる程の男じゃないんでね。ルーンの親友に死なれると困るんだよ。俺には話せない事とか、そういう事も沢山あるだろうしな。リアはルーンの親友なんだろ？　言った分の責任は取ってもらうよ。」

「司羽さん……。」

司羽の台詞を聞いてリアはくすりと笑うと、自分の照れ隠しも含めて少し仕返しをしてみる事にした。

「……司羽さん、それはちょっと気障過ぎますよ？」

「そ、そうか？」

「無自覚じゃったか……さすがは主。」

リアは司羽の発言に毒吐く様にそういうと、赤い顔で微笑んだ。トワは気付いていなかった様子の司羽に呆れ混じりの溜息をついたが、リアは苦笑するだけだった。そして、当面の問題を考える為、少し頭を回転させた。

「しかし、全て見られていましたか……。」

「あ、ああ、ごめんな。悪気はなかったんだけど。」

「それは分かっています。私も命を救われましたし……。」

問題はこれからの事だろうとリアは考えた。流石に顔を見せたのとあの程度の会話では細かい所までバレてはいないだろう。司羽は異世界からの来訪者であるし、自分の顔も知れ渡っているというわけではない。だからこのまま何を聞かれてもシラを切り通せば誤魔化せるだろう。だが、それもなんだか気持ちが悪い。下手に調べられてその過程でルーンに知れても困るし、司羽ならちゃんと説明すれば自分の秘密をルーンに話してしまうような事はないだろうから、ちゃんと話してしまった方がいいのではないだろうか？　無論、隠すべき所は隠すつもりだけれど……。

「その……私の秘密の事なのですが……。」

「その事なら、別に話さなくてもいいぞ。話してくれるなら聞きたいことは色々あるけど。」

「え……宜しいのですか？」

「ああ、最低限俺の判断に必要な事は聞いてあるし。興味があるのはリアの事っていうよりシーシナとかいう共和国の事だからな。個人の秘密に興味を抱くのは不謹慎だと思うし。」

リアはその発言に安心する事半分、奇妙な違和感を覚えた。なんで司羽がシーシナ共和国の事を知っているのだろうか？　そもそも聞いたとは誰に……。

「まさか、あの方達を捕まえて拷問でもしたんじゃ……。」

「拷問はしてないけど……ちょっと脅したかもしれないな。」

「……どこまで聞きました？」

リアは恐る恐る聞くと、司羽は暫く唸って考えた。

「取り敢えず、フィリアって名前とリアの国の事、共和国の事とかその辺だな。後、リアが共和国に対するレジスタンスの旗領に祭りあげられようとしてた事とか。」

「ううっ……殆んど全部じゃないですか。」

「悪いな、そこら辺を知ってないと俺もあいつらをどうしていいの

か判断出来なかったものでね。」

「じゃが、その結果がどうしてこうなるのじゃ……。」

司羽が落ち込むリアにそう言って謝罪すると、隣でトワが愚痴る様に呟いた。司羽はそれに対して苦笑していたが、リアにはその意味が理解出来ていない様で首を傾げただけだった。そんなリアに、トワは瞳をうるうるさせながら詰め寄った。

「リア、おぬしからも主に言ってやってくれ。あやつは主を誘惑して利用する気なのじゃ！！　そもそもこんなに簡単に心変わりするなんて信じられる訳が無いのじゃ。主はあの女に騙されておるだけなのじゃ！！」

「あの、意味が良く分からないのですが……。」

トワの色々と端折った台詞に困惑していたリアだったが、少し不機嫌そうに佇む人影が樹海の方から近づいて来たのを視界の端で捕え、そちらを振り返った。

「……失礼ですね、私が司羽様を利用したり出来る筈がないじゃないですか。それに、誘惑なら寧ろ私がされました。いままで男の方に肌に触れられた事なんてなかったのに……本当に年下なのか疑いましたよ。」

「えっ……そんな、貴方なんで此処に……。」

「帰ってきたか、おかえり。」

眼の前に現れたスケッチブックを持った女に、リアは驚きと困惑

で身を固くした。薄い緑色の綺麗な髪をセミロングにし、黒いカチューシャで止めている。穏やかな琥珀色の瞳は大きく、肌の色は夜の闇に映える様に白い。背は司羽の肩より少し高いかどうかという程度で、顔立ちはどちらかと言えば童顔だったが、大人っぽい艶やかさも携えていた。胸も年相応に膨らみ、腰のくびれは服の上からでも分かる程。見る者からほぼ間違いなく美しいと形容される容姿だったが、リアは我に返るなりその女を敵意に満ちた視線で睨みつけた。

「ユーリア、何故貴方が此処にいるんです！！」

「何故、と申されましても……。それとこれは司羽様に頼まれたスケッチブックです。リア様、御確認ください。」

「え？　た、確かに私のですけれど……。」

リアはユーリアの行動が理解出来ないというように訝しげな視線をユーリアに送り、スケッチブックを確認した。ユーリアはスケッチブックがリアの物だと確認すると、そのまま司羽の傍へと寄った。

「悪いなユーリア、こんな夜中に取りに行かせて。」

「いいえ、元はといえば私達の責任ですから。それに星の明かりがありましたし、道を覚えているので大丈夫です。って、司羽様！？　私を子供扱いしないでください頭を撫でないでください、私は年上ですううううううううっ！？」

「こ、これは一体どういう事なのですか……？」

「ううっ……主。」

目の前で頭を撫でられてちょっと嬉しい様な複雑な様な顔をして文句を言っているユーリアを見て、リアはユーリアの発言の中に変な言葉がある事に気付いた。司羽様とはどういう事だろう？　もしかしたらという予想はあるが……まさか、そんな事はないだろう。リアはまさかとは思いつつ、確認の意味で司羽へと視線を送った。

「司羽さん、まさか。」

「ああ、ユーリアを使用人として雇った。」

「そんなっ、なんでですか!?　ユーリアは敵だったのですよ!?」

「そうじゃぞ主、いくらなんでも酔狂過ぎる。」

溜息をついたトワに合わせて、リアはユーリアを撫でるのを止めた司羽と、頭を押さえているユーリアを交互に見つめ、その表情を険しくした。

「絶対に反対です、信用できません。」

「……リアまでそんな事いうのか。」

「当たり前です、ユーリアは私を殺そうとしたのですよ!?　司羽さんにもしもの事があればルーンがどれだけ悲しむか!!」

「だけどなぁ。」

「主、リアも言っておるじゃろう？　いくらなんでも簡単に人を信用し過ぎじゃ、ユーリアが主を騙そうとしていないという保証がど

こにある。」

不安気な表情で説得してくるトワと断固阻止しますと顔に書いてあるリアに挟まれて、司羽もどうしたものかなーと頭を悩ませた。ユーリアもさすがに居心地が悪そうな表情をしている。司羽もこの状況は想像していたのだが……。

「俺はユーリアを信じるに足りる人間だと思ってるんだよ。」

「そういう所は主の美徳だとは思うが……。」

そう言い切った司羽に、トワは救いを求める様にリアを見た。ユーリアがここに居るという事は、リアが勝てなかった三人を少なくとも倒しているのだ。どんな手を使ったのかはリアには分からなかったが、ユーリアが司羽に従っている所を見るとそれは間違いない。ならば自分が暴力の面で司羽を心配するのは御角違いなのかも知れないと思ったが、ユーリアをただ信用する事も出来ない。取り敢えずリアは、今は司羽に考える時間を設けてもらうべきだと判断した。

「少なくとも、私はこの方を信用する事が出来ません。試験の間、共に行動するだけなら警戒も出来ますが、ユーリアの傍で眠るのは……正直怖いです。」

「……司羽様。試験の間、私は離れていた方が良いかもしれませんね。私がリア様に攻撃を仕掛けたのは確かなのですから。」

リアの発言を受けてかユーリアが司羽にそう言い、やはりこうなったかと司羽は心の中で溜息をついた。これも一応は司羽の予想の範囲だったのだが、リアにこうまで言われるのはユーリアに責があるとしても、司羽としては今日一晩ユーリアと離れて余計な不安を

ユーリアに抱かせたいと考えていた。ユーリアが司羽を騙そうとしているというのは司羽も考えたが、司羽はとっくにその考えを破棄している。これから一緒に過ごしていく上で、周りの誰もが自分を信用してくれていないとユーリアに思われるのは司羽としても心外だった。

「なら決まりだな。行くぞ、ユーリア。一緒に付いて来てくれ。」

「……はい？　それは構いませんが、何処へ、何をしにですか？」

「何って、寝に行くに決まってるだろ？　場所はこの近くでさっき見つけた洞穴。もう夜も遅いんだから、それに俺は眠れる時に眠るんだ。ああ、ちなみに寝具は一つしかないから悪いが共用だ。トワの分は一応念のために貰って来てあるんだけど、流石にこの事態は想像してなかったからな。」

司羽の発言に三人は暫く何を言っているのか理解できないという様に固まっていたが、暫くするとトワとリアは焦りの表情へと変化し、ユーリアは顔を赤くした。

「そ、そんな、司羽さん考えなおしてください！！」

「そ、そうじゃぞ主、危険すぎる！！　襲われたらどうするのじゃ！！」

「……なんだか寧ろ襲われる心配をしなくてはいけないのは私の様な気がしますが……司羽様に襲われたら抵抗出来そうにありませんし……主従とか、力とか、その……色々……。あっ、司羽様、その様な事は私が……。」

三者三様な反応を見せたが、司羽としては完全にそれをスルーで出ていく仕度を始めている。それを見たユーリアも顔は赤いままだったが、司羽の仕度の手伝いを始めた。リアとトワは焦りつつも顔を見合わせて頷きあった。

「そ、それなら童が主と一緒に行く！！　それなら寝具も三つで足りるじゃろう。童が主の中へ戻れば良い！！」

「駄目だ、リアを一人には出来ない。」

「わ、私なら大丈夫ですからトワさんを連れて行ってください！！」

「まだ体調が完全じゃないんだから無理するな。」

「ですが司羽さんとユーリアを二人にして貴方に何かあっては……。」

堂々巡りにしかならない会話に司羽は呆れ混じりの溜息を抑えられなかった。司羽としてはそのユーリアに余計な事を考えてほしくなかったのでこういう会話の繰り返しは早く終わらせたい。取り敢えずユーリアは何やら赤くなっていてこっちの話にまで頭が回っていないようだったが……。今の内に二人を説得しなければならないだろう。

「あのなぁ、俺がユーリアに襲われたからってどうにかなると思ってるのか？」

「そ、それは、確かにそうかもしれませんが……。」

「トワ、お前の主は誰だ？　心配してくれるのは嬉しいけどな、主

を信用する事が出来ないのか？」

「ううっ、そんな事はないのじゃが……。」

「なら、決まりだ。明日の昼までには迎えに来る、二人共ゆっくり休んでくれ。特にリアはさっきまで気絶してたんだから、気を付けろよ？　トワなら俺の居場所が判るだろうし、何かあったら直ぐに俺を呼びに来ること。」

司羽がそういうと、二人は渋々と言った感じだったが頷いた。リアとトワがユーリアとこのままなのは問題があると思うが、それも時間を置くべきだろうと司羽は思考した。ユーリアが司羽の荷物をまとめ終わると、司羽は手を挙げて二人に分かれを告げる。

「二人共、おやすみ。」

「あっ、そ、それでは、失礼いたします。」

司羽が荷物を持って洞窟から出ると、ユーリアはそれを追いかけて司羽に付いて行った。後に残された二人は司羽達を見送った後、お互いに顔を見合わせると、大きく溜息をついた。

「司羽さんって、結構強情なんですね。」

「ああ、その様じゃな。」

ユーリアの事は信用した訳ではなかったが、司羽ならそう大きな問題が起きる事もないだろう。……取り敢えず、リアとしては自分の問題をなんとかしなければならなかった。ユーリアの事は試験が終わればルーンにも話さなくてはならないだろう。そうなると、

リアの秘密の事がバレる可能性がある。なんとか誤魔化す方法を考えなくてはならない。

「トワさん、ルーンへの言い訳を一緒に考えてもらえますか？」

「ああ、まだ眠くもないしの。お安いご用じゃ。」

そうして、二人はルーンへの言い訳案を夜の間話し合いながら過したのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーー

「あ、あの……司羽様？」

「ん、どうした？」

司羽とユーリア、二人は光のない樹海の中を歩いていた。星の明かりがあるとは言え、先ほどユーリアがスケッチブックを探しに行った時よりも闇が深く、前は殆んど見えない状況だ。魔法で光を灯せばいいのだが、先ほどトワに危険だと言われてユーリアの持っていた杖は破棄された為それも出来ない。仕方が無いので夜目の利く司羽がユーリアの手を引いて歩いている状態だ。ユーリアとしては自分の手が汗ばんでしまっていないかと気になってしょうがなかったが。

「あの……先ほど仰っていた事なのですが。」

「えっと……どの事だ？」

「私を信用してくださっているという事です。」

「ああ、その事ね。」

ユーリアはなんでもない事の様に言う司羽を、不思議な物を見る様な眼で見た。司羽はそれに気付いて苦笑したが、何も言わずにユーリアからの言葉を待った。

「いきなり押しかけて来た私自身が言うのもおかしいのかもしれませんが……。何故、私を信用してくださったのです？　もしかしたら貴方を油断させて、そのままフィリア……リア様を捕えよう

と考えていたのかも知れないのに。」

「……さぁ、何故だろうな？」

「……惚けないでください。貴方はトワ様の言う様な、酔狂で行動する様な方ではないでしょう？」

「まぁ、確かに。」

「……きゃっ！？」

ユーリアは真剣に受け答えをしていない様に聞こえる司羽の反応に一時押し黙り下を向いていた。その為、司羽が急に足を止めたのに気付かず、司羽の背中に突っ込んでしまった。

「ユーリア。」

「……つ、司羽……様？」

「あの時、ユーリアは俺が見る物を見てみたいって言ったな？　それに、俺がどういう人間なのかを知りたいって、だから仕えてみたいんだって言ったな？」

「……はい、言いました。」

いつの間にか、司羽が真剣な顔で自分を見つめているのに気付き、ユーリアははっきりとそう言った。ユーリアが去っていく司羽を追いかけ、そして司羽に言った事。そこに嘘はなかった。ユーリアが自分で考え、進もうと思った道だ。司羽の使用人として生きる事が、復讐よりは良いと感じたからと言うのは確かにある。だがなんとな

く、そうする事が自分にとっても正解なのだと思ったのだ。それは別に傭兵の仕事先で出会った一人の男に付き従う事などではない。この司羽という人間の傍にいる事が、自分のあるべき姿だと。ユーリアは何故かそう思ったのだ。

「何故だと思う？」

「……はい？」

「ユーリアは何故だと思う？　何故俺がユーリアを信用したんだと思う？」

「……それは……。」

それを聞いているというのに。質問で返されてしまった。だが、司羽はユーリア自身をからかっている様には見えなかった。真剣にユーリアに質問しているのだ。少なくともユーリアはそういう感想を抱いた。だからじっくり考えてみて、それに答える事にした。

「分かりません。」

「……。」

「でもやっぱりさっきの私の質問、司羽様は答えなくてもいいです。その答えは私が考えます。司羽様の傍に居れば、いつか全部分かる時が来ると思いますから。なんかそうじゃないと意味がない気がしますし。」

ユーリアがくすりと笑ってそう言うと、司羽は無言で微笑んだ様に見えた。司羽が直ぐにまた前を向きユーリアの手を引いて歩き始

めてしまったので、ちゃんとは確認出来なかったのだが。
手を引かれているユーリアは、なんとなく司羽と繋ぐ手に入れる力を強めた。やはり、ここは正しい場所だ。誰がなんと言おうが、ここが自分の居るべき場所なのだと、そう思えた。ユーリアは司羽の方を見て優しげに笑みを深めると、この話はもう終わりにしようと、わざと別の話を切り出した。

「でも、司羽様もラッキーですよね。私みたいな可愛い女の子を賃金無しで雇えるんですから。」

「自分で可愛いとか言うなよ。それに金の事は勘弁してくれ。俺は家なき子で実質居候みたいなものだからな。家の家主はそういう事は気にしないだろうが、居候の身分としては自分の侍従の食費くらいは自分で出したいし。近くで色々採取出来るからそこまで金には困ってないが、流石に人一人の給料なんて出せないんだ。」

「まぁ私も両親の遺産がありますのでお金にはあまり困っていませんし、食事さえあれば問題ないのですが……司羽様って何処かに居候なさっているのですか？」

「ああ、ちょっとした事情があってな。」

司羽がそう言って苦笑すると、ユーリアはちょっと気不味そうに頭を下げた。失敗してしまったかもしれない……と。それを見て司羽はユーリアが何を勘違いしているのかすぐに理解した。

「申し訳ありません。司羽様の事をまだ良く知りもしないのに不作法な発言を……。」

「あーいや、こっちも勘違いさせる様な事言って悪かった。家が無

いって言っても親がいなくてとかそう言った理由じゃないんだよ。」

「……そうなのですか？」

「ああ、まぁ、実質こっち側にはいないんだけど……。」

「こっち側……？　なんだか良く分からないのですが。」

司羽の方も分かるはずがないだろうなと思いながら、ユーリアには話しておいた方がいいだろうと判断した。その内容というのは勿論世界間移動の事なのだが。

「えっと、だな。俺は実はこの星の人間じゃなくてだな……。まぁ、ぶっちゃけ異世界から来たんだよ。」

「……え？」

「ああ、分かってる。そういう反応されるって事も分かってた。取り敢えず後で説明するから今は置いておいてくれるか？　その為に紹介しなくちゃいけない人もいるし。」

表情を引き攣らせて首を傾げたユーリアを見て、司羽はついつい苦笑してしまった。そういえばトワにもちゃんと説明しなくちゃいけないかもしれないな。色々とあって説明するのをすっかり忘れていたからいい機会だろう。思えば、あのかくれんぼ事件からもう大分経った様な気もする。つい最近の事なのだが。

「取り敢えず、そろそろ着くから今日は早めに寝ようか。」

「……そ、そうですね。色々と聞きたい事はありますけど、明日

にしましょう。」

　司羽がそういうと、ユーリアの顔は急に赤くなった。手を握る力も自然と強くなってしまっている。司羽が見たところなんだか緊張しているようだ。無論ユーリアはこれから二人っきりで眠る事に対して緊張しているのに他ならないのだが。そんな事とは知らず、司羽がユーリアに大丈夫かと声を掛けようとしたその時、司羽は少し離れた場所、司羽の記憶だと洞窟があった場所から気配を感じた。司羽がまたもや足を止めたのに気付き、ユーリアが司羽の顔を覗き込むと、何かを考える様に表情を険しくしている。

「ど、どうなさいました？」

「この先の洞窟から人の気配を感じる。恐らく先客だろうな。」

「私は何も感じませんが……その洞窟ってどれくらい遠くにあるんです？　それにその様な方達は失格にしてしまえばいいのでは？　そういう試験なのでしょう？」

「まぁ、確かにそうなんだけどな……ちなみに距離にすると二キロって所だ。気を抜いてて気付かなかった。」

「それは近くありません、リア様達の居る洞窟からまだ半分以上あるじゃないですか。……それで、その方達が何か問題でも？」

　司羽の反応に対して心底不思議そうにしているユーリアの隣で、司羽は唸る様に考えた。と、言うのもその気配が以前にも感じた事がある気配で……はっきり言ってしまえば友人の気配だったのだ。まぁ試験前にはこういう事もあるだろうとは覚悟していたのだが。

「やっぱり、友人だからって見逃したりするのは良くないよな？」
「なるほど、そういう事ですか。………まぁ確かに試験的にはそうかも知れませんね、ペーパーテストで言うカンニングの様な物でしょうか？　私はこういう事は良く分かりませんが。」
「………今から失格になってもA台には残れるだろうし………まぁいいか。取り敢えず、寝込みを襲うのは嫌だからな。今ならまだ起きてるみたいだし、急ぐぞ。そっちの荷物もこっちに渡せ。焦らなくていいけど、ちょっと速足で行く。」
「は、はい。」
司羽はそう言ってユーリアから荷物を受け取ると、ユーリアが付いて来れるスピードで夜の樹海を走りだした。

――――――――――――――――――
――――――――――――――
――――――――――――

「大丈夫か、ユーリア？」

「……司羽様、なんで荷物持ってくれていたのに息が乱れてないんですか？　さすがに理解出来ません……。」

「たかが二キロだろう。」

「あんな速度で走る二キロなんて初めてです……短距離じゃあるまいし……。」

呼吸を整えながら話すユーリアに苦笑しながら洞窟の入口へと向かう。中にいる人間は取り敢えずまだ起きているらしい。だから取り敢えず呼んで見ることにした。

「おーい、出てこーい。出てこないと入口を岩で封鎖するぞー。」

「この声は……つ、司羽！？　何故ここに！？」

「あーやっぱりそうだったか。」

「この方達が司羽様のご友人ですか……あまり強そうには見えませんが……。」

司羽の脅迫染みた発言で奥から現れた二人の内の一人は司羽の予

想通りの人物だった。司羽と同じくらいの身長に、少し癖のある金髪の少年、ムーシェは司羽がそこに居る事に大層驚いた様子だった。

「よお、ムーシェまだ残ってたんだな。」

「ああ、ほんの少し司羽の御蔭でもあるのかもしれないけどね。君が開始早々にあんな騒ぎを起こしてくれたおかげで君の隣にいる事の多い僕まで敬遠し出した生徒がいたのはたしかだし。その御蔭で魔力もあまり消費していない。僕は魔力の回復がどちらかと言うと遅くてね、ありがたい事だよ。」

「ああ、そういえば私が侵入する時にも教師やスカウトが噂されていましたね。今回試験準備時間中に強化中のフィールドすら貫通して襲い掛かってくる恐ろしい生徒がいると……あれは司羽様の事でしたか。」

「そんな噂になってるのか……。」

あんまりそういう噂は好きじゃないんだが……と司羽が渋い顔をしていると、ムーシェはユーリアの事が気になった様子で、観察する様な視線を送っていた。ユーリアがなんと自己紹介していいのかわからないといった感じで視線を向けて来たので、司羽は助け舟を出す事にした。

「司羽、君は確かリア嬢とペアではなかったのかい？　それにこの人、この学園の生徒でもないよね。こんな美人なら流石の僕も忘れる筈ないし……。」

「ああ、ユーリアは俺の侍従だ。ちょっとした訳があってここにいる。それとリアは今別行動なんだ、まぁトワを置いて来たから問題

ないさ。」

「ユーリアと申します、司羽様の侍従をさせて頂いております。」

不思議そうに訪ねてきたムーシェに司羽がそう言ってユーリアを紹介すると、ユーリアはそれに合わせて綺麗にお辞儀をした。その時のユーリアの動作がとても優雅で、家の都合上で上流階級と会う事も多かった司羽もそれに感心した。そういえば自分に付き従っている時の立ち居振る舞いも中々様になっている、一体どこで習ったのだろうか？　取り敢えずユーリアの事を深く聞かれると面倒なので、直ぐに話題を逸らす事にした。

「それで、ムーシェのペアってのは……。」

「ああ、紹介するよ。この子は僕の妹の……。」

「リンシェです。司羽さんには不出来で無礼な兄さまがいつもお世話になっております。」

「り、リンシェ、それはあんまりではないかい？」

「本当の事でしょう。」

表情を若干悲しみの色に染めて話すムーシェの隣で軽蔑混じりの視線を送っているリンシェと名乗った少女に、司羽は視線を移した。髪はムーシェと同じダークブロンドとでも言うべき色感の金色でショートヘアーという程度の長さ、身長は百三十と少し程度だろうと司羽は推測した。色感が違うとはいえ同じ金髪で小柄なのに第一印象がルーンと全く被らないのはその橙色の瞳のせいというのもあるだろう。今その瞳からムーシェへ発せられている視線は少々キツイ

感じがする。まぁ、ルーンも最近俺の周りの人間に滅茶苦茶キツイ視線を送る様になったけど……ミシュナは今頃大丈夫だろうか？

「リンシェは十二だが、これが中々魔法の才に長けていてね。年は低いがクラスは僕と同じＡマイナスクラスなんだ。」

「へー、君凄いんだな。」

ムーシェの言葉に司羽が素直に感心すると、リンシェは謙遜している様子もなくただ当たり前の事の様に首を横に振った。

「凄くはありません、司羽さんの恋人であるルーン様は私の年で既に学園全体の主席でした。それに色々な方々から既に認められていましたし……私はまだまだです。」

「あー……司羽、リンシェはルーン嬢のファンなんだ。とは言ってもいきなり君を襲ったりはしないから安心してくれ。」

「ああ……しかしルーンは本当に人気なんだな。」

「当然です。ルーン様はこの学園の、いいえ、この町、この国の誇りなのです。憧れを持たない筈がありません。」

「誇りって……。」

なんだか聞いてるとルーンが地球での俺の家みたいな扱いをされてるみたいで妙に受け入れ難いな、良い事なんだろうけど。と、司羽がそんな事を考えていると、ユーリアが少し青くなった顔で手を挙げてきた。何やら質問があるらしい。

「どうしたんだ？　何かあったか？」

「い、いえ、その……司羽様の恋人と言う方の名前がルーン様と聞こえたのですが……それはまさか、次元魔法の……？」

「ああ、その次元魔法のルーンだと思うぞ？　ちなみに言い忘れてたけど俺が住んでる家の家主もそのルーンだ。」

「はい、ルーン様が司羽さんをそれはもう異常な程に愛していらっしゃるのは、ルーン様と同じ教室で授業を受けている私達には知れ渡っています。司羽様の事を話すルーン様はそれはもう嬉しそうですし、司羽様の悪口を言っていた学生がルーン様に次元の彼方へ飛ばされそうになったりしていましたしね。あの時はミシュナさんがルーン様を説得して救出しましたけれど、それがなければ確実に一人の命が消え去っていたでしょう。あの時のルーン様はミリク先生が止めに入るのを躊躇うくらいに怖かったですし、それ以来私達のクラスで司羽様の悪口は死と同義となっているのです。」

「「……。」」

司羽の発言に表情を引き攣らせたユーリアは、続けたリンシェの言葉に顔色を一層青くした。余程ショックだったらしく、そのまま沈黙してしまっている。司羽もそんな事があったとは聞いていない。どうやらミシュナには色々な所で世話になっているらしい。やはりミシュナに指輪を贈ったのは間違いではなかったようだ。

「……もしルーン様に司羽様を攻撃しようとした事が知れたら……私はどうなってしまうんでしょうか……。」

「ユーリアさん、どうかなさいましたか？」

「あ、い、いえ、何でもありません！！」

真っ青になって呟いたユーリアの声を微かに聞きとったリンシェが尋ねると、ユーリアは声を裏返しながらそう答えた。聞き取ることが出来た司羽はそれを見て苦笑してしまったが、ルーンにはリアも本当の事を隠したがっていたし、心苦しいが何か考えておいた方が良いかもしれないと思いなおした。

「そ、それより司羽様。これからどうなさるのですか？」

「ああ、そういえば忘れてた。」

「ん？　何がだい？」

「いや、何がって決まってるだろう。これは試験なんだぜ？　……取り敢えず、友人相手に不意打ちはどうかと思うから、そっちからどうぞ。」

ユーリアが咄嗟に話題を変えて司羽に言って来たのを聞いて、司羽も忘れかけていた試験の事を思い出してそう言った。ムーシェはそれを聞いて暫く沈黙すると、冷や汗を流した。

「えっとだね……それはつまり……。」

「ああ、勝負だって事だな。そっちには悪いが試験に不正はいけないと思うんだよ。」

「ちょ、ちょっとお待ちください司羽さん！！」

司羽がムーシェの問いに答える様にそう言うと、リンシェが焦った様な表情で前に出て司羽を制止した。どちらかを失格にすれば良いのだから戦うのはどちらかでも、二人相手だろうが司羽は構わないのだが、出来ればこんな小さな女の子を攻撃したくはない。どうしてもやらなければいけないなら話は別だが、ムーシェを攻撃して済むならそれが一番だろう。……若干酷い思考だとは思ったが。そんな事を考えつつ、司羽はリンシェに視線を移し、言葉を促した。

「あの、これは相談なのですが……ぶっちゃけ正直な話、私達を見逃してくれませんか？　出来れば保護もお願いしたいです。」

「……うーん……。」

まぁ、そう来るだろうとはなんとなく思っていた。今朝の一件はリンシェも知っているみたいだし、ムーシェと自分は一度対戦済みなのだから、それを見ているとすればそこから検証して勝てないと判断したのかもしれない。交渉は妥当な選択といえばそうなのかも知れないが……。

「ユーリアは参加者じゃないから今なら二対一になるよ？」

「前にやっていた兄さまと司羽さんの対戦は私も見ていましたが兄さまは戦力になりません、ですから一対一です。そして私は司羽さんに勝てると思うほど判断力が鈍くはありません。我武者羅に逃げて逃げ切ったとしても魔力を使い果たして他の人達にやられちゃいます。」

「リ、リンシェ！？　酷いじゃないか、兄さんが嫌いなのかい！？　それに兄さんにもプライドっていうものが……。」

「プライドでクラスが上がるなら安いものです。それに転校生で右も左も分からない司羽さんを無理矢理戦わせて、挙句に遊ばれて、結局無様に負けた兄さまなんてとっくに大嫌いです。学園主席の兄さまを少しは尊敬していたのに、正々堂々戦ったのならまだしもあんな真似するなんて、最低です。さっさと失せてください。」

「り、りんしぇえええええええええええええええええええええっ！！！！！！！！！！！！！」

ダッ

ムーシェはリンシェのごみを見る様な視線を受けると、泣きながら夜の樹海の中へと走り去っていった。まぁ、杖は持っていた様だし大丈夫だろう、そもそも教師とかスカウトから監視されているから遭難の心配はないし。誰かに会って倒されるならそれはムーシェが悪い。

「まぁそれで見逃すって話だけど、やっぱりいけないと思うんだよね、そういうの。」

「そこをなんとかなりませんか？　実際手を組んでいる方達は沢山いますし、ルール違反にはならないかと。」

「うーん、でもそういう人ってのはお互いに利益を感じてそうしてる訳でしょ？　正直俺は一人で足りてるし、リアを今あんまり戦わせたくないからこれ以上護る対象が増えるのも困るんだよね。」

「ううっ、結構ドライですね。」

「司羽様は身内には滅茶苦茶優しくてそれ以外にはドライな方だと

私も思っています。」

がっくりと項垂れたリンシェにユーリアが付け足す様に言った。奇襲を掛けなかったり、ちゃんと攻撃を待ってる時点で冷たくはないと思うのだが、二人にドライ認定をされてしまったようだ。女心は難しいとか司羽が考えていると、リンシェが急に手をポンと叩いた。

「利益ならあるじゃないですか！！」

「ん？　どういうことだ？」

「えっと、司羽さんとユーリアさんは……その……えっちな目的で二人になったんじゃないんですよね？」

「ふぇぇぇっ！？」

「な、何を言ってるんだ！？」

リンシェの発言に司羽は表情を固まらせ、ユーリアは顔を真っ赤にして俯いてしまった。司羽達の反応を否定と取ったのか、リンシェは顔を赤くしながら指を立てて説明した。

「二人にその気はなかったとしても、司羽さんにはルーン様という恋人がいます。リアさんが別行動してらっしゃるのですし、恐らくこの事もルーン様の耳に入るでしょう。だから、私が証人になるのです。夜の間二人はそういう事を何もしていらっしゃらなかったと。」

「……なるほどな。」

まぁ、確かに疑われる事もあるかもしれない。少なくともミシュナは疑ってくるだろう。だが、正直ルーンは自分の言った事ならば基本的に信用してくれているのだ。だから証人を用意する方が寧ろ誤解を招く結果になるかもしれない。……とはいえ、リンシェにこんなに期待された顔で見つめられたら……断れないよなぁ。

「ど、どうですか？」

「……まぁ、仕方ないな。」

「ほ、本当ですか！？」

司羽が苦笑して頷くと、リンシェは胸の前で手を組んで跳ねるように喜びを顕わにした。その様子を見て、ユーリアは司羽に視線を送るとくすくすと笑った。

「ふふっ、司羽様はお優しいですね。可愛い女の子だから特別ですか？」

「あのなぁ……。」

くすくすと笑うユーリアに居たたまれなくなって、司羽は手で二人を洞窟の奥へ払うようなジェスチャーをした。

「二人共さっさと寝ろ、夜の間は俺が番をしてやるから。ムーシェは帰ってきたら手伝わせるけどな。」

「はーい！！」

司羽がそう言うと、リンシェはぴょんぴょん跳ねるように上機嫌で洞窟の奥へと入って行った。だが司羽は、夜番をする為に入口まで出ようとして、ユーリアが司羽を見つめたまま微笑んで動かない事に気が付いた。

「ユーリア、どうしたんだ？　早く寝ろよ。リンシェも不審に思うぞ。」

「いえ、やっぱり司羽様は自分の身内の人間には優しいんだなーって思いまして。あの時に私達を見ていた見下す様な眼とは大違いです。」

「……唯の取引だよ。まぁ、あの子を攻撃しにくくなったってのはあるけどな。」

「……ふふっ、司羽様は嘘吐きですね。まぁ全部が嘘ではないですし、照れ隠しみたいな物でしょうか？」

「……なんだよそれ。」

司羽の方を見て微笑むユーリアに、司羽は半ば呆れる様な声でそう言い返した。そんな司羽に、ユーリアは嬉しそうな声で言った。

「私の為なのでしょう？」

「……なんでそうなるんだ？」

「あの二人を失格にしなかったのは、私が司羽様と二人っきりの夜を過ごすのに緊張していたから。だからあの子を挟んで緊張を和らげようとしてくれたんです。あの子がどんな子だろうと、取り敢え

ず女の子がいれば私は一先ず安心出来ますから。」

「自意識過剰だよ、それは。」

司羽は入口付近まで行くと、そこにあった岩に腰を下ろした。ユーリアは壁に背を向けて、だが、視線だけは依然司羽へと向けていた。

「そんな事ありません。だって、司羽様は試験は試験だって割り切れる人ですから。友人だから奇襲は嫌だとか言う人じゃありません。あれは洞窟に、ムーシェ様の他にリンシェ様の……女の子の気配を感じたから利用しようと思ったんですよね？　私の為に。」

「……。」

「理由は他にもありますよ？　貴方は試験中に気を抜く様な人じゃありません。だからあの時二キロ先の気配に気付いたのは嘘です。気付いたのはムーシェ様とリンシェ様の気配じゃない、リンシェ様の気配が女の子だという事です。それにさっきだって私が言いださなかったら、あの二人が見逃して欲しいって話をするまでずっと無駄話をしているつもりだったのでしょう？」

ユーリアがそこまで言うと、司羽は溜息をついて苦笑しながらユーリアへ視線を向けた。ユーリアは微笑んだままその視線を受ける。暫くそのままだったが、司羽はしびれを切らした様に背を向けて夜番に入った。それを見てユーリアは若干拗ねた様な表情になった。

「まだ会って一日と経ってないのに、よくもまぁそう簡単に人の性格を判断出来るもんだ。まぁ、外れてるけどな。」

「……いいですよ、司羽様が強情な人なのもなんとなく分かってましたから。……だから、これから貴方の傍でゆっくり確かめさせてもらいます。」

「まぁ、そうしてくれ。」

「……でも、これだけは言いたかったんです。」

ユーリアはそう言って岩に座っている司羽の傍まで寄ってきて肩に手を乗せ、腰を落として耳元で囁いた。

「……ユーリアを、貴方の身内に迎えてくださりありがとうございます、ご主人様。」

ユーリアは一言そう言うと、頬をほんのり赤くしてリンシェの待っている洞窟の奥へと姿を消した。それを背中で感じ取り、司羽は一人溜息をついた。

「……どうも年上ってのは、苦手だなぁ。」

司羽の独り言は風に混じって夜闇へと消えた。そして、司羽がユーリアと初めて出会った夜は静かに過ぎて行ったのだった。

第２５話：試験終了？

『これは一体何事なのですか？』

「フィ……リア様、おはようございます。」

『ユーリア、出来ればあまりボロを出さない様にして欲しいのですが。』

「……申し訳ございません、以後気を付けます。」

『いえ……それより。』

リアは視線を少し離れたところにいる司羽へと向けた。リアとトワが朝早く司羽とユーリアの洞窟まで来てみると、司羽とユーリアは二人揃って外へ出ていた。それだけならば特に問題はなかったのだが、司羽の傍にいる人間と、その行動にリアとトワは揃って首を傾げてしまったのだ。ちなみにリアの装備は最初と同じで、ちゃんとローブも纏っている。

「あれは……確か主の友人のムーシェと言ったかの？　もう一人は……。」

「その妹様のリンシェ様です。なんでも、司羽様に稽古を付けてもらうとかで。」

『稽古って……試験中に何故そんな展開になるのですか。』

リアが呆れた（様に感じる）様に肩を竦めると、トワはその隣で

少し離れたところにいる司羽達を眺めた。試験に使っている三人のフィールド発生装置のセンサーに司羽の気を感じる。恐らくリアにしたのと同じ様にセンサーを妨害しているのだろう。理屈は分からないが、あの稽古とやらが原因で試験に影響を与える事はなさそうだ。トワはそれだけ確認すると、ユーリアの方へと視線を戻した。

「昨夜はあの二人と一緒だったのかの？」

「ムーシェ様は存じませんが、リンシェ様は私と一緒に居られましたよ。司羽様が夜番をしてくれていたので、恐らくムーシェ様も同じ様に夜番をしてくれていたのでしょうが。」

「なるほど……主と二人っきりにはならなかったという訳じゃな。」

「はい、そうなりますね。とはいえ、リンシェ様は早々に御休みになられましたし、ムーシェ様は何処かへ行ってらした様ですので殆んど二人っきりと同義な状態でしたが。」

「……まぁ、主に限ってお主にしてやられる事はないとは思っておったがの。」

トワはそう言って少し不満気に息をついた。昨夜に比べてユーリアへの警戒度が少し下がっているのがトワの口調からなんとなく分かった。どちらかと言えば嫉妬心の様な物が強く出ている気がするとユーリアは察知し、その表情を笑みへと変えた。

「トワ様は司羽様の事が好きなのですね。」

「当たり前じゃ、そうでなければ魂契約は結ばん。主は少なくとも

童には優しいお方じゃ。夢の中で触れ合った時にそう分かった。だから童も安心して傍について居られるのじゃ。」

「……魂契約？　それに夢の中って……どういう……？」

「ああ、二人共来てくれたのか。そろそろ迎えに行こうと思ってたんだ。」

　ユーリアがトワへ質問しようとしたが、少し離れたところから司羽の声が聞こえたのでそれを中断した。トワは見るからに表情をぱぁっと華やがせると、司羽の方へ駆け寄って行った。本当に仲が良いらしい。色々気になる事はあったが、トワへの質問は取り敢えず保留だ、後で聞く機会は何度でもあるだろう。ユーリアはそう思考すると、トワへ続くようにリアと一緒に司羽へ近づいた。司羽の直ぐ傍では先ほどまで司羽に武術を習っていたムーシェとリンシェが地べたに座っていた。

「ううっ、疲れました。武術っていうのは難しいですね……前見た時からやってみたいと思っていたんですが。」

「だから言っただろう、一朝一夕で身に付くものじゃないって。下手に使うなら魔法だけを使ってた方がまだましだよ。」

「やはりそうなのですね、簡単に強くなれると思った私が浅はかでした。」

「……僕はもうごめんだね、肉体労働より頭脳労働の方が性に合ってるよ。」

「なるほど、稽古というのは武術の稽古じゃったのか。遠目に見て

踊りの稽古でもやっておるのかと思ったぞ。」

「なんとも辛辣な評価だな、それは。まぁ、最初は皆こんなものさ。」

ムーシェとリンシェの動きを酷評したトワに司羽は苦笑した。二人共元々こういう動きには慣れてないのだろう。生活の中でも魔法を多用しているのだろうし、体に力を入れるという事すらあまり無いのかも知れない。とはいえ気を使いこなせる様にさえなれば後は集中力の問題が大きくなる為、筋力はあまり問題ではなくなるのだが。

「二人共、こっちの女の子はムーシェの妹のリンシェちゃんだそうだ。」

「あ、初めまして。トワさんにリアさんですよね？　お話は聞いています。」

「宜しくじゃ。」

『初めまして。』

司羽がトワとリアにリンシェを紹介すると、リンシェは立ち上がって二人に向かって綺麗にお辞儀をした。二人もそれに合わせる様に軽く挨拶をする。そこで司羽はリアから視線が来ている事に気が付いて、リンシェについて捕捉した。

「この子が俺とユーリアの身の潔白の証人になってくれるって言うから、取り敢えず和睦が成立したんだ。」

「はい、御二人が隣で何かしていれば私が気付きましたから。司羽さんは浮気なんてしてませんよ？」

『ああ……なるほど、そうでしたか。そういう事でしたら安心ですね。実はちょっとそういう意味でも心配していたんです。』

「……リア、それはどういう意味だ？」

『そんなに深い意味はありませんよ？　ユーリアの事について本当の事をルーンに言う訳にも行きませんし、隠す事は隠すつもりですが万が一と言う事があります。もしルーンにバレた時に司羽さんが困るんじゃないかなーと思いまして。ユーリアと二人になると言い出したのは司羽さんですから。』

リアのちょっと棘のある言い方に司羽は表情を引き攣らせながら視線を逸らした。まぁ、昨日ちょっと強引に話を進めたのをリアも根に持っているのだろう。リアはどうもルーン贔屓らしいし、ユーリアの事をまだ完全に信用出来ていないのもあると思う。まぁ、それはその内時間が解決してくれるだろうと思い返し、司羽は本題に入るべくユーリアへと目配せをした。

「ユーリア、そろそろ試験が終わると思うんだが。」

「……そうですね。此処にこのまま私が司羽様と一緒に居る訳にも行きませんし、なんとか脱出しなくてはいけません。」

「……どういう事じゃ？」

「簡単な事だよ。今は試験中、ユーリアは本来は此処に居ちゃいけないって事さ。」

首を傾げたトワに、司羽は苦笑しながらそう答えた。本来此処には生徒と監視、サポート役の教師しか居ない筈なのだ。それだというのにユーリアがいる。見つかったら確実に何故此処にいるのか、どうやって入ったのかを聞かれ、納得のいく説明を求められるだろう。それはなんとしても避けたい。その為にユーリアには司羽達とは別に此処から脱出してもらわなくてはならないのだが、それには色々と問題がある。

「第一にユーリアを一人に出来ないんだよなぁ。」

「はい、司羽様が私から離れれば恐らく直ぐに魔法で見つかってしまうでしょうね。仲間が居る時ならまだしも、皆既に撤退してしまっている筈ですから……。」

今現在、スカウト達の為の魔法による監視の目は司羽が妨害している。その為ユーリアが此処に居ても気付かれる事はないのだ。元々ユーリアは傭兵団として此処に送り込まれ、外からのサポートを受けて行動していたが、今となってはそれも受けられない状態だ。だからと言ってこのまま此処に居ても試験が終われば司羽達は控室に戻らなくてはいけない。一緒にユーリアを連れていけば入口に居る教師に見つかるだろうし、ユーリアを此処に置いていっても魔法で探知されておしまいだろう。

「まぁ結論から言えば、俺がユーリアを一人にせずに入口にいる教師数人を何とかすればいいんだけどな。選手控室は入口を抜けて直ぐだから一度バレないように選手控室にユーリアを連れて行っちまえば、後から来たんだと言い張れるし。」

『……でも、暴力で教師を気絶させたりとかは止めた方がいい

でしょうね。そうなれば後からそんな事をしたのは誰かと追求が激しくなりますし、そもそもそんな事が出来る人物は限られてますから確実に疑われますね。特に今回はミリク先生が監視に付いていますから、あのミリク先生を気絶させられる人なんてルーンと司羽さんくらいでしょうし。』

「そうだな……ムーシェ達と違って口封じも出来そうにないし……。」

「口封じ……？　口止めじゃなくてかい？」

「ああ間違ってないぞ、口封じだ……この意味、分かるよな？　あ、リンシェちゃんも頭の良い子だからそんな事しないよね？」

「はい、神に誓って。ルーン様の大事な方に害を加えるなどありえない事です。」

「……なんだか若干扱いに差を感じるんだが……。」

ムーシェに視線を送ってそう言った後、司羽がリンシェに諭すように言うとリンシェは微笑みながらそう答えた。ムーシェは不満そうにしているが、このくらいの差は妥当だろう。そんな事よりも今はこの問題を解決する術を見つけなくては。

「うーむ……そうじゃ、童が魔法でこの試験会場を吹き飛ばして何もなかった事にするのはどうじゃ？　主の力を使えばその程度簡単じゃ。それにムーシェを攻撃しようとしたらやり過ぎたと言い訳も出来るぞ？」

「ああ、なるほど。それは良いかもしれませんね。ついでにこの馬

鹿兄を他の国まで飛ばしてしまっても構いませんよ？」

「酷い、酷いよリンシェ！？　昔はあんなにお兄様お兄様って慕ってくれていたのに！！」

「え？　記憶の捏造は止めてくださいキモイですお兄様。司羽さんが私のお兄様だったらよかったのに……そうすれば私はルーン様の妹になる事でしょうし。」

「そんな……もう僕は生きていけない……。」

リンシェの言葉に打ちのめされてガクッと膝をついたムーシェに憐れみの視線を送りつつ、司羽はあるヒントを得ていた。その様子に気付いたのか、ユーリアは司羽の方に視線を送ってきている。

「どうかなさいましたか？」

「いや……そんな事したら試験妨害で無条件失格くらうかもしれないし、トワのは流石にやり過ぎとしても、パニックを起こすってのは案外良い作戦だと思ってな。監視員が直接こっちに状況を把握しに出向かないといけない様な対処に困るトラブルが広範囲で発生すれば、入口付近の監視員も出払うだろうし。」

『なるほど、道を塞いでいる教師をおびき寄せるわけですね。』

「ああ、でも肝心の内容が思いつかない。本気で試験をやり直しにさせるようなレベルのパニックや不自然過ぎるトラブルは、ミリク先生辺りなら俺が何かしたって気付くかもしれないんだよな……どうもあの先生は苦手だ。誤魔化しきれる気がしない。あんまり暴力的手段に出たくはないしな。」

そんな問題だったら確実に原因究明をしてくるだろうしな。昨日問題を起こしたばっかりなのにそんな事になったらまず俺が疑われるし。俺がやったってバレたら混乱させた責任をとって試験失格もありえる。ぶっちゃけ俺が落ちても入れ替え試合で上がってくればいいだけなんだが、リアにも付き合わせる訳にはいかないし。でもそう考えると浮かばない、先生をおびき出す事が出来て、笑い話で済みそうなトラブルとなると……。

「駄目だ、思いつかないな。」

『そうですね……一応外につながっている非常用のワープゲートを使う手もありますが、普段は魔法で施錠されて解放されていませんし。あそこの魔力強度は此処に来ていない他の先生達が逐一見ていますから、無理矢理開ければ確実に分かります。そんな事が出来る人間はやはり少ないですから、結論からいえばバレますね。』

「なるほどな。外に直接通じてるなら利用できそうだけど……俺は魔法は良く分からないからな。そこは反則に使われやすそうな所だからジャミングしても寧ろそれで気付かれるだろうし。でも、時間もないしな……。」

ピンポンパンポン

「えー、連絡します！！」

司羽が危険を覚悟で強行突破で行こうと本気で考え始めたその時、樹海にミリクのアナウンスが響いた。司羽は試験終了の合図だと思い、つい舌打ちをしてしまった。だが、ミリクから次に発せられた言葉は司羽の予想とは全く違う言葉だった。

『司羽君、司羽君、至急こっちに戻ってきてください。お姫様が限界みたいです。私もあれをどうにかする勇気はないですから。非常用のゲートが近くにあればそれ使ってもいいので速やかに控室まで戻ってきてください。ちょっと本当に急いでくださいね？　私の責任になりかねないんですから。試験とかどーせ誰とも戦う気ないんでしょ？　だから早くしてください、十分以内に来なかったら失格にしますからそのつもりで。繰り返します……。』

「……は？」

ミリクのアナウンスが繰り返される中、司羽は呆気に取られた様にユーリアに視線を送った。ユーリアも驚いた様に司羽を見ている。まぁ、何はともあれ。

「理由は分からないけど、助かったみたいだな。」

『司羽さん、取り敢えず急ぎましょうか。ゲートは学園の外につながっているのでユーリアにはそこで待っていてもらいましょう。』

「……分かりました。」

「では、私とお兄様はここで。」

ユーリアがそう答えると、リアは樹海の奥の方を指差した。確かにあっちの方に何か魔力を感じる。恐らくそこがゲートなのだろう。司羽は頭を下げるリンシェに微笑みかけた後、三人を連れてワープゲートへと向かった。十分とは無茶な要望だが、取り敢えずはこの偶然に感謝する事にしようと、司羽は一人笑ったのだった。

第２６話：お姫様の限界と特効薬

「司羽……っ！！」

「おっと!?　ルーン、どうしたんだ？　何かあったのか？」

「……ううん、私良い子で待ってたよ……ギュッてして、司羽……。」

「……本当にどうしたんだ？」

司羽達が選手控室に入ると、瞳を潤ませたルーンが飛び付く様に抱き着き、司羽はそれを受け止めた。ちなみにユーリアは校門の辺りに待たせてある。ユーリアからトワに聞きたい事があった様なのでトワも一緒だ。ムーシェ達はまだ中なのでここに一緒に戻って来たのはリアだけである。そのリアも、ルーンが泣きながら司羽に抱き着いているのを見て困惑しているようだ。ルーンが何も答えずにいるので、司羽は説明を求める様に近くでぐったりと座り込んでいるミシュナに視線を向けた。ミシュナは司羽の視線に気付くと、溜息を一つついてから立ちあがった。

「……私に感謝しなさい？　なんとか犠牲者はゼロよ。」

「……犠牲者って……どういう意味だ？」

「そのままの意味よ。」

「あ、司羽君戻ってきたんですね。時間内と言う事でペナルティも無しです。ミシュナさんもお疲れ様でした。」

ミシュナの言葉に訳も分からず司羽とリアが呆けていると、半放心状態のシノハを連れたミリクがいつも通りの笑顔で近づいてきた。ミシュナはそんなミリクを恨めしそうな眼で見て、直ぐに諦めた様にまた嘆息した。

「えっと……どうしたんだ？　放送も良く分からなかったし、何が起きたんだ？」

「あら、放送でも言ってたでしょ？　そこのお姫様の限界が来たのよ。」

「いや、だから意味が……。」

「……こっちの試験は開始早々にこの子があんたの帰りを此処で待つ為に暴れて直ぐに終わったの。でもそれじゃあスカウトにも見せ場作れないし、試験にならないって言うから私達だけAプラスクラスに合格扱いで抜けて、仕切り直ししてるの。だからそんな訳で私達は昨日の昼からずっと此処で待ってたってわけよ。」

「……そっちはそんな滅茶苦茶な事になってたのか……。」

『滅茶苦茶って言っても、司羽さんもルーンの事言えないんじゃないですか？　こっちの場合は試験前にやらかしていますし。』

今日のリアは若干不機嫌っぽく感じるが、まぁ理由は分かっているので今はスルーしておく事にする。しかし昨日からずっと待っていたって、先に家に帰ってたりすればいいのにと思わないでもないが、個人的にはかなり嬉しい。ミシュナもルーンに付き合ったのだろうが、結果的に待っていてくれたのだし。

「でもそれで、流れでお姫様ってのがルーンってのは分かるが、ルーンの何が限界なんだ？　待ちくたびれたとか？　確かに凄い長い時間ではあるけども流石に一学生の希望で放送が掛かったりしないだろ？　試験中で、他の人から見れば結局はルーンの我儘って事になるんだし。」

「そうね、いくらこの子がＶＩＰ格って言っても、流石にそこまではね。学園側の体面もあるし。……でもまぁ、それが今回の直接的な原因って言えばそうかもしれないわね……。」

疲れきった表情でそう言ったミシュナに、司羽も若干嫌な汗が出てきた。ルーンは依然自分に抱きついたまま擦り寄ってきている。……そういえば、ルーンは俺の事になるとかなり過激になったりする事があるし……。

「……まさか……此処で暴れたのか？」

「ええ、暴れたって言えば暴れてましたね、といっても主にルーンさんの魔力がですが。シノハちゃんなんて今回のストレスの元凶ですからねー。抑え込む時にもかなり当てられたみたいですよ？　私がいたずらしても反応すら億劫みたいですし。」

そういってクスリと笑ったミリクに、支えられるようにして立っているシノハは恨めしそうな視線を向けた。いたずらとは何をされたのだろうか？　なんだか気になるが気にしてはいけない気がする。司羽がそんな事を考えていると、リアがミリクの言葉に何か気になる事があるようで、スケッチブックに鉛筆を走らせた。

『……魔力の暴走？　そんな馬鹿な事が本当に？　死刑囚じゃな

いんですから。』

「……ええ、本当にね。馬鹿げてるわ、どうしてくれるのよ、司羽はさっさと責任取りなさい。もう帰る気力も残ってないわ。」

「いや……えっと……魔力の暴走って？」

「ああ、そういえば魔法学でも基礎中の基礎過ぎて司羽君には説明してなかったんですねー、Ａプラスクラスですし。魔力の暴走っていうのはその名前の通りの意味です。正確には三つのタイプがあって、自衛型の暴走と、制御出来なくなっての暴走と、その複合型があるんですけどね。今回は自衛型の暴走ですね。自分に身の危険が迫ったりとか、どうしても許容出来ない事が起きた時とか、どうしようもないくらいストレスが堪ると自分の心の命ずる儘に、自分の心を、あるいは体を守る為に魔力が勝手に動いちゃうんです。制御系も実質凄く危険な実験とかしないと起きませんが、自衛型だって、それこそ死刑囚とか変な薬の禁断症状でとかじゃないと起きないんですよ？　そのレベルでも起きない事の方が多いですし。」

……ああ、なんとなく想像はしてたけど魔力の暴走ってやっぱりそういう類のやつだったか。一日待って退屈だったとはいえそんなにストレスを感じるなんて……でも日ごろからのストレスの蓄積みたいのでってレベルの話でもなさそうだしな……。

「なんというか、司羽君がちょっと分かってないみたいなので言いますけど、ルーンさんは昨日試験の後に此処に戻ってきてからさっきまで、ずっとあそこの隅っこの辺りで動かずに、飲まず食わずで睡眠も取らずに司羽君を待っていたんですよ？」

「……はい？」

「ピクリとも動こうとしないのが心配なのでずっとミシュナさんが付いていてくれましたけれど、話しかけてもずっと返事がありませんでしたし。夜に見周りに来る度に私も気にはしていましたけど、ルーンさんはじーっと司羽君のいるエリアの方を見て固まっていました。寝てるのかとも思いましたけど、何かを呟いてるようでしたから起きていたとは思います。とはいえ眼が完全に据わってましたし、殺気が凄くて途中からとても怖くて近寄れませんでしたが。」

「……。」

ミリクが発言とは真逆のなんでもないような口調で話していたので一瞬それがどういう事か上手くつかめなかったが……想像してみたら何故か簡単にその場面のルーンの状態が把握出来てしまった。

「まぁ魔力の暴走はここに司羽君を呼んだ瞬間、私達の苦労はなんだったんだってくらいに一瞬で収まりました。それから見ても今回の暴走の原因はもはや言うまでもないんですが……司羽君？」

「……なんですか？」

「こんな可愛い女の子に、たかが一日離れてたら頭がおかしくなって狂っちゃうくらいに愛されて依存されまくってる気分はどうですか？」

「……弁明はない……。」

今更だが周りにいる教員の方達もかなり疲れた顔でこちらを見ている。なんだか視線がかなり痛い。俺のせいか？　やっぱり俺のせいなのか？　なんていうかかなり不可抗力には違いないんだけど、

まぁ、ルーンの責任ってのは嫌だし。甘んじて批難の視線を受けることにする。でもリアまで批難臭い視線を向けてくるのはどうなんだ？　俺が何かしたか？

「……ちなみに、暴走って具体的には何が起こったんだ？」

「今回はほぼ未遂だったので被害自体はありませんでしたが……そうですね……取り敢えず、今回二人を引き裂く原因になったシノハちゃんがルーンさんに近づいた瞬間に次元の狭間に飛ばされました。」

「……。」

「それから私達でシノハちゃんを助け出す為にルーンさんの魔力を辿って無理矢理次元の入口を開いていたんですけど、その途中でルーンさんの魔力貯蔵用の魔法陣の魔力まで暴走し始めまして、これが本格的に暴走したらハルマゲドンが起きかねないって事で、私が司羽君に放送で呼び出しを掛けたんです。放送を掛けたら直ぐにおさまったらしいですけど、それまで私が居ない間に放射線が漏れたりしない様にミシュナさんが頑張ってくれていたり、次元の狭間に閉じ込められたシノハちゃんが完全に何処かへ飛ばされない様に皆が頑張って魔力を抑え込んだりしてくれてたみたいですね。……本来本当は制御されていないただの魔力なんて大して力がない筈なんですが……ルーンさんのはちょっと質が違ったみたいですねぇ。流石は世界に名高い才女って所でしょうか。」

なるほどな、それでさっきからシノハ先生や皆が何も喋らないのか。現状喋る事が出来ないくらいに消耗していると。しかしそれは……なんというか……。

「……御迷惑をお掛けしました。」

「まぁ、そう言いましても今回のペア決定は故意の変更がありましたし、こうなる事を予想出来なかった私達教師にも非があると言えば言えます。ですから取り敢えず今回の事を教訓にして、これからは司羽君はルーンさんとなるべく一緒に居てあげてください。下手したらまた暴走するかもしれませんし。……まぁ面倒なので本音駄々漏れな言い方をすれば、ルーンさんが暴れると学園的にも凄く困るので司羽君はちゃんと手綱を握っていてくださいって事です。不純な異性交遊だろうとなんだろうと文句は言いませんからルーンさんのストレスだけは溜めない様に。」

「それってどうなんですか……教師的に。」

「いいじゃないですか、これで貴方達は学園公認のカップルです。心おきなくイチャイチャできますよ？　というか流石の私も今日はちょっと疲れました。本当なら司羽君を弄り回して体力と気力を回復したいんですが、今日は貴方を拘束した瞬間に私が八つ当たりの標的にされかねないのでそれも出来ませんし。まぁ早い話が司羽君とリアさんのクラスは現状維持にするので今日は帰ってルーンさんに欲望でも何でもぶつけててください。私達はこれからまだ仕事がありますから。」

「……身も蓋もありませんね。」

「仕方ないじゃないですか。殆んど皆倒れちゃって稼働人員が凄く減っちゃったんですから。これ以上心労の種をこの場に残しておきたくないんですよ。」

「……了解です。」

良く見ると、なんだかミリクも周り同様いつもより元気が無い様に見える。ミシュナがさっきから恨みがましい視線をミリクに送っている所を見ると、ミリクはさっさとルーンから避難していた様だが、それでもかなりのダメージが残っている様だ。取り敢えずこの場はミリク達に任せて、御言葉に甘えるとしよう、実際今抱きついてきているルーンの無言がなんだか怖いし。

「えっとな……ミシュ、トワと、その……もう一人、面倒を頼みたいんだけど……取り敢えず夜まで。」

「トワは分かるけど……もう一人？　……仕方ないわね……今日だけよ？　それと、後でちゃんと説明する事。」

「ああ、すまん。恩に着る。」

「まぁ、昨日から一日あんな姿を見せられたらね……責任はちゃんと取るのよ？」

ミシュナはそう言うと、ルーンを一瞥して溜息をついた。司羽は昨日初めて会って、尚且つ敵対していた為に微かに緊張状態が続いているユーリアをいきなり誰かに任せるのはどうかと思ったものの、この状態のルーンにユーリアをいきなり合わせると良くない事が起りそうな気がしたので取り敢えずミシュナに面倒を頼んでおく事にした。とはいえトワもなんだかんだで警戒は解きつつあるみたいだし、万が一共和国のレジスタンス連中がまだこの辺りに居て、口封じの目的でユーリアの身柄の確保を要求してきたとしても、トワが付いていれば戦力的には大丈夫の筈だ。何かあったらトワから連絡が来るから直ぐに飛んでいけばいいし。……まぁ、相手も過激な奴らといえどそこまで馬鹿な真似はしないだろう。取り敢えずトワ

達の要求で捨ててしまったユーリアの杖の代わりに、後で護身具は念のために買っておくが。

司羽がそんな事を考えていると、ルーンは司羽が何か別の事に感心を向けているのに気付いたのか、抱きついたまま顔を上げると拗ねる様な表情で言った。

「司羽ぁ、私お風呂入りたい。」

「ああ風呂か。シャワールームはあるみたいだけど流石に風呂はないよな。」

まぁ、この学園は滅茶苦茶広いし、温泉が沸いてもあんまり驚かないけどな。司羽がそんな事を考えていると、ミリクが苦笑気味に微笑みながらそれに答えた。

「いいえ、お風呂でしたらありますよ？　学園長が趣味で作った大浴場が。私達も良く入ってますし、特別生徒に使用させてはならないとは言われていませんから。」

「ああ、そうなんですか。……本当にあったんですね。というかいずれ学園長にも会ってみたいですよ。色んな理由で。」

まぁ学園に入学させてくれたお礼とかも兼ねてどっかで挨拶しておきたい。マスターとの関係も気になるし。まぁ、それはともかく。

「ルーン、家の風呂は沸かさないといけないしちょうどいいからここで入って行くか？」

「ううん、私は司羽と二人で入りたいの。前に見たけど、ここのお風呂って混浴じゃないみたいだし。混浴だったとしても絶対に司羽

以外に裸見られたくないもん。結界張ってもいいけど、魔法を使えばお風呂の準備もそんなに時間掛からないんだし、帰ってから一緒に家で入ろ？」

「……。」

「ああ、司羽君。後日色々聞きたいことが出来ましたので職員室まで来てください。今日は空気を読んで遠慮しておきますけど。」

「明日になったら忘れてると思いますよ？」

「私が覚えてるので大丈夫ですよ♪　……ふふふっ、楽しみです。」

「……ルーン、帰ろうか。」

「うんっ♪」

司羽が遠い目をしながらそう言うと、ルーンは誰もが見惚れる様な笑みを浮かべて司羽の腕を取った。こうして、司羽の長い長いクラス入れ替え試験は幕を閉じたのだった。

第27話：明るい家族計画エーラ編

「……ふーん、ユーリアさんは司羽の侍従なんだ。」

「は、はい。その……駄目でしょうか……？」

「え、なんで？　そんな事ないよ？　司羽が信用してる人なら私は信用出来るから。この家はまだ部屋が空いてるし、好きな所を使っていいよ。」

緊張して委縮してしまっているユーリアに対して、ルーンはそう言いながら眠たそうに眼を擦った。時刻は三時をまわり、今までマスターの所に居たらしいミシュナとトワ、そしてユーリアが帰ってきた。それまでルーンは司羽に抱かれながら睡眠を取っていたのだが、ユーリアの事を紹介する為に起きてもらったのだ。司羽に寄り添って座っているルーンの機嫌は中々良い様で、それを聞いたユーリアは緊張の糸が切れた様に固まっていた表情を和らげた。

「まぁ、その……俺もルーンに何も言わずに勝手に決めたのは悪いと思ってるんだが……。」

「でもどういう経緯で知り合ったかくらいは私達にも教えてくれてもいいんじゃない？　司羽とあの次席ちゃんは試験中だったんだし、そもそも学園の生徒ですらないこの侍女さんと知り合うタイミングなんてないと思うんだけど？　あ、それと前から知ってたって言い訳は聞かないわよ。三人で居る時にトワが若干警戒してたからね。この子はあんまり人にああいう態度を取る子じゃないもの。」

「うっ……そ、それはじゃな……。」

ミシュナがそう言うと、トワは一瞬苦い表情をして司羽に視線を送った。まぁユーリアへの警戒心が抜けきらないのは仕方ないが、やはりミシュナにはバレてしまったらしい。トワと一緒にいる時間は司羽以外だと一番ミシュナが長いのだ。表情や気配の変化などには敏感になっているのだろう。もともとトワが分かりやすい性格だというのもあるかもしれないが。

「……それについては聞かないでくれると嬉しいんだが……色々と事情があるんだ。」

「そうなんだ。私は別にいいよ、司羽がそういうなら。ちょっといきなりでびっくりしたけど、別に人が増えて困る様な状況じゃないし。寧ろ家事手伝いの人が欲しいなって思ってたくらいだもん。広くて掃除とかも大変だし。」

司羽が若干渋い顔をすると、ルーンは直ぐに笑って追求を止めた。そんなルーンに、今度はミシュナが呆れと諦めの表情になった。

「……貴方はもう少し警戒した方がいいと思うわ。主に旦那の身の回りの女性関係についてね。誰かに寝取られても知らないわよ？　まぁ、この国では規則的に寝取られるってよりも虫が付くって感じでしょうけど。」

「うーん。私は、司羽が私を愛して、束縛して、独占してくれればそれでいいから。司羽は絶対に私を捨てたりしないって信じてるし。それに、隠れてこそこそ何かされるよりも、おおっぴらに愛人とか作ってもらった方が私としては安心するしね。……その人が司羽を一人占めするようなら考えるけどね……？　司羽に独占されるのは嬉しいけど、司羽を独占する様な人は……。」

「わ、私はそんなつもりはありません！！　というより愛人じゃないです、ただの侍従です使用人ですっ！！！」

ルーンの表情に影が差したのを読み取ったユーリアはルーンの発言を即座に否定した。というより司羽もルーンの発言について言いたい事があったのだが、ユーリアの発言にかき消されてしまった。ミシュナはそんな司羽を見て呆れ混じりの視線を送りながら溜息をついた。

「まあいいわ。司羽の周りに唐突に人が増えるのはトワで慣れたし、その人が美人なのにも慣れてるもの。別に私は困らないし、主席ちゃんがいいなら私もとやかく聞く気はないわ。……それじゃあ、改めて宜しく。司羽の侍女さん？」

「あ、私も宜しくね。えっと、ユーリアさん。」

「は、はい。これから宜しくお願いいたしますミシュナ様、ルーン様。」

ミシュナが苦笑しながらそう言うと、ルーンも続く様にユーリアを迎え入れる言葉をかけた。ユーリアの方はまだ緊張が抜けきらないようだが、司羽としては肩の荷が下りた気分だ。一番心配していたルーンの反応がこの程度で済んだのがありがたい。魔力の暴走の話を聞いてかなりビビっていたのだが、どうやら大丈夫らしい。司羽の心配も解消されてやっと空気も完全に弛緩した所で、ルーンが唐突に提案をした。

「それじゃあ、トワちゃんの時にもやったみたいにパーティしよっか？」

「ああ、良いな。でも今貯蔵庫に備蓄とかそんなにあったか？　帰りに買い物してくるの忘れたし、有り合わせで料理を作るのもなぁ。……うん、取り敢えず今から買いに行くか。」

「あ、あの、何もそこまでしていただかなくても……。」

「ユーリアさんも遠慮しないの。あ、司羽。私とユーリアさんで買い物に行って来るから、今あるもので先に作っててね。ミシュナちゃんとトワちゃんもよろしく。ほら、行こう？　ユーリアさん。」

「あ、は、はい！！」

ルーンはそう言ってユーリアの腕を取ると、手早く荷物を取り、他のメンバーの返事も待たずに二人で出かけて行った。なんだかルーンがいつもより行動力がある感じがして司羽は少し疑問に思ったが、取り敢えずルーンがユーリアを受け入れてくれてる様だったので問題ないと納得した。そんな司羽にミシュナが茶化す様な意地の悪い笑顔で近づいてきた。

「あら、奥さんと愛人が買い物に取られちゃったわね？　トワ、貴方の出番よ？」

「……おい、トワの教育に悪いだろ。」

「主、愛人と奥さんと言うのはどう違うのじゃ？」

「トワも悪い影響を受けないでくれ、頼むから……。」

司羽は純粋な疑問を投げかけてくるトワへの対応に四苦八苦しな

がら、ルーンから任された仕事をする為に貯蔵庫の方へと向かって行った。途中ミシュナが良いタイミングで煽りを入れるせいで危うくトワに要らない知識を与えてしまう所だったりと、ミシュナとは一度ちゃんと話をした方がいいだろうかと悩む司羽であった。

――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――――――

「あ、あの、ルーン様？　お荷物なら私が……。」

「ううん、大丈夫だよ？　半分持ってもらってるし、全部は重いでしょ？」

「あ、ありがとうございます。」

ルーンとユーリアはこの街一番の市場へと来ていた。ルーンの顔は流石に色々な人物に知れている様で、事あるごとにオマケをしてくれるので予想より大荷物になってしまったのだ。荷物を任されようとするユーリアに半分の荷物を渡したルーンは、残り半分をリュックへとしまい込んだ。

「ですが、流石はルーン様ですね。凄い人気です。」

「うん、この辺りは私が昔から利用してる場所だから顔見知りが多いんだよ。私に両親がいない事を気にかけてくれる人が多いから、結構オマケも貰っちゃうんだよね。」

ルーンは苦笑とも取れる笑顔でそう言った。ユーリアは確かにあの屋敷には大人は居なかったと思い出し、その事に興味を惹かれた。

「御両親が……ということは、やはり司羽様と二人暮らしだったのですね？　トワ様が司羽様の使い魔になられたのは最近とお聞きしましたので。」

「そうだよ。でも最近はミシュナちゃんが帰るのを面倒がって家にいる事が多いし、トワちゃんを入れて四人かな。ミシュナちゃんにトワちゃんの面倒を頼めるから、私としてはミシュナちゃんに居て貰った方が司羽と二人の時間が沢山取れて嬉しいんだけどね。司羽は二人きりにならないと私の事を可愛がってくれないし。」

「か、可愛がって……ですか……。」

「うん。私は皆が居る前でも構わないんだけど、司羽は恥ずかしがり屋だから。だからユーリアさん、あんまり遅くに司羽の部屋に来ない様にしてね？」

そう愛おしそうに言ったルーンが、ユーリアには一瞬とても大人びて見えて、思わず赤面してしまった。そしてそんなユーリアの様子に、ルーンは笑みを深めた。ユーリアはその照れ隠しにコホンと咳払いをすると、僅かに疑問に思った事をルーンに聞こうと思い立った。

「あの、ルーン様。もしかして私に何か聞きたいことか言いたいことがあるのでは？」

「えっ、どうして？」

「いえ、その……ミシュナ様から、ルーン様は出来る限り司羽様の傍に居ようとする方だと聞いていたので、私を買い物に誘われたのは何か理由があるのかと。それにルーン様が私をお誘い下さった時に、司羽様が不思議そうな顔をしていたので、なんとなくそう思いまして。」

「ふうん……中々鋭いねユーリアさん。そうだよ、ちょっと聞きたいことがあるの。」

ルーンはユーリアの問いに対して、僅かに眼を細めながらそう言った。ユーリアとしてはルーンに質問されても答えられる事ばかりではないので、失言だったかと後悔したが、それこそ今更である。取り敢えず司羽との関係に関しては、先ほど追求しないと約束して

くれていたので恐らく大丈夫だとは思うのだが。

「それじゃあ、聞いてもいいかな？」

「ええと……私が答えられる事でしたら。」

「……うん、大丈夫だと思うよ。多分だけど。」

戸惑いを隠しきれないユーリアを見たルーンは、ユーリアを安心させる様にそう言って薄く微笑んだ。だがユーリアは逆に、そのルーンの表情に若干の違和感を覚えた。僅かだが先ほどの笑みとは違う様な……そんな不確かな感覚があったのだ。それをユーリアが感じ取ると、ルーンもまたそれに気付いて苦笑した。

「……本当に鋭い人みたいだね。」

「ルーン様……？　どうされました？　もしかして体調が悪いのでは……。」

「ううん、なんでもないの。……ごめんね、なんだか私ユーリアさんに嫉妬しちゃってるみたい。私は司羽を独占しないなんて言ったのに。誰かが私の知らない司羽を知ってるってだけで、なんだか苛々しちゃって。」

「ルーン様……。」

そう言って溜息にも似た息を吐いたルーンを見て、ユーリアはルーンに対する認識を改めようと思った。次元魔法の権威とも言える地位を持っていて、周りから天才と言われていようとも、眼の前にいる少女はまだ十五歳の普通の女の子でもあるのだ。司羽の周りに

他の女性が居れば、嫉妬だってするに決まっている。そうだ、自分はこれから司羽の侍従として仕えていくのだ。その中でルーンは決して軽視出来る存在ではない。司羽が自分を身内として受け入れてくれている様に、自分自身も司羽の身内を、自分自身の身内として受け入れなくてはならないのだ。ユーリアはそう思う内にだんだんとルーンに対して緊張していた理由が理解出来る様になっていた。きっと自分自身も、今まで別の世界の人間だと思っていた人を身内として迎える事に不安を感じていたのだと。

「……私はね、私の想いを司羽に受け入れてもらって、そこで初めて分かったの……私は司羽の事何も知らないんだなって。」

「そんな事、きっとありません。だって御二人は今まで一緒に暮らして来たのでしょう？　知らない事も勿論多いと思いますが、お互いに知っている事だって多いはずです。」

「……あれ、ユーリアさんは知らないんだ。司羽が今なんで私の家にいるのか。私が司羽と一緒に暮らし始めたのは本当に最近なんだよ？」

「それは……多少聞いてはおりますが……。」

ユーリアはそこで言葉を区切った。なんというか、あの発言が司羽の冗談であったと考えられない事もなかったからである。だが、ルーンはそれをしっかりと読み取った様で、苦笑気味にそれを肯定してくれた。

「成程ね。うん、司羽の話は本当だよ。司羽はこの星の人間じゃない、私が魔法で呼んだの、つい最近ね。詳しくは司羽に聞いた方がいいかも、私は説明下手だから。」

「……あれは冗談ではなかった訳ですね。ですが俄かには想像できませんが、星を超えた恋愛と言うのは素敵ですね。運命的な物を感じてしまいます。」

「あははっ、そうかもしれないね。これが運命なんだとしたら、私も出会ったのが司羽で良かったって心から思ってる。でも、そういう訳だから私は司羽の事を殆んど知らないの。」

ルーンは微笑みながらそう言い、その中に少し寂しそうな色を滲ませた。だがそれも一瞬で、直ぐにいつもの表情へと戻った。

「それでは、ルーン様。私に聞きたいことと言うのはやはり？」

「うん、司羽の事。司羽のユーリアさんへの態度って言うのかな、なんだか私やミシュナちゃん達への信頼とはちょっと違う気がして、もしかしたら何か知ってるんじゃないかなって。」

「……何かとは、どの様な事でしょうか？」

ルーンの漠然とした問いに対してユーリアは一瞬戸惑い、聞き返した。ルーンの知らない司羽と言う事ならば、悪寒すら感じたあの見下す様な瞳を思い出したが、ユーリアはその事をルーンに教える気にはならなかった。あの事は直接的ではないにしろ、司羽が黙ってくれている自分の事をルーンに話してしまう事にもなる。ユーリア自身は困らないにしても、フィリアにも何か事情がありそうなので、なるべくなら協力して上げたいとも思う。それに何故か、あの時の事は自分の胸にだけ留めておきたいと思うのだ。司羽が自分を身内として受け入れてくれた時の事と合わせて、自分の胸の内に。

ユーリアがそう思っていると、そんなユーリアの心情を理解した

のか、ルーンはユーリアから視線を外して体をそむけてしまった。

「うん、やっぱりいいや。それにきっと、これは人に聞く様な事じゃないと思うから。私が自分で見つけて、私が解決する問題だもん。だって私は、心も体も司羽の一番傍にいる人になるんだから。誰よりも近くで、司羽と歩いて行く人に。」

「……ルーン様は司羽様の事を愛していらっしゃるのですね。」

「愛してるよ、誰よりもね。だから私が取り去って、必要なら埋めてあげるの。司羽が抱えてる事の全てを。私と司羽を出会わせてくれた事には感謝するけど、司羽を苦しめるものは全部私の敵だから。」

ルーンは真面目な顔でそう言って、ユーリアの方を向いてから笑って見せた。ユーリアにはいまいちルーンの言っている意味が理解出来なかったが、それもまたルーンに聞くことではないだろう。司羽が自分を受け入れてくれた理由と同じ様に、それもまた自分自身で考えていく必要がある事なのだから。それが、司羽に仕えて、同じ景色を見るという事なのだ。ユーリアはそう思い、ルーンに習って微笑んだ。だがユーリアは、どうしても気になった事があったので最後に一つだけ聞いてみる事にした。

「あの、ルーン様。ミシュナ様ではありませんが、あまり油断していると他の誰かに司羽様を取られてしまうかも知れませんよ？　取られるまでいかなくても、司羽様程の方でしたら人気も出るでしょうし。……本音ではどう思っていらっしゃるのかなと。」

「うーん、でもこの国は法律で制限されてないし、司羽は気が多そうだから少しは許容して上げるのが理想の奥さんだと思うよ。……

…あ、話は変わるんだけど私思うんだ。司羽って子供が出来たら子煩悩になって他に愛人とか作らなくなりそうだよね？　取り敢えず、体温はちゃんとチェックする様にしてるんだけど……。ほら、多少なら良いんだけど、やっぱり人が多いと私と二人っきりでいる時間が減っちゃいそうだし、対策は取らないといけないよね？　でもしょうがないよね、愛し合ってる二人なら自然にそうなっちゃうものだし……。まあそういう事だから、協力よろしくね？」

「……意外と策士……ですね、ルーン様。」

ユーリアの問いに笑顔で答えたルーンに対し、先ほどと言っている事が違うのでは？　などと無粋な事を言うユーリアではなかった。取り敢えずいつの間にか雁字搦めにされそうな自分の主人の顔を思い浮かべて、なんとか自分で気付いてくださいと思念だけを送ったユーリアなのであった。

第２８話：罪と罰は微笑みに

『ルーンの家に来るのは久々ですし、少々迷ってしまいました。やはりあの森は厄介ですね。』

「そうですね、私も早く道を覚えなくてはいけません。このままでは一人で買い物へ行く事も難しいですから……。司羽様は直ぐにいらっしゃると思いますので、こちらでお寛ぎ下さい。」

『ありがとうございます。それにしても、司羽さんは休日でも朝が早いと聞いていましたが、お昼まで寝ているなんて珍しい事もあるんですね。』

「それはまぁ……、司羽様にも色々とあるようですから。」

入れ替え試験とユーリアの歓迎会の翌日、試験休みとなっている日の昼過ぎ。そんな日に唐突にリアが司羽を訪ねて来た。応対に出たユーリアも始めは驚いたが、ユーリアもリアがその内自分と司羽を訪ねて来るだろうとは予想していたので、行動が早いなくらいの驚きでしかなかった。

『少々急な訪問になってしまったのがいけませんでしたね。驚かせてしまってごめんなさい。』

「いえ、その様な事は。私としても予想はしていましたので……。それでリア様、今日の用件とはやはり？」

『……そうですね、多分貴方が思っている通りだと思います。貴方に話を聞くならば主である司羽さんに許可を取るのが礼儀ですか

ら。それに実際問題、ここで話せる事ではないですし、私の屋敷に来て頂く事になりますので。結果的にユーリアさんにはお暇を取って頂かなくてはなりません。そうなればどちらにしろ司羽さんにお願いしなくてはならなくなりますし。』

「やはりそうでしたか。私自身はリア様に付いて行く事に関しては全く構いません。ですが、これぱかりは司羽様次第ですね。私は司羽様の侍従ですので、司羽様が反対なされればそこまでです。とは言え、恐らく反対はなさらないと思いますが……。」

『そうでしょうか？　司羽さんはユーリアさんの事を大事にしていますし、貴方と元敵対関係にあった私の家に貴方を送る事には反対なさるかも知れません。』

「そうですね……、ですが、私から話を聞かないとリア様も困るでしょうから、司羽様は考慮なさると思いますが……。」

そこまで言って、ユーリアは唐突に背後に気配を感じて振り向いた。

「……うーん、そうだな。まあ反対したいっちゃしたいが、ユーリアが行っても良いって言うなら、別に俺も構わない。ただし、その条件として俺も同行する。リアの言う通り、あまりユーリアを一人で行動させたくはないからな。」

「……司羽様、居たのなら教えてください。びっくりするじゃないですか。」

「ああ、悪い悪い。何を話してるのか気になってさ。ほら、筆談は近付かないと盗み聞きが出来ないだろ？」

「……私が言いたいのは気配を消してまで盗み聞きをしないで下さいって事です。と言うか司羽様、業とやってますよね？」

ユーリアは、二人の隣に忍び寄っていた司羽をジト眼で睨んでそう言った。一方のリアは司羽が来た時こそ驚いた様子だったが、直ぐにもう慣れたとでも言う様に肩を竦めた。

『構いませんよ、お話する手間が省けましたし。司羽さんが言う条件も問題ありません。それに、司羽さんが一緒の方がユーリアさんも安心でしょうから。敵対していた人間の家に行くわけですし。妥当な条件でしょうね。』

リアはそう書いて司羽に見せた。司羽にはリアの正体がバレているので今更隠す様な事もないし、勿論ユーリアのメンタル面での事もある。リアとしては特に問題のある条件ではない為、拒否する理由もない。そこまで考えて、リアはふとある事に気付いた。

『そう言えば、ルーンは何処に居るんです？　司羽さんをお連れするならルーンにも伝えて置かなくてはいけませんし……。それに昨日の暴走の件もあります。先程から姿が見えないので気になって居たのですが……。』

「ぼ、暴走……ですか？　そういえば昨日ミシュナ様がおっしゃっていた様な……。」

「はは……、まあ心配しなくても大丈夫だよ。ルーンは俺の部屋で寝てるし、起きて来ないのは単に寝不足で寝足りないだけだろうから。取り敢えず、こんな事だろうと予想はしてたから外出するとは言って来たし、トワとミシュも居るから大丈夫だろ。遠くに居ても、

トワを介して俺と会話も出来るからな。」

『それならば良いのですが……ちゃんと寝ているのですか？　寝不足と言っていましたが、やはり昨日の無理が祟ってしまったのでしょうか。』

「あー…、昨日は帰って来てから随分と寝たし、無理が祟ってとかいう訳じゃないんだけど……いや、ある意味無理が祟ったのかも知れないけどな……。」

「……司羽様、そういう話は生々しいので止めて下さい。リア様もどう答えて良いか困ってしまいますよ？」

「あ、いや……、すまん。」

ユーリアが司羽の発言に対し、顔を紅潮させながらそう言って睨むと、司羽はちょっとバツが悪そうに頬を書いて謝った。当のリアはその発言の意味が分からず暫く考えて居たが、その意味に気付くとスケッチブックに何やら素早く書き込んで司羽達に見せた。

『その……、司羽さんとルーンの仲が良いのは私もとても嬉しいのですが……。』

と、リアはそこまで書いて見せ、唐突にスケッチブックに追加の文を書き足した。

『いえ、何でもありません。それより私は先に外に出ていますので。……ルーンに言って来たと言う事は、私の家に来ていただけるのは今日で問題ないのですね？』

「あ、ああ。」

『それでは準備が出来たら声を掛けて下さい。』

リアはそれだけ素早く書くと、逃げるようにその場から立ち去った。後に残ったのはユーリアの責める様な視線のみ。

「司羽様？　私が言えた義理ではありませんが、王女への破廉恥な言動は下手をすれば極刑になりますよ？　リア様は純な方であらせられるみたいですし。」

「……ああ、自重する。」

「……出来ればリア様が居ない所でも自重して下さい。私も、その……。」

「……本当にすまない……。」

その後、ユーリアの赤い顔が冷めた頃にリアに声を掛けた。何だか視線を逸らされている気がして居心地が悪くなった司羽だった。

ーーーーー

ーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーー

「へえ、此処がリアの家か。思ってたよりも全然大きいな、屋敷って言っても問題ないくらいだし。」

『ありがとうございます。ですが、家臣も全員此処に住んで居るので、必然的にこれくらいの広さになってしまうんですよ。』

「成る程な……。リアは王家の人間だし、当然逃げる時には家臣もかなり居たと。」

『はい。私を含めて12人の大所帯ですが、もう何年も一緒に暮らしている私の大切な家族です。』

「……そうか。」

司羽はその時のリアの発言に笑って答える事が出来なかった。ユーリアもそれは同様の様で、僅かに震えた様に見えたリアの腕を悲し気な眼で見つめていた。当然その中に血の繋がった家族は居ないのだろうから。

『お気になさらないで下さい。私は皆が居ればそれで幸せですから。

』

「ああ、分かってる。」

司羽が薄く微笑みながら一言そう言うと、リアは沈黙し、何も言わずに二人を振り向いた。

『お二人共、ようこそ我が家へ。それでは、御案内致します。』

リアがそう書いて何か魔法を使うと、門が独りでに開いて司羽達を招き入れた。門の奥にあるのは西洋風の屋敷で、ルーンの家とそう変わらない大きさに見える。屋敷の前には庭も広がり、丁寧に手入れがされているらしい。司羽はリアの屋敷にそんな印象を抱きながら門を抜けようとして、そこで眉をしかめた。

「ユーリア、もっと俺の側に寄れ。」

「……えっ？」

「そんな顔をするな！！　別に何かする訳じゃないから、取り敢えず言う事を聞いてくれ。というかその反応は何気に傷付くんだけど。俺はセクハラなんかしないからなっ！？」

『司羽さん、どうかされましたか？』

ユーリアに体を隠されながら一歩引かれた事にショックを覚えながらも、司羽はそう叫んだ。リアが何か疑問の視線を向けて来たのも何でもないとジェスチャーして返す。

「ふふっ、冗談ですよ。何だか司羽様が難しい顔をなさったので、

侍従なりにお茶目を働いた訳です。」

「……まあ良いや。取り敢えず言う通りにしてくれ。それよりリア、この屋敷って門を誰かが通ると分かる様になってる見たいだな。」

『良くお気付きになりましたね。私の都合上、我が家のセキュリティは万全にしなければなりませんから。』

「……そうだったな。まあ、それ自体はどうでも良いんだけど……。」

司羽がそう言って溜息をつくと、リアとユーリアは揃って首を傾げた。何はともあれ、門を抜けて庭を横目に玄関へ。ユーリアも雰囲気が変わった司羽を疑問に思いつつ、司羽の真横にピッタリと付いて行った。

『それでは中へどうぞ。』

「ああ、それじゃあユーリア……。」

「はい。それでは、お邪魔致しますうっ……！？。」

「おっと。」

ユーリアが屋敷に一歩足を踏み入れた瞬間、司羽は唐突にユーリアを抱き寄せて横にステップした。

そしてユーリアがいきなりの行動に混乱し、司羽に抗議しようとした次の瞬間、ユーリアは自分が元居た場所に黒塗りの刀剣が振り下ろされていた事を知った。それをしたのは二十代中盤に見える男。

そしてその刀剣の使い手の男は、獲物を逃がした事を察すると直ぐに、そのままユーリア目掛けて横凪に剣を振るった。

「きゃあっ！？」

「死ね！！」

「お前がな。」

憤怒の形相でそう言った男に言葉を返すと、司羽はユーリアを抱き寄せたまま、肉薄するその剣を手で掴み、剣ごと使い手の男を自分の前に引き寄せた。その時に男の表情が驚愕に歪んだのを見て、司羽は何となく笑ってしまった。

「寝てろ。」

「が、はっ……！！」

ドサッ

司羽が、自分の方に引き寄せた男に一発蹴りを入れると、男は意識を失い、剣を手離してその場に倒れ伏した。司羽はそのまま、倒れた男の頭に足を乗せて踏みにじる。そして周りに潜む気配へと目を向けた。

「おっと、隠れてる奴は動くなよ？　動いたらこの男の頭を踏み抜くからな。……まあ、正直俺はどっちでも良いんだけど。大事な家族を失いたくはないよなあ？」

「なっ、何事ですか！？」

「おいリア声が……って、ここはリアの家だから良いのか。」

リアが声を発している事に若干緊張した司羽だっだが、良く考えて見れば当たり前の事だと気付いた。そして眼の前で一瞬の内に起こった出来事に混乱していたリアは、司羽の足元で気絶している男に気付くと息を呑んだ。

「あ、アレン……なんで……。」

「それだけじゃないみたいだぜ？　俺達の後ろに3人、屋敷でこっちを警戒してるのが7人いる。仲間総出で歓迎とは……嬉しいじゃないか。」

「そんな……。」

司羽はそういうと、それぞれの方向へ視線を走らせた。リアはそれを聞いて呆然となってしまったが、先に呆然状態になっていたユーリアが正気を取り戻すと、司羽の方へ頼りなさ気な視線を送った。

「つ、司羽様、これは……。」

「はあ……、俺達は待ち伏せされていたんだよ。この様子だとリアは知らなかったみたいだが……、一緒に付いて着て正解だったな。……おい、お前らもいい加減に出て来い。お前達の考えてたプランはもう実行不可能だ。この男がお前達の主力だったんだろう？勝ち負けが分からないなら、俺が直々に分からせてやろうか？」

司羽がそう言うと、一人、また一人と姿を現した。気配を感じた通り、足元にいる男を含めて１１人。全員が揃って姿を見せたので

確認してみると、男に女、子供に大人、それ自体はまちまちだったが全員が警戒を解かずに司羽とユーリアを見つめていた。リアはその光景を見て硬直していたが、はっとなり我を取り戻すと、ローブのフードを脱いで全員を睨みつけた。

「貴方達、どういうつもりなのですか。この二人は私の客人ですよ？」

「……客人であろうと、それが過去の事であろうと、フィリア様へなされた無礼な行いを許すわけには参りません。あのユーリアとか言う女は、フィリア様を殺そうとなさったのですよ？　それをこうも簡単に許すなど出来る訳がありません。そこの司羽とか言う男にしても、きっとその女に懐柔されたに違いありません。私達の総意は、御覧の通りです。」

リアの強い視線を受けて数人が目線を逸らしたが、それに対して一人の女が前に進み出てそう言った。そしてそれを聞いて、司羽の腕の中で固まっていたユーリアが身を震るわせたのが分かった。正直そんな所だろうと予想をしていた司羽は、ただ嘆息するしかなかったが。そんな女を見て、リアは歯を噛み締めた。

「……私には何の事前報告もなしに行動したのです。私が反対すると分かっていたのでしょう？　それでも尚、私の意志に逆らって尚、この方達を傷つけると言うのですか？　私の命の恩人と、その従者を。」

「フィリア様、私達は貴方の為を想って……。」

「お黙りなさいっ！！！　貴方達の今行ったその行為自体が、貴方達が言っている無礼な行い以外の何物でもないと分からないのです

か！！　挙句の果てには司羽さんまで侮辱して、それを恥と知りなさいっ！！！」

「っ……！！」

リアが一喝すると、女だけでなく周りの人間も震えあがった。後ろで見ていた司羽もリアが大声を出して怒った事に驚いてしまったくらいだ。そしてリアは、その一言に押し黙ってしまった自分の家族を見回すと、司羽とユーリアの方を振り向いて頭を下げた。

「本当に申し訳ございません。私の家族がとんでもない御迷惑を……私が屋敷に招待したばかりに……。」

「俺は別になんとも思ってないよ。さっきの発言だって気にしちゃいない。元々リアは無関係だって分かってたし、ユーリアも怪我してないしな。」

「私も……自業自得ですから。皆さまのお怒りは当然の事だと思います。」

「ユーリアさん……。」

「責められるべき立場の私が、この様な事を言うのはおこがましいですけれど、私も父と母が殺された時には同じ気持ちになりました。それにあの時まで、本当は私だって貴方の事を、力があるのに父母の仇を討たない臆病者だと思っていたんです。だから、あまり皆さんの事を怒らないであげてください。大事な人が殺されそうになって、その当人が眼の前に居れば、誰だってそうなってしまいますから……。」

「……。」

リアがもう一度周りに視線を巡らせると、皆一様にバツが悪そうに目線を逸らしていた。自分達の当主であるリアに頭を下げさせてしまったのだから、当然と言えば当然だが。きっとそれだけでもないのだろう。司羽は警戒心よりもショックが大きいらしい面々を見て溜息をつくと、男の頭から足を退けた。

「おい、寝たフリはもういいぞ。」

「……バレていたのか。」

「あんたはまず何よりも殺気を消す事だな。そんなんじゃバレバレだ。剣の訓練では一番かも知れないが、そういう所も鍛えない限りは実践じゃ意味が無い。あっちの魔法使いらしい奴等にも言える事だけどな。」

「……フィリア様と同じくらいの年の奴に言われるとはな……。」

司羽がそう言うと、男は一言だけそう言った後、立ち上がって他の皆の中に混じった。直ぐに１１人の内で最年長らしき男性が近寄って、司羽が蹴りを入れた辺りを探り、治癒の魔法を掛ける。どちらかと言うと衝撃を与えて気絶させたので、骨もそこまで酷く折れてはいない筈だ。リアはそれを見届けると、もう一度ユーリアの方を向いた。

「ユーリアさん、私の家族が貴方を危険な目に遭わせたのは事実です。何かお詫びをさせていただけませんか？」

「……危険な目、ですか。」

「はい、なんでも構いません。私に出来る事なら、何かお詫びを……。」

「……いいえ、その必要はありません。」

リアがそう言い掛けると、ユーリアはそれを遮る様に言った。そして、微笑みながら司羽の方を見た。

「私は今日一瞬たりとも危険な目になど遭ってはいませんよ？　私のご主人様は、私を危険な目に遭わせる様な方じゃありませんから。身内にはとことん優しい方なので。そうですよね、司羽様？」

「……さぁな。まあ今回は運良く俺も付いて着てたからな。」

「それならば、せめて司羽さんにだけでも……。」

「……いいえ、それはもっと不要です。寧ろ司羽様が私にお詫びをするべきだと思います。」

「え？　それはどういうことです？」

リアの言葉を再び遮って、今度はちょっと不機嫌そうにユーリアがそう言うと、今度は司羽を睨むようにしながら言った。リアはきょとんとしてその訳を聞いた。司羽はなんとなーく不穏な空気を感じ取って回れ右をしたくなったが、腕を掴むユーリアの手がそれを許さない。

「司羽様？　さっき剣を避ける時に私の胸触りましたよね？　思いっきり。」

「……え？」

「その後もずっと抱き締めてましたし。」

「……いや、それは一種の不可抗力で……。」

「それでちょっとはドキドキしてくれるんなら私も女として立つ瀬がありますが、無反応ってどういう事なんです？　結構傷付いたんですよ？」

「え、えっとだな……。」

「とにかく、司羽様にとって今回の件は役得だったんですから、お詫びなんて不要なんです。寧ろ貸し一つってやつです。ですよね、リア様？」

ユーリアがそう言うと、司羽も諦めたように溜息をついた。貸し一つとやらで何を要求されるかは分からないが、そういう事なら甘んじて受けよう。それに実際触ったのも抱きしめたのも事実なんだし……トワと同じかそれとも……。

「……司羽様、変なこと考えてませんか？」

「いいや、何も？」

「ふっ、ふふふっ……。」

ユーリアと司羽のやり取りを見て、リアはクスクスと笑い始めた。リアが、フィリアとして素顔を晒しながら見せた笑顔はこれが初め

てだ。それは、つい、それを見てつられて微笑んでしまう様な、綺麗な笑顔だった。

「司羽さん、ユーリアさん、私は改めて歓迎します。ようこそ御出で下さいました。」

フィリアの笑顔に迎えられながら、司羽とユーリアはそれに答えるようにまた、微笑むのだった。

第２９話：王女の願いと信念と

「……こちらへどうぞ。」

「ありがとう、ナナ。……司羽さんとユーリアさんは、紅茶で宜しいですか？　それともコーヒーに？」

「俺は紅茶でいい。ユーリアは？」

「それでは、司羽様と同じ物を。」

ナナと呼ばれた小柄な赤毛の少女が案内した先は、応接間らしき部屋の対面式ソファーだった。案内に従い、リアと体面になる方へ司羽とユーリアは座った。あの後リアが指示を出し、家臣と思われた人達は司羽達を迎える準備を始めた。司羽とユーリアに対する警戒はまだ完全に解けた訳ではないようだったが、リアの一喝が効いているらしく、皆何も言わずに準備を進めてくれた。もしかしたらユーリアのあの態度も良かったのかもしれない。

「司羽さん、ユーリアさん、申し訳ありません。皆心配性なもので。」

「いいや、構わないさ、さっきユーリアが言った通りだ。……そこで見てるあんた達もこっちに来たらどうだ？　リアの近くに居た方があんたらも安心だろ？」

「……そうさせてもらおう……。」

「……ふんっ……。」

司羽がそういうと、先程先陣を切り、リアにアレンと呼ばれたの茶髪の男と、先程リアに一喝を受けた張本人である赤髪の女がリアを挟み込む様に座った。

「紹介しますね。こっちの茶髪の男性がアレン、赤髪の女性がネネと言います。アレンは親衛隊長、ネネは侍従長をしてくれています。」

リアがそう言って紹介すると、アレンの方は沈黙を守ったまま軽く会釈をしたが、ネネの方は鼻を鳴らして視線を逸らした。アレンは髪も瞳も茶色で、長い髪を後ろで束ねている。かなり整った顔立ちをしていて背も高く、少なくとも司羽と同じかそれ以上。モデルと言われれば納得してしまう容姿だ。一方ネネの方は、赤い髪を肩の辺りでバッサリと切り揃えており、髪よりも薄い赤をしている瞳はキツイ印象を与える。美人ではあるのだが、周りを威圧するような雰囲気を漂わせている女性だ。そしてリアはネネのそんな様子を見て困ったように肩を竦めた。

「ごめんなさいね、ちょっと気が立っているみたいで。普段は本当に気の利く、良いまとめ役なのですが……。」

「フィリア様、こんな何処の者とも知れない者に気を利かせる必要はありませんよ。そもそも一体なんなのですかこの司羽という男は。それはアレンを倒した程ですから多少は腕が立つのかも知れませんが、一度助けられたくらいで簡単に信用するのは危険です。それに、正体がバレてしまったのですからそれなりの対処をするべきとも思います。万が一この男から敵対勢力にフィリア様の事が漏れれば……。」

「もう、ネネは頭が固いですね。大丈夫ですよ、万が一でも起こりえません。司羽さんが信用出来るかどうかは私が自分で判断したのです。無論、ユーリアさんの事も。」

「うう……ですがですねぇ……。」

「諦めろ、フィリア様はこうなったら動かん。」

必死にリアに詰め寄って説得を試みたネネだったが、リアには全く聞き入れてもらえず、協力を求めてアレンに視線を送った。だがそのアレンも無表情に諦めろと言うばかりで戦力にならない。そんなネネが頭を悩ませていたそんな時、斜め前から小さな笑い声が聞こえて来たので、ネネは咄嗟に視線を自分の斜め前、司羽が坐っている方に向けた。少しの羞恥を湛えた表情で。

「おい、何がおかしい……？」

「いいや、何も。ただ、仲がいいんだなーと。」

「……くっ、今のは私に対する侮辱と取るが構わないな？」

「はぁっ、ネネ、貴方はまたすぐそうやって司羽さんに喰ってかかって……。別に何もおかしな事は言われていないでしょう？」

睨みを利かせたネネに、司羽がそう嘯くと、ネネは拳を握りしめて視線を更に鋭く研ぎ澄ました。そんな二人を見てリアが深く溜息をついたが、ネネにはどうやら見えていないらしい。

「アレンさんとやら、まとめ役がこれじゃあ苦労も多いだろうな。同情するよ。」

「……ふぅ。」

「……おいアレン、その溜息はなんだ……？　同意か？　同意したのか？」

「ああもう！！　いい加減にしなさいネネ。何度も言いますが司羽さんは敵ではありませんし、大事なお客様です。あまりに酷い様ですと、この部屋から追い出しますよ？」

「うっ……。」

主君の声色に本気を感じたのか、ネネはリアにそう言って睨まれると、バツが悪そうに視線を逸らした。それを見て、司羽もちょっとからかい過ぎたかと反省した。反省したのは決してユーリアに肘で突つかれたからではない。そしてリアは、やっとの事で落ち着いたその場の人間を見回すと、佇まいを直し、真面目な表情になった。

「……さて、本題に入りましょうか。今日私がユーリアさんを此処に呼んだ理由、御二人にはもう分かっていますよね？」

「……はい、分かっています。」

「ああ。続けてくれ。」

リアが確認の意味を込めてそう言うと、ユーリアと司羽はそれに同意した。つい一昨日出会ったばかりのリアが、ユーリアから聞き出したい事など一つしかない。そしてそれはユーリアにも分かっている様で、律儀にも一度司羽の方へ確認を取る様に視線を送ってきたので、司羽は頷いてそれを承諾した。つまりは、リアを狙った組

織の事だろう。今回直接手を出したのはユーリアが長を務めていた傭兵団『道化』だが、それは反シーシナ共和国のレジスタンスグループ『蒼い鷹』の差し金によるものだ。そこで気になって来るのはやはり、リアに対してレジスタンスが掛けてくる次の行動の事だろう。

「単刀直入に聞きます。ユーリアさん、私を狙っている組織……反シーシナ共和国レジスタンスの『蒼い鷹』でしたか？　そこの組織はユーリアさん達が失敗したら次はどの様な行動を取ることにしていたのでしょうか、わかりますか？」

リアがそう言ってユーリアに問うと、ユーリアは暫く考えるように目を閉じた。リア達は何も言わずに答えを待つ。暫く沈黙が続いた後、ユーリアが口を開いた。

「そうですね……本来ならば、別の者を送り込んで作戦を続行という事になっていたのでしょう。その様な事は、依頼された時に向こうの仲介人も言っていましたし。ですが詳しい事となると……正直良く分からないんです。私達も反シーシナ共和国ではありましたが、あくまでも立場は傭兵でしたから、多くの情報は与えられていませんでした。私達『道化』は、レジスタンスの様な一つの意志として動くのが嫌な人間が集まっていましたので。あくまで目的は個々の恨みによる共和国に対しての復讐ですし。レジスタンスの一部には、そんな目的で動く私達を良く思っていない方もいました。そういう理由もあって、私は確実な情報を持っていないんです。申し訳ありませんが。」

「……そう、でしたか……。」

「……ユーリア、反共和国のレジスタンスってのはどれくらいいる

んだ？　『蒼い鷹』とか言う奴等もそうだが、別の組織だってあるだろう？　昨日ルーンから聞いた限りでは、共和国ってのはそうとうデカイ国なんだろう？　ならそれに対抗する為の組織が複数あっても不思議じゃない。」

「そうですね……えっと。」

落ち込むリアを見兼ねてか、司羽がユーリアにそう聞くと、ユーリアは唇に指を当てて自分の記憶を探った。

「『蒼い鷹』は首都を中心とした１０万人規模の大きなレジスタンス組織です。とはいえ、その殆んどが民衆に紛れていますので、全体を把握するのは難しいですね。他のレジスタンスも確かに沢山ありますが、はっきり言ってそこまで強い力はないと思います。実際に私が見た他の組織は自分で動くというよりも『蒼い鷹』の補助をしていましたから。ライバル組織みたいな所もありませんし、恐らく警戒するのは『蒼い鷹』だけで十分でしょう。」

「なるほどな。その『蒼い鷹』がレジスタンスの中枢みたいになってる訳だ。だとしたら、やっぱりリアって存在は喉から手が出るほど欲しいだろうな。結束力を強めるチャンスだろうし。自分達のレジスタンスとしての地位を確固たる物に出来る。都合が良過ぎる程の存在だ。」

「そうですね。リア様の遺体でも良いと言ったのにはそういう意味が込められていると思っていいでしょう。」

「相手は１０万人規模のレジスタンス……ですか。」

司羽とユーリアがする会話の中で、リアは表情を歪めてそう呟い

た。いくら相手が一つに絞れたと言っても、やはり個人と組織では分が悪すぎる。今回の一件で諦めてくれればいいが、向こうの組織にとってこの作戦の価値はとてつもなく大きい。だからこそ諦められる筈がないと、リアにもその事が分かっているのだろう。ネネは、拳を握りしめて俯いてしまったリアを痛ましげな瞳で見つめて、瞳を逸らした。

「くそっ、信念の為なら人をも殺すか……それでは自分達も共和国と同じだろうに。」

「信念の為……ですか。」

そう言ったネネに反応して、ユーリアが呟いた。何故だかそのユーリアの放った言葉に、全員の視線が集中する。

「信念って言葉、怖いですね。段々と他の事がどうでも良い事みたいに思えて来てしまって。私も人を殺した事がある訳ではありませんでした。だから正直今回の傭兵団での仕事は凄く怖かったです。でも、両親の仇の為とか思ったら、そんな事小さい事だって思えてきて……仲間が死んだ時だってそう、あの二人は今回の仕事で一緒になったばかりだったけど、それでも仲間が死んだって言うのに私は何も感じなかった。もしあのままリア様を殺していたら……司羽様と一緒に来なかったら、私はどうなっていたんでしょうか。」

「ユーリア……。」

そういって小さく身を震わしたユーリアの頭を、司羽はポンポンと優しく叩いて、ユーリアはそれを何も言わずに受けた。それを見ていたネネは、悲しげに眼を伏せてユーリアから視線を逸らした。アレンとリアも同様に瞳を伏せる。暫くの沈黙ののち、最初に口を

開いたのは意外にもネネだった。

「あの……ユーリアさん、その……ごめんなさい……。」

「……え？」

「えっと、ご、ごめんなさい。私、貴方に酷い事言ったし、酷い事したわ。今回貴方を全員で襲ったのだって、私が主導したんだもの。貴方が言った、私達の気持ちが分かるって、今更、やっと意味が分かったの。だから、ごめんなさい……。私も、『蒼い鷹』と同じだったのね。」

「ネネさん……。」

「ネネ……。」

顔を赤らめて、照れ隠しに髪を弄りながら言ったネネの言葉に、暗かったユーリアの表情が明るくなる。リアもそんなネネの様子が嬉しいらしく微笑んでいる。無表情なアレンも微笑を浮かべるくらいに、ネネの言葉はその場の空気を明るい物にした。そしてそんな空気の中、司羽はリアに切り出した。これからの行動を決定する為に、リアの意思を確認しなくてはならない。

「……リア、今回の事で向こう側の行動もある程度把握出来る。まず傭兵を5人送って不意打ちしても駄目なくらいにはリアの警備が固いと思われてるだろうし、交渉の余地はないと思われてる。だから次は、少なくとも前回以上の戦力で来るはずだ。だがそれと同時に、『蒼い鷹』が動いてる事をこっちが察知しているとまず分かってるだろうから、それなりに慎重にもなる筈だ。共和国に政府があるんだかなんだか知らないが、そういう目もある筈だから何度も

兵を送ってもいられないだろうしな。兵だって、多くなればそれだけ目立つ。」

「……はい。」

「慎重に行動しなければならない相手は、今はまだこちらについて調べてる最中だろう。だからもし、今この街を出て行けば、容易にはこちらの居場所を掴めなくなる筈だ。相手も迂闊に動けば共和国に知られるかもしれないリスクがあるからな。もしかしたらそうなれば向こうも諦めるかもしれない。リスクの方が大きくなるからな。これは決して希望的観測じゃない。ユーリア達の様な傭兵団を、学園にスカウトと一緒に潜り込ませるってのは、それなりに難易度の高い作戦だ。だから今の『蒼い鷹』はそれをしなければならない程に大人数をこっちに送れない立場にあるんだろう。恐らく共和国の目が厳しいんだろうな。５人で最大の効果を挙げようとしたんだ。」

ついでに言うなら、『道化』はそこまで実績のある傭兵団じゃない筈だ。ユーリアが人を殺したことがないと言っていたのはそういう事だろう。レジスタンスがあくまで反共和国の思想を持ってる人間しか雇わないとしているなら。更にリアを見逃す可能性は高くなる。とはいえ、こちらの想像以上にリアに価値を見出しているとなれば話は別だが。

「つまり、今直ぐにこの街を出て新しい住む場所を探す。出来るだけ共和国から離れた場所にな。そうすればかなり高い確率で安全になる。それでも警戒は必要だけどな。」

「なるほどな。確かに司羽が言った理由なら今回の相手の行動にも納得出来る。そうだとするなら今ならまだ、そこまで状況は絶望的でもないのか。」

「……共和国側も馬鹿じゃないって事かしら。今はそれが助かるけど。」

「……それよりも私は、司羽様の分析力の方が驚きなんですけど……。本当に一昨日、共和国の事を知ったばかりなんですか……？」

深刻な、しかし少し安堵も混ざった顔になり考え込むアレンとネネ、そして疑惑の視線を向けるユーリアを尻目に、司羽は可能性を提示したにも関わらず依然として浮かない顔をしているリアへと向き直った。当然これからの行動は、今司羽が言った様に行動するのがベストだろう。そもそも普通に考えれば、居場所が敵に知れているにも関わらず此処に居続ける理由がないのだ。……だというのに、リアを前にして、司羽は全く別の事を言おうとしていた。

「だけどまあ、それはあくまでリアが取ることが出来る方法の一つだ。最良だけど、絶対じゃない。だから勘違いするなよ？」

「え……それって……？」

「言ってる意味が分かるか？　危険だが、この街に残るかどうかはリアが決めろって事さ。誰も俺に従って街から出ろなんて言ってない。」

「ちょ、ちょっと司羽さん？　何を言って……。」

「ネネ、お前は主の決定に従うか？　アレン、お前はどうだ？」

「司羽様、ですがそんな事……！！」

「ユーリア、これはリアの問題だ。そうだろ？　ネネとアレンも、嫌なら逃げればいい、誰も責めないよ。だがまずリアの事を決めるのはリアだ。」

自分が提示した最良の方法を、一つの可能性でしかないのだと即座に言い張った司羽に、ネネは戸惑い、アレンは呆然とし、ユーリアは咄嗟に反論した。だが司羽は、その三人の事を気にも留めないかの様にリアだけを見つめて、リアの問題だと言い切った。そんな司羽に、三人は咄嗟に言葉を失い、リアは、そんな司羽の前で身じろぎひとつせずに硬直している。まるで、何を言っているのか理解が出来ないとでも言う様に。

「リア、ユーリアが言った通り、信念は人をおかしくしちまう事もあるかもしれない、だけどな。」

「……司羽さん……私は……。」

「お前がどうしても叶えたいなら、それを我慢する事はないんだ。その道にいくら死体が転がっても、誰を傷つける事になっても、リアには絶対に叶えたい事があるんじゃないのか？　此処に居たい理由があるんじゃないのか？　いや、正確には此処に居なくちゃならない理由か。」

「っ……。」

司羽がそう言うと、リアは眼を見開いて動揺を顕わにした。そして司羽を見つめる。まさかそんな事を言われるとは予想をしていなかったと、何故司羽にそんな事が言えるのかと、そう言うかの様に。

「な、なんで……。」

「さあな。俺は推測で物を言ってるだけだ。偶然会話が噛み合ってるだけかも知れない。」

「……。」

「多分な、リアは皆を巻き込むのが嫌なんだろう？　確かにこんな事に巻き込んで死なれた日には、罪悪感も酷いだろうな。自分の我儘に巻き込んで人が死ぬかも知れないんだ。それに、相手だって殺す事になるかも知れない。ユーリアの仲間を二人殺した時みたいにな。」

ユーリアの仲間を殺した、と司羽が言った瞬間にリアの肩が小さく震えた。それを見て、自分の思っていた事、リアに対して感じていた事が間違いではなかったと確信した。内容については、今はまだおぼろげだが。

「リア、お前の願いはきっと、誰の平和も脅かさない。もしお前の願いの為に誰かが傷ついて死ぬとするなら、それは勝手に巻き込まれたそいつの責任だ。リアが悩む必要はない。」

「でも、そんな事……そんな勝手な事出来ません……私が残りたいと言えば、結局皆だって巻き込むに決まってるんです。もしそうなれば、それはやっぱり私の責任で……。」

「そう思うなら諦めれば良いさ。それも一つの選択だ。どっちかって言うと皆そっちを望んでるんじゃないか？　皆リアの安全が一番の心配の種みたいだし。」

「……でも、でも私……。」

司羽があっさりと言ったその言葉に、リアは顔を伏せてしまった。もしかしたら泣いているのかも知れない。きっとその理由は、ネネにもアレンにもユーリアにも分からないだろう。リアが何故こんなに悩んでいるのか、それは当然だ。リアは自分の望みを誰にも話さなかったのだから。でもそれは、非難される事でもなんでもない。願いなんてものは結局は我儘なのだ。それを誰かに言うのをリアが嫌がっただけの話。

「でもな、リア。」

「……は…い……。」

「どうしてもその願いを叶えたくて、それのせいで周りを巻き込んで傷つけたくないのなら、俺が手を貸してやる。」

「……えっ？」

そんな言葉に、リアが驚いた様な声を上げた。一方で困惑した声の様にも聞こえるが、そんな事は司羽にはどうでもよかった。重要なのは、リアがその事に興味を示したと言う事なのだから。

「両方実現したいなら努力をすればいい。もしくは誰か別の人間に頼ればいいんだ。簡単な事だろ？」

「そ、それは、確かにそうですが……司羽さんまで巻き込んでしまう訳には……貴方に何かあったら……ルーンが……。」

「俺に何かあったらって……それ本気で言ってるのか？　自分の身くらい自分で守れる。それに俺としてはリアが居なくなる方が損失だ。言っただろ？　ルーンの親友に居なくなってもらう訳にはいかないって。」

「……司羽さん……。」

そこまで言ってもリアはまだ決めあぐねているようだった。まあ無理もない、自分一人協力した所で、此処に残ってリアが何かしたいと言うならば当然付いて来るであろう家臣に危険が及ぶことには変わりないのだから。

「まあ取り敢えず、さっきから何も言わないそこの二人と、そこのドアの向こう側に居る九人はリアの意志を尊重するだろうよ。リアが俺に家族って言った、この十一人ならな。」

「え、ドアの向こうって……。」

司羽は、気付いていなかったのかとでも言う様に嘆息すると、部屋の入口のドアに近づいてドアを開いた。そこに居たのは、先程玄関先で見たばかりの使用人達、計9名。そして、そこで聞き耳を立てていた人達を見ながら、リアを含む、部屋の中に居た人間は驚いた様に声を上げたのだった。

「あ、貴方達……。」

「えっと、ナナちゃんだっけ？　紅茶ありがとね。」

「あっ、は、はい。」

司羽はリア達の反応も気にせず、御盆を持ったまま呆然と立ち尽くしていた赤毛の少女の手元からティーカップを取ると、その場で口を付けて、紅茶を一口飲む。

「ちょっと温いかな。まあ、仕方ないけど。でも美味しいよ、ありがとうね。」

「あ、あぅ……。」

司羽が素直にお礼を言うと、ナナはお礼を言われたからか、それとも立ち聞きがバレたからか、真っ赤になって俯いてしまった。司羽は紅茶を啜りながら、そのまま視線をリア達へと移した。

「選ぶのは君だよ、リア。まあ、まだ時間はあるからゆっくり考えるといいさ。……ユーリア、そろそろ帰るぞ。」

「え？　あ、はい。」

ユーリアは家臣が隠れていたドアの方を見て呆然としていたが、司羽の声が掛かると我に返って立ち上がった。司羽がそれを見て苦笑し、身を翻してティーカップを元の位置に返すと、後ろから声が掛かった。

「あ、あの、司羽さん！！」

「ん？　なんだ？　後悔しない様にちゃんと考えた方が良いぞ。」

「いえ、あの……ありがとう……ございます……。」

「いいや、礼を言われる様な事はしてないよ。」

司羽はそれだけ言うと、司羽に寄り添うように傍に来ていたユーリアを携えて部屋を出た。なんだかユーリアの視線が、この気障野郎とか言っている気がしたが、取り敢えず無視。その真偽は後程確かめられるだろう。恐らく屋敷を出たら直ぐにでも。そんな事を思いながら、司羽の初、リア宅訪問は幕を閉じたのだった。

第３０話：頼ると言う事（前書き）

本当は前回に付けるつもりだったんですが、何を思ったのか離してしまいました。
見難いでしょうか？　もしそうなら意見を下さると嬉しいです。感想などもあまり頂けていないので、どのキャラが好きーとか言うのから、ここはこうした方が良い、というアドバイスまで、気付いた事など教えてくれると作者としては凄く嬉しいです。

第３０話：頼ると言う事

「えっと、『どうしてもその願いを叶えたくて、それのせいで周りを巻き込んで傷つけたくないのなら、俺が手を貸してやる。』でしたっけ？　女の子との話し方が分からないとか言う割には中々の口説き文句じゃないですか、ねえ司羽様？」

「……ま、まぁ確かにクサイ台詞だったとは思うけど……。結果的には良い方向に運んだと思わないか？　ほら、あのままじゃリアも悩み続けていただろうし……。」

リア宅の門を潜り抜け、数歩程度歩いた所で唐突にユーリアが不機嫌そうな顔で言ったのに対して、司羽はやっぱり来たかとでも言いたげな表情で視線を逸らした。ユーリアが不機嫌な理由は恐らく、先程のリア達とのやり取りの中で気に入らない点があったのだろう。司羽の反論を受けたユーリアは、案の定納得がいかないと言った風に唇を尖らせた。

「確かにそうかも知れません。でも私が気に入らないのはそれだけじゃないんです。リア様の事だって一人で分かった様な感じでしたし、どうせ聞いても教えて下さらないんでしょう？　秘密主義の司羽様は。」

「そりゃあな、俺自身リアの性格と行動から予想しただけで、俺が思っている通りの望みがあるのか分からないし、何も確証になる様な事を知ってる訳じゃないんだから、下手な事言う訳にもいかないだろう？」

「それは確かにそうです……けど……。前から思っていましたが、

司羽様はなんでも自分だけで決めようとなさるんですね。今回の件で確信しました。」

「別に……俺はそんなつもりは……。」

「まあ、あまり自覚はないんでしょうけど。」

ユーリアの言葉に反論する様に咄嗟に司羽はそこまで言って、ユーリアの寂しそうな瞳を見てしまい、その後に続く言葉を呑み込んだ。自分が何か間違った事をしたのだろうかと司羽は考えたが、どうしても理由が分からなかった。必要な時には周りにも意見を求めているし、今回の事だってリアに最終決定権はあるのだ。

「……私は別に今日司羽様の仰った事が間違いだなんて言っている訳ではありません。実際リアさんには何か望まれている事があった様ですし、司羽様の言っている現状への解釈もとても優れた物だと思います。私が今回の事に何か口を出す意味なんてないのかも知れません。」

「だったら……。」

ユーリアの発言に司羽は多少ムッとした様子で答えた。何か間違いがあったのなら責められても仕方ないが、理由もなくそんな風に非難されたのではどうしようもない。だがユーリアは、そんな司羽の心情を見透かしたかのように言った。

「今、司羽様はこう思っているのではないですか？　間違いがあったのなら非難されても構わないけれど、そうでないなら自分が責められる謂われはないと。必要な時には意見も求めているから効率を欠く様な事にもなっていないと。」

「……ああ、そうだよ。」

「確かに、司羽様の言う通りなのかも知れません。私が正しいなんて大きな態度で言う事は出来ません。ですからこれは、半分以上私の我儘になってしまうと思います。」

司羽はユーリアが自分の思っている事を言い当てたので、取り敢えず諦めてユーリアの言い分を聞くことにした。それにユーリア自身に我儘だと言われてしまえば司羽からは何も言えない。それ以前にユーリアにこんな表情をされては調子が狂ってしまうのだ。悲しげだが、信頼していると言う態度が伝わって来る、こんな笑顔をされたのでは。だから何か意見をするのはユーリアの意見を聞いてからでいいだろうと、司羽は思った。

「……先程も言った通り、司羽様は間違いをした訳ではありません。司羽様は御自分一人でリア様の為に策を考えて、リア様の心の内まで考慮して、それはとても凄いことだと私も思います。ですが、司羽様は一人に慣れ過ぎてしまっているのではないかと感じてしまうのです。だって、司羽様は誰に頼らずとも生きていける方だと思うから。勿論、知識が足りない時には誰かに聞くこともあるでしょう。手を借りる必要がある時は借りるでしょう。ですがそれは、誰かを信頼しての事ではなく、ただ単に必要だからでしょう？　効率を考えての事でしょう？」

「……。」

そこまで言われて、司羽にもユーリアの言い分が理解出来た。確かに、司羽には効率的になってしまう癖がある。あまり感情的になったりもしないし、自分でもそれを自覚していた。そしてだからこ

そ、このユーリアの指摘は、司羽の胸の奥にくるものがあった。反論する気も起きなかった。

「司羽様が私達を大切にしてくださる様に、私達だって司羽様を大切に思っています。まだ出会ったばかりの私ですら、そう思います。だって司羽様は本当に私の事を考えて下さっているんですもの。今日だって、わざわざ司羽様にとって必要がなかったネネさん達を議論の中に入れたのは、私との仲を回復させる為だったのでしょう？

私の心情を理解しての事か、私がまた何かの機会に攻撃される危険性を排除したいが為の事かは分かりませんが、どちらにしろ私の為の行為です。司羽様はそういう気の使い方をする方だって、もう分かってるんですから。」

「……別にそれだけって訳じゃないさ。あの二人のリアへの忠誠心だって見たかった。」

司羽は自分が気付かれないだろうと思っていた考えが見透かされて、恥ずかしく思う所もあり、咄嗟にそう切り返し、ユーリアの瞳から視線を外した。それを聞いたユーリアは小さく笑うと、そのまま話を続けた。

「私は、効率や利害の上でしか誰かに頼る事や甘える事が出来ないのは凄く寂しい事だと思うのです。私ではもしかしたら役に立つ事は出来ないかも知れません。ですが私は、司羽様になんでも一人で抱え込んで欲しくないんです。今回の事に関わらず、きっと司羽様は誰かに自分の事を話すのが苦手な人なんだと思います。でも決してそれに慣れて欲しくないのです。いつか貴方が深く悩んでしまう事があった時、一人で結果を出して、不幸になって欲しくないんです。司羽様は自分よりも大事だと思う事を優先させて、自分の事を軽視してしまうでしょうから。」

「……そんな事はないぞ。」

「いいえ、絶対にそんな事あります！！　さっきのネネさん達に対する態度だってそうです。リア様が後で後悔しない様に、他の人の意見を排除したのは司羽様らしいと思います。ですがその為にネネさん達の意見を完全に封殺してはネネさん達からの司羽様への印象が悪くなってしまいます。」

「いや、でもそんなの大した事じゃ……。」

司羽はそう言いかけて、気付いた。司羽の失言を聞き取ったユーリアは、それ見た事かと司羽をジト眼で見つめている。どうやら反論はもう聞いてもらえないらしい。ユーリアは小さく嘆息すると、司羽に詰め寄った。

「ほら、直ぐそういう結論になっちゃうんです。私とリア様とトワ様が仲違いをしていた時もそうです、あの御二人ですから司羽様が私の為にした事だと理解してくださいましたが、あれではリア様とトワ様に分からず屋だと思われても仕方がないです。それとあの司羽様の御学友とその妹の時も同じです。あの時だって……。」

「ああ、もう、分かったよ！！　悪かったよ！！　確かに俺はそういう癖があるし、ユーリアの言ってた通りに考えてたよ！！　ったく……。」

失言の後、ユーリアに次々に罪状（？）を並び立てられて司羽はついに降参した。そして司羽は叫ぶ様にそう言った後、一つ溜息を吐いてから不機嫌そうな顔でユーリアの方を振り返った。なんだか先程の苛立ちも全て吹き飛んでしまった様だ。ユーリアはそんな司

羽を見て、クスリと笑った。

「……ふふっ、なんだか司羽様って、意外と子供っぽい所もあるんですね？　いままであんまり年下に見えなかったんですが、凄く新鮮な気分です。」

「それはどういう意味だ。俺が気取ってたとでも言うのか？」

「もう、何もそこまで言っていないじゃないですか。拗ねないでくださいよ。本当に子供みたいですよ？」

「……はぁっ。」

司羽は可笑しそうに笑い続けているユーリアに、続けてもう一度深い溜息を吐いた。そしてユーリアの笑い声が止んだ後、司羽が表情を覗き見ると、司羽がいつか見た、優しげで、慈しむ様な表情に変わっていた。

「昨日、ルーン様も仰っていました。自分は司羽様の事を何も知らないって。」

「ルーンがか？」

「はい。きっとルーン様も不安なのですよ、司羽様が自分に相談事を何もしてくれないのが。ですから、ルーン様の為にも、もっと私達を頼ってください。些細な事でも良いんです、一人で抱え込まないでください。私は司羽様の侍従なのですから、気を使われ過ぎると逆に困ってしまいます。」

「……そう、なのか。」

「そうなんです。私はこう見えても尽くすタイプの女なんですよ？」

司羽は、そう言って微笑んだユーリアに、なんだか毒気を抜かれてしまった。それにルーンにまでそんな風に思われて居たのかと反省した部分もある。これはもうユーリアの言い分を認めるしかないだろう。全面的に降伏である。そう考えを新たにした司羽は、ユーリアにその旨を伝えようとして、今二人の間に流れている沈黙に気付いてなんとも言えない気分になり、咄嗟の照れ隠しをしてしまった。

「じゃあ早速だけど、ユーリアの服を買いに行くぞ。選ぶのを手伝ってもらう。なんか替えの服なんて殆んどないみたいだし、そんなマントみたいな服じゃ家事もこなせないだろ。適当に買おうと思ってたんだけど、全然こういう服の事なんて分からないからな……。メイド服っぽいのでいいのか？　リアの家の使用人はそんな感じだったけど。」

「……司羽様？　それって結局私の為じゃないですか？　まぁ服は必要ですし、仕事着を買っていただけるのは有り難いですけれど……。まぁ、司羽様らしいと言えばらしいですが。ちなみに、そのメイド服ってなんですか？　向こうの世界での使用人服の様なものですか？　私が作れる物ならば生地を買って自分で仕立てますけど。」

司羽とユーリアはそんな話をしながら足を商業地区の方へと向けた。ユーリアは結局自分へ気を回してしまう司羽に内心で苦笑しながら、いつか、長い時間が掛かっても、司羽の事を知ることが出来ればいいと、そう思ったのだった。

第31話：a tender smile

「あら、お帰りなさい。貴方達も出掛けてたのね？」

「おお、リアの家に行ってたんだ。貴方達もって事は、ミシュも出掛けてたのか。」

買い物を終えて、帰路に着いていた司羽とユーリアが屋敷の近くまで来ると、調度ミシュナが屋敷の扉に手を掛けようとしている所だった。

「でもミシュがこうやって出掛けるのは珍しいな。基本的に学園に行く時以外は家に居るのに。」

「ええ、まぁね……って、私がこの家の住人じゃないって事を忘れてない？　ちょっと家に帰っていただけよ。……着替えとか私物を取りに。」

あ、最後の方で視線を逸らされた。しかも微妙に声が小さくなってたし。

「……完全にこの屋敷に住み込む気まんまんだな。」

「あら、別に良いじゃない。むさ苦しい男ならともかく、見目麗しい美少女なんだから。学園にも街にも此処からの方が近いし、私が家に居なきゃいけない理由なんてないもの。勿論首席ちゃんの許可も貰ってるし、自分の食費くらいは入れるわ。……それとも、貴方の愛の巣作りの邪魔かしら？」

「別にそんな事はねーよ、特に反対してるわけでもないしな。……ってか自分で見目麗しいとか言うなよ。恥ずかしい奴だな。」

「でも否定出来ないでしょう？」

「……。」

「ふふっ……。」

ミシュナは自信満々にそう言い返し、対して咄嗟に言葉に詰まってしまった司羽に、面白い物を見た様な意地悪な笑みを浮かべた。
それを見ていたユーリアは苦笑混じりに口を開いた。

「ふふふっ、司羽様はミシュナ様には弱いのですね。」

「別にそう言う訳じゃあないんだけど……。」

司羽がユーリアから微笑混じりの発言に答えあぐねていると、ミシュナはクスリと笑みを漏らして言った。

「サドだって、たまには虐められたくなっちゃうのよね？」

「俺が確定的なサディストみたいに言うなよ！！　ユーリアが信じたらどうしてくれるんだ！！」

「あら、本当の事じゃない。それに相手の性癖を知ってないと後々後悔しちゃうわよ？　あの子みたいにピッタリ一致なんて、そうそうある事じゃないのよ？」

「ダァーッ、もう！！　下ネタは止めろ下ネタは！！」

「いやよ。だって司羽、下ネタが一番面白い反応するんだもの。」

「お前な……性格悪いぞ。」

「……ふふっ。」

いつも通りのやり取りを繰り返すミシュナと司羽を見て、ユーリアはつい小さく噴き出してしまった。この二人が出会ったのは最近だと聞いたが、何かもっと長い年月を経て培われた物がある様な気がしてしまう。二人の会話が、それほどに相手の事を心得た、なんとも小気味の良い物に感じられてしまったのだ。ユーリアの笑みは、それが微笑ましくて、自然に出てしまった。そんな微笑みだった。

……だが、どうやら当の二人にはそれが通じて居なかった様である。

「ふふふっ……、って……あ……。」

ユーリアがそれに気付き、ヤバいと思った時には既に二人の視線はユーリアに向けられていた。ミシュナも今のやり取りを笑われたのが恥ずかしいらしく、仄かに頬を染めている。それだけを見れば微笑ましいのだが……。

「「……。」」

「……あー、ええとですね、これは、何と言うか……。」

「……侍従さん？　何がそんなに可笑しいのかしら？」

「……お、可笑しい等と言う事は……あはは……。」

いつもクラスでミリクに合わせて司羽で遊んでいるミシュナだが、その対象が自分に向くのはかなり恥ずかしいらしい。そのせいか、いつの間にかミシュナの矛先はユーリアへと向いていた。

「み、ミシュナ様はトワ様のお姉さんみたいな落ち着いた方だと思って居たので、その……少々意外だったと言いますか……。」

「成る程。つまり今の私はまるで子供の様で、幻滅したと言いたいのね。私は一生部屋の隅で大人しくしている様なそんな生き方が似合っているんだもの、仕方がない事よ。……そうね、私は根暗で寡黙で無愛想な女よ。貴方程胸もないし。」

「い、いいえっ！！　私は決してそんなつもりでは！！」

「おいおいミシュ。ユーリアはそういうの慣れてないんだから、あんまり口撃するなよ。」

まるで深く傷付いたとでも言うような悲嘆に暮れる演技をするミシュナに、司羽は苦笑混じりでそう言った。

「私、からかうのは好きだけど逆は大嫌いなの。」

「本当に最悪な性格だな。……いつか後ろから刺されても知らないぞ。」

ミシュナの発言に対し、司羽が先程の仕返しとばかりにそう言うと、ミシュナは溜息を一つついて呆れた顔になった。

「……司羽がそれを言うの？　入れ替え試験が始まった時の事を考

えると真っ先に刺されるのは司羽の方だと思うけど。」

「うっ……確かに……。」

入れ替え試験での最初の襲われ具合をトワから聞いているらしいミシュナはクスリと笑ってそう言った。その口撃に司羽からは何も言い返せず、口元を引き攣らせながら言葉に詰まった。

「ふふっ、まぁいいわ。今日の私は特別気分が良いの。久し振りに当たりの本が見付かったし。……さ、こんな所に居ないで、早く家に入るわよ。もう時間も遅いし、あの子達も待ってるわ。」

「あ、ああ……。」

ミシュナが言った事に対して、司羽は溜息をついてからそう返す。ミシュナはそれを楽しそうに眺めた後、一足先に扉を空け、屋敷の中へと入って行った。

「……司羽様でも、ミシュナ様相手ではああいう風になってしまうんですね。ちょっと意外です。」

「……まぁな。それにミシュには多分一番世話になってるんだろうし。どうしても強気に出れないんだよな……。特に不満があるわけじゃないけど。」

そう言って深く溜息をついた司羽をユーリアはクスクスと笑いながら見詰めた。

「ふふっ……成る程、そういう事ですか。つまり私が司羽様に虐められたらミシュナ様に泣き付けば良いんですね。」

「虐められたらって……お前な……。」

「冗談です。……ちなみに、『さど』とか『さでぃすと』ってどういう意味なんですか？　方言か何かでしょうか。」

「……それ、本気で聞いてるのか？」

ミシュナに続き屋敷に入りながら、司羽は表情を歪ませ、首を傾げるユーリアの隠れ天然に戦慄するのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

「しかし主、随分遅い帰りだったの。リアの家に行っていた様じゃが……。」

「ああ、帰りにちょっと買い物をしてたんだよ。流石にユーリアの服が少ないからな。仕事着とかも欲しいだろうし。……そういえば仕立てるとか言ってたけど、本当に自分で作れるのか？」

「はい、問題ありません。こう見えても私の祖母は昔、隣国の王宮に仕える従者でしたので、孫の私もあらかたの家事雑用は習っているんです。ふふっ、まさか私も御祖母様と同じ道を行く事になろうとは思ってもいませんでしたが。」

「成る程、やけに立ち居振る舞いが綺麗なのはお婆さんの教育の賜物って訳か。どうりでな。」

司羽の疑いの視線を受けて、ユーリアは胸を張ってそう言い返した。今は屋敷にいる全員が集まって食事をしている。ユーリアは最初、従者として同席するのを渋って居たのだが、歓迎会でも同席していたのだから同じにして欲しいとルーンが言った事で了承してくれた。ちなみに今日の夕食の支度はルーンとトワがしてくれた物だ。そして目の前に置かれた何かの包み焼きはルーンが担当した物だろう。席に着いた時からルーンの視線が自分とこれに固定されているのだから、そう見てまず間違いないだろう。

「うぅー……ねぇねぇ、司羽ぁ……どう？　美味しい？」

「うん、この包み焼き凄く美味いぞ。でもなんの肉だ？　食べた事ないな。」

「えへへ、アマドリって言う鳥のお肉だよ。今日トワちゃんと買い物してたらお肉屋さんで見付けたの。この時期にこの国に渡ってくる鳥の中でも捕獲数が少ない貴重な鳥なんだよ？　単純に逃げるのが早いってだけなんだけどね。」

「へー、アマドリって言うのか。今まで食べた肉の中では一番美味しいかも。肉が凄く柔らかいし。」

「本当っ!?　良かった、気に入ってくれて。それじゃあ……、あーん♪」

司羽が美味しいと言って再び箸を伸ばすと、真横に座ったルーンが待ってましたと言わんばかりのタイミングで自分の箸を司羽の口元まで持っていく。

「あーむ。うん、美味い。じゃあ、お返しに。」

「あーん♪」

「……慣れてきたとはいえ、やっぱり見てて恥ずかしいわね、このやり取り。他の話の途中でいきなりやり始めるから質が悪いのよね。せめて心構えをさせて欲しいわ。」

直ぐさまお返しに自分の箸をルーンの口元へ運んだ司羽を見て、ミシュナは軽く溜息をついた。このやり取りは毎回の恒例行事の様な物だが、ミシュナは今だに気になってしまう様だ。司羽も最初は恥ずかしかったのだが、ルーンがあまりに可愛らしくおねだりするものだから司羽も簡単に堕ちてしまったのだ。

具体的な内容としては、司羽が自分の行動を受け入れてくれると信じきっているキラキラした瞳の上目使いと、幸せいっぱいですと自己主張しまくっている可憐な笑顔である。そこから若干感覚が鈍って来ているのは司羽自身も自覚している。自覚しているが考えない様にもしている。

「ははは……、なんか悪いな。」

「……それは良いとして……、あの次席ちゃんの家には何をしに行ってたのよ？　侍従さんの事はもう聞かないけど、なんだか最近また隠し事が増えて来たんじゃないかしら？　あんまり周りに心配かけるんじゃないわよ。」

「なんだミシュ、心配してくれるのか？」

「ごめんなさい。今は頬を赤く染めて、『し、心配なんかしてるわけないじゃないっ！！　……馬鹿。』とか言う気分にはなれないの、真面目に答えなさい。」

「……悪い、どこから突っ込んで良いのか分からん。」

「ほうほう、今のがツンデレというやつなのか。」

しないと言いつつ迫真のツンデレ演技をしてくれたミシュナに対して言葉と気力を奪われつつ、司羽は呆れ笑いを浮かべた。そんな司羽を、ミシュナは少し険しい視線で見つめる。どうやらふざけた物言いながらもかなり真剣らしい。若干トワが要らない事を学習しているのも気になったが。

「本当……司羽はいつもそうよね。自分の事は何も話さないんだから……。」

「……そんな事はないだろ？　前回だってちゃんとミシュナには話したじゃんか。俺が隠してたのだって少しの間だったろ？　それに止むを得ない事情があったんだ。」

「……そうだったかしらね。」

「そうだったかしらって……。」

惚けた様にそう言ったミシュナを見て、司羽は疲れた様にうなだれた。そこで司羽は一つの可能性に思い当った。もしかしたらミシュナは拗ねているのかも知れない、という可能性。

それはまぁ、試験で一度一緒になったに過ぎない相手の家に行って、しかも相手は謎が服を着て歩いている様な存在なのだから、何かあったと考えるのは仕方のない事だと思う。しかし、リアの秘密を司羽が隠しているのなら、それが簡単には言えない事であるのもミシュナならば分かる筈だ。だと言うのに不機嫌になっている。ならばやはり、これはそういう事なのではないか？

「……なあミシュ、お前もしかして……。」

「拗ねているんじゃないか……、とか言ったら明日学園で着衣を乱して職員室に駆け込むわよ。勿論涙と貴方の名前付きでね。」

「そうかそうかお前はそんなに俺を性犯罪者にしたいか。ただでさえ最近周りの視線が痛いって言うのにっ！！」

「ふふっ、いいじゃない。司羽が困っている所を見てるとゾクゾクするんだもの。」

「……なんというドS発言……。」

駄目だこいつ、早く何とかしないと。というかこの分じゃミシュが拗ねたりとか絶対有り得ねぇな。地球……じゃなかったエーラがひっくり返っても有り得ない現象だ。

「……まったく、ちょっと困った流れになると直ぐに誤魔化そうとするんだから。とはいえ、貴方の性格は分かってたけどね。」

「……。」

呆れた様に、そして少し諦めた様に、ミシュナはそう言った。そこには寂しさの様なニュアンスも含まれている気がして、司羽は咄嗟にかける言葉を見失ってしまう。ミシュナが面白半分でリアの事を聞き出そうとしている訳ではない事は司羽も十分に理解している。だが、それを教えてしまう事はリアとの約束を放棄してしまう事に他ならない。司羽はそう考え、暫し迷った後に口を開いた。

「……悪いな、もう少し待ってくれ。今回は俺だけの話じゃないんだ。この事は、いつかちゃんと話す。」

「……なんとも気の長い話ね。」

「そう言うなよ。あいつにだって事情があるんだ。分かるだろ？」

「……はぁっ、仕方ないわね。」

なんだかんだで面倒見の良いミシュナの事だ。話せば協力してくれるだろうし、信頼もしている。だが、リアがそれを望んでいない以上は話が別だ。ルーンには知られたくないと言っている事もあるし、あまり大勢に言うのは得策ではない。ミシュナもそんな司羽の心情に気付いたのか、諦めた様に肩を竦めた。

「でも、何か危険があるようなら直ぐに言いなさいよ？　貴方がいくら強かろうと、出来る事と出来ない事があるんだから。協力くら

いさせなさい。……それと、これからはその子の気持ちも、もっと考えてあげなさい。」

「えっ？　……わ、私？」

ミシュナは司羽に諌める様にそう言いつつ、ルーンへと視線を移した。当のルーンは、いきなり自分に話が振られたので困惑してしまった様に首を傾げただけだったが。ミシュナはそんなルーンを見て表情を険しくした。

「ミシュナちゃん、私は別に大丈夫だよ？　それは司羽が危ないことをするのは嫌だけど……。私達に言えない事があるのにはやっぱりそれなりの事情があるんだろうし。リアと会うのだってその為なんだろうから。」

「……またそんな事言って……。」

「で、でも私本当に……。」

「……まぁ、それも貴方の本心なんでしょうけどね。私が言いたいのはそういう事じゃないのよ。」

少し怒った様なミシュナの言葉に対し、ルーンは困惑を交えた表情で小さく呟いた。そしてミシュナの妙な威圧感の中、司羽も口を開けずに沈黙が続く。そんな沈黙を破ったのは、ミシュナの小さな溜息だった。そしてミシュナは、同時に懐から何かの券を二枚取りだし、司羽達の前に置いた。

「まったく……取り敢えずこれあげるから、貴方達は次の休みにでも遊びに行って来なさい。勿論、二人切りでね。一泊くらいなら

学園も問題ないでしょ。……ちなみに、拒否権はないから。」

「えっ……？　で、でも……これって、いいの？」

「ホテルの宿泊券……か？」

「あ、そのホテルは確か……。」

眼の前に置かれた宿泊券に、ルーンは戸惑い、司羽は手に取って確認した。司羽には何処かのホテルの宿泊券という事くらいしか分からなかったが、ルーンとユーリアは知っているらしく、軽く驚きの表情を見せている。

「二人とも知ってるのか？」

「は、はい。そこは各国の偉い方達が集まって会議が行われる際に使用されるホテルの内の一つです。そういったホテルが各国には一つずつあるのですが……普通の人間では泊まる事はおろか、入る事も出来ません。と言うのも高い地位の方が来られるので、大がかりな審査があると言う事なのですが。」

「別にそんな大層な所じゃないわよ。基本的に暇を潰すには困らない立地だから、金持ちの旅行者が多いってだけで、数年に一度此処で国際会議が開かれる時だけ審査が異様に厳しくなるけど、その時以外は普通のホテルよ。一般人だって泊まれるわ。まぁ、それなりに高いけど。」

「そ、それなりって……一泊が私のお父さんの月の収入の二倍以上した気がするんですが……。」

「そんなに凄い所なのか……。」

ユーリアの父親がどれほどの収入だったかは知らないけど、よっぽどの場所っていうのは分かった。だが良いのだろうか、こんなものを貰ってしまっても。

「なぁミシュ、やっぱりこれは……。」

「拒否権はないって言ったわよね。」

「……でも、本当にいいの？　私、ミシュナちゃんにこんなにしてもらうだけの事してないよ？　確かに部屋は貸してるけど……。」

「……それは、貴方がそう思ってるだけよ。それにどうせ、私が持ってても仕方ないんだから行って来なさい。勿体ないわ。それペア招待券だし。」

「う～ん……。」

いつもよりも強引な気がするミシュナの説得に、ルーンはミシュナと招待券を交互に見つめた後、判断を委ねるべく、司羽を見上げた。困っている様な、だが何処となく嬉しそうな表情だ。そんな顔を見せられたら、恋人としては選択肢は一つしかない。

「……行くか、そのホテル。……俺達は、初デートもまだだったもんな。」

「司羽……うんっ。」

「……ふふっ、決まりね。トワ、侍従さん、私達は留守番よ。柄じゃないけど、女の友情でも深めましょうか。」

「あら、良いですねそれ。」

「そうじゃの。あ、童は久しぶりにミシュナの料理が食べたくなってきた。」

「それは……面倒ね。」

クスクスと笑いながら仲が良さそうに話す三人を見て、司羽は少し安心した。トワとユーリアの事も、きっとミシュナならば良い緩和剤になってくれるだろう。当日は心おきなく楽しむ事が出来そうだ。そんな事を思いながら、先程から腕に抱きついて着ているルーンの方を見ると、ルーンも同じ様に司羽を見て微笑んでいた。

そうだ、自分で言っていて今気が付いた。これは初デートなのだ。それは、付き合い始めてからまだ殆んど日は経っていないし、忙しかった事もあるだろう。だが、もう少しルーンに割く時間を取ってあげるべきだったのではないか？　ただでさえ入れ替え試験もあり、二人で居る時間は殆んど取れていなかったのだから。ミシュナが言ってくれなければ、自分はそれに気が付けただろうか？

「……ルーンが一番大事なのにな。」

「司羽が優しい人なのは知ってるから、私大丈夫だよ？」

「ありがとう、ルーン。」

ルーンがそう言って、いつも通りに甘えてくるのを司羽はいつも通りに受け止めた。いつもよりも少しだけ賑やかになっている食卓

の中、司羽の向かいで、そんな二人を視界の端で捉えながら、一人の少女が微笑んでいた。

第３２話：我が愛しき者の為に（前書き）

何故か3日続いて一日三万ヒットしました。驚きです、目茶苦茶嬉しいです。それと感想くれた皆さん、凄く参考になりましたし、それ以上に書いていく意欲が更に沸きました、感謝感謝です！！

第３２話：我が愛しき者の為に

「おはよう、司羽！！　呼び出しなんてされていたから心配してたけど、やっぱりＡプラスクラスに残っていたんだね！！」

「ああ、おはよう。……って、ムーシェがなんで此処に？　なんだ、教室を間違えたか。」

「司羽……親友に向かってそれはあんまりなんじゃないのかい……？」

「ははははっ、冗談だ。クラス上がったんだな、おめでとう。」

教室に入った瞬間に歓声を上げたムーシェに、いつもの様に毒舌を吐きながら挨拶を返した司羽は、笑いながら祝いの言葉を述べた。どうやらムーシェは無事にクラスアップを果たしたらしい。いつもより割増でテンションが高いムーシェを横目に教室を見渡すと、確かに若干の人間が入れ替わっている。殆んどが以前と変わらないが、今居る人間だけでも三分の一程度の入れ替わりが見て取れた。事前にミリクから聞いていた話では、Ａクラス以上にもなると殆んどの面子が固定化されてしまい大きな変動は珍しいらしいので、この程度でも十分大きく動いた範疇に入るらしい。だが司羽には、変動の規模以上に思う所があった。

「でもなんだか不思議な感じだな、まだ転入してから殆んど経ってないってのにクラスのメンバーが変わるってのは。」

「……そう言えば、司羽さんは随分遠くからいらっしゃったのでしたね。やはりこの学園とは違ったのですか？　私はこの学園しか

知らないので特に何も感じないのですが。」

「ん？　リンシェちゃんか、おはよう。それにAプラスクラスおめでとうかな。」

「おはようございます司羽さん、それとありがとうございます、これも司羽さんの御蔭です。それにしても話には聞いていましたが、本当に毎朝ルーン様を背負って御登校なされているのですね。あのルーン様が誰かに頼りきりになるなど内心信じられなかったのですが、やはり恋とは偉大な物ですね。」

　司羽がつい独り言を漏らすと、それに反応して、近くで他の女生徒と話をしていたリンシェが話に加わった。そしてリンシェは司羽に対して挨拶とお礼を済ませると、その背中で寝ているルーンに視線を移した。今日も今日とて、ルーンは登校時間にも関わらず絶賛爆睡中である。そのくせ朝食の時だけはしっかり起きて、司羽にあ～ん攻撃を仕掛けているのだからミシュナが呆れて先に行ってしまうのも仕方がないだろう。そのミシュナも今日はかなり寝むそうだったので心配だったのだが、案の定机の上にうつ伏せになっている。どうやら昨夜は徹夜で読書をしていたらしい。

「ルーンを背負って来るのはもう日課みたいなものだよ。……それと前の学園との違いだけど、取り敢えず、こんなに頻繁にクラス替えはなかったかな。この学園のシステム的に仕方がない事なんだろうけど、頻繁にクラスの友人が入れ替わるっていうのはちょっと寂しい気がするよ。」

「そういう事ですか……でもここはまだ良い方ですよ。他のクラス、特にBやCの辺りは激戦区ですからね、クラス替え試験の後にも入れ替え戦を行う生徒が多いですから。その目まぐるしさは此

処の比ではないです。」

「そうだねぇ、僕も正直あのランクに戻りたくはないよ。試験の後は連日入れ替え戦を申し込まれるしね。体力もそうだけど、気疲れもするし。」

「……そうなのか。」

そう言えば入れ替え戦の事を忘れていたなぁ、と司羽は思考した。確かに実力が拮抗しているクラスでは入れ替え戦が多く行われるだろうし、試験での変動も此処の比ではないだろう。

「まぁ、少ないとはいえAクラスでも入れ替え戦の申し込みはありますけど……兄さま、負けないでくださいね？」

「リンシェ、心配してくれるのかい？」

「そんな訳ないでしょ、馬鹿なの兄さま。実力的に考えて兄さまがやられたら次に申し込みを受けるのは私です。折角ルーン様と一緒のクラスになれたのですから、協力してくださいね？　その身が滅びて使えなくなるまで。負けたら次の入れ替え試験まで絶対に口利きませんから。」

「……何と言う事だ……あの可愛かったリンシェが……リンシェが……うわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

「……これで良しと。」

本気泣きをしながら教室を飛び出したムーシェを眺めて、満足げに頷いたリンシェに、司羽は思わず苦笑してしまった。

「……結構えげつない事するなあ、リンシェちゃん。」

「……そうでしょうか？　私と兄さまはいつもこんな感じなのですが。」

「ムーシェ……不憫な。」

先程の発言がいつもの事だと言うのは流石にムーシェが可哀相に思えてきたが、リンシェが本気で分かっていないらしく、首を傾げる仕草が可愛らしかったので司羽は考えるのを止めた。いや、文脈的におかしいとは思ったが、なんかどうでも良くなった。

そんな時、司羽は背中でルーンが身じろぎするのを感じてそちらに視線を動かした。どうやら今の騒ぎ（と言うよりもムーシェが一人で騒いだだけだが）で目が覚めた様だ。

「ん、んっ……うるさいの……。」

「こら、ルーン。もう起きないと駄目だろ？　ほら、髪やってやるから降りて椅子に座れ。」

「……やだぁ……司羽の背中が良い……此処でする……。」

「うっ……いや、そこに居られたら手が届かないんだけど……どうしろと？」

ギュッと肩に回す手に力を入れたルーンの我儘に、一瞬折れそうになってしまった司羽だが、物理的に無理なものは仕方がないと、ルーンに言い聞かせる様に言った。それにも関わらず、何とかしてあげたいとか、甘やかしてあげたいとか考えてしまうのは決して自

分がおかしい訳ではないと司羽は無理矢理自分に言い聞かせた。なんだかんだで最近はルーンが朝食の準備をしてくれたり、自分を起こしてくれる事が度々あるので、実はリンシェに言われた程毎日こんな感じではなくなって来ている。だからこそ、久しぶりに甘えた声でお願いされると破壊力が違う。つい応えて上げたくなってしまうは仕方のない事なのだ、可愛いは正義。以上、言い訳終わり。……とは言え、やはりそろそろ降りて貰わなくては困る。時間的にもギリギリだし。

「ほら、そろそろ先生も来るから早く席に着く。リンシェちゃんからもルーン言ってやってくれ……って。」

「……はあぁっ……♪　ルーン様の我が儘……可愛らしい……。」

「……。」

何かこっちの方でも一名トリップしていらっしゃる。何故だろうか。今この瞬間にリンシェちゃんと言う人間を理解してしまった気がする。

「……更に性格がムーシェに似てる様な感じすら受けるのは何故だろう。外面的には正反対な感じがあるのに……兄妹って……不思議だな……。」

「……ああっ……ルーン様ぁっ……はふぅっ♪」

リンシェの見せる年下とは思えない恍惚とした表情に、司羽はなんとも言えない微妙な表情なってそう呟いた。

結局そのせいでルーンを起こすのを忘却してしまい、この後ミリ

クから何故か司羽が怒られてしまうのだが、少しくらいは理不尽に思ってくれても良いんじゃないかなーと思う司羽なのだった。

ーーーーーーーーーーーーーーーー

『朝から大変でしたね。……ムーシェさん達が何か余計な事を言わないかと心配でしたが、何もなくてなによりでした。』

「ああ、二人の方は心配要らないだろうな。リンシェちゃんは利口な子だし、ムーシェだってユーリアの事を告げ口する様な奴じゃない。うっかりって事はあるだろうが、そもそもそんな話題になる事もないだろう。それに元より、リアの事を何か知ってる訳じゃないんだし、気にしすぎだ。」

『……そうですね。』

入れ替え試験後初めての授業も無事に終わり、授業間の僅かな空き時間を利用して、司羽はリアに呼び出されていた。何もこんな短い休みを狙わなくてもとは思うが、リアもルーンに司羽を呼び出している所を見られるのが嫌なのだろう。やはりルーンにだけ黙っているというのはリアも結構気にしているらしい。

「それで要件ってのは、やっぱり昨日の事でいいのか？」

『はい。昨日一日考えて、私なりの答えは出ました。』

「へぇ、いいのか？　そんな簡単に決めちまっても。」

『……なんだかちょっと意地悪ですよね、司羽さんって。』

「……そうか……？」

司羽の問いにリアは小さく微笑んでそう言い、司羽は最近少しだけ自覚が出てきた、微妙に否定しずらい事を指摘されて、なんとも言えない表情になった。

「……まぁそれはいいとして、本当に後悔しない答えが出たんだな？」

『そうですね……きっと、必ず後悔しない答えではありません。私の選択のせいで私の家族が、皆が傷つけば、私は絶対に悔むでしょう……、正直今でも怖いんです、皆を巻き込んでしまう事が……、あの人達は私に付いてきてくれるって、信じられてしまうから。』

「あいつらならそうするだろう。」

『……やっぱり、司羽さんは意地悪です。』

「……そうか。」

再びリアに意地悪宣言をされてしまい、司羽は苦笑混じりにそれを受け止めた。悩んでいるリアの気持ちは理解出来る。だが、今の司羽はリアに掛けられる言葉は持ち合わせていなかった。リアを救ってやれる言葉など存在しない。そこで救われた様な気になった所で、結局は自分で決める事になるのだから。そして、どうやらリアもそれは理解している様だと司羽は核心していた。

『……でも、私は決めました。この意思を変えないだけの覚悟も出来ました。』

「ああ、そうみたいだな。……それで、答えは？」

司羽はそう言った切り黙ってしまったリアに一言促すと、リアは暫くの間の後、手に持っていたスケッチブックを伏せた。

「私の……いいえ、私達の答えは決まりました。私達は、この街に残ります。逃げてもまた隠れて、違う街へと逃げる事の繰り返しになります。此処へ戻る事は難しいでしょう。ですから、私の願いを叶える為にこの問題から逃げる訳にはいきません……絶対に。」

「……成る程な、それがお前達全員で決めた答えか。」

スケッチブックを伏せ、わざわざ簡易の結界を張ってまで自分の声で話し始めたリアの独白に対し、司羽は一言そう言って、表情を和らげた。しかしリアはそんな司羽の前で、微かに俯き加減のまま、

ポツリと一言呟いた。

「……司羽さんは馬鹿だと思いますか？　自分の小さな願いの為に、大切な人達を危険に晒す私が。私は、自分の大事な家族を危険に晒すのです。きっと、一生付いて回る危険に。」

「さてな。だがそう言うって事は、リア自身が馬鹿げた行動だと思って居るんじゃないのか？」

「そんな事は……。」

ない、とは言えない。確かに自分の意思を通す覚悟はしたが、正解かどうかと言われればやはり疑問が後を絶たない。自分に掛かっている命と責任はそれだけ重いのだから。

結局残ったままだった自分の疑問を、司羽に直接突き返されてしまったリアは、咄嗟に言葉に詰まってしまった。それを見て司羽は、小さく溜息を吐いて言った。

「まぁ本来俺が言い出した事だしな、本当に馬鹿な選択だと思うならリアに推しちゃいないさ。危険な選択である事には同意するけどな。」

「……。」

「リア、俺は言ったはずだぜ？　この選択にはそれ相応の努力が必要だって。それと、最悪の場合犠牲もな。」

「……はい、それは重々承知しています。」

結局リアの心配はそこに尽きるのだろう。覚悟が甘い、とは言わ

ない。ただ、リアは自分の我を通すには少し家族に優し過ぎるだけの事だ。リアの意思の強さは、以前の戦いで司羽なりに見せて貰っている。だから司羽は、少しだけ後押しをする事にした。

「安心しろよ。お前の覚悟は馬鹿な選択でも間違った答えでもない、俺が保証してやる。」

「……司羽さん……。」

「もしもそれでも不安だって言うなら、自分一人で全員を護れるだけの力をつけろ。覚悟を決めて、変える気がないなら後やる事は一つだ。そうだろ？」

「……そうですね。悩んでる時間なんて無駄なだけです。私達はもう決めたんですから。」

「そういう事だ。あん中じゃあ最悪の場合に一番戦力になるのはリア、お前自身なんだ。一番頼れる自分自身を、しっかり磨いとけ。」

「はい、そうします。私の決めた未来で後悔しない為に。」

司羽の言葉を受けて微かに笑みを浮かべたリアは、真っ直ぐに司羽を見詰めてそう言った。どうやら迷いの方はもう大丈夫らしい。そう思うと、司羽の顔にも小さな笑みが浮かんだ。

「まぁ俺が言い出した様なもんだからな、出来る限り助けになるよ。学内でもそれ以外でも、危険だと思ったら直ぐに教えてくれ。……ああ、それとその内にまた、リアの屋敷に行くことになるだろうな。」

「ふふっ、そうして頂けると嬉しいです。特にアレンとネネは司羽さんに勝つ為に訓練に励んでいますし、来て頂けるときっと喜ぶと思います。」

「……ユーリアの言う通り、若干嫌われたか？」

「ふふっ、あの二人だってちゃんと時間を置けば、司羽さんの思惑を見抜く眼力はありますよ。結構あからさまでしたし。」

「……やっぱり手厳しいな、リアは。」

リアがクスリと笑って司羽の心配を否定すると、司羽はわざとらしく溜息をついて返した。そしてリアは一言付け足す様に言った。

「それと、私に時間を割いてくれるのは嬉しいのですが……。」

「ああ、ルーンの事か。情けない事にミシュにも同じ事を言われちまったよ。俺はやっぱりルーンに対する配慮が欠けてるのかも知れないな。」

「……そういえば、ミシュナさんも御一緒に住んでいらっしゃるのでしたね。」

「おいおい、あんまり変に勘繰るなよ？」

急に眼を細めて司羽に対する視線を強めたリアに、渇いた笑いを漏らしながら司羽は一歩後ろに下がった。美人は怒ると怖いと言うが、こういう視線はやはり別に迫力がある。取り敢えず、まず話を元に戻そう。

「ルーンとは次の休みに旅行に行くつもりだ、短いが泊まりがけで。」

「……なるほど、ルーンの機嫌がいつもより良いのはそう言う理由でしたか。」

「……本当にルーンの事を良く見てるよな、リアは。」

「当然です。とは言え、今回は司羽さんを呼び出す為の警戒の意味もありましたが。」

まぁそれは確かにそうなんだろうが、やはりリアのルーンへの気の掛けかたは少し大袈裟な所のある様に思える。だからこそ、こう言った質問にも間違いなく答えてくれるだろうと核心している。

「あー、ちょっとルーンについて聞きたいことがあってだな……。」

「なるほど、つまりデートの前にルーンの好きな事を私から聞いて置こうと言うわけですね。」

「……まぁそんな所だ。鋭いな。」

しかし、リアはルーンの事になるといきなり鋭くなるな。何だか若干怖くなってきた気がするのは何故だろう。

「がっかりさせてしまい申し訳ありませんが、ルーンは基本的に娯楽関連にこれと言った好みはありません。しいて言うなら魔法の研究をするのが何より好きな子でしたが、取り敢えずその目標も達成してしまった訳ですし。」

「ああ、そういえばそうだったな。」

そうでもなければあの若さで一つの分野のスペシャリストになる事など出来ないだろう。天才とは才を持つだけでは何の役にも立たないのだから。

「ですから私としては、あの子の楽しみを沢山作ってあげて欲しいんです。これは本当に個人的な、貴方へのお願いになってしまうのですが。」

「……いいや、そうでもないさ、俺もそれには賛成だからな。異議なんてない。」

「……そうですか。」

司羽の答えにリアは満足そうな笑顔になると、一言だけそう返した。司羽はその笑顔の中に、ほんの少しだけ、陰りを見た気がしたが、リアが普通に笑っている以上、追求するべきではないだろう。

「ああ、そうです。取り敢えずアドバイスがあるとすれば……。」

「おっ、何かあるのか？」

「デート先の女の子に不用意に優しくするのは止めた方が良いですよ？　それとなるべくルーンを一人にしない事。」

「……胆に命じておくよ。」

最後に若干の皮肉の混ざった発言をされた所で次の授業を知らせ

るチャイムが鳴り響いた。フードを付けて結界を解いたリアに、苦々しげな表情で一言返すと、リアは教室に戻るべく踵を返し、何かを思い出したように振り返った。

『デートとは二人で楽しむべきだと私は思うのです。』

「……了解。それも覚えとく、心配するな。」

最後のやり取りを行うとお辞儀を一つ残してリアは去って行った。そんなリアの後ろ姿を、司羽は優し気な視線で見送ると、タイミングをずらして教室へと帰るのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5039j/

異世界と絆な黙示録

2011年10月11日12時59分発行